

# 満洲スポーツ史話 (III)

高 嶋 航

## 第 28 話 サッカー

### (1) 満洲サッカーの起源

満洲で最初にサッカーをしたのはイギリス人であったと思われるが、詳細は不明である。『大連市志・体育志』は「1905 年以後、大連港は自由港となり、外国汽船の船員がいつも敷島広場（いまの民主広場）西南の林のなかの空き地でサッカーをしており、その影響で一部の中国人青年がサッカーを始めた」と記し、続いて 1920 年代の状況を述べている<sup>1</sup>。一方、『遼寧省志・体育志』は、遼寧地区でサッカーが始まったのは 1918 年前後とするが<sup>2</sup>、日本人側、中国人側ともそれ以前からサッカーをしていた記録が見える。

まず中国人側から見ていこう。1908 年 9 月、旅順公学堂、旅順女子公学堂の第 2 回創立記念日に開かれた競技会で「フットボール」が行われている<sup>3</sup>。1911 年に創立された南満医学堂では、創立当初からサッカーの愛好家が集まってフリーキックなどをしていった。1914-1915 年に、「足球队」が結成され、奉天の各学校チームや遼陽の簡易師範学校と対戦した。1917 年に「蹴球部」が設立され、1919 年から 1924 年までが「黄金時代」だった<sup>4</sup>。東三省側では、1914 年 6 月に奉天の文会書院で学ぶ遼陽出身の学生と遼陽の文徳中学の学生が遼陽でサッカーの試合をしている。文会書院も文徳中学もミッションスクールである。遼陽で初めて行われたこのサッカー試合には多くの観衆

<sup>1</sup> 大連市地方志編纂委員会辦公室編『大連市志・体育志』大連出版社、2001 年、71 頁。

<sup>2</sup> 遼寧省地方志編纂委員会辦公室主編『遼寧省志・体育志』遼寧人民出版社、1999 年、67 頁。

<sup>3</sup> 「旅順公学堂紀念日」『満洲日日新聞』1908 年 9 月 21 日。公学堂は中国人向け初等教育機関である。『満洲日日新聞／満洲日報』は以下、『満日』と略す。

<sup>4</sup> 黒田源次編『満洲医科大学二十五年史』満洲医科大学、1936 年、284 頁。

がつめかけたという<sup>5</sup>。文会書院は奉天のイギリス人チームとも試合をしている<sup>6</sup>。1918年の『泰東日報』からは、奉天の商業学校、海城の県立師範学校、遼陽の県立中学、文徳中学、吉林の法政専門学校などでサッカーが行われていたことがわかる<sup>7</sup>。安東では安東 YMCA、銀市、糧市、遵立中学、警察隊、報税所、丹華公司、園芸学校の8チームによる「皮球」の大会が開かれている<sup>8</sup>。1917年以前の『泰東日報』は部分的にしか残存していないので全容を把握することはできないが、おそらくサッカーはそれ以前から東三省各地で行われていたはずだ<sup>9</sup>。

日本人の側でもほぼ同じ時期にサッカーが始まった。1909年4月に大連で開かれた基督教団体運動会のプログラムには、「フットボール」が含まれている<sup>10</sup>。同年秋、大阪屋号書店は東京高等師範学校蹴球部の編集した『フットボール』を入荷、新聞に広告を出した<sup>11</sup>。長春の室町小学校は1910年に「フットボール」を購入し、児童の課外運動を奨励した<sup>12</sup>。1912年秋、大連 YMCA ではソールバーンの指導下に「アットセッション、フットボール」が行われていた<sup>13</sup>。その後しばらくはサッカーに関する記録がないが、1918年2月の「大連学生気質」と題する連載記事から、南満工業と大連商業で蹴球が行われていたことが確認できる<sup>14</sup>。

<sup>5</sup> “Football Match at Liaoyang,” *Manchuria Daily News*, June 15, 1914. *Manchuria Daily News* は以下、MDN と略す。

<sup>6</sup> “Association Football at Mukden,” MDN, November 19, 1915.

<sup>7</sup> 「手球足球之練習」『泰東日報』1918年5月12日；「師範校動運盛況」『泰東日報』1918年5月13日；「中学校隊球賽会」『泰東日報』1918年9月10日；「法政組設校友会」『泰東日報』1918年11月4日。

<sup>8</sup> 「園校体育之発達」『泰東日報』1918年9月23日。「皮球」がサッカーを指すことは、拙稿「なぜ baseball は棒球と訳されたか：翻訳から見る近代中国スポーツ史」『京都大学文学部研究紀要』55号、2016年3月を参照。

<sup>9</sup> 1917年以前の『泰東日報』で現在見ることができるのは1911年3-5、9-10月、1912年12月、1913年1-2月である。

<sup>10</sup> 「基督教八団体運動会順序」『満日』1909年3月29日。

<sup>11</sup> 『満日』1909年9月22日（広告）。東京高師蹴球部が1903年に出版した『アソシエーションフットボール』のことである。

<sup>12</sup> 「満鉄附属地卅年史 室町小学校の沿革その五」『新京日日新聞』1937年11月28日。『新京日日新聞』は以下、『新日』と略す。

<sup>13</sup> 「青年会週報」『満日』1912年10月20日。

<sup>14</sup> 「大連学生気質」『満日』1918年2月23、24日。

1918 年 4 月に開校した大連中学では、服部精四郎校長がサッカーを校技に指定し、その奨励を図った。当初は戦術もテクニックもなく、ただがむしゃらに蹴飛ばすだけだったが、広島高師附属中学から転校してきた小倉良夫が最先端の技術を持ち込んだという<sup>15</sup>。

1919 年、臼杵中学からひとりの転校生がやってきた。ノコさんこと竹腰重丸である。臼杵で剣道をしていたノコさんは大連中学で初めてサッカーに出会い、そしてサッカーにのめり込んでいった。そのうち体操の時間や課外活動で行われるサッカーでは物足りなくなり、ひとり遅くまで校庭に残って練習に明け暮れた。そんなノコさんを服部校長は「両親に心配をかけますよ」と注意するのだった。ノコさんのクラスメートで、のちに満洲医大でアイスホッケー選手として活躍する北河清は、当時のサッカーについて「級教師が熱心で校内ゲーム、又英艦が入港すると試合をしたり」したと述べている<sup>16</sup>。ノコさんは 1922 年に山口高校に入学、1925 年に東京帝大に進み、同年 5 月に開かれる極東大会日本代表選手に選ばれた。その後も日本サッカー界の立役者として、極東大会、アジア大会、オリンピックの日本代表監督、日本サッカー協会理事を務め、没後の 2005 年に日本サッカー殿堂入りした。

一部の学校でサッカーが行われていたとはいえ、サッカーは大連ではほとんど知られていなかった。1920 年 11 月に満洲起業会社常務取締役の芥川光蔵が「運動界の一転機を画し冬期に相応しい団体競技として「フットボール」を奨励せよ」と『満日』紙上で提唱したのはそのためである。芥川はフットボールの魅力について、それが混戦の白兵戦であり、一蹴の球が見る者をハラハラさせ、刹那の緊張は野球の比ではないこと、さらに「ラグリー〔ラグビー〕」は「痛快淋漓の猛競技」で男性的で乱暴ではあるが「好ゲーム」であると主張した。大連には外人団、中華民国青年団があり、奉天の南満医学堂、旅順工科学堂、大連中学にもすでにチームがあった。南満工業学校、大連商業学校もすぐにチームを組織できる見込みで、11 月 23 日に芥川が組織した実

<sup>15</sup> 野崎保平「創立のころ」大連一中創立五十五周年記念誌編纂委員会編『柳緑花紅 大連一中創立五十五周年記念誌』大連一中校友会、1973 年、35-36 頁所収。広島各各学校では似島収容所のドイツ人捕虜から学んだドイツ式サッカーが行われていた（拙著『軍隊とスポーツの近代』青弓社、2015 年、226-227 頁）。

<sup>16</sup> 竹腰重丸「進于技」大連一中創立五十五周年記念誌編纂委員会編『柳緑花紅』144-145 頁所収。

業団、外人団、中華民國青年団の國際競技を挙行する計画が進んでいた<sup>17</sup>。

芥川がサッカーを提唱する前月には、「在住西洋人と支那人」の試合の予告が『満日』紙上に掲載されており、これに刺戟されたものと考えられる<sup>18</sup>。外人団が Dairen Football Club であることは間違いないとして、ここで言及される中国人チームがいったいどのチームを指すかは定かではない。通説では、大連で最初の中国人チームは 1921 年 3 月に組織された大連中華青年会チームということになっているが、このチームはそれに先じるからである<sup>19</sup>。1921 年 2 月の *MDN* には Dairen Foreigners と「[T]he Chinese Body Association in the SMR. Co.」が対戦したとあり、満鉄で働く中国人の組織したチームがそれに当たるかもしれない。試合は 1 対 6 で中国人チームは大敗している<sup>20</sup>。

芥川の記事が掲載された翌日から、『満日』では香月生の「アツソシエーション式フットボールの解説及規定」というサッカーの解説記事が連載され<sup>21</sup>、11 月 27 日には同志社倶楽部対 Dairen Football Club のサッカー戦が挙行されるが、同志社は 0 対 18 で惨敗した<sup>22</sup>。Dairen Football Club 主将のラーキンス (G. I. Larkins) はかつてイギリスのフットボールチーム、トッテナム・ホットスパーズでプレーしたこともあるというから、格が違ったのだろう<sup>23</sup>。

芥川は同志社専門学校（のちの同志社大学）の出身で、当時は満洲起業株式会社常務取締役。1928 年より映画製作に携わり、「満洲におけるリットン調査団」（1932 年）、「秘境熱河」（1936 年）、「娘々廟会」（1940 年）など数々の記録映画を製作した<sup>24</sup>。芥川

<sup>17</sup> 「満洲大陸の冬季運動として蹴球競技を提唱す」『満日』1920 年 11 月 10 日。

<sup>18</sup> 「蹴球競技会」『満日』1920 年 10 月 23 日。

<sup>19</sup> 汪小村「会務記事」『大連中華青年会会報』創刊号、1921 年 7 月；大連市地方志編纂委員会辦公室編『大連市志・体育志』71 頁；陶其深「大連最早期の足球队——中青隊」『大連体育史料』1989 年 1 輯；朱元宝「大連中華青年会足球队」『大連近代史研究』14 卷、2017 年；「青年会招募足球队」『泰東日報』1921 年 3 月 10 日。

<sup>20</sup> “Association Football at Dairen,” *MDN*, February 23, 1921.

<sup>21</sup> 香月生「アツソシエーション式フットボールの解説及規定」『満日』1920 年 11 月 11-19 日。

<sup>22</sup> 「フットボール第一回試合」『満日』1920 年 11 月 27 日；「外人団対同志社倶楽部蹴球競技」『満日』1920 年 11 月 28 日。後者の記事のタイトルには「十九対零」とあるが、本文を読むと 18 対 0 であったことがわかる。

<sup>23</sup> “Dairen Football Club,” *MDN*, March 9, 1925.

<sup>24</sup> 映画監督としての芥川については、上田学「芥川光蔵：忘却された記録映画作家」（和田博文、黄翠娥編『＜異郷＞としての大連・上海・台北』勉誠出版、2015 年所収）などを参照。

以外のメンバーには YMCA の黒田善八、日米公司の松森正重、油谷商店の油谷万次（大連実業団野球部創設期のメンバー）らがあり、彼らはみな横浜、神戸の外人や東京高師、慶応、三高と対戦した猛者ばかりだと芥川は言う。同志社では明治 20 年代にアメリカ人教師がサッカーを紹介したが、それは「ボールを蹴って遊ぶ程度」のものであった。1907 年にサッカー同好会が発足するが、1910 年にラグビーが採用されると、サッカーはいったん衰退した<sup>25</sup>。芥川は 1907 年、松森は 1909 年に同志社を卒業しているので、ラグビー採用前のサッカー世代ということになる。

## (2) 中国人チームの台頭

通説によると、1921 年 3 月 10 日に結成された大連中華青年会体育部足球队（中青隊）が大連で最初の中国人サッカーチームである（ただし、これに先だって中国人チームがあったことは先述した）。隊員は 37 人で、その半数が 10 歳未満の小学生だった<sup>26</sup>。中青隊はもともと敷島広場で練習をしていたが、夏には西公園の使用を申請し、大連民政署によって蹴球場として使用することが認められた<sup>27</sup>。

1921 年 6 月、旅順工科学堂と奉天南満医学堂の対校競技大会が举行され、相撲、庭球、サッカーの各種目で勝敗が競われた。南満医学堂のサッカー選手は全員が中国人だった<sup>28</sup>。旅順工科学堂のほうは日中混成で、先述の小倉良夫もメンバーのひとりだった<sup>29</sup>。伏見台公学堂と旅順師範学堂でもサッカーチームが結成され、1921 年 12 月に対戦している<sup>30</sup>。

1922 年 12 月、全満競技連合は第 1 回全満蹴球大会を開催する。全満競技連合とし

<sup>25</sup> 同志社スポーツ史編集委員会編『同志社スポーツの歩み』同志社スポーツ史編集委員会、1961 年、188-189 頁。

<sup>26</sup> 陶其深「大連最早期の足球队——中青隊」。

<sup>27</sup> 「大連支那人の運動熱」『満日』1921 年 7 月 27 日；“Dairen Chinese Athletic Association,” *MDN*, July 25, 1921. 大連中華青年会が大連民政署から西公園の空き地 1000 坪を借りて運動場としたとの記事がある（「青年会会務之発達」『泰東日報』1922 年 11 月 5 日）。

<sup>28</sup> 「両端の雄、工科と南医の対校競争覇戦」『満日』1921 年 6 月 11 日。

<sup>29</sup> 旅順工科学堂で蹴球部が校友会「靈陽会」に承認されたのは 1922 年 5 月である（興亜寮史編集委員会編『興亜寮史』旅順工科大学興亜寮、1940 年、799-800 頁）。この年度の蹴球部委員は日本人 2 人、中国人 4 人で構成されていた（「総務部報」『靈陽』15 号、1924 年 1 月）。

<sup>30</sup> 「両学校定期賽球」『泰東日報』1921 年 12 月 13 日。

ては、水泳、陸上競技に続く3番目の事業だった。日本人の間であまり普及していなかったサッカーを取り上げたのは、岡部平太の意向だったと思われる。岡部は1921年の極東大会日本予選で蹴球委員長を務め、1922年5月には「フットボールの普及に就いて」という文章を発表するなど、この時期サッカーの普及に力を入れていた<sup>31</sup>。参加チームは奉天の満洲医科大学、南満医学堂、旅順の旅順工科大学、旅順師範学堂、大連の南満工業学校、外人団、大連中華青年会、大連中学だった。大連中学と南満工業学校（日本人）、外人団（欧米人）以外は、中国人のみか中国人主体のチームだったと思われる。決勝に残ったのは大連中学と外人団で、外人団が3対0で大連中学を下して優勝した。岡部はこの試合で審判を務めている<sup>32</sup>。

1923年の第2回全満ア式蹴球選手権大会、参加チームは前年と全く同じで、満洲医大、外人団、大連中華青年会、旅順工大が予選を突破し、満洲医大が決勝戦で外人団を下して優勝した<sup>33</sup>。

1924年は日本人の間でラグビーへの転向が加速し、満鉄、旅順工大、南満工専・工業、大連商業が次々とラグビー採用に踏み切る。満洲体育協会もこの年の全満蹴球選手権大会をサッカーからラグビーに切り換えた（第32話参照）。

1925年、満洲体育協会は全満ア式蹴球選手権大会を復活させ、11月15日に満鉄伏見台グラウンドで開催することにしたが、参加チームが少なく中止となった（翌週にラグビーの全満選手権を開催、8チームが参加した）<sup>34</sup>。参加チームが少なかったのは、大連中華青年会が同じ週末に東北足球大会を開催することになっていたからである。1925年といえば、五・三〇事件で反日感情が高まった年である。大連中華青年会が日本側の開催する全満選手権に出場するのをよしとせず、独自に大会を開催したのか（もとは10月25日に開催する予定だった）、それとも満洲体育協会が大連中華青年会の開

<sup>31</sup> 拙著『国家とスポーツ：岡部平太と満洲の夢』KADOKAWA、2020年、88-90頁；岡部平太「「フットボールの普及に就いて」『アスレチックス』1巻2号、1922年5月。

<sup>32</sup> 「全満蹴球選手権大会」『大連新聞』1922年12月2日；「全満蹴球選手権第一勝戦の成績」『大連新聞』1922年12月4日；「覇権は何れに」『大連新聞』1922年12月8日；「覇権は遂に外人団」『大連新聞』1922年12月11日。

<sup>33</sup> 「第二回全満洲ア式蹴球選手権大会」『大連新聞』1923年11月17日；「ア式蹴球」『大連新聞』1923年11月26日；「伏見台で蹴球大会」『大連新聞』1923年12月3日。

<sup>34</sup> 「体育協会主催の蹴球選手大会」『満日』1925年11月14日。

催する東北足球大会をよしとせず、全満選手権を開こうとしたのか、いずれが真相かはわからないが、大会への招待状のなかで大連中華青年会が「大連にあつて支那人が独立自営し文化侵略と植民地の奴隷教育を排斥する唯一の中華青年団体及び教育機関」を自称し、足球大会を開催するのは表面上体育奨励のためであるが、「租界地内にて民族の精神と対外示威的運動を発揚せんとする意味を含」ませているとの文字が書かれていると報じられたことから、民族対立が影響したことは確かなようである<sup>35</sup>。

東北足球大会には芝罘益文学校、奉天体育専門学校、大連印刷職工連合会、大連中華青年足球団の4チームが参加した。報道によれば、旅順工科大学、旅順二中、北京師範大学、天津の南開大学、大連の沙河口工学会、敷島広場足球队、西崗学友足球队などが参加予定だったというが、旅順の2校は「故あって」、北京天津の各校は「時局の関係」で参加できなかった。おりしも華北では張作霖軍と馮玉祥軍との間で緊張が高まっており、11月22日には郭松齡の兵変が起こることになる。また、大連の各チームは時間の関係で連合チームを組んだ。大会で準優勝した大連中華青年足球団チームがそれである<sup>36</sup>。いずれにせよ、この大会はもっと大規模に開催される可能性があり、だからこそ日本側でも警戒をしたと思われる。

全満足球大会に参加を予定していたチームからもうかがえるように、1925年以降大連サッカー界では社会人チームが台頭してくることになる。1926年11月に、おそらく東北足球大会の代替として開かれた大会には、大連中華青年会、三井、満洲報、大連印刷職工連合会、大連体育団などが参加した。東北足球大会の開催を望む声もあがっていたが、当局の警戒に配慮して小規模の大会に改めたのだろう<sup>37</sup>。翌1927年11月には上海大戲院主催で全埠華人足球比賽が開かれた。満洲体育協会、大連華商公議會、西崗華商公議會なども賞品を贈呈していることから、当局の了解も得られたと思われ、

<sup>35</sup> 「中華青年の主催で足球競技大会」『満日』1925年11月3日；「中華青年会が中心で蹴球大会に名を藉り排日運動を起さんとす」『大連新聞』1925年11月3日；中共大連市委党史研究室編『大連中華青年会史料集』大連外国語学院外文印刷廠、1990年、22頁。

<sup>36</sup> 「東北足球大会業已举行」『満洲報』1925年11月14日；「東北足球会決賽之結果」『満洲報』1925年11月17日；「足球比賽之結果」『盛京時報』1925年11月17日。

<sup>37</sup> 「六団体比賽足球」『泰東日報』1926年11月21日；劉少周「忠告大連中華青年会当事者」『泰東日報』1926年11月21日。

表 28-1 大連中国人サッカー大会参加チーム

| 年    | 大会名  | 参加チーム                                                         |
|------|------|---------------------------------------------------------------|
| 1925 | 東北足球 | 大連印刷工連合会、大連華人青年（沙河口工学会、敷島広場足球队、大連中華青年会、西崗学友足球団）、益文学校、奉天体育専門学校 |
| 1926 | 六団体  | 大連印刷工連合会、大連体育団、大連中華青年会、満洲報印刷部、三井華員倶楽部                         |
| 1927 | 全埠華人 | 沙河口体育団、泰極団、大連中華基督教青年会、大連中華青年会、東亜、日清、満印体育団、三井華員倶楽部、隆華、嶺前屯青年団   |
| 1929 | リーグ  | 大連中華青年会、満鉄、隆華                                                 |
| 1930 | 乙級   | 関東、工華、泰東、電鉄、西同、三井、無畏                                          |
| 1931 | 中華足球 | 育英、工華、銭俱、電鉄、満華、旅華                                             |

前年とは違って大々的に報道がなされている<sup>38</sup>。参加チームは10チームでいずれも社会人チームだった（表 28-1）。このなかで注目したいのが隆華である。

隆華の創設者である羅仙樵によると、1907 年生まれの羅は公学堂を卒業したあと、昼は日本郵船で働き夜は華商夜校で英語を勉強していた。華商夜校の校長は益文学校出身でサッカーを愛好し、サッカーチームを結成しており、羅もチームに加わった。1925 年になって練習仲間だった正隆銀行の郭義達、劉義昌らと中央隊を結成し、大連中華青年会と対戦したが相手にならなかった<sup>39</sup>。そこで関連書籍を読んでサッカーに対する認識を高め、隆華隊を結成した。「隆華」の「隆」は正隆銀行にかこつけたもので、実際には「中華を興隆する」という意味を込めていた。こうしてふたたび大連中華青年会に挑んだが、0 対 6 で完敗した。第 2 戦では 0 対 3、第 3 戦では 0 対 1、そして第 4 戦では 0 対 0 の引き分けに持ち込んだ。以上を羅は 1925 年の出来事として描いており<sup>40</sup>、『大連市志・体育志』も隆華が 1925 年に設立されたと記している<sup>41</sup>。しかしこれは

<sup>38</sup> 「足球比賽大会籌備」『泰東日報』1927 年 11 月 8 日；「足球比賽好消息」『泰東日報』1927 年 11 月 10 日；「足球比賽之第一週」『泰東日報』1927 年 11 月 15 日。

<sup>39</sup> 1926 年に近江町の青年が中央足球団を結成したとの報道が見えるのがそれであろう（「兩団体比賽足球」『泰東日報』1926 年 8 月 28 日）。近江町は彼らの練習場である西公園のすぐ近くにあった。

<sup>40</sup> 羅仙樵「旅大地区足球運動草創時期的回顧及其他」『大連体育史料』2 期、1986 年 9 月；羅仙樵「大連市早期足球運動的回顧：記大連隆華足球队」『大連文史資料』3 輯、1987 年 12 月；羅仙樵「参加足球活動的回憶」『大連文史資料』5 輯、1988 年 9 月。羅らが読んだ書籍は前 2 者ではマクロイ『足球』、中華全国体育協進会『足球規則』、朝日新聞社編『運動年鑑』、イギリスの『足球年鑑』、後者では李惠堂『足球』となっている。

<sup>41</sup> 大連市地方志編纂委員会辦公室編『大連市志・体育志』71 頁。

誤りである。1927 年 9 月 11 日に隆華が小林と対戦し、1 対 0 で勝利したのが史料で確認できる最初の記録である<sup>42</sup>。また、1928 年 9 月に「隆華一週年紀念」という記事が見えることから、1927 年 9 月頃に結成されたとすべきである<sup>43</sup>。

隆華は 1927 年の全埠華人足球比賽では初戦を突破できなかったが、その後めきめきと力をつけ、1928 年夏には大連中華青年会と互角の勝負ができるまでに成長する。同年 11 月に大連に遠征してきた奉天の東北大学サッカー部が大連中華青年会、隆華と対戦していることから、隆華が大連サッカー界を代表するチームとして認められていたことがわかる。1929 年 6 月の第 8 回中華陸上運動大会では馮庸がサッカー盃を寄贈、大連中華青年会と隆華が対戦し、隆華が 2 対 0 で大連中華青年会から初勝利をもぎ取った<sup>44</sup>。

隆華の台頭とならんで注意したいのが、この時期に「華」を名乗るチームが続々と生まれることである。たとえば、1929 年には「商華」「新華」、1930 年には「工華」「英華」が結成され<sup>45</sup>、1931 年 12 月の中華足球大会では、参加 6 チームのうち半数の 3 チームが「華」を名称にしていた（表 28-1 参照）。張学良のもとで中華ナショナリズムが

<sup>42</sup> 「隆華与小林球戦」『泰東日報』1927 年 9 月 13 日。

<sup>43</sup> 「隆華一週年紀念」『泰東日報』1927 年 9 月 9 日。なお、大連中華青年会との対戦は、初戦が 1927 年 10 月 23 日、第 2 戦が同年 10 月 30 日、第 3 戦が 1928 年 7 月 29 日、第 4 戦が同年 8 月 12 日であることが『満洲報』『泰東日報』で確認できる（得点も一致する）。

<sup>44</sup> 「足球表演大博嘆賞、隆華戦勝中青」『泰東日報』1929 年 6 月 3 日。羅仙樵はこの試合を 1926 年とするが（注 39 所掲の羅の文章）、誤りである。

<sup>45</sup> 商華の初出は「隆華対商華二次足球戦」『満洲報』1929 年 7 月 25 日。このときが隆華との第二戦なので、結成はさらに遡るはずである。楊振増、陶其深「三十年代的大連足球队」『大連体育史料』6 期、1989 年 2 月では商華隊の結成を「20 年代初期」とするが、誤りであろう。新華の初出は「遼東与新華比賽足球」『満洲報』1929 年 9 月 7 日で、新華は最近成立した、と記される。工華の初出は「工華協和兩隊本日賽足球」『満洲報』1930 年 7 月 24 日。「本日足球戦、中青対工華」『満洲報』1930 年 7 月 27 日によれば、工華は最近結成され、大連中華青年会との対戦が「処女戦」だという。大連市地方志編纂委員会辦公室編『大連市志・体育志』72 頁は工華の結成を「20 年代中葉」とするが、誤りであろう。さらに傍証を挙げれば、1932 年元旦に宋子仁は前年を振り返り、この一年に工華、商華など十数のサッカーチームが結成されたと述べている（宋子仁「対連濱体育界将来之希望」『泰東日報』1932 年 1 月 1 日）。英華の初出は「本埠足球消息」『泰東日報』1930 年 9 月 14 日。「英華足球队竟一鳴驚人」『満洲報』1933 年 10 月 29 日によると、英華は設立されて「数年」になるという。また、日本人チームとの対戦が多い野球でも「健華」「震華」などのチームが結成された（第 44 話参照）。

高まっていたことが背景にある<sup>46</sup>。

大連の空地は如何なる場所でも必ず其処に支那人が足でボールに戯れて居る姿を見受けるでせう。之が即ちア式蹴球なるもので支那人の間にはかく一般化し而も数多くの運動の中最も愛好され又之が支那の国技とされてゐるのである<sup>47</sup>。

ここからは、中国人の間でのサッカー人気と、日本人にはサッカーがどういうものかもよく知られていなかったことがわかる。

### (3) 日中の交流

日本人側のサッカーに話を戻そう。先述したとおり、1924年の全満蹴球選手権が前年のサッカーからラグビーに切り替えられ、1925年にサッカーの全満蹴球選手権を開こうとしたものの、参加チームが少なく開催に至らなかった。1927年9月、上海の極東大会に出場した日本代表サッカーチームが帰途に大連に立ち寄った。同チームは早大選手を主力としていたが、かつて大連一中（当時は大連中学）にいた竹腰重丸（東京帝大）も加わっていた。日本代表は大連一中を6対0、大連二中を4対0、大連中華青年会を3対2で下した<sup>48</sup>。なぜ格下の中学生チームと対戦したかという点、それ以外に日本人チームが存在しなかったからである。まだ日中間のスポーツ交流が少ないこの時期に、大連中華青年会が対戦相手となったのは、大連中華青年会こそ大連で最強のチームだったからにほかならない。早大はその後朝鮮に向かい平壤では善戦するが、ソウルでは延禧専門に0対4、朝鮮蹴球団に1対3で敗北を喫した<sup>49</sup>。

1929年9月9日、朝鮮各地を転戦していた早大蹴球部が大連にやって来る。早大チームには主将横村三男、本田長康ら1927年の極東大会日本代表選手7名がなお健在だったが、朝鮮では徽新倶楽部に3対4、崇実専門に0対7、戊午団に1対3と3連敗していた<sup>50</sup>。なお、本田選手は1930年の極東大会でも日本代表選手に選ばれ、1933年に満

<sup>46</sup> 拙稿「満洲における日中スポーツ交流（1906-1932）：すれちがう「親善」」『京都大学文学部研究紀要』57号、2018年3月。

<sup>47</sup> 内田静夫「満洲ア式蹴球界、チームワークが強味」『大連新聞』1931年1月1日。

<sup>48</sup> 「中青与日選手比賽足球」『泰東日報』1927年9月9日。

<sup>49</sup> 大韓蹴球協会編『韓国蹴球百年史』大韓蹴球発展後援会、1986年、194頁。

<sup>50</sup> 大韓蹴球協会編『韓国蹴球百年史』194頁。

鉄に入社することになる<sup>51</sup>。

大連では中国人の二大チーム大連中華青年会と隆華が合同して全大連中華足蹴団を組織し、早大を迎え撃つ準備を整えていた<sup>52</sup>。11日の初戦、満鉄理事小日山直登の挨拶に続いて、岡部鞠子（岡部平太長女）から中華軍主将に、張婉華（前中国銀行長令嬢）から早大軍主将に、それぞれ花環が渡され、両軍主将握手、国旗掲揚のあと、いよいよ試合が始まった。岡部平太はマイクロフォンでいつものように観客にゲームの解説をした。第1回戦は7対0、第2回戦は4対0で早大が勝ち、中華側は1点も取ることができなかった<sup>53</sup>。早大に続いて15日には京城帝大が来征した。京城帝大は日本人1人を除いて、あとはみな朝鮮人のチームである。初戦は奉天での満洲医大戦で、0対1で惜敗、つづいて旅順工大に4対1で快勝、大連では隆華に2対1で勝ち、大連中華青年会とは2対2で引き分けた<sup>54</sup>。

早大と京城帝大が日本人チームと対戦しなかったのは、のちに飯沢重一が嘆いたように、「実に満洲にはそれ〔早大〕を相手に戦ふべき一の邦人チームも存在しなかつた」からである。中学校チームがあるにはあったが、相手にならないことは前回で証明済みだった。そこで満鉄の飯沢重一と朝倉保は日本人チームの編成に取り掛かり、周囲のサッカー経験のある人たちを集めた<sup>55</sup>。満鉄ア式蹴球倶楽部が結成されたのは、早大の帰国後であった。満鉄チーム主将の朝倉保は元早大主将で、1927年の極東大会日本代表選手である。満鉄ア式蹴球部は「国際親善の立場から隆華足球队中華青年会足球队との間に大連中日蹴球連盟を組織し同連盟主催本社及び泰東日報社後援の下に毎年

<sup>51</sup> 「満鉄新入選手の横顔」『大連新聞』1933年4月10日。

<sup>52</sup> 「帝都学生蹴球界の強豪、早大チーム近く来征」『満日』1929年9月7日。

<sup>53</sup> 「今日行はれる中日国際蹴球戦」『満日』1929年9月11日；「中華軍七対〇にて惜しくも早大軍に敗る」『満日』1929年9月12日；「華軍の奮闘も効なく四対零にて早大再勝」『満日』1929年9月13日。不思議なのは中国語新聞『満洲報』が早大と京城帝大の来征をまったく報じていないことである（この期間の『泰東日報』は見ることができない）。

<sup>54</sup> 大韓蹴球協会編『韓国蹴球百年史』271頁。

<sup>55</sup> 飯沢重一「ソッカーに就て」『満日』1931年1月1日。飯沢は松本高校で陸上競技部主将を務め、短距離と砲丸投に秀でた。とくに砲丸投はパリオリンピック国内2次予選で3位に入った実績を持つ。飯沢はサッカーや柔道でも活躍した。東北帝大卒業後、満鉄に入り、満洲国では國務院参事、総務庁主計処長（古海忠之の後任）など重要な官職を歴任する。戦後は弁護士をしていたが、1975年に日本体育協会専務理事に就任、体協の財政再建に貢献した。

一回三チームのリーグ戦を開始する事を決定」、11月23日からリーグ戦が繰り広げられたが、満鉄は隆華と大連中華青年会とともに5対2のスコアで敗れている<sup>56</sup>。

1930年10月には、「日支対抗競技会」が開催された。東北大学、馮庸大学を中心とする中国チームと、在満日本人チームがテニス、バレーボール、サッカー、バスケットボールで対抗戦を行うという企画だった<sup>57</sup>。大会をセッティングした岡部は「籠球と蹴球は到底勝味はない」と考え、日本人選手にも「若し、全大連チームが五点の差以内に喰ひ込んだなら、何んでも奢つてやる」と約束したほどだが、結果は1対1の引き分けに終わった<sup>58</sup>。『満日』には、「日本人はいざとなれば実際強いそれは責任観念と闘争心が強いからだ、僕は今日の試合で吾々日本人の強さをはつきりと自覚した」という某先輩の話が載せられているが、発言の主は間違いなく岡部だろう<sup>59</sup>。選手に奢らされたのは嬉しい誤算だが、あるいはそれも計算済みだったのかもしれない。日支対抗競技会の中国側サッカー代表は東北大学のチームだったが、その1週間後、今度は馮庸大学のサッカーチームが来連した。日本側は同じメンバーで臨むが、0対2で完敗した<sup>60</sup>。

満鉄、大連中華青年会、隆華によるリーグ戦は毎年開催する予定だったが、満鉄ア式蹴球部が活動停止状態に陥ったためか、1930年には開かれなかった<sup>61</sup>。その代わり、11月に大連中華青年会と泰東日報社の主催で、第1回乙級足球連賽大会が開かれている。大連中華青年会と隆華は「甲級」とみなされ、参加しなかった。7チームが参加し（表28-1参照）、電鉄が優勝した<sup>62</sup>。日本側でも満日社が第1回全満中等学校ア式蹴

<sup>56</sup> 「蹴球リーグ戦」『満日』1929年11月22日；「満鉄軍振はず隆華に敗る」『満日』1929年11月25日；「中華青年会に満鉄再敗」『満日』1929年11月26日。大連中日蹴球連盟によるリーグ戦はこの1回きりで終わった。1932年秋から大連足球連合会によるリーグ戦が開かれる。

<sup>57</sup> 「日支対抗ゲーム日割、種目等決る」『満日』1930年9月17日。

<sup>58</sup> 飯沢重一「ソツカーに就て」『満日』1931年1月1日。

<sup>59</sup> 「雑観」『満日』1930年10月20日。

<sup>60</sup> 「馮庸捷つ」『満日』1930年10月26日。

<sup>61</sup> 三吉瀧雄「満洲の蹴球」『新天地』15巻5号、1935年5月に「人員が不足で物にならず、一時中絶昭和六年再び内田、川田、飯沢、立上、総務部文書課の矢彦沢の諸氏等が立つて満鉄蹴球部を創立した」と記す。リーグ戦は1932年に5チーム（大連青年会、隆華、工華、師同、全大連）の参加を得て再開される。全大連が日本人チームで、あとは中国人のチームである。

<sup>62</sup> 「第一屆乙級足球連賽、深望及早報名」『泰東日報』1930年11月16日；「第一屆乙級足球連賽大会」『泰東日報』1930年11月23日；「第一屆乙級足球連賽会」『泰東日報』1930年12月1日。

球選手権大会を開催、大連一中と大連二中から各2チーム、大連商業から1チームが参加、大連一中が優勝した<sup>63</sup>。

1931年、満鉄のサッカー部が再建され、全大連チームとして6月に奉天で開かれた国際運動場開きに出場し、馮庸大学に0対2で敗れた<sup>64</sup>。

9月10日、すなわち満洲事変勃発の約1週間前、大連中華青年会の主催で漢口水害救恤日華対抗籠球蹴球戦が開かれた。この大会は長江中流域で大規模な水害が発生したことを受けて、芝罘からバスケットボールとサッカーのチームを招待し、大連の中国人チームと日本人チームの三つ巴で国際試合を挙行し、その収益を水害救恤に充てるために企画された。全大連は益文、隆華と引き分け、大連中華青年会に勝利、大いに健闘した<sup>65</sup>。満洲事変の直前まで、満洲のスポーツ界で日中交流が行われていたことは注目すべきであろう<sup>66</sup>。また在満日本人チームが中国人チームと互角に戦えるまでに向上していたことも注目される。

## 第29話 テニス

### (1) 軟式庭球

旅順攻略後まもなく、旅順のロシア人の店からテニス用のボール（もちろん硬球）とラケットが「発見」された。そのボールとラケットを使い、ロシア人がつくった大連北公園のコンクリートコートで軍関係者がテニスをした（以後も満洲ではコンクリートコートが主流であった）——満洲スポーツ史の幕開けである<sup>67</sup>。

<sup>63</sup> 「全満中等学校蹴球戦組合せ」『満日』1930年11月2日；「大連一中軍優勝」『満日』1930年11月9日。

<sup>64</sup> 「足球予賽」『盛京時報』1931年6月14日；三吉瀧雄「満洲の蹴球」『新天地』15巻5号、1935年5月。

<sup>65</sup> 「水害救護の為の蹴籠球リーグ戦」『満日』1931年9月3日；「漢口水害救恤競技（第四日）」『満日』1931年9月14日。

<sup>66</sup> 拙稿「満洲における日中スポーツ交流（1906-1932）」。

<sup>67</sup> 貝瀬謹吾「庭球思出誌」『読書会雑誌』9巻12号、1922年11月。ほぼ同じ文章が、竹内黙庵『八面観 大連の二十年』木魚庵、1925年、158-167頁、古庄重一編纂『小松台文存：貝瀬謹吾君還暦並在満三十五年記念集録』貝瀬謹吾君還暦並在満三十五年記念出版事務所、1938年、1126-1131頁、にも引かれる。

1905年2月24日、大連北公園に本願寺が大連倶楽部を設置し、傷病兵だけでなく一般の軍人軍属が弓、テニス、擊劍、角力などをするために集まった。鉄網で周囲を囲んだテニスコートは「内地にも多く見ざる完全のものにて高等商業学校卒業生中島專之助此に起臥を共にして監督を諾し紅白兩軍の仕合に日々笑声構内に溢る」と『東京朝日新聞』は報じる<sup>68</sup>。中島は明治31年度に東京高商予科、明治33年度に本科2年に在籍していたことが確認できる<sup>69</sup>。中島自身の証言によれば、当時の東京高商は東京高師とテニス界の覇を競い、選手となった中島も「殆ど夢中になつて此の運動に熱心した」。日本最初のテニスの対校試合は1898年（明治31年）11月の東京高商と東京高師の試合で、しかも1899年の第2回から1901年の第5回まで高商が4連勝したといふから<sup>70</sup>、中島はまさしく黎明期のテニス界を代表する選手だったことになる。1904年に大連にやって来た中島は、北公園にテニスコートがあるのを見て、「外人が運動機関の設備に如才のないこと」に感服した。翌1905年、ふたたび来連した中島はコートが日本軍兵士のために打ち壊されてしまっているのを見て、「日本人が公の觀念に乏しく、又運動と云ふことに冷淡であることに驚ゐた」。そこで中島はテニスの監督を申し出たのである<sup>71</sup>。

大連では早くも1905年4月下旬には市内の日本人商店でテニスのラケットやボール（軟球）が購入できるようになった。5月21日、本願寺開祖降誕733回忌祝賀会が北公園で開かれ、余興としてテニス、大弓、相撲の試合が催された。貝瀬謹吾によると、これは満洲で最初のテニスの試合であり、大連守備隊、鉄道隊、電信隊等の有志約30名が参加した。6月には貝瀬と谷直諒が野戦鉄道庭球倶楽部を設立し、7月9日に第1回競技会を開いた。同倶楽部員25名のほか、守備隊将校ら13名が参加した。大連守備に当たっていた歩兵第60連隊は北公園に酒保を設け、テニスコートにも多くの隊員

<sup>68</sup> 「大連倶楽部の近況」『東京朝日新聞』1905年6月19日。

<sup>69</sup> 「本校学生々徒現員」『東京高等商業学校一覧』従明治三十一年至明治三十二年、従明治三十三年至明治三十四年。貝瀬は中島を「明治三十六年」の卒業生と紹介しているが、『東京高等商業学校一覧』には見えず、中島自身は「退校」したと述べている（中島專之助氏談「テニスの話」『満日』1907年12月21日）。

<sup>70</sup> 福田雅之助『庭球百年』改訂新版、時事通信社、1976年、4-5頁；鳴海正泰『テニス明治誌』中央公論社、1980年、93-95頁。

<sup>71</sup> 中島專之助氏談「テニスの話」『満日』1907年12月21日。

が出入りしていたが、凱旋に当たり、これら諸設備を庭球倶楽部に寄贈した。10 月に行われた歩兵 60 連隊の送別マッチでは、某中隊長が「毎月このコートに出入して精神と身体と養なひ、以て克く其の任務を尽す事の出来たのは全く諸兄の賜である」と挨拶した。このように、満洲のスポーツは軍隊スポーツとして始まったのである<sup>72</sup>。

1906 年夏、満洲見学にやってきた早大と慶大の学生にテニスの試合を申し込んだところ、大連の烏合の軍で敗を取っては非常な恥辱だからと断られた。ついで満洲見学にやってきた兵庫県の学生団（姫路中学、神戸商業、神戸工業）は試合に応じ、大連倶楽部・野戦鉄道庭球倶楽部の連合軍が勝った。続いて三重師範、東京師範、広島高等師範とも対戦した<sup>73</sup>。これら一連の試合は、満洲スポーツ界が外敵を迎えた最初のものである。同年秋には大連倶楽部が優勝旗を作製して、優勝旗マッチを挙行了。1907 年の年末に大連倶楽部には 100 名ほどの会員がいたが、その後軍関係者の多くが内地に引き揚げたこともあって、大連倶楽部は解散、優勝旗も行方不明となった<sup>74</sup>。

1908 年、大連市内の各庭球団体は満洲庭球団を結成し、7 月に第 1 回テニス大会を開いた。勝敗は関東（東日本）出身者と関西（西日本）出身者による対抗という形式で争われ、総勢 56 名が参加した。優勝旗は満鉄、三井物産、正金銀行など市内の会社が合計 200 円を拠出し、三越呉服店に作らせたもので、関西軍が手にした<sup>75</sup>。満洲庭球団の大会は、初期大連テニス界で最大のイベントとなった。当初は互角の戦いだったが、大連では関西出身者が多く、次第に関西軍が有利になったため、1913 年春の第 10 回大会で関西軍が大勝したのを最後に廃止された<sup>76</sup>。

その後、各会社や職場でコートがつくられ、互いに競争するようになったことから、

<sup>72</sup> 貝瀬謹吾「庭球思出誌」『読書会雑誌』9 卷 12 号、1922 年 11 月；中島専之助氏談「テニスの話（続）」『満日』1907 年 12 月 22 日。

<sup>73</sup> 姫路中学以下の学生は、文部省と陸軍省が主催した合同満洲修学旅行の一員と考えられる（高媛「戦勝が生み出した観光：日露戦争翌年における満洲修学旅行」『ジャーナル・オブ・グローバル・メディア・スタディーズ』7 卷、2010 年 9 月）。

<sup>74</sup> 貝瀬謹吾「庭球思出誌」『読書会雑誌』9 卷 12 号、1922 年 11 月；中島専之助氏談「テニスの話（続）」『満日』1907 年 12 月 22 日。

<sup>75</sup> 「第一回満洲庭球団大会」『満日』1908 年 7 月 16 日；「満洲庭球大会」『満日』1908 年 7 月 28 日；「庭球大会続報」『満日』1908 年 7 月 29 日。

<sup>76</sup> 「優勝旗試合」『満日』1913 年 5 月 17 日；「大連庭球優勝試合」『満日』1916 年 4 月 2 日。

1915 年秋には満鉄庭球部が大連の団体対抗の庭球大会を開く<sup>77</sup>。この大会は、翌年 4 月から大連庭球優勝試合として毎年 1 回開催されることになり、第 1 回大会には 12 チームが参加し、福昌会社が優勝した<sup>78</sup>。1919 年からは遼東新報社が主催し、大連庭球大会（のちに関東州庭球大会、関東州軟球大会）という名称で毎年 5 月下旬に開かれた。遼東新報社が満日社と合併してからは満日社主催となり、1931 年以降も続いた。多いときには 100 組以上が参加、満洲で最大にして、最も歴史のあるテニス大会であった<sup>79</sup>。

大連以外の都市でも早くからテニスが始まっていた。たとえば 1909 年には旅順民政部の爾靈テニス団、撫順炭鉱倶楽部、営口領事館庭球倶楽部などがテニス大会を開催している<sup>80</sup>。翌 1910 年には、貝瀬謹吾率いる大連庭球団 14 名が営口に遠征し、営口庭球倶楽部と対戦、完勝した<sup>81</sup>。1914 年には大連対満鉄沿線連合軍の庭球大会が奉天で開催され、連合軍に軍配が上がった<sup>82</sup>。

1915 年、朝鮮に出張中の満鉄社員飯河道雄に対して、朝鮮鉄道局鉄道青年会が満鉄とのテニス試合を申し込んだ。飯河は高師出身で、学生時代からテニスの名手として知られていた。この申し出に対して、満鉄側は開催地の安東へ行くには、前後 3 日を要することから躊躇したが、奉天、長春の支部が前向きの姿勢を見せたため、大連本部も応諾した。満鉄は飯河と佐藤を大将に据え、大連、奉天、本溪湖、安東、撫順、長春の連合チームを結成して鮮鉄に挑んだ。7 時間の死闘を制したのは鮮鉄だった。試合の様子は、満日記者渡辺三角洲によって詳細に伝えられた<sup>83</sup>。臥薪嘗胆を強いられた満鉄は、同年秋に大連で団体対抗の庭球大会（先述）、翌年 6 月に遼陽で満洲庭球大会を開催して、競技力の向上に努める。

<sup>77</sup> 「庭球優勝競技」『満日』1915 年 10 月 16 日。

<sup>78</sup> 「大連庭球優勝試合」『満日』1916 年 4 月 2 日；「庭球会出場戦士」『満日』1916 年 4 月 21 日；「庭球優勝試合」『満日』1916 年 4 月 25 日。

<sup>79</sup> 「本日の庭球大会」『満日』1919 年 5 月 11 日；「本社主催州内庭球大会の組合はせ決定す」『満日』1930 年 5 月 22 日。

<sup>80</sup> 「旅順庭球大会」『満日』1909 年 3 月 29 日；「撫順炭坑倶楽部庭球部大会」『満日』1909 年 6 月 20 日；「営口の庭球会」『満日』1909 年 10 月 25 日。

<sup>81</sup> 「営口の庭球試合」『満日』1910 年 10 月 18 日；「庭球試合の得点」『満日』1910 年 10 月 19 日。

<sup>82</sup> 「連合軍勝つ」『満日』1914 年 9 月 22 日。

<sup>83</sup> 「鮮鉄対満鉄庭球」『満日』1915 年 6 月 24 日；「対鮮鉄軍試合」『満日』1915 年 7 月 4 日；「満鮮庭球競技」『満日』1915 年 7 月 24 日；「満鮮庭球試合」『満日』1915 年 8 月 4 日。

1916 年 6 月に満鉄庭球部の主催で開かれた満洲庭球大会は満洲で最初の全満規模のテニス大会で、大連、瓦房店、大石橋、営口、遼陽、奉天、鉄嶺、開原、公主嶺、長春、撫順、安東の代表が参加した。当時、全満規模の競技会は前年秋に始まった全満野球大会があった。野球のほうは大阪毎日新聞社から、テニスのほうは大阪朝日新聞社から優勝旗が寄贈された<sup>84</sup>。満洲庭球大会は翌年に開催地を遼陽から奉天に移し、1920 年以降は遼東新報社が主催する。同社は野球で成功していたライバル紙の満日社に対抗するために、野球と並ぶ人気スポーツだったテニスに目をつけたのだろう。両社の合併後は、満日奉天支社の主催で開催されることになる<sup>85</sup>。

満鉄が 1916 年 10 月に安東で開かれた第 2 回の鮮鉄との対抗戦でみごと雪辱を果たすと<sup>86</sup>、今度は鮮鉄側が雪辱に燃えることになる。1917 年 8 月の第 3 回対抗戦は、それぞれ満鉄、鮮鉄という会社の枠を越え（1917 年から 1925 年まで朝鮮総督府鉄道は鉄道業務を満鉄に委託、満鉄京城管理局となっていた）、全満洲、全朝鮮チームを組織して対戦することになった。会場は大連の北公園テニスコートである。朝鮮軍は慣れないコンクリートコートながら、序盤戦を優位に進めた（朝鮮ではサンドコートが主流だった）。しかし、満洲軍戸井・伊達正男の大將組が出るに及んで、形勢は逆転、朝鮮軍は 5 組が次々と敗れ、残り 1 組となったところで、日没のため試合続行が不可能となった。試合中に判定をめぐって紛擾が起こったことも影響してか、翌日に試合をやり直すか、残る 1 試合だけを実施するかで双方の意見が折り合わず、気まずい雰囲気を残したまま朝鮮軍は大連を去った<sup>87</sup>。両軍がふたたび顔を合わせるのは 3 年後のことであった（後述）。

1918 年、朝鮮という好敵手を失った満洲に朗報がもたらされる。大連庭球団と大連早稲田大学校友会の招待により、早大庭球部が満鮮に遠征することが決定したのだ。すでに前年には早大野球部が来満していたから、早大としてはこれが 2 回目の満鮮遠

<sup>84</sup> 「満洲庭球大試合」『満日』1916 年 4 月 24 日；「沿線庭球大会」『満日』1916 年 5 月 12 日；「庭球争覇戦」『満日』1916 年 6 月 12 日；「大連軍優勝す」『大阪朝日新聞』1916 年 6 月 12 日。

<sup>85</sup> 「庭球優勝戦」『満日』1917 年 7 月 10 日；「奉天の満洲庭球大会」『満日』1920 年 9 月 22 日；「全満軟球大会開期近づく」『満日』1928 年 8 月 10 日。

<sup>86</sup> 「満鉄雪辱せり」『満日』1916 年 10 月 2 日。

<sup>87</sup> 「朝鮮庭球団来」『満日』1917 年 8 月 13 日；「鮮満庭球戦」『満日』1917 年 8 月 14 日；「満鮮庭球無勝負」『満日』1917 年 8 月 16 日。

征ということになる。緒戦で満鉄軍に大勝した早大は、全大連との第2戦で苦戦を強いられる。結局日没で中止となり、翌日の再戦で早大は5年ぶりとなる敗北を喫した。早大の大將組を下したのは、全大連の大將組伊達正男、石川信正組である。2人は三井物産の社員で、伊達はかつて東京高商で大将を務めた。その後、早大は遼陽、撫順、長春、奉天から朝鮮を経て、帰国した<sup>88</sup>。

翌1919年7月、東京高商が三井物産先輩（伊達であろう）の招きで来征した。満洲では全勝したものの、大連では満鉄の安富・勸修寺允雄組、全大連の石川・伊達組の活躍により苦戦を強いられた。東京高商を苦しめた勸修寺は早大出身で、前年の満鮮遠征にマネージャーとして帯同していた。満洲では遼東新報社運動部記者として、また選手、マネージャー、監督として活躍するが、1927年に亡くなる<sup>89</sup>。

1920年は満洲テニス界にとって輝かしい1年となった。7月上旬、満鉄軍は京城に遠征した。全朝鮮には惜敗したものの、満鉄京城管理局、全京城には大勝した。満鉄遠征軍20名には、南満中学堂の教師4名が含まれていた。四角誠一、熊沢信二、臼田徳衛、平田義雄である。いずれも、飯河道雄の後任として奉天中学校長兼南満中学堂堂長になった内堀維文に呼び寄せられた元東京高師庭球部の選手たちだった<sup>90</sup>。長崎師範から転じた四角によれば、「近ごろの言葉でいえばノンプロのようなもので、まあテニスが一つの看板といったところであつた。しかし、満鉄の名誉のためとかなんとかいう束縛から離れて、ただ自分の衝動がテニスに向つて爆発したといつてもよいくらいに打ち込んだので、日本全国のだれにも負けたことがない黄金時代を築いたのである<sup>91</sup>」。事実、奉天は1920年から満洲庭球大会を3連覇している。

<sup>88</sup> 「早大庭球団」『満日』1918年6月9日；「早大軍大勝」『満日』1918年7月5日；「激戦なりし庭球」『満日』1918年7月6日；「遠征軍敗る」『満日』1918年7月7日；「庭球最終戦」『満日』1918年7月8日；福田雅之助『庭球百年』36-37頁。

<sup>89</sup> 「高商庭球部遠征」『読売新聞』1919年6月19日；「満鉄善戦破る」『満日』1919年7月28日；「敵將遂に倒る」『満日』1919年7月29日；「故勸修寺氏の追悼会執行」『満日』1927年8月10日；福田雅之助『庭球百年』38頁。

<sup>90</sup> 「壮絶凄絶を極めし満鮮庭球争覇戦」『満日』1920年7月9日；「満鉄軍逆襲大捷」『満日』1920年7月11日；桜井寅之助「回顧」法本義弘編『内堀維文遺稿並伝』内堀維文遺稿並伝刊行会、1935年、153-165頁所収；安藤基平「余と内堀先生」同前書、829-836頁所収；田中館哲彦『日本スポーツを救え：野人岡部平太のたたかい』平凡社、1988年、69-70頁。

<sup>91</sup> 四角誠一「私のスポーツ」『関西経協』12巻9号、1958年9月。

1920 年 7 月から 8 月にかけて、神戸高商と三高の庭球団が満鮮を訪れた。8 月中旬には三高庭球団が来連、満鉄に勝ったが全大連には 2 敗した<sup>92</sup>。

三高戦からしばらくして満鉄庭球団は内地遠征の計画を発表した。満洲から内地への遠征は、前年の満洲倶楽部（野球）に次いで 2 番目だった。一行は 10 月 14 日に大連を出発、団長は飯河道雄、副団長は勸修寺允雄、主将は伊藤敏二郎（元早大）、メンバーは伊藤の相棒和田虎（元慶応）ら大連の選手に、奉天から四角、熊沢、営口から平田、撫順から高山、高峰が加わった。東京では東京医専、全東京、天狗倶楽部・ポプラの連合軍を破り、関西では関西学院、神戸高商に勝ち、布引倶楽部と引き分けた。かくして満鉄軍は「全国の庭球界を震撼して、意気揚々王者の如く凱旋した」のである。満鉄庭球団には優勝旗とトロフィーが贈られ、盛大な祝賀会も開かれた。しかし、満鉄軍の活躍は内地のメディアではほとんど報じられなかった。東京での対戦相手には早大、東京高商をはじめテニスの強豪が含まれていなかった。なぜか。同年春から秋にかけて、東京の主要大学、専門学校は一斉に硬球に転じていたからである<sup>93</sup>。満鉄軍が関西を席卷した直後には、大阪朝日新聞社の主催で日本初の硬式庭球大会が開かれている<sup>94</sup>。

## (2) 硬式庭球

在満西洋人と在満日本人の団体 Dairen Golf & Tennis Club で行われていたのは、ほぼ確実に硬式庭球であった<sup>95</sup>。1916 年の『満日』に、大連の三越でレギュレーション球（硬球）が売られていたが、満洲で硬球を使うものはいないのにどうして紛れ込んだのだろうという記事が掲載されているところからみて、在満日本人がもっぱら軟式だった

<sup>92</sup> 朝日新聞社編『運動年鑑』大正 10 年版、朝日新聞社、1921 年、213-215 頁；「三高来連」『満日』1920 年 8 月 16 日。

<sup>93</sup> 朝日新聞社編『運動年鑑』大正 10 年版、朝日新聞社、1921 年、215-218 頁；「母国席捲記」『満日』1920 年 11 月 5-6 日；「全満鉄庭球軍旋る」『満日』1920 年 11 月 8 日；「母国席捲の誇り」『満日』1920 年 12 月 5 日；「満鉄庭球軍」『満日』1920 年 12 月 8 日。

<sup>94</sup> 福田雅之助『庭球百年』65 頁。

<sup>95</sup> 同倶楽部はもともとゴルフがメインであり、日本人の多くはゴルフのためだけに会員になっていた（“Dairen Golf and Tennis Club,” *MDN*, April 24, 1913）。*MDN* では 1917 年の第 7 回総会まで活動を確認できる（“Dairen Golf & Tennis Club,” *MDN*, February, 20, 1917）。

ことも間違いない<sup>96</sup>。

のちに満鉄運動会硬球部幹事を務める田中佐一は、1918年春から3年間ハルビンに滞在したが、すでに同地では硬球をしている日本人がいた。横浜正金銀行ハルビン支店の白石という人物で、同地テニス倶楽部の唯一の日本人会員であった。田中は早速このテニス倶楽部に入り、3年間硬球を楽しんだ。1919年に大連に出かけた時、硬球用のラケットが欲しかったので山本運動具店に立ち寄ったが、硬球の用具は置いていなかった。田中は1921年3月に大連に転勤、このシーズンは大連倶楽部でプレーした<sup>97</sup>。大連倶楽部は西洋人のクラブで、関東陸軍倉庫の裏にテニスコートを持っていた<sup>98</sup>。田中が外国人のクラブでプレーしたのは、この時点でまだ硬式庭球をする日本人がいなかったからである。しかし状況は変わりつつあった。

1920年秋に満鉄庭球軍は内地テニス界が軟球を捨てて硬球に向かいつつある様子を目の当たりにした。『満日』に「満洲庭球界の覚醒、硬球使用の気熟す」という記事が掲載されたのは、遠征軍が戻ってわずか1週間後のことであった。

今日硬球に改めることは世界の大勢に副ふのであつて上海や青島や天津や各植民地は既に硬球を使つてゐる、運動界の発達植民地中の權威である我大連が尚軟球を使つてゐるが如きは云ふまでもなく時世に逆行してゐるので大なる恥辱でもあるのだ<sup>99</sup>。

発言の主は大連テニス界の第一人者伊達正男だった。じつは同年春にすでに硬球使用の協議がなされ、秋にも硬球使用を開始する予定だったが、この年は軟球界の活躍めざましく、一時棚上げにされていたのである<sup>100</sup>。伊達は翌12月に「硬球を使用せよ」と題する記事を書き、さらに「硬球庭球規則」を翻訳、『満日』に掲載した<sup>101</sup>。

1921年1月には『満日』が「大連庭球界革命、硬球使用決定」と報じ、満鉄をはじめ、

<sup>96</sup> 「運動界雑事」『満日』1916年7月28日。

<sup>97</sup> 田中佐一「満洲硬球界の揺籃時代を回顧して」『満日』1933年1月1日。

<sup>98</sup> 「大連庭球革命」『満日』1920年12月14日。

<sup>99</sup> 「満洲庭球界の覚醒、硬球使用の気熟す」『満日』1920年11月12日。

<sup>100</sup> 「大連庭球革命」『満日』1920年12月14日。

<sup>101</sup> 伊達正男「硬球を使用せよ」『満日』1920年12月5日；伊達正男訳「硬球庭球規則」『満日』1920年12月12、19、22日。

東洋拓殖、三井物産、大連汽船、鈴木商店が次々と硬球に移行していくことになる<sup>102</sup>。こうして1921年は満洲における硬球元年となった。考えてみれば、満洲は硬球するのに適した土地である。大連港では関税がかからなかったもので、外国のテニス用具を内地よりも安価で購入できた。満洲の大企業の社員は在外手当で潤い、余暇時間もたっぷりあった。周囲には中国人を含めて硬球を楽しむ外国人がいた。しかし、満洲の日本人は周囲の世界と積極的に交わろうとしなかった。その結果、内地のスポーツの影響をより強く受け、硬球に目を向けようとしなかったのである。そして、内地のテニス界が硬球に向かうのを見るや、満洲でも硬球が叫ばれることになったのだ。

1921年9月、満鉄庭球部は元早大庭球部の三上嘉一を招聘した。三上は前年11月に開催された第1回全国硬式庭球大会で単複ともに準優勝した選手である<sup>103</sup>。三上の指導を受けた満鉄は、10月に東拓から硬球の試合を申し込まれた。大連における日本人最初の硬球戦は満鉄の圧勝に終わった<sup>104</sup>。

1922年春、田中佐一ら満鉄の硬球愛好者が満鉄硬球部を設立、6月に盛大な発会式を開いた<sup>105</sup>。同じく6月、極東大会打合せのため内地に行っていた岡部平太が内地各大学の硬球選手招聘の話をまとめてきた<sup>106</sup>。8月、針重敬喜監督以下、東京高師の太田芳郎、早大の川妻柳三、関学の吉田嘉寿男、京都帝大の四角誠一ら関東関西の錚々たる面々が来連した。大連軍との第1回戦は単複とも内地軍が4勝1敗で圧勝したが、第2回戦は大連軍が単で3勝1敗、複で2勝3敗と勝ち越しを決めた。かつて高師で四角誠一と大将組を組んだことのある岡部も、大阪高商の奥野弥三郎に勝利して満洲軍のために気を吐いた。内地軍はその後満洲各地を回って硬球の種を蒔いた<sup>107</sup>。

<sup>102</sup>「大連庭球界革命、硬球使用決定」『満日』1921年1月30日；「軟球から硬球へ、満洲庭球界」『大連新聞』1921年10月23日。

<sup>103</sup>「硬球選手三上氏は二十一日着連」『満日』1921年9月21日。

<sup>104</sup>「満鉄庭球大会」『大連新聞』1921年10月16日；「大連最初の硬球戦」『大連新聞』1921年10月19日。

<sup>105</sup>田中佐一「満洲硬球界の揺籃時代を回顧して」『満日』1933年1月1日。

<sup>106</sup>「斯界の猛者を招聘し硬球時代を作るべく満鉄庭球部努力中」『大連新聞』1922年5月11日；「本邦球界の代表チームが満洲に押し寄せ来る」『満日』1922年6月14日；「本邦最初の硬球試合」『満日』1922年6月23日。

<sup>107</sup>「内地対満洲硬球庭球争覇戦」『満日』1922年8月5日；「全大連軍捷つ」『満日』1922年8月6日；「老頭兎気を吐く、昨日の硬球戦」『満日』1922年8月7日；岡部平太「テニスに就て」『読

同年 10 月、全滿競技連合の主催で全滿洲庭球大会（硬球）が極東大会滿洲予選を兼ねて開催され、大連、奉天、撫順から選手が参加した<sup>108</sup>。大連から発せられた硬球化の呼びかけは、その他の都市にも確実に届いていた。

撫順庭球部では 1922 年春から段階的に硬球に転換していくことを決めた。当初は硬軟ともに実施していたが、やがて軟球禁止という措置を取り、強制的に硬球への移行を図った<sup>109</sup>。旅順工科学堂は、滿洲で庭球の先輩がことごとく硬球に移っており、「我部のみ軟球を墨守しても遂に発達の見込」みがなく、「滿洲最高学府としては少くとも将来は運動競技の先達となりたい」との思いから、硬球採用に踏み切った。当初は 1、2 年生が軟球、3 年あるいは本科から硬球という形で実施することになっていたが、1923 年には完全に硬球に移行した<sup>110</sup>。軟式庭球のメッカだった奉天でも硬球倶楽部が組織され、1923 年 7 月に第 1 回硬球大会を開催、さらに撫順との対抗戦を行い、これに勝利した。奉天硬球倶楽部は女性の入会を積極的に勧めていた点でも注目される<sup>111</sup>。1923 年夏には滿鉄硬球部が沿線各地に遠征し、硬球の普及に尽力した<sup>112</sup>。この夏休みには神戸高商硬球団が来連、滿鉄軍を圧倒した。神戸高商のエース鳥羽貞三は同年 5 月に開かれた極東大会の日本代表選手で、1926 年から 1928 年までデビス杯に出場、1934 年に大連に転勤し、滿洲で指導者として活躍することになる<sup>113</sup>。

鳥羽とともに 1927、1928 年のデビス杯に出場した太田芳郎は、1925 年春に東京高等師範学校を卒業、先輩岡部に誘われて翌 1926 年春に来連し弥生高女の教諭となった。さっそく同校では硬球コートがつくれ、太田は体操科助手飯村敏子のコーチをし

書会雑誌』9 卷 10 号、1922 年 9 月。

<sup>108</sup>「全滿洲競技連合主催、全滿庭球選手権」『大連新聞』1922 年 10 月 23 日；「全滿洲庭球争覇戦」『満日』1922 年 10 月 24 日。

<sup>109</sup>「本年の庭球界」『大連新聞』1922 年 4 月 23 日；「撫順の硬球廃止と軟球大会出場選手」『大連新聞』1925 年 9 月 9 日。

<sup>110</sup>H 生「硬軟両球を採用することに就つて」『靈南』14 号、1922 年 11 月；「庭球部部報」『靈南』16 号、1923 年 12 月。

<sup>111</sup>「婦人硬球開設」『満日』1923 年 3 月 9 日；「硬球大会」『大連新聞』1923 年 7 月 1、4 日；「硬球争覇戦で優勝盃は奉天へ」『満日』1923 年 7 月 12 日。

<sup>112</sup>「滿鉄硬球沿線に遠征」『満日』1923 年 8 月 30 日。

<sup>113</sup>「高商軍勝つ」『満日』1923 年 8 月 14 日；「デビス戦の勇将鳥羽氏大連に栄転」『大連新聞』1934 年 12 月 9 日；鳥羽貞三「第一に設備によりシーズン難を解決する事」『満日』1937 年 1 月 21 日。

た<sup>114</sup>。8月、全日本選手権大会に参加して初優勝を飾った太田は同年度シングルのランキング1位に推された。ランキング1位となればデビス杯選手として推薦されるのが通例だったが、太田は満洲にいたためか推薦されなかった。満洲体育協会が日本庭球協会に詰問状を突きつけた結果、ようやく太田のデビス杯参加が認められた。経費5000円のうち、日本庭球協会が2000円、関東庁が1500円、満鉄が1000円、満洲体育協会が500円を出すことになった。新米教師太田のために先輩の岡部平太と満洲体育協会の林田学が奔走したことは言うまでもない<sup>115</sup>。太田は1928年にイギリス留学という形でデ杯戦に出場、その間イギリスを拠点にデビス杯に参戦し、日本が2度インターゾーンに進出するのに貢献し、1930年8月末に大連に戻る<sup>116</sup>。太田は大連に赴任してから4年余りの間に3年近く海外にいたことになる。それだけ学校も関東庁も理解があったということだろう。

硬球化に話を戻そう。中等学校では硬球化があまり進まなかった。1925年、旅順工大主催の全満中等学校競技大会と満洲医大がこの年に創設した全満中等学校庭球大会はともに今回を軟球最後の大会とし、翌年から準硬球を採用することになった<sup>117</sup>。準硬球は、軟球から硬球への移行を促すため、鳥山隆夫が中心となって開発されたボールで、1924年3月に日本最初の準硬球トーナメントが開催されている<sup>118</sup>。1931年に玉沢運動具店が創設した全満中等学校準硬球複試合もその名の通り準硬球だった。

<sup>114</sup>「庭球の権威者太田芳郎氏が市立高女の教諭となる」『満日』1926年3月7日；「黎明期に入つた大連の女子競技」『満日』1926年4月8日；「得意の水泳を思切つた飯村嬢、神宮競技に硬球の選手で」『満日』1926年10月10日。

<sup>115</sup>「日本庭球協会の越権に対し満洲より抗議」『大連新聞』1927年5月5日；「満洲体育協会より発せる詰問状」『大連新聞』1927年5月6日；「太田選手を除外せるデ盃出場者問題」『大連新聞』1927年5月10日；「庭球戦出場者選定の詰問状が問題と成る」『大連新聞』1927年5月12日；「デ盃戦には太田芳郎選手も出場することにならふ」『大連新聞』1927年5月13日；「不足の旅費を補助」『満日』1927年5月18日。

<sup>116</sup>「英国留学の形式で太田選手デ盃戦へ」『満日』1928年3月25日；「デ盃戦出場の太田安部選手来る」『大連新聞』1930年8月31日。

<sup>117</sup>「全満中等学校庭球大会」『満日』1925年5月19日；「全満中学庭球大会」『満日』1925年6月10日。

<sup>118</sup>鳥山隆夫「準硬球」『アルス運動大講座』第2巻、アルス、1928年所収。ちなみに、鳥山は台湾に軟式庭球を広めた人物である（林丁国『観念、組織与实践：日治時期台湾体育運動之發展』稲郷出版社、2012年、268-269頁）。

これに対して1929年に南満工専が創設した全満中等学校庭球大会は軟球を採用した。準硬球と軟球の大会出場校に大きな違いはなく、中等学校では両方行われていたようである（内地も同じ状況だった）。たとえば、満鉄育成学校庭球部はまず玉沢運動具店の大会に出場（準硬球、コンクリート）、ついで旅順工大（準硬球、サンド）、体育堂（軟球、コンクリート）、満洲医大（準硬球、サンド）、南満工専（軟球、コンクリート）が主催する大会に出場した。コートもサンドとコンクリートがあつて、「複雑きわまる状況」だった<sup>119</sup>。1933年に田中佐一は「中等学校の方々は是非軟球を止めて準硬球なり硬球をせられては如何です」と記しているが、ここから逆に硬球化が進まなかったことがわかる<sup>120</sup>。ただこれはなにも中等学校だけのことではない。

硬球化の声を前に、軟球は一時押され気味だったが、すぐに勢力を盛り返した。1924年の満洲体育協会主催、全満選手権大会は明治神宮大会予選を兼ねて開催された。「本年度に於ける硬球の進歩発達は著しきものがあり参加申込も多数に上る予定」と報じられたが、実際の参加者はシングルス10名、ダブルス4組（ダブルスのみ出場は1名）にすぎなかった<sup>121</sup>。1924年の満洲テニス界について、『満蒙年鑑』は「庭球は目下の処硬軟両球にて硬球漸く擡頭し軟球稍凋落の感がある」「満洲庭球界は今や硬球軟球の過渡期とも云ふべき時代に遭遇し選手も二分の形となり往事軟球全盛時代の夫れに及ばず」と評したが<sup>122</sup>、トップ選手を除くと、軟球は相変わらず盛んであった。1925年春になつても、「大連の庭球界は大分硬球に移つたけれども軟球にいふべからざる興趣があるので大連に於ては軟球熱が尚衰へぬばかりでなく大会並有力チームのリーグ戦及び体育其他の関係からなか／＼旺盛である」とされ<sup>123</sup>、こうした状況を受けて、これまで硬球化を推進してきた満洲体育協会は新たに軟球の全満選手権大会を開催することを決定した。軟球選手権には38組が参加した<sup>124</sup>。軟球を認めない方針を採っていた撫順

<sup>119</sup> 植松義夫、楠正之介「庭球部史」満鉄若葉会編『曠野に生きた若者たち』佐藤真美、1982年、145-152頁所収。

<sup>120</sup> 田中佐一「満洲硬球界の揺籃時代を回顧して」『満日』1933年1月1日。

<sup>121</sup> 「庭球大会場所」『満日』1924年10月4日；「全満洲庭球選手権大会」『満日』1924年10月5日。

<sup>122</sup> 満蒙文化協会編『満蒙年鑑』大正14年版、1925年、766、770頁。『満蒙年鑑』の出版者は変化が激しいため、以下では『満蒙年鑑』元号X年版と略す。

<sup>123</sup> 「庭球季節来る」『満日』1925年4月19日。

<sup>124</sup> 「体育協会の軟球選手権大会」『満日』1925年9月22日；「素人ばなれた全満軟球選手権大会」『満

庭球部もこの年に方針を転換、硬球廃止の声があがることになる<sup>125</sup>。また、軟球支持者が硬球の普及を妨害することもあったようである。

硬球はブルジョアのスポーツなりとの悪信念の下に軟球より硬球に代らんとする選手を虐待してコートを貸さず或はテニスマンを任じて横柄なる態度を以て人と接するが如き鼠輩の居る限り満洲硬球界の発達は何と望むべからざるものである<sup>126</sup>。

1931年の満鉄社員に対する調査では、男子社員約1万9000人のうち、「現在実行中の運動趣味」に軟球を挙げたのが5253人、硬球が123人、準硬球が109人であった。テニス愛好者の95%が軟球を選択していたことになる<sup>127</sup>。鳴り物入りで導入され、一時は軟球に取って代わるかの勢いを見せた硬球だったが、10年を経て軟球に完敗したのだった。

### (3) 女子庭球

テニスコートでは女性の姿もよく見られた。それがいつからかはわからない。

1914年に大連高等女学校（神明高女）に入学した加藤重子は、当時の校舎は日本橋にあり、テニスコートもあって、サーヴが上手だったのでテニスの選手になったと述べている<sup>128</sup>。神明高女は1914年3月に私立大連高等女学院を継承して創設され、当初は児玉町にあった南満洲工業学校の建物（これも仮校舎だった）を利用していた。1917年に女学校は神明町の新校舎に移った。したがって、加藤がテニスをしたのは1914年から1917年の間ということになる。

こうした光景は少なくとも撫順では珍しかったようで、1916年6月に撫順で行われたテニスの試合に「男もすなる庭球てふことを女もしてみむとて勇み給へり」と女性が参加したことが特筆されている<sup>129</sup>。

---

日』1925年9月28日。

<sup>125</sup>「撫順の硬球廃止と軟球大会出場選手」『満日』1925年9月9日。

<sup>126</sup>太郎冠者「昭和三年の運動界を送る（中）」『満日』1928年12月29日。

<sup>127</sup>「興味ある満鉄の運動調査」『大連新聞』1931年7月14日。

<sup>128</sup>加藤重子「創立の頃の神明」満洲美会編『合歓の花：大連神明高等女学校創立70周年記念誌』満洲美会、1984年、100-101頁所収。

<sup>129</sup>「庭球試合」『満日』1916年6月23日。

ゴルフ（第18話参照）と同じく、大連の上流社会の女性は、夫と一緒にテニスを楽しんだ。西洋人が加わることも珍しくなかった。そんな女性の代表が、「大連女流運動界の明星」、江原春子（大連海関長夫人）だった<sup>130</sup>。

テニスは学校や社交界の狭いサークルの中で行われており、競技会に女子選手が姿を見せることはなかった。女子スポーツに力を入れていた全満競技連合が1923年9月に女子の庭球大会を計画したが、実現しなかった<sup>131</sup>。

最も早い女子のテニス試合は1924年10月に旅順高女、神明高女、弥生高女の対抗競技会の一部として挙行された。水泳では1922年から飯村敏子ら女子選手が活躍していたことを考えると（第14話参照）、テニスはいかにも遅い。その一因として、女子スポーツを推進していた全満競技連合が硬球にこだわっていたことが挙げられるかもしれない<sup>132</sup>。

満洲体育協会は1925年10月、明治神宮大会に女子のテニス選手（硬球）を派遣した。弥生高女の飯村敏子と室崎かほるは6月から硬球の練習に取り組んだが、本戦では芳しい成績を残せなかった<sup>133</sup>。飯村は1926年春に弥生高女を卒業、同校の体操科助手として後進の指導に当たっていたが、水泳を止めて硬球に専念することを決め、太田芳郎ら一流選手から指導を受けた<sup>134</sup>。1926年の明治神宮大会ではシングルスで準決勝に、東京の瀧口滯子と組んだダブルスで決勝に進出した。飯村によれば、当時大連には女子の硬球プレーヤーは何人かいたが、いずれも「保健」のためにやっているのと一緒に練習することもできず、いつも男子選手と練習していたため、「男子のテニス」が身についていたという。水泳やスケートで鍛えた体力を生かして、パワーで押すテニスが持ち味だった。一方の瀧口は技巧派だったから、なかなかいいコンビだったはずで

<sup>130</sup>「大連女流運動界の明星」『満日』1921年1月30日。

<sup>131</sup>「全満競技連合事業計画成る」『満日』1923年1月20日。

<sup>132</sup>たとえば岡部平太は「私が東京府立第二高女の硬球試合に立合つて得た経験から婦女子の庭球は軟球よりも却つて硬球の方が良いと思つた」と述べている（「女性の運動は決して肉体美を損じ男性化するやうな憂ひはない」『満日』1922年6月19日）。

<sup>133</sup>「神宮競技に飯村、室崎二嬢出発す」『満日』1925年10月21日。

<sup>134</sup>「黎明期に入つた大連の女子競技」『満日』1926年4月8日；「得意の水泳を思切つた飯村嬢、神宮競技に硬球の選手で」『満日』1926年10月10日。

ある<sup>135</sup>。

3度目の挑戦となる1927年、全日本女子選手権と明治神宮大会に出場した飯村は、瀧口と組んでついに両大会で優勝した。満洲庭球界のために大いに気を吐いた飯村だったが、父の仕事の関係で翌年早々満洲を離れた。飯村は東京で瀧口と同じボプラ倶楽部に入り、1928年の全国女子選手権のダブルスで連覇を果たすことになる<sup>136</sup>。

飯村の活躍もあって、大連をはじめ各地の大会で女子選手の姿が見られるようになる。1927年には全満硬球選手権に2名、全満軟球選手権に8組の女性選手が参加した<sup>137</sup>。先述した1931年の満鉄社員調査によると、日本人女子社員887名のうち、軟球の経験者は半数以上の478名に上り、現在軟球を実践しているものも124名いた。一方、硬球と準硬球は経験者が各5名、実践者が各2名で、男子以上に硬球の割合が少なかった<sup>138</sup>。

### 第30話 バスケットボール<sup>139</sup>

1891年にアメリカのYMCAで考案されたバスケットボールは、早くも1895年にアメリカ人YMCA主事によって中国に紹介された。日本では1894年にアメリカ留学から帰国した成瀬仁蔵がいちはやくバスケットボールを紹介したが、それはアメリカの女子バスケットボールを改変したもので、競技というよりは遊戯に近かった。競技としてのバスケットボールは、1908年に国際YMCA訓練学校を卒業して帰国した大森兵蔵によって伝えられた。1913年秋にYMCA体育主事フランク・H・ブラウンが来日したときには、神戸では国際YMCA訓練学校卒業生である宮田守衛によってバスケットボールが導入されていたが、ブラウンの目からすれば「Helter-skelter game」（初

<sup>135</sup>「明治神宮女子硬球出場感想（下）」『満日』1926年11月27日；「好敵手（五）何方が勝つ、瀧口小林の両嬢」『読売新聞』1930年6月23日。

<sup>136</sup>「満洲庭球界のため気を吐いた飯村敏子嬢」『満日』1927年11月13日；「満洲の運動界と別れる飯村姉妹」『満日』1928年1月22日。

<sup>137</sup>「硬球選手権大会」『大連新聞』1927年8月15日；「女子組の組合せ決定」『満日』1927年9月16日。

<sup>138</sup>「興味ある満鉄の運動調査」『大連新聞』1931年7月14日。

<sup>139</sup>本話は第31話、第40話と重なる部分が多いことをお断りしておく。

心者の目茶苦茶なゲーム)でしかなかった<sup>140</sup>。

1911年3月にオープンした大連 YMCA 会館は、当時のアメリカの YMCA 会館と同じく、バスケットボールの設備を有し、当初からバスケットボールは体育活動の一部を構成していた<sup>141</sup>。1912年1月に来連し、「非常なるセンセーションを大連市中引き起した」アーサー・シューメーカーは、バスケットボールの指導に力を入れ、彼の滞在中に組織されたバスケットボールリーグには、「満鉄本社、日清豆粕、正金、大連市、青年会等」が参加した<sup>142</sup>。

1915年9月、大連 YMCA に着任したジョン・B・ソーディ (John B. Sawdey) とカルトン・W・パワー (C. W. Bower) によって、バレーボールとバスケットボールはにわかに活況を呈した。1916年3月の時点で大連 YMCA では5つのチーム (Y.M.C.A., News, Merchants, Mitsukoshis, and Independents) が活動し、大連商業学校や南満工業学校にも広めようとしていた<sup>143</sup>。同じころ、満鉄庶務課慰藉係の大塚素は、満鉄沿線の社員に対する体育奨励のため、「冬季向き嶄新爽快なる団体運動」であるバスケットボールを普及させようと考え、ソーディとパワーを連れて、長春、奉天、撫順を回った<sup>144</sup>。3月22日に長春に着いた一行は小学校でバスケットボールを指導、「駅員及び小学生徒汗ダラケになつて競争を為し多大の興味を感じた<sup>145</sup>」。2日間にわたって指導を行った撫順では、さっそく東郷坑、機械課、会計課、医院の4チームが結成され、4月2日に「内輪の競技会」を行った。撫順選手は4月16日に大連に遠征する予定だったが、撫順側の都合で23日に延期された<sup>146</sup>。その間にソーディとパワーが猩紅熱にかかり、

<sup>140</sup> 日本バスケットボール協会広報部会編『バスケットボールの歩み』日本バスケットボール協会、1981年、42-44頁。水谷豊『バスケットボール物語：誕生と発展の系譜』大修館書店、2011年、120頁は「Helter-skelter game」を「ボールを奪取するや、ディフェンスの状態にいっさい目もくれないで常に早く攻める。しかし、これは単なる「韋駄天攻め」でしかなく、組織的なプレーもないままでの“あわて攻め”とも言われる」と解説している。

<sup>141</sup> 「青年会館竣成」『満日』1911年4月2日。

<sup>142</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』大連基督教青年会、1930年、194頁；「青年会週報」『満日』1912年2月11日。

<sup>143</sup> “Basket-Ball and Volley-Ball Leagues,” *MDN*, March 16, 1916.

<sup>144</sup> 「バスケットボール」『撫順』42号、1916年4月18日；「バスケットボール」『満日』1916年3月24日；「掃き寄せ」『満日』1916年3月25日；「バスケット好評」『満日』1916年3月26日。

<sup>145</sup> 「バスケットボール」『満日』1916年3月25日。

<sup>146</sup> 「バスケットボール」『撫順』42号、1916年4月18日；「バスケット試合」『満日』1916年4月

試合は無期延期となった<sup>147</sup>。奉天では4月になってバスケットボールが届き、小学校で競技が始まった<sup>148</sup>。5月14日、同じく奉天の南満医学堂陸上運動会でバスケットボールが行われたことが確認できる<sup>149</sup>。ただし、翌年以降、長春、奉天、撫順でバスケットボールが行われたという記録はなく、一過性のブームに終わった可能性が高い。

大連 YMCA は1917年に外来チームを迎えた。

芝罘外国語学校学生団十四名外人引率にて廿二日朝来連し敷島町基督教青年会館組と同館にてバスケット、ボール、ヴォレーボールの大試合を為すべく既に廿二日夕第二選手の競技を終り本日は午後六時より第一選手の仕合を挙行すべきが此競技は近來米國に於て頗る流行を極めて興味あるものにして満洲及び日本に於て皮切りの仕合なれば大に見物なるべく観覧自由なりと<sup>150</sup>。

この外国語学校とは、アメリカ長老教会が運営していた実益学館 (The Temple Hill English School) のことだろう<sup>151</sup>。帝国日本で最初のバスケットボール国際競技は、大連 YMCA が42対27で勝利した<sup>152</sup>。こうした情報は東京のフランクリン・ブラウンにも届いていたようである。同年5月に東京で開かれる極東大会を前に、ブラウンは「大連にも有力な組が出来て居るから何とかして呼び寄せて関西組と試合」をさせて日本代表を決定したいと記している<sup>153</sup>。

大連 YMCA で細々と続いていたバスケットボールが注目を浴びるのは1922年に入ってからである。仕掛け人は、前年秋に来満した岡部平太である。

満鉄慰藉係の体育主事岡部さんは満洲の冬季運動にバスケットボールが好適だと主張して満鉄社内でも若手の間に頻りと奨励し<sup>マ</sup>ゐたが可成練習も出来たので来る

---

6日。

<sup>147</sup>「バスケット中止」『満日』1916年4月23日；「撫青試合延期」『満日』1916年4月23日。

<sup>148</sup>「掃き寄せ」『満日』1916年4月22日。

<sup>149</sup>“South Manchuria Medical College,” *MDN*, May 1, 1916.

<sup>150</sup>「日支籠球大試合」『満日』1917年3月23日。“Chinese Students, Chefoo,” *MDN*, March 23, 1917 も参照。

<sup>151</sup>王妍紅「美国北長老会与晚清山東社会 (1861-1911)」博士論文、華中師範大学、2014年、106-107頁。同校はのち会文書院と合併して益文学校となる（さらに1929年に益文商業專科学学校と改名）。1925年と1931年には、益文のサッカーチームが大連に遠征した（第28話参照）。

<sup>152</sup>大連基督教青年会編『恩寵廿年』208頁。

<sup>153</sup>ブラウン「極東オリムピック競技に就て」『開拓者』12巻4号、1917年4月。

十日には敷島町青年会館に於て青年会对満鉄の競技をするさうです岡部さんは順次中学校各小学校教員チーム等と対戦して満洲に此競技が盛んになる事を期して居る<sup>154</sup>。

2月10日の満鉄対大連 YMCA 戦は大連 YMCA 名誉主事ダーギンが審判を務めた<sup>155</sup>。岡部は翌年以降、冬のスポーツとしてスケートを奨励することになるが、来満最初の冬はまだスケートを使いこなせなかったから<sup>156</sup>、勢いバスケットボールに力を入れたことだろう。満鉄のほか、南満工業学校や大連中学の学生もバスケットボールを始めた<sup>157</sup>。大連中学の山本芳松教諭は、服部精四郎校長から体育は何に重点を置いたらよいかと聞かれ、個人種目として陸上競技、団体競技としてバスケットボールを勧めた。ただし、バスケットボールは社会性ができるが、チームゲームだから勉強の時間がとれないとつけ加えたところ、服部校長は陸上を第一校技にするよう申し渡したという<sup>158</sup>。満鉄附属地の各小学校でも、1922年春より体育科で尋常六年以上の生徒にバレーボールとバスケットボールを課すことになった<sup>159</sup>。

1923年2月8日、大連新聞社は、スケートが少年に独占され、婦人や老人には歓迎されていないことに鑑み、「子供でも婦人でも老人でも出来る」バスケットボールを奨励すべく、弥生高女で大連籃球倶楽部（DBC）と大連中学の模範試合を開いた<sup>160</sup>。試合前、DBC主将の岡部は、満洲の冬を征服するのはスケートとバスケットボールだが、今日まで満洲でバスケットボールが遅々として進歩しなかったのは「正規なバスケットボールの床」がなかったからで、今回弥生高女にそれができたので将来が見物だと語り、試合については、中学は非常にうまくなっているが、自分たちは勤務の関係で一緒に練習する機会がなく、チームワークに欠陥があり、どうなるか予想できないと

<sup>154</sup>「バスケットボール」『満日』1922年2月5日。

<sup>155</sup>“Basket Ball Fad,” *MDN*, February 10, 1922.

<sup>156</sup>拙著『国家とスポーツ』118頁。

<sup>157</sup>『満蒙年鑑』大正12年版、816頁。

<sup>158</sup>山本芳松「随想——われ、生けるしるしあり」大連一中創立五十周年記念行事実行委員会編集部編『大連一中 創立五十周年記念』大連一中校友会、1970年、44-46頁所収。

<sup>159</sup>「満鉄小学校の体育科実施」『大連新聞』1922年4月15日。

<sup>160</sup>「冬季運動としての籃球模範試合」『大連新聞』1923年1月25日。

コメントしている<sup>161</sup>。DBCの黒田善八(大連YMCA体育部主事)も冬のスポーツとしてバスケットボールが最適であると評価し、さらに団体的精神に欠ける日本人に団体的精神を養成するのは現代社会において急務でなければならないとも述べている<sup>162</sup>。土田忠二(弥生高女校長)、水野谷初美(大連高女教諭)、服部精四郎(大連中学校長)、丸山英二(大連中学教頭)をはじめ、市内の中、小学校の運動担当教員多数が観戦するなか、試合は岡部と黒田の活躍でDBCが大連中学に20対17で勝利した<sup>163</sup>。

1923年10月、全満競技連合が第2回陸上競技選手権大会の一部として、バスケットボールとバレーボールの第1回選手権を挙行政した。参加は2チームで、大連中学が大連YMCAを破って優勝した<sup>164</sup>。11月には大連中華YMCAと大連YMCAの試合が挙行政された。大連の日本人と中国人のバスケットボール戦はこれが最初のことであった。大連中華YMCAは、「民国人の団体は頗る優秀の腕揃ひで大連に於ける欧米及び日本人の一大強敵で斯界に名を成して居る」と紹介されており、実際この試合も23対20で大連中華YMCAが勝利している<sup>165</sup>。

大連中華YMCAは、1925年2月に開かれた第2回バスケットボール選手権大会にも出場、大連YMCAと対戦した。両チームは日頃から一緒に練習するようになっており、互いの手の内をよく知っていたが、今回は36対8で大連YMCAが圧勝している。大連中華YMCAの参加に関して、「短軀豚生」なる人物は「体育界から云つても日華親善の方面から言つても誠に喜ばしき快挙であると思ふ競技には国境もなく、人種もなく又階級もない。吾人スポーツマンは是等の運動競技を通じて日華親善の実をあげて行くべきであると思ふ」と述べている<sup>166</sup>。もっとも、同じくYMCAが考案したスポー

<sup>161</sup>「満洲の冬を征服すべき籠球に就て」『大連新聞』1923年2月7日。弥生高女の体育館は前年12月に竣工した(「満鉄各種運動」『満日』1922年12月9日)。

<sup>162</sup>「籠球ボールの後にヴォーレーボールも」『大連新聞』1923年2月7日。

<sup>163</sup>「血湧き肉躍る観を呈した籠球模範試合」『大連新聞』1923年2月9日。

<sup>164</sup>「全満洲競技連合主催の全満陸上選手権大会」『大連新聞』1923年10月29日。

<sup>165</sup>「両青年会賽籃球」『泰東日報』1923年11月9日；「日華両軍の籠球戦」『満日』1923年11月10日；「中日教会籃球比賽結果」『満洲報』1923年11月13日。

<sup>166</sup>「バスケットボール、バレーボール全満選手権」『満日』1925年2月16日；短軀豚生「排球と籃球、選手権大会評」『満日』1925年2月26日。大連中華YMCAは毎週火木土曜日に大連YMCA会館で練習をしていた(「基督教青年会消息側面」『泰東日報』1925年6月14日；大連基督教青年会編『恩寵廿年』209-210頁)。

ツでありながら、男子のバレーボールは1930年まで日中対抗戦が開かれなかった。日中双方でバレーボールの普及が進まなかったからである。

1925年10月、大連YMCAが第1回全滿籃球大会を開催、大連、旅順から8チームが参加したが、そのうち大連中華YMCA、旅順二中、旅順工大の3チームが中国人チームだった。大連中華YMCAは大連商業に、旅順二中は大連一中Aにそれぞれ完敗したが、旅順工大は決勝まで進出した<sup>167</sup>。

大連のバスケットボール界は1928年前後から飛躍的に発展する(表30-1)。1927年11月3日に関東庁体育研究所が全滿籠球大会を開催する。この大会は1回だけで終わり、関東庁体育研究所は翌年に第5回全滿籃球大会を大連YMCAと共催することになる<sup>168</sup>。1928年5月には南滿工專籃球部主催で全滿中等学校籃球大会が挙行される。第1回は旅順二中が優勝するが、その後は大連二中が連覇する。1929年から中学校のバスケットボール・バレーボール界では大連二中の全盛期が続くが、その基礎を築いたのは、1929年4月に同校に赴任した田島満男教諭であった。田島は選手としても活躍したが、病を得て1931年10月に亡くなる<sup>169</sup>。大連一中の宗像卯一がバスケットボール部に入っただのはこの年の春であった。宗像は前年に広島から転校、体操の時間にサッカーをしていたところ、宮畑虎彦教諭の目に止まり、バスケットボール部員となった。しかしながら、宗像でも大連二中の勢いを抑えることはできなかった。彼の才能が花開き、1936年のベルリンオリンピック日本代表選手に選ばれるのは早大入学後のことになる<sup>170</sup>。

女子の全滿選手権が開かれたのも1928年である。先述の通り、1922年12月に弥生高女にバスケットボールコートが設置されていた。そこで開かれたDBCと大連中学の模範試合では、弥生高女と神明高女の関係者の姿が見られた。1924年3月に神明高女

<sup>167</sup>「年少気鋭の商業軍、よく工大軍を撃退」『満日』1925年10月26日。

<sup>168</sup> 関東庁体育研究所は、1930年に全滿籠球大会の共催を止め、11月2-8日に全旅順蹴球選手権大会を開催した。この大会は翌1931年から旅順体育協会の主催となった。

<sup>169</sup>「田島教諭逝く」『満日』1931年10月4日。

<sup>170</sup> 王八会「若き思い出」創立80周年記念誌「緑旗のもとに」編集委員会編『緑旗のもとに：創立80周年記念誌』大連第一中学校校友会本部、1998年、51-54頁所収；宮畑虎彦「その頃の思い出：西内校長のことなど」大連一中創立五十周年記念行事実行委員会編集部編『大連一中』56-59頁所収。

表 30-1 大連バスケットボール大会参加チーム

| 全満（男子）籠球選手権大会 |                                                                 | 全満籠球大会／全満女子籠球選手権大会 |                                    | 全満籃球大会     |                                                      | 全満中等学校籃球大会         |  |
|---------------|-----------------------------------------------------------------|--------------------|------------------------------------|------------|------------------------------------------------------|--------------------|--|
| 1923.10       | * 大連 中学、大連 YMCA                                                 |                    |                                    |            |                                                      |                    |  |
| 1925.2        | * 大連 一中、大連 商業、大連 YMCA、中華 YMCA                                   |                    |                                    |            |                                                      |                    |  |
| 1926.2        | スターマン倶楽部、* 大連 一中 A、同 B、大連 商業 A、同 B、中華 YMCA、大連 YMCA、中国 婁子 隊、南満工専 |                    |                                    |            |                                                      |                    |  |
| 諒閣のため中止       |                                                                 |                    |                                    | 1926.10    | スター倶楽部、大連 一中 A、同 B、大連 YMCA、* 大連 商業 A、同 B             |                    |  |
| 1928.2        | 大連 一中、大連 二中、大連 YMCA、中華 青年会、* 南満工専                               | 全満籠球大会             |                                    | 1927.10    | * 大連 一中、大連 二中 A、同 B、大連 商業 A、同 B                      |                    |  |
|               |                                                                 | 1927.11            | * 大連 YMCA、南満工専、旅順工大                |            |                                                      |                    |  |
|               |                                                                 |                    | 大連 二中、大連 商業、旅順 一中、* 旅 順 二中         |            |                                                      |                    |  |
| 1928.11       | BMSG、大連 商業、大連 YMCA、* 南満工専、光丘倶楽部、                                | 全満女子籠球選手権大会        |                                    | 1928.10    | * 大連 一中、大連 二中 A、同 B、大連 商業 A、同 B、旅順 二中                |                    |  |
|               |                                                                 | 1928.11            | * 神明高女 A、同 B、同 C、同 D               |            |                                                      |                    |  |
| 1929.11       | 鞍山 中学 A、同 B、大連 一中、* 大連 二中、大連 商業、大連 YMCA、南満工専、満鉄                 | 1929.12            | * 神明高女 A、同 B、弥生高女 A、同 B、同 C、満鉄婦人協会 | 1929.9     | * 大連 一中、大連 二中 A、同 B、大連 商業、旅順 二中                      |                    |  |
|               |                                                                 |                    |                                    |            | 大連 YMCA、鉄道教習所、* 南満工専、満洲医大                            |                    |  |
| 1930.11       | 工専倶楽部、大連 一中倶楽部、* 大連 二中、大連 商業、大連 YMCA、満鉄                         | 1930.11            | * 神明高女 A、同 B、弥生高女 A、同 B            | 1930.10-11 | 鞍山 中学、青年会夜学校、大連 一中、* 大連 二中、奉天 中学、旅順師範学堂              |                    |  |
|               |                                                                 |                    |                                    |            | 大連 YMCA、鉄漢倶楽部、南満工専、満洲医大、* 満鉄                         |                    |  |
|               |                                                                 |                    |                                    |            | 神明高女、弥生高女 (2,4 年は神明、3 年は弥生が勝つ)                       |                    |  |
| 時局のため延期       |                                                                 | 時局のため延期            |                                    | 1931.11    | 鞍山 中学、黒猫、大連 一中、大連 二中、大連 商業、* 大連 YMCA、南満工専、旅順工大、旅順 二中 |                    |  |
|               |                                                                 |                    |                                    |            | 1931.5                                               | 大連 一中、* 大連 二中、南満工専 |  |

\*は優勝チーム

を卒業した赤羽美智子は、弥生高女にバスケットボールの親善試合を申し入れ、弥生高女の屋内運動場で試合をしたと証言している<sup>171</sup>。1924年10月に開かれた旅順大連三高女連合競技大会では、テニス、バレーボールと並んでバスケットボールが採用され、神明高女が優勝した<sup>172</sup>。しかし、満洲の教育界は女子の対校競技に前向きではなかった。

女学校に於ても近来対抗競技を可及的に忌避する傾向多く、学校外の運動競技会に招待された場合出場しても庭球の如き自校選手同志が試合をなしバスケットボールの如きは互に他校の選手が入混じつて混成チームを臨時に編成する為め試合の興味が少いと称せられつゝある<sup>173</sup>。

そのため、満洲体育協会が1928年11月になってようやく女子の選手権大会を開いたものの、出場したのはいずれも神明高女の生徒で、まるで校内運動会のようなもの<sup>174</sup>。神明高女と弥生高女の試合は1929年10月に実現する。学校関係者が競技会に慎重な姿勢を崩さないなか、スポーツ関係者が中心となって、長らく中断されていた神明、弥生、旅順の三高女競技会を復活させるべく奔走し、大連YMCA主催、大連新聞社後援という形で神明高女対弥生高女のバスケットボール試合が開催されたのである<sup>175</sup>。

バスケットボールの統括組織、大連籃球連盟も1928年に誕生した。12月11日のことである<sup>176</sup>。本部は大連YMCAに置かれた。文部省の調査によれば、連盟委員長は岡大路（南満工専教授、大連YMCA会員）、連盟の活動内容として「春秋リーグ式競技会研究会、審判員養成並審判員派遣、審判協会設立」が挙げられている<sup>177</sup>。第1回リーグ戦は1929年11月に開催され、南満工専、満鉄、大連YMCA、大連中華YMCAが参

<sup>171</sup> 有賀美智子（赤羽）「神明高女時代の思い出」満洲美会編『合歓の花』105頁所収。

<sup>172</sup> 「優勝の桂冠は大連高女の手に」『満日』1924年10月18日。

<sup>173</sup> 「満洲体育界に暗流漲る」『満日』1926年6月13日。

<sup>174</sup> 「神明高女A組終に優勝」『満日』1928年11月19日。

<sup>175</sup> 「あす神明、弥生両高女対抗籃球大会」『大連新聞』1929年10月27日；「大盛況を極めた両高女の籃球戦」『大連新聞』1929年10月28日。旅順高女は修学旅行を理由に不参加となった。

<sup>176</sup> 「満洲籃球連盟発会式」『満日』1928年12月11日。発会を伝える新聞記事を除くと、「大連籃球連盟」「大連籠球連盟」と称されることが多いので、本稿では大連籃球連盟と記しておく。なお、満洲国建国以降はもっぱら「大連籠球連盟」が使われた。

<sup>177</sup> 文部大臣官房体育課編『殖民地ニ於ケル体育運動団体ニ関スル調査』文部大臣官房体育課、1932年、23頁。

加、南満工専が優勝した<sup>178</sup>。翌年からは春季開催となり、1930年、1931年ともに鉄道教習所、満鉄、南満工専、大連 YMCA が参加し、南満工専が優勝している<sup>179</sup>。

外来チームの来征が活発になるのも1928年以降である。1928年11月、奉天東北大学のバスケットボールとサッカーの選手が大連に来征した。国民党に帰順する準備を進めていた張学良は、スポーツ面で日本との交流を推し進め、同年9月には日仏競技に参加した日本選手を奉天に招いて国際運動会を開催していた<sup>180</sup>。東北大学の相手は数日前の全満バスケットボール選手権大会で優勝した南満工専と準優勝した大連 YMCA である。16日、遠征の幹旋に努めた岡部平太の挨拶に続いて、南満工専との試合が行われた。会場の大連一中屋内体育場には日本人と中国人あわせて400人が詰めかけた。「体がよくてゴールシュートが確実」な東北大学が41対32で勝った。18日の大連 YMCA は一転して接戦となり、前半を18対16の2点リードで折り返した東北大学が後半もリードを守り、37対35で辛勝した<sup>181</sup>。

さらに東北大学はバスケットボールとサッカーのチームを日本に派遣する計画を立てた。「スポーツを以て今まで險悪だった日支間を融合しやう」と日本側でこの計画を推進したのが岡部だった<sup>182</sup>。この背景には当時の政治状況がある。日本遠征が決まってほどない1928年12月29日、張学良は「易幟」（国民党への帰順）を発表して日本との対決姿勢をあらわにした。自らが校長を務める東北大学の日本遠征はいわばその埋め合わせでもあった<sup>183</sup>。初戦となる1月15日の早大戦は45対38で競り負けた。馬沢民監督は日本の正しい規律とゲームの中に流れる美しい運動精神を称賛した。一方、大日本体育協会の薬師寺尊正は孟玉崑選手をフォワードではなくガードで出場させたことを敗因の一つに挙げ、大学創設5年、バスケットボール創部3年でここまで強くなっ

<sup>178</sup>「大連籃球連盟リーグ戦」『満日』1929年11月16日；「籃球リーグ戦、工専遂に優勝」『大連新聞』1929年11月18日。

<sup>179</sup>「籠球リーグ戦」『満日』1930年4月22日；「籠球連盟戦最終戦」『満日』1930年4月26日；「籠球連盟戦最終戦」『満日』1931年4月27日。中学チームは学業の関係で出場しなかった。

<sup>180</sup>拙稿「満洲における日中スポーツ交流（1906-1932）」。

<sup>181</sup>「東北大学生が大連に来征」『満日』1928年11月16日；「遠征第一戦に東北大学軍勝つ」『満日』1928年11月17日；「東北大学軍辛勝す」『満日』1928年11月20日。

<sup>182</sup>「明春早々奉天から籃球蹴球軍内地へ」『満日』1928年12月13日；“Mukden Athletic Teams to Tour Japan,” *MDN*, December 20, 1928.

<sup>183</sup>拙稿「満洲における日中スポーツ交流（1906-1932）」。

たことに感服した<sup>184</sup>。孟は1927年に上海で開催された第8回極東大会の中国代表選手であり、北平の民国大学を卒業後、東北大学に就職、日本遠征軍にはコーチとして加わっていた<sup>185</sup>。17日の商大戦で孟はフォワードで先発、コートの端から端までドリブルしてゴールするなどファインプレーで観客を唸らせ、中国応援団の野次を制止するフェアプレーで観客に好印象を与えた<sup>186</sup>。20日の同志社大学戦は80対20、23日の広島高師戦は72対20と大勝して、意気揚々と引き揚げた。チームに同行した岡部平太は、大連に戻ってから恩師であるシカゴ大学のスタッグに次のように書き送っている。

私は日本と中国の競技とスポーツに全力を捧げようと考えています。日本と中国の関係は幸福からはほど遠いものです。両国の政治家や外交官のたび重なる失敗のために、両国の国民はたちの悪い宣伝家にそそのかされ、感情は日増しに激しくなっています。いまや宗教家や前向きな教育家がこの事態を收拾するために介入すべき時です。私は南満洲に8年間住んでいたことから、残りの人生をこの仕事に捧げようと決心しました。両国の青年が互いを理解し打ち解け合わない限り、この問題は永遠に解決されないでしょう。おりに触れて対抗試合を開き、フェアプレー精神とよきスポーツマンシップを育むことで、私はそれを達成したいと思っています<sup>187</sup>。

遠征チームのキャプテン麻秉鈞が満洲事変後に中国共産党に入党、抗日運動に従事し、1936年の黒竜江民報事件で逮捕、処刑されたことを考えると、岡部の試みは空振りに終わったといっていいただろう<sup>188</sup>。

1929年7月末、芝罘YMCAの白燕籃球部が来連、大連二中、大連一中、工專、大連YMCAと対戦、2勝2敗の成績だった<sup>189</sup>。同年12月には奉天の馮庸大学と天津の南開

<sup>184</sup>「来朝第一戦で中華軍敗る」『東京朝日新聞』1929年1月16日。

<sup>185</sup> 孟玉崑「張学良將軍と体育」『体育文化導刊』1983年2期。孟は日本遠征を「1929年冬-1930年春」とするが誤りである。

<sup>186</sup>「商大敗る」『読売新聞』1929年1月18日。

<sup>187</sup> Okabe Heita to Amos Alonzo Stagg, February 6, 1929 (Box 2, Folder 11, Amos Alonzo Stagg Papers, University of Chicago Library)。

<sup>188</sup> 谷文双「東北回族的抗日救亡闘争」『黒竜江民族叢刊』2004年1期。

<sup>189</sup>『満蒙年鑑』昭和5年版、534-535頁：「煙台之白燕籃球隊来連」『満洲報』1929年7月28日；「芝罘YMCA、一中に快勝す」『満日』1929年8月1日。

大学が相継いで来征する。馮庸大学は南満工專に 24 対 25 で惜敗したが、大連 YMCA に 55 対 24 で大勝した<sup>190</sup>。南開大学は満洲体育協会の招聘により来連、初戦の大連 YMCA 戦を 90 対 6 という圧倒的なスコアで勝利し、続いて大連二中に 57 対 17、満鉄に 81 対 13、南満工專に 47 対 10 と大連の並みいる強豪を一蹴した<sup>191</sup>。大連の東西両公議会と南開大学校友会は「我が国の榮譽を高めた」として、南開大学籃球隊に銀杯と銀盾を贈呈した。南開の大勝は大連の中華ナショナリズムを大いに刺激したのである。監督の董守義は大連 YMCA で「体育の教育における位置」と題する講演を行うなど、コートの外でも忙しかった<sup>192</sup>。

南開チームに歯が立たなかったのは当然である。監督の董守義は第 3 回（1917 年）と第 6 回（1923 年）の極東大会に中国代表選手として、第 9 回（1930 年）の極東大会とベルリンオリンピックに監督、ロンドンオリンピックに中国選手団総幹事として出場、また IOC 委員も務めるなど中国スポーツ界の第一人者であった。董の率いる南開大学は 1929 年の華北球賽の優勝校で、大連に来征した選手のうち李国琛、魏蓬雲、唐宝堃、劉建常、王錫良のいわゆる「南開五虎」はいずれも第 9 回極東大会（東京）で中国代表に選ばれている<sup>193</sup>。もっとも、第 9 回極東大会で日本は中国から極東大会初勝利をもぎ取ることになる（ただし、日本人審判が試合後に弁明書を発表するという曰くつきの勝利だった<sup>194</sup>）。南開大学はこのあと日本に遠征する筈だったが、予定を変更して奉天へ向かい、東北大学、馮庸大学、同沢中学に連勝して天津に引き揚げた<sup>195</sup>。

1930 年 4 月、杭州で開かれた全国運動会（極東大会予選を兼ねる）に参加した馮庸

<sup>190</sup>「馮庸大学の来征」『満日』1929 年 11 月 30 日；「馮庸軍惜しくも工專軍に敗る」『満日』1929 年 12 月 2 日；「馮庸軍大に勝つ」『満日』1929 年 12 月 2 日。

<sup>191</sup>「侮りがたい南開大学籠球部」『満日』1929 年 12 月 6 日；「妙技を發揮した南開大学の攻撃」『満日』1929 年 12 月 8 日；「天晴れな手並、南開大学の選手」『満日』1929 年 12 月 9 日；「工專軍も遂に敗る」『満日』1929 年 12 月 10 日。

<sup>192</sup>「作籃球隊遠征紀念贈与銀盃銀盾」『満洲報』1929 年 12 月 10 日；「体育在教育上的位置」『満洲報』1929 年 12 月 10-11 日。

<sup>193</sup>「華北球賽大会閉幕」『申報』1929 年 4 月 8 日；「南開軍所向無敵、工專軍亦大敗」『満洲報』1929 年 12 月 11 日。

<sup>194</sup>田中寛次郎「審判から見た三国籠球チーム」『時事新報』1930 年 6 月 5-7 日。

<sup>195</sup>「日本遠征中止」『満日』1929 年 12 月 9 日；「南開籃球隊所向披靡、連勝東大馮大与同沢」『満洲報』1929 年 12 月 15 日。

大学と東北大学のバスケットボールチームは奉天に戻る途中大連に立ち寄り、大連のチームと試合をした。馮庸大学は南満工専を 33 対 19 で破った。一方、馮庸大学教授チームは大連 YMCA と対戦、馮庸校長自らフォワードとして出場、得点 1 を記録、40 対 39 での勝利に貢献した<sup>196</sup>。馮庸大学の 1 週間後に来征した東北大学は全大連と対戦、34 対 32 の辛勝だった<sup>197</sup>。在満日本人チームと東三省チームとの実力差は確実に狭まっていた。10 月に举行された日支対抗競技会のバスケットボール試合で、事前の予想を覆して日本が勝ったのも、決して偶然ではなかった<sup>198</sup>。しかし、中国の一流チームが相手となると、やはり歯が立たなかった。1931 年 1 月に北平天津リーグを制した北平師範大学が来連した。同チームの監督は董守義、選手には昨年の極東大会に中国代表として参加した劉冠軍、陳盛魁、王玉増がいた。試合前に『満日』に掲載された元南満工専籃球部主将伊藤清司の文章からは、日本人関係者がこの試合から多くのことを学び取ろうとしていたことがわかる。北平師範大学はまさに「期待」通りの強さで、満鉄を 57 対 18、全大連を 52 対 20 で破った。董守義は今回も各界から講演の要請を受け、大連の東西両公議会は前回同様、銀盾を贈呈したのだった<sup>199</sup>。

1931 年正月、中国チームの相次ぐ来征を踏まえ、原田修三はこう語る。

吾々は斯くも吾々の近くに、隣邦中華の強剛チームを多く持つてゐることを斯界の為に歎ぶものである。本年度に於ては出来るだけ多く是等中華の諸チームと手合せをするの機会を作りたい、母国球界から離れてゐるとは云へ斯くも国際的大試合を持つことの出来る地の利を充分に利用し、技を練り術を鍛えて母国籠球界をリードするに足る実力を養つて行きたいと思ふ。次に吾々の熱望してやまぬ

<sup>196</sup>「昨夜の籃球戦」『満日』1930 年 4 月 16 日；「馮大球隊凱旋過連中、又戦勝三団体」『満洲報』1930 年 4 月 17 日。

<sup>197</sup>「全大連惜敗」『満日』1930 年 4 月 22 日。

<sup>198</sup>日本側、中国側とも、庭球、体育ボールは日本、サッカー、バスケットボールは中国が優位とみていた（「日支対抗ゲーム、日割、種目等決る」『満日』1929 年 9 月 17 日；「日支競技出場の支那選手着連す」『満日』1930 年 10 月 19 日）。バスケットボールは 30 対 24 で日本が勝った。

<sup>199</sup>伊藤清司「対北平師範大学籠球戦の観方」『満日』1931 年 1 月 9 日；「満鉄軍大敗」『満日』1931 年 1 月 10 日；「北平軍大勝す」『満日』1931 年 1 月 11 日；「各界紛紛函請董守義君講演」『泰東日報』1931 年 1 月 8 日；「董守義先生、講「体育的十誡」」『泰東日報』1931 年 1 月 10 日；「両公議會贈」『泰東日報』1931 年 1 月 11 日。

事は如何にしてか吾々の代表チームを内地に遠征せしめたいことである<sup>200</sup>。

この時、満洲体育協会は春に東京で開かれる全日本選手権に大連中等学校選抜チームを派遣する計画を立てていた。原田が熱望したにもかかわらず、派遣は実現しなかった。バスケットボール界は満洲国成立まで内地との交流の機会を持たなかった（内地からの遠征は1935年の東京文理大が最初である）。

女子チームの遠征は珍しかったが、なかでも1931年5月の上海両江女子体育専科学校の来征は特筆に値する。両江は日本内地で6勝4敗と勝ち越した。両江はアメリカと同じく女子規則を採用していたが、日本では男子規則が用いられていた。内地では長崎女子師範が前半と後半で男子規則と女子規則を採用、YWCAが女子規則に応じたが、他のチームは男子規則で戦うことを譲らなかった<sup>201</sup>。4敗のうち2敗は1点差だった。あとの2試合、すなわち東京府立第一高女戦は不公平な審判のせいで、京都府立第一高女戦は予定外の非公式試合であり、疲労が蓄積していて最後まで戦うことができず、棄権して負けたのだった。内地をあとにした両江は、朝鮮で3戦3勝し、大連に乗り込んできた<sup>202</sup>。

27日の弥生高女戦には日本人と中国人約2000名の観客が押し寄せた。前半は19対3と両江が一方的に攻めたが、後半は互角に渡り合い、33対17で両江が勝った。『満日』の戦評は、身長の優劣が得点の開きになったと論じる。実際、試合の写真を見ても、センターの龍競雄の高さは際立っており、ジャンプボールはほとんどが両江のものになった<sup>203</sup>。28日の神明高女戦には、大連で隠棲していた元軍閥の孫伝芳も観戦に訪れた。前半はまたもや12対5と両江が攻め立てたが、後半は神明高女が一步も譲らず、互いに7点を加え、19対12で両江が再勝した<sup>204</sup>。

伊藤清司は日本側の敗因として、身長とともにボールを挙げている。すなわち、アメリカ製標準球を使った前半は両江が圧倒的に強いが、日本の正規球を使った後半は

<sup>200</sup> 原田修三「大躍進の我籠球界、輝しい前途、選手の自重を望んでやまぬ」『大連新聞』1931年1月1日。

<sup>201</sup> 「両江女校籃球隊東征記（二）」『申報』1931年5月8日。

<sup>202</sup> 「両江女校籃球隊東征記（三）」『申報』1931年5月12日；「両江女校籃球隊東征記（五）」『申報』1931年5月19日；「両江東征籃球隊昨日凱旋」『申報』1931年6月2日。

<sup>203</sup> 「日華女子籠球戦、両江先づ一勝」『満日』1931年5月28日。

<sup>204</sup> 「両江再勝す」『満日』1931年5月29日。

いずれの試合でも日本側が健闘した。小柄な日本人選手にとって、大きな球が不利に働いたのは疑いない、と伊藤は言う。また伊藤は、内地女子チームのレベルを間接的に知ることができたこと、中心選手である邵錦英のプレーに見るべきものがあったほかは得るところがなかったとも述べている<sup>205</sup>。バスケットボール界は内地との交流がなく、両江との対戦成績から間接的に内地のレベルを推し量るほかなかった。したがって、両江が来征したこと自体が特筆すべきことなのである。数々のハンディ（旅行や連戦の疲れ、慣れない食事や環境、勝手の違う審判や規則）にも関わらず、勝ち越しを決めたことをまずは評価すべきであろう。

中国側の評価はどうだろうか。遠征に同行した中国人記者は、両江は技術も優れ、連繫もよく、経験も豊富だったのに対して、弥生高女はチームの実力も個人の技術も劣り、惨敗は当然の結果だが、唯一取るべきところは、最後まで諦めずに戦った姿勢だ、と弥生高女戦を評価している。もっとも、今回の遠征の勝利はたんに技術が優れていたというにすぎず、体質や毅力を比較すれば、中国人はいまだ日本人に及ばないとして、中国体育界に猛省を促している点が興味深い<sup>206</sup>。1990年代に陸礼華は当時を振り返って、最後には日本の選手たちと仲良くなり、別れ際にはお互い涙を流した、と語っている。しかしながら、スポーツを通じた友情は、大きな歴史の流れによって切り裂かれることになる。陸が苦心して築きあげた両江女子体育専科学校は1932年の上海事変で破壊され、陸は抗日運動に身を捧げることになる<sup>207</sup>。

### 第31話 バレーボール／体育ボール

YMCA 体育主事ウィリアム・G・モーガンがバレーボールを考案したのは1895年のことであった。その後、バレーボールはYMCAの国際ネットワークを通じてアメリカから世界各地へと拡散していく。日本内地に初めてバレーボールを紹介したのは、国際YMCA訓練学校を卒業して帰国した大森兵蔵で、1908年のことである。ただし、今

<sup>205</sup> 伊藤清司「両江籠球チーム、神明弥生との試合をみて」『満日』1931年6月4-5日。

<sup>206</sup> 「両江東征籃球隊昨日凱旋」『申報』1931年6月2日。

<sup>207</sup> Wang Zheng, *Women in the Chinese Enlightenment: Oral and Textual Histories*, University of California Press, 1999, pp. 157-158.

日にまで続くバレーボール発展の直接の起点となったのは、1913 年に来日した YMCA 体育主事フランク・リン・H・ブラウンであろう。

バレーボールを満洲にもたらしたのも、やはり YMCA であった（第 40 話参照）。1911 年 3 月に完成した大連 YMCA 会館でバレーボールを指導したのは YMCA 名誉主事のカーライル・V・ヒバードである。バレーボールは、戸外での活動が難しい 11 月から 3 月までの間の室内運動として、人気を博した<sup>208</sup>。MDN の紹介によると、娯楽室（Amusement Room）には 2 台のビリヤード台、ピンポン、バレーボール、碁、将棋、チェスなどが備えられ、体育館（Gymnasium）では剣道、柔術、バスケットボール、インドアベースボール、ピンボール、体操などが行われていたという<sup>209</sup>。

1923 年の新聞記事に、「同団〔大連 YMCA〕は十有余前年組織に係り、ヴァーレーボール団としては内地方面の各チームよりは先輩であり且つ度々支那人チームや外国人チームと試合し、優秀なる成績を挙げて歴史を有する」と記されているように、大連 YMCA は日本で最初のバレーボールチームといっても過言ではない<sup>210</sup>。

1915 年秋にソーディとパワーが着任すると、バレーボールとバスケットボールがブームとなり、翌年にかけて市内会社、商店、銀行、新聞社など職場ごとにチームが作られ、バレーボール、バスケットボール、ピンポンのリーグ戦が行われた<sup>211</sup>。1917 年 3 月には「芝罘外国語学校」の学生がベックの引率で来連、YMCA とバスケットボール、バレーボールの試合をして、大連側が快勝した（第 30 話参照）<sup>212</sup>。帝国日本で最初のバレーボール国際試合であろう。一般には、同年 5 月に東京で開かれた第 3 回極東選手権競技大会で日本代表が中国、フィリピンと戦ったのが最初の国際試合とされる。このときの日本代表は各地の YMCA と神戸高商から選手をピックアップして編成されていた。

<sup>208</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』118 頁。

<sup>209</sup> “(s) Y. M. C. A.,” MDN, February 3, 1915. ピンボール（pinball）はドッジボールの一種。「一時勇壮なる競技として最も興味を以て行はれたりボンボール、今春暫時断絶し、ブオーレーボール盛んに行はれしも十一月頃より新入会員中運動に頗る興味を持たる人々等に依り再びボンボールを復活し目下該運動にて持切りの有様となれり」（大連基督教青年会編『恩寵廿年』118 頁）に見える「ボンボール」「ボンボール」がそれに当たるだろう。MDN には娯楽室の写真も掲載されているが、狭い娯楽室でバレーボールをしたとは思えず、誤記と判断される。

<sup>210</sup> 「大連ヴァーレーボール団」『大連新聞』1923 年 4 月 14 日。

<sup>211</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』207-208 頁。

<sup>212</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』208 頁；「日支籠球大試合」『満日』1917 年 3 月 23 日。

バレーボールは長らく YMCA のなかだけで行われていたが、徐々に学校にも広がっていった。たとえば、1919 年の南満工業学校秋季運動会でバレーボールらしきものが行われたことが『満日』の写真から確認できる。記者はそれがバレーボールであることを認識できなかったのだろう。記事には「挙行競技は何れも工業独特の新らしいもの」とだけ記されている<sup>213</sup>。1922 年春から満鉄管下の各小学校でバレーボールが導入される<sup>214</sup>。大連中学でも極東大会予選に向けてバレーボールの練習をしており、1922 年 10 月には大連中学、南満工業、大連 YMCA、大連寄港中のイギリス艦隊がバレーボールの試合をするという報道がなされた<sup>215</sup>。この試合が実現したかどうかはわからないが、10 月 21 日に開かれた南満工業の秋季運動会では大連 YMCA とのバレーボール試合が行われ、YMCA が勝っている<sup>216</sup>。

女子への普及も進められる。1922 年には女子体育に熱心な土田校長の肝煎りで大連市立高女に 400 坪の室内運動場が完成、「ボレイボール」の設備も備えられた<sup>217</sup>。この新しい室内運動場で、1923 年 2 月にバスケットボールとバレーボールの模範試合が大連新聞社主催で開かれた（第 30 話参照）。大連 YMCA 主事黒田善八はバレーボールのメリットを次のように紹介している。

ブオーレーボールはバスケットの如く男性的ではありませんが、大連の如く紳士階級の多い土地には強ち無益ではなからんかと思ひますヴオーレーボールの特徴は一個のボールと一張のネットがあれば足る程他に比して頗る簡便でコートของ如きも、テニスコート大のものがあれば楽に二三十の者が同時にプレーイングすることが出来ます而も身体の強弱年齢の大小には殆ど無差別でありプレーヤーは絶えず空を仰ぎ、身体を充分上方に伸ばさなければなりませんから婦人は勿論一般人士に好適であります<sup>218</sup>。

バレーボールが老若男女をとわず楽しめるレクリエーションとして紹介されたことが

<sup>213</sup>「工校運動会」『満日』1919 年 10 月 19 日。

<sup>214</sup>「満鉄小学校の体育科実施」『大連新聞』1922 年 4 月 15 日。

<sup>215</sup>「健全な肉体と精神を築き上げる努力」『満日』1922 年 9 月 19 日；「連合ヴハレボール競技」『大連新聞』1922 年 10 月 7 日。

<sup>216</sup>「満工の秋季運動会」『大連新聞』1922 年 10 月 22 日。

<sup>217</sup>「肉体、精神二つ乍ら健全に美化」『満日』1922 年 11 月 7 日。

<sup>218</sup>「籠球ボールの後にヴオーレーボールも」『大連新聞』1923 年 2 月 8 日。

わかる。実際、YMCA では老若をとわずバレーボールが楽しまれていた。

1923 年 5 月には大阪で第 6 回極東大会が開催される。それに先だって開かれる全日本予選に全満競技連合は陸上競技と水泳の選手を派遣する。バレーボールは前年秋に満洲予選を開けず、参加の予定はなかったが、大連 YMCA が参加を希望した。バレーボールチームのメンバー黒田善八は前年に東京の YMCA 主事養成所に派遣されており(第 40 話参照)、内地の状況をみてバレーボールなら勝ち目があると考えたのではないだろうか。全満競技連合は後援という形で参加を認めたが、遠征費用は寄附でまかなわねばならなかった。1400 円の寄附のうち、500 円が選手の河村統治、300 円が監督の浜本忠吉によるものだった<sup>219</sup>。選手のひとり原田修三はのちにこの遠征について次のように語っている。

大連チームと見れば年齢十八歳から四十幾歳の者までも網羅して居り其の頃 Y・M・C・A の体育館で毎夜の様にボールを打ち合つた連中でその技倆など、今から見ればてんでお話にならぬものではあつたけれども、その鼻息の荒いことと云つたら、これ又素晴らしいものがあつた。……急拵へで作らせたユニホームと来たら上衣はまだしも、パンツの如きはその長さ膝を没する程で、おまけにだぶだぶと来てゐる。それに若いのは年少十八歳のお菓子やの息子から老頭兄では二人合算すれば九十歳と云ふ電気時計で有名な増田十字堂主増田宗之助氏や棉花協合理事矢中快輔氏など色とりどりのである上に、例の通り Y・M・C・A の体育場で毎夜やつてゐた様に、破鐘の様な蜚声をあげてひつきりなしに我鳴り立てると云ふのだから、口さがないお江戸の女学生ならずとも辛辣なる野次や半畳の飛ぶのは無理もない事なのだ<sup>220</sup>。

原田は 1902 年生まれ。敦賀商業野球部でエースを務めた。野球部の先輩に満俱の清水広次がおり、また満俱のエース岸一郎が敦賀出身ということもあって、1921 年に敦賀商業を卒業した後、満鉄に入社した。原田は満俱で投手か一塁手としてのプレーを期待されたが、なぜか野球は続けなかった。大連 YMCA に加入した原田は、1938 年に華

<sup>219</sup>「大連籠球団が極東競技大会予選会に参加出場に決定準備中」『大連新聞』1923 年 4 月 7 日；大連基督教青年会編『恩寵廿年』403 頁。

<sup>220</sup> 原田修三「排球随想記」『新天地』15 巻 5 号、1935 年 5 月。

北に転じるまで、バスケットボールとバレーボールの選手、指導者として活躍することになる<sup>221</sup>。

4月21日に東京で開かれた関東予選に出場したのは東京 YMCA、横浜 YMCA、大連 YMCA の3チームだった。大連 YMCA は両チームを難なく破って優勝し、関東代表の座を射止めた。翌日、関西代表の神戸高商と対戦したが、散々な敗北に終わった。敗因は天気である。前日の試合は雨のため東京 YMCA の体育館で行われたが、神戸高商戦は陸軍戸山学校校庭で開かれることになった。大連 YMCA は屋内でしかプレーしたことがなく、初めての屋外試合にとまどった。空が明るくてボールが見えず、風のせいでボールのコースが読めない。神戸高商側は大連軍の弱点を見越して、盛んにボールを高く打ち上げてきた。前衛に背の高い選手を並べ、「タッチ」で得点をかせぐ神戸高商に大連 YMCA は文字通り手も足も出なかったのである<sup>222</sup>。その神戸高商も、極東大会ではフィリピンと中国が打ち込む「キル」(スパイク)の前になすすべもなく敗れている。

1923年10月、全満競技連合はバスケットボールとバレーボールの全満選手権を、第2回陸上競技選手権大会の一部として開催した。満洲で最初のバレーボール選手権に参加したのは大連 YMCA と大連中学のわずか2チームだった<sup>223</sup>。

1924年の第2回全満選手権大会は6月に開催を予定していたが、「暑熱の関係」で秋に延期された<sup>224</sup>。その後さらに延期されて、1925年2月ようやく開催、参加は大連一中、大連 YMCA、大連商業(棄権)の3チームにとどまった<sup>225</sup>。表31-1からわかるように、1929年まで全満排球選手権大会の参加チームは3チームを越えることはなかった。1928年2月の全満選手権大会に出場したパイオニア倶楽部は大連 YMCA の少年部(大連一中、二中の生徒からなる)で、パイオニア対大連 YMCA の決勝戦はいわば内

<sup>221</sup>「満俱新選手来」『満日』1921年4月7日；外海省三著、山本省吾編『福井県立敦賀商業学校野球部外史』敦賀商業学校野球部外史刊行会、1971年、230、248頁；「原田修三氏北支に転勤」『満日』1938年4月6日。

<sup>222</sup>原田修三「排球随想記」『新天地』15巻5号、1935年5月。

<sup>223</sup>「全満洲競技連合主催の全満陸上選手権大会」『大連新聞』1923年10月29日。

<sup>224</sup>「満洲体育協会のボール選手権大会は秋に延期」『大連新聞』1924年5月16日。

<sup>225</sup>「バスケットボール、バレーボール全満選手権」『満日』1925年2月16日。

表 31-1 大連バレーボール大会参加チーム

| 全満（男子）排球選手権大会 |                                                                             | 全満女子排球選手権大会 |                                               | 全満排球大会 |                                                                                                          |
|---------------|-----------------------------------------------------------------------------|-------------|-----------------------------------------------|--------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1923.10       | * 大連 YMCA、大連<br>中学                                                          |             |                                               |        |                                                                                                          |
| 1925.2        | * 大連 YMCA、大連<br>一中、大連商業                                                     |             |                                               |        |                                                                                                          |
| 1926.2        | * 大連 YMCA、スタ<br>マン倶楽部                                                       |             |                                               | 1926.6 | 大 連 YMCA、大 連 中 華<br>YMCA、南満工専 A、* 同 B<br>大連一中 A、同 B、大連商業 A、<br>同 B                                       |
| 諒闇のため中止       |                                                                             |             |                                               | 1927.7 | 大連商業 A、同 B、大連二中 A、<br>同 B<br>大連 YMCA、* 南満工専、ス<br>ター                                                      |
| 1928.2        | * 大連 YMCA、大連<br>商業、パイオニアク<br>ラブ                                             |             |                                               |        |                                                                                                          |
| 1928.5        | * 大連 YMCA、大連<br>商業、南満工専                                                     | 1928.5      | * 神明高女 A、<br>同 B、弥生高女<br>A、同 B                | 1928.7 | * 大連 YMCA、大連商業、南<br>満工専<br>神明高女 A、* 同 B                                                                  |
| 1929.6        | 大 連 二 中、* 大 連<br>YMCA、旅順工大                                                  | 1929.6      | * 神明高女 A、<br>同 B、弥生高女<br>A、同 B                | 1929.6 | 旅順一中、大連二中、* 大連<br>商業 A、同 B<br>* 工専倶楽部、大連 YMCA<br>* 神明高女 A、同 B、弥生高<br>女                                   |
| 1930.6        | 大 連 YMCA、南 満<br>工 専、* 満 洲 医 大、<br>鞍山、販売課、大連<br>二中、審査係、地方<br>部、大連商業、旅順<br>工大 | 1930.6      | * 神明高女 A、<br>同 B、弥生高女<br>A、同 B、技術<br>研究所、婦人協会 | 1930.5 | * 大連二中、大連商業<br>* 満洲医大、南満工専、大連<br>YMCA<br>* 地方部、審査係<br>* 神明高女 A、同 B、満鉄婦<br>人協会                            |
| 1931.6        | * 全大連、埠頭倶楽<br>部、満鉄鉄道部、鞍<br>山倶楽部、大連一中、<br>大連二中、大連商業                          | 1931.7      | * 神明高女 A、<br>同 B、弥生高女<br>A、同 B、満鉄<br>本社、撫順炭鉱  | 1931.6 | 大連一中、* 大連二中、満鉄<br>育成、大連商業<br>満洲医大、旅順工大、南満工<br>専、* 全大連<br>第一埠頭、* 第二埠頭、第三<br>埠頭、埠頭 C 組、満鉄本社黄<br>組、満鉄審査、工務課 |

\* は優勝チーム

輪の戦いであった<sup>226</sup>。この大会から3カ月後の6月に再び全満選手権大会が開催され、以後は6月開催が定着する。

大連バレーボール界を牛耳る大連 YMCA は、1926 年 6 月に全満排球大会を開催、「異

<sup>226</sup> 原田修二「全満排籃球選手権大会寸評」『満日』1928 年 2 月 14 日。

常なる人気」を呼ぶ<sup>227</sup>。全満排球選手権大会が夏開催に移行したのは、全満排球大会の盛況を見てのことかもしれない。シーズンの移行は、満洲のバレーボールが夏の（戸外）スポーツとして普及していたことを物語る。そして、この移行は、屋内体育設備が不足する満洲において、バレーボールがのちに「体育ボール」としてひろく推進される条件を整えることになった。

女学校でもバレーボールが競技として行われるようになる。最初の競技会は1924年10月の旅順高女、神明高女、弥生高女による連合競技大会で、神明高女が弥生高女をわずかに上回って優勝した<sup>228</sup>。1925年1月、弥生高女の土田忠二校長は、冬の間、生徒たちが連合競技会での惜敗に酬いるべく、雨天体操場でバスケットボールとバレーボールの練習に励んでいると語っている<sup>229</sup>。残念ながら、翌年の競技会に神明高女が参加しなかったため、雪辱を晴らすことはできなかった<sup>230</sup>。1926年9月の関東庁始政二十年記念運動会で再び神明、弥生両高女が対戦するが、またもや神明高女が勝利した<sup>231</sup>。

1928年、全満排球選手権大会と全満排球大会が女子にも開かれた。高女の連合競技会が2回で中止となり、バレーボールの対外試合の場を失った高女の生徒にとって朗報だった。ここでも神明高女の優位は揺らぐことがなかった。満鉄附属地の高女でもバレーボールが行われていたが、対外試合の機会はなかったようである<sup>232</sup>。そんななか、奉天同沢女子中学と神明、弥生両高女の国際排球試合が開催されたことは特筆に値する。

同沢女子中学は1928年3月に張学良が設立した中学校で、愛国教育が重視されたことは注意されてよい。校門正面の壁には国恥地図が貼られ、学生たちは日本製の文具を扱う店で買い物をしないように申し合わせていた<sup>233</sup>。そのような学校から満鉄運動会を通じて大連の両高女にバレーボールとバスケットボールの試合が申し込まれてきた

<sup>227</sup>「バレーボール争覇戦挙行」『大連新聞』1926年6月26日。

<sup>228</sup>「優勝の桂冠は大連高女の手に」『満日』1924年10月18日。

<sup>229</sup>「男子の運動熱に連れて女子の運動も盛んになる」『満日』1925年1月17日。

<sup>230</sup>「旅大高女連合競技会」『満日』1925年4月18日。

<sup>231</sup>「関東庁始政二十年記念運動会」『南満教育』66号（特別号）附録、1926年11月15日。

<sup>232</sup>1924年の連合競技会には奉天高女が参加を検討していたようだが実現しなかった（「全満高女競技会」『大連新聞』1924年7月30日）。

<sup>233</sup>広莊磷「遼寧同沢女子中学」『遼寧文史資料』33輯、1991年8月。

のである。1929年3月のことである。岡部平太が王捷先校長に働きかけて実現したもので、中国側の女子チームが大連に来征するのは初めてのことだった<sup>234</sup>。

9月19日、姚淑文、侯同梁の両教諭に率いられ大連駅に到着した同沢女中一行は、神明、弥生両高女の校長、排球部員の歓迎を受けた。20日の神明高女戦は21対0、21対1で神明高女の一方的勝利に終わった。翌日の弥生高女戦は1回戦に2点、2回戦に6点をとったものの、やはり完敗であった<sup>235</sup>。当時の日本のバレーボールは女高男低で、極東大会でも女子は日本が圧倒的に強かったのに対して、男子は中国とフィリピンから1セットすら取れない状況だった。翌1930年11月、今度は神明高女排球部が茂木定株監督、原田修三コーチの引率で奉天遠征を敢行し、同沢女子中学、奉天高女を破って凱旋した<sup>236</sup>。遠征に参加した杉山春那子によれば、今回の遠征は「友好」のためで、試合のあとに食べた本式の中華料理の印象が強く残ったという<sup>237</sup>。

満洲のバレーボール界を一変させたのが満鉄による「体育ボール」の奨励である（第38話参照）。1930年はさながら「体育ボールの年」であった。同年春から満鉄では3600円の予算を投じ、大連をはじめ満鉄沿線各地にコートを建設した。撫順炭鉱だけで27カ所、鞍山製鉄所にも16カ所のコートがつくられた<sup>238</sup>。満鉄本社の4カ所のコートはほとんど奪い合いで、上は課長から下は給仕まで一緒にコートでプレーするというスポーツならではの光景が見られた<sup>239</sup>。満鉄社員会の雑誌『協和』4月号に体育ボー

<sup>234</sup>「奉天支那女学生の排、籃球チームが来征」『満日』1929年3月29日；「已於十九日夜抵連同沢隊球選手」『満洲報』1929年9月20日；「行師千里之同沢女中球隊、又与弥生高女作隊球戦」『満洲報』1929年9月22日。

<sup>235</sup>「華かな出迎をうけ奉天同沢女学校選手来る」『満日』1929年9月20日；「戦ひ利あらず、同沢軍惨敗」『満日』1929年9月21日；「善戦せるも遂に同沢軍敗る」『満日』1929年9月22日；「已於十九日夜抵連同沢隊球選手」『満洲報』1929年9月20日；「中日女青年連濱初握手之同沢神明両校隊球比賽」『満洲報』1929年9月21日；「行師千里之同沢女中球隊、又与弥生高女作隊球戦」『満洲報』1929年9月22日。

<sup>236</sup>「神明高女排球隊北上、与遼寧同沢女中比賽」『泰東日報』1930年11月7日；「神明高女生帰連の途に就く」『満日』1930年11月11日；「神明高等女学校排球遠征全勝」『泰東日報』1930年11月11日。

<sup>237</sup>中山春那子（杉山）「神明高女のバレー、バスケット部」大連神明高等女学校同窓会満洲美会編『大連神明高等女学校創立八十周年記念誌』大連神明高等女学校同窓会満洲美会、1994年、119-120頁所収。

<sup>238</sup>「細君連も出場する体育ボール熱」『大連新聞』1930年4月13日。

<sup>239</sup>「満鉄体育ボール第一回大会を開く」『満日』1930年3月31日。

ルのルールが掲載され、4月から5月にかけて満鉄運動会の高橋俊夫が体育ボール指導のために満洲じゅうを駆け回った<sup>240</sup>。その結果、5月の全満排球大会、6月の全満排球選手権大会の参加チームは劇的に増えた（表31-1）。5月に秩父宮が来満したさい、秩父宮から「満鉄社員はどの位運動をやるか、又重役連も運動をやるか」と質問を受けた山本寿喜太は、重役は主にゴルフをやっており、社員も最近大いに目覚めて体育ボールをやっていると答えたところ、非常にお褒めに与ったという<sup>241</sup>。

1930年の全満排球大会と全満排球選手権大会を制した満洲医大排球部は、7月に広島、関西に遠征、広島文理大、呉海軍工廠砲煩部に勝つも、呉海軍工廠水雷部、県立神戸高商、神戸商大、大阪高校に敗れた。内地チームとの実力差はまだ大きかった<sup>242</sup>。

8月には満鉄体育係主管、満日主催で第1回全満体育ボール大会が奉天で開かれた。伍堂卓雄が会長、二村光三が役員長、岡部平太、高橋俊夫、斎藤兼吉らが審判を務めた。鞍山、安東、開原、撫順、大連、遼陽、奉天などから男子21チーム、女子2チームが参加、男子は鉄道部経理課、女子は理学試験所が優勝した<sup>243</sup>。理学試験所に敗れた撫順チームは、9月下旬に大連遠征を試み、理学試験所、満鉄婦人協会とリーグ戦を実施し、理学試験所には雪辱を果たしたものの、婦人協会に敗れた<sup>244</sup>。女子社会人チームの遠征は珍しい。

10月、大連市主催で第1回大連市民体育ボール大会が開催され、一般男子18チーム、一般女子2チーム、学生男子8チーム、学生女子8チーム（弥生高女5組と羽衣高女3組）、合計36チームが参加した<sup>245</sup>。翌週に大連で開かれた日支対抗競技会では、満洲男子バレーボール初の日中戦が行われ、日本が大勝した。中国側は東北大学と馮庸大学、日本側は大連YMCAと満洲医大を中心とするピックアップチームだった<sup>246</sup>。

<sup>240</sup> 高橋俊夫「体育ボール規則」『協和』23号、1930年4月1日：「細君連も出場する体育ボール熱」『大連新聞』1930年4月13日。

<sup>241</sup> 「専門的御質問に恐懼」『満日』1930年5月9日。

<sup>242</sup> 黒田源次編『満洲医科大学二十五年史』289-290頁。

<sup>243</sup> 「三百五十選手の華々しい大競技」『満日』1930年8月25日：「輝やく白日下に接戦を演ず」『満日』1930年8月25日。

<sup>244</sup> 「体育ボールリーグ戦」『満日』1930年9月20日：「女子体育ボール遠征団けさ来連」『大連新聞』1930年9月24日：「婦人協会チーム鮮かに優勝」『満日』1930年9月25日。

<sup>245</sup> 「体育ボール大会、組合せ決定」『満日』1930年10月8日。

<sup>246</sup> 「日支対抗ゲーム、日割、種目等決る」『満日』1930年9月17日：「日支対抗競技の籃球、体育

年が越えても体育ボールの勢いは衰えなかった。6月に開催された奉天国際運動場開きでは、男子に全大連、満洲医大、東北大学、女子に奉天高女、同沢女子中学が参加、男子は東北大学を破った満洲医大と全大連の間で決勝が行われ、全大連がストレート勝ちした。一方、奉天高女と同沢女子中学の試合は5セット目にもつれ込み、奉天高女が接戦を制した<sup>247</sup>。その翌週に開かれた全撫順体育ボール大会には約40チームが参加した<sup>248</sup>。8月、第2回満鉄体育ボール大会は伍堂理事が寄贈した優勝カップの争覇戦という形で行われ、男子17チーム、女子2チームが参加、男子は鉄道部経理課が連覇を成し遂げた<sup>249</sup>。翌9月には大連市民体育ボール大会が予定されていたが、満洲事変勃発により延期となった<sup>250</sup>。結局、11月3日に開かれるが、事変下にもかかわらず27チームが参加した<sup>251</sup>。

## 第32話 ラグビー

### (1) 満洲ラグビーの起源

1932年1月、満洲ラグビー蹴球協会は満洲におけるラグビーの開始期を1923年5月1日と決定した<sup>252</sup>。

全満競技連合は1923年夏に東京帝大陸上競技部を招聘して、満洲軍との対抗競技を実施する計画を立てていた。この計画を主導したのは、かつて一高や東京帝大で陸上競技のコーチをしたことのある岡部平太だった。対抗競技の協定を締結すべく、大連

---

ボール、蹴球正選手決まる」『満日』1930年10月4日；「勝負の分岐点、結局体育ボールか」『満日』1930年10月17日；「体育ボールも日本軍大勝」『満日』1930年10月20日。

<sup>247</sup>「国際運動場開き男女子排球試合」『満日』1931年6月14日；「日支女生徒の大接戦」『満日』1931年6月15日；「国運場記念競技、第一日開幕盛況」『盛京時報』1931年6月14日；「国際運動会第二日競技、英俄等選手加入」『盛京時報』1931年6月15日。

<sup>248</sup>「全撫順体育ボール大会」『満日』1931年6月12日；「全撫順バレーボール大会」『満日』1931年6月18日；「大接戦を演じて大山D軍優勝す」『満日』1931年6月22日。

<sup>249</sup>「男女十九チーム参加し争覇」『満日』1931年8月14日；「十七チーム参加、華々しく開戦」『満日』1931年8月17日。

<sup>250</sup>「体育ボール大会、来月三日開催に決る」『満日』1931年10月21日。

<sup>251</sup>「体育ボール大会」『満日』1931年11月4日。

<sup>252</sup>「ラグビー十年祭」『満日』1932年2月2日。

にやってきた東京帝大の代表が香山蕃であった。香山は1920年に東京帝大に入学、陸上競技部に入ったが、1921年にラグビー倶楽部を創設し、ラグビーに力を入れていた。東京帝大はなぜそのような人物を派遣したのだろうか。『満日』には「東京帝大蹴球部のキャプテンであつた香山<sup>ママ</sup>繁氏の来連を求め」とあるので、偶然ではなく満洲側が求めた人選だったのかもしれない。対抗陸上競技の協定が締結されたあと、香山は夜行で大連を立つ前に、南満工業でラグビーの講演と指導を行った<sup>253</sup>。この日がのちに満洲ラグビー蹴球協会によって、満洲ラグビーの始まった日として認定されることになる。

一方、山本芳松は1929年にラグビーの起源を次のように振り返っている。1922年、山本はラグビーの洋書を手に入れ、「今後我日本にサッカーに代るべきものは実に此ラグビーなるを悟り」、研究してみたが、一度もラグビーを見たことがなかったため、要領を得なかった。1923年4月に大連中学から南満工業に転任した山本は、暑中休暇に京都帝大を訪れ、ラグビーを学んだ。大連に戻った山本はサッカー選手にラグビーを勧めたが、彼らは気乗りしないばかりか、山本に反感を持つものさえいた。香山蕃が来満したのはまさにそうした時で、「運動の神様とまで云はるゝ岡部氏と斯界の権威者〔香山〕との兩名の独特の宣伝演説に於てラグビーの真価を直覺的に聴衆の脳裡に印象づけ」たのである。これを機に山本は毎日生徒にラグビーをさせ、チームを編成した<sup>254</sup>。香山の来満は1923年4月なので、山本の説明は時系列が混乱している<sup>255</sup>。山本は「帝大のグラウンド」(北白川の農学部グラウンド。1924年に設置)に言及しているので、京都帝大を訪れたのは1924年夏以降のことであろう。

戦後に執筆した別の回想で山本はラグビーを導入した理由として、中国人チームと試合をしてもあまり成績が良くなく、日本人が劣等感に陥ってはとってラグビーを

<sup>253</sup>「高師に次で帝大来る」『満日』1923年2月3日；「今夏大連で蹴球大会」『満日』1923年5月3日；「陸技宣伝」『満日』1923年5月3日。

<sup>254</sup>山本芳松「満洲体育競技創設の跡」『体育と競技』8巻5号、1929年5月。

<sup>255</sup>高尾恭三「大陸に弾んだ楯円球の青春賛歌」(全満ラグーマンの集い編『全満ラグビー史・概要：1999』全満ラグーマンの集い事務局、1999年、13-17頁所収)は、山本が京都帝大で指導を受けた時期を1922年の冬休みとする。京都帝大ラグビー部は1921年秋に設立されたばかりであったが、1923年には三高、同志社と鼎立する実力を備えていた(京都大学ラグビー部OB会編『京都大学ラグビー部六十年史』京都大学ラグビー部OB会、1987年、14-22頁)。

始めたと述べている<sup>256</sup>。ただし、1923年11月の第2回全満蹴球選手権大会で大連中学は大連中華青年会に敗れているものの、それ以前に中国人チームと日本人チームが対戦した記録はない（練習試合はあったかもしれない）。山本は1929年の記事で、「日支親善の意味で中国人のも度々コーチをなし又時々試合をもして見た。けれども中国人にはスポーツマンとしての訓練が全く無いのでいつも不愉快な試合ばかりしてみた」と述べており<sup>257</sup>、中国人との対戦を嫌ってラグビーに切り替えたのかもしれない。あるいは中国人チームの実力が向上した1920年代後半の状況が山本の記憶に影響を及ぼしたのかもしれない。

香山の講演後、南満工業・工専と満鉄でラグビーチームが結成され、1923年11月4日に両チームによる満洲最初のラグビー試合が行われる。観衆は数百人、山本が審判を務めた。満鉄はフォワードに柔道何段かの猛者を並べ、スリークウォーターバックスには陸上競技のスプリンターを配した超豪華メンバーだったが、試合当日は人数が揃わず、3対6で「意外の敗北」を喫した。ベストの布陣で臨んだ11日の第2回戦は3対3の同点に終わった<sup>258</sup>。『大連新聞』はラグビーの解説を連載して、ラグビー熱を盛り立てた<sup>259</sup>。山本が京都帝大のグラウンドに日参して、ラグビーの指導を受けたというのは、それからしばらくしてのことだっただろう。

1924年2月から3月にかけて、満鉄は南満工業と3回、大連商業と1回、ラグビーの試合を行った<sup>260</sup>。南満工業は3月23日から25日にかけて、旅順、撫順、奉天を回り、ラグビーの宣伝・指導を行った。旅順では工大、奉天では医大と試合をし、医大には15対0で圧勝した<sup>261</sup>。撫順では「予め市民に宣伝し永安台小学校グラウンドに市民を集

<sup>256</sup> 山本芳松「体育に命を賭けて五十年」。同様の説明は、山本芳松「満洲体育競技創設の跡」にも見られる。

<sup>257</sup> 山本芳松「満洲体育競技創設の跡」。

<sup>258</sup> 「新しい蹴鞠戦」『満日』1923年11月4日；「ラ式蹴鞠戦」『満日』1923年11月5日；「満鉄対工専ラ式蹴球」『大連新聞』1923年11月13日；多田久「南満工専ラグビー半世紀」全満ラグーマンの集い編『全満ラグビー史』377-385頁所収；“First Regular Rugby Game,” *MDN*, November 13, 1923. 第3回戦は18日に実施予定だったが、結果は不明である。

<sup>259</sup> 「ラグビー式フットボール」『大連新聞』1923年11月11、13-15日。

<sup>260</sup> 『満蒙年鑑』大正15年版、772頁。

<sup>261</sup> 『満蒙年鑑』大正15年版、772頁；「工業軍優勝す」『満日』1924年3月27日。山本は医大に6対0で勝ったと述べている（「満洲体育競技創設の跡」）。

めメガホンで説明しつゝ、エキジビジョンゲームをやつて見せた」という<sup>262</sup>。

満洲医大にラグビーを持ち込んだのは樋村知博で1922年冬のことだったという。これが事実であれば、香山の講演よりも早い。樋村は同志社中学でラグビーの選手をしており、級友にラグビーボールを見せ、ルールを説明、やがてラグビー部が設立され、紺と白のジャージまで揃えた。練習に励んだが、相手がいない。そんなとき、山本率いる南満工専チームがやって来たのである<sup>263</sup>。

旅順工大では1923年冬に満鉄の山崎一雄（元早大選手）、萩原丈夫（元慶大選手）によってラグビーが紹介されていた。フランシス・マーシャルの *Football: The Rugby Union Game* を翻訳して勉強したり、茂木善作助教授が体操の時間にラグビーを採り入れたりした。南満工業との対戦後にラグビー蹴球部が創設されたようで、1924年5月24日の満鉄戦が「我部最初の試合」とされる（3対3の同点）。6月1日には満洲医大との対抗戦に臨み、9対3で勝利した<sup>264</sup>。

撫順でもすでにラグビーが行われていた可能性がある。というのも、1924年11月に満洲医大が撫順炭鉱見習教習所とラグビーの試合をしたときの新聞記事に、「撫順でも故青年団幹事長牛島俊郎氏がこの競技を盛んにして日支青年の試合を目論んでゐたのが始めである」と書かれているからである<sup>265</sup>。とするなら、山本はすでにラグビーの種が蒔かれていた場所を選んだことになる。

新興スポーツ、ラグビーは1924年5月の満鉄運動会でも披露された。『満日』は、「満洲に於てラグビー蹴球と言へば苟くも運動を口にする人には誰知らぬ者のない様になつた」と吹聴したが、少し言いすぎであろう<sup>266</sup>。しかし、3万5000人の観客の前でプレーする効果は計り知れない。運動会直後の『大連新聞』には満鉄調査課長佐田弘治郎の

<sup>262</sup> 山本芳松「満洲体育競技創設の跡」。

<sup>263</sup> 北河清「ラグビー部創立のころ」輔仁会満洲医科大学史編集委員会編『柳絮地に舞ふ：満洲医科大学史』満洲医科大学史編集委員会、1978年、557-559頁所収。南満工業との一戦に関する北河の記憶には誤りがある。なお、ラグビー部が正式に承認されるのは1924年のことである（黒田源次編『満洲医科大学二十五年史』286頁）。

<sup>264</sup> 山田隆生「旅順工大ラグビー部の想い出」全満ラガーマンの集い編『全満ラグビー史』336-342頁所収；「ラグビー蹴球部部報」『靈陽』16号、1924年12月。

<sup>265</sup> 「蹴球競技」『満日』1924年11月18日。

<sup>266</sup> 「満鉄運動会の呼物、ラ式蹴球戦」『満日』1924年5月3日。

手になる「ラグビーフットボールを盛んにする事の提唱」が掲載された。佐田は、人道主義や平和主義が唱えられ軍備が縮小されるなかで、「軍隊教育に代るべき男性的遊戯」としてラグビーを評価し、技巧を弄する「ベースボール」を亡国的だと批判したうえで、「国家の前線」にある満洲の青年に向かって、「奮つて本競技を練習せよ」と呼びかけた<sup>267</sup>。

## (2) 山本芳松と南満工業

満洲体育協会はこのようなラグビーの勃興を背景に、1924年11月の全満蹴球選手権大会を従来のサッカーからラグビーに切り換えて開催した。参加は満鉄、満洲医大、南満工業、南満工専、旅順工大の5チーム。降雪直後の悪いコンディションだったが、参加チーム側は「雪中を冒して其の勇壮なるゲームを為す事」こそラグビーがウィンタースポーツとして一般に認められる所以であると主張し、予定通り開催、南満工専が南満工業を破って優勝した<sup>268</sup>。翌年の選手権には南満工業、南満工専、満鉄、満鉄育成学校、大連商業 AB、満洲医大、旅順工大の8チームが参加、南満工業と旅順工大が決勝に進み、2度の延長の末、南満工業がトライを決めてノーサイドとなる<sup>269</sup>。

南満工業こと南満洲工業学校は1911年に設立された工業技術者養成学校だが、1922年の南満洲工業専門学校設立にともない新入生募集を停止、1926年に廃校となることが決まっていた。1925年時点で全校生徒は4年生の42名のみ。山本は後輩のいない生徒たちに前途の希望をもたせるため、全日本ラグビー試合に優勝して輝かしい伝統ある本校の有終の美を飾るべくラグビーの猛練習を続けた。42名の生徒から、15名の選手にマネージャーなどを含む20名の選手団（全校生徒の約半分！）を大毎主催の全国中等学校蹴球大会に送り出した。第1回戦の早実戦を20対0で快勝した南満工業は、天王寺中学を14対0で破り、決勝に駒を進めた。決勝の相手はラグビーの名門同志社

<sup>267</sup> 佐田弘治郎「ラグビーフットボールを盛んにする事の提唱」『大連新聞』1924年5月8-9日。

<sup>268</sup> 「来る廿三日に全満蹴球選手権大会」『満日』1924年11月16日；「全満の選手権を獲るラ式蹴球戦は愈々明日」『満日』1924年11月23日；「白雪を蹴つて選手の意気軒昂す」『満日』1924年11月24日。

<sup>269</sup> 「期待さる、ラグビー蹴球戦」『満日』1925年11月21日；「うら寒き初冬の陽を浴び、全満の猛者連が集りて、今流行の蹴球争覇戦」『満日』1925年11月24日。

中学。3 対 3 で迎えた後半に 3 点を取られ、3 対 6 で敗れた。優勝こそできなかったが、準優勝で有終の美を飾った<sup>270</sup>。

南満工業と同じ船で内地に向かった旅順工大は、京都帝大主催の全国高等専門学校ラグビー大会に出場、初戦で大阪高校と対戦するが 6 対 6 で勝負がつかず、翌日の再試合に 0 対 18 で負けた（大阪高校は決勝に進出するも棄権）。工大監督の茂木は帰連後に、満洲のラグビー界で適用しているルールと内地のそれが非常に異なっており、今後大いに研究しなければならないと感想を述べている。今回の遠征では金銭面で苦勞したようで、大毎から非常に同情され、補助 100 円、旅費 300 円を支給してもらった。さらに今後大毎から満洲代表出場選手 18 人分の汽船汽車賃を補助することが決まった。この援助により、満洲勢はほぼ毎年のように全国大会に出場することが可能になったのである<sup>271</sup>。

満洲ラグビー界のルールについて、山本は満鉄と南満工業の試合を審判した経験をもとにこう語る。

満鉄側は内地で大学或は専門学校等で選手として活躍したものもあるので相当自信<sup>ママ</sup>を以つてゐるものだからいくら審判が規則通りジャッジをしても、内地を楯にしてどうしても聞かない。そこで工業チームは之に対する一策を案出し、ラグビーのルールブックを腰にぶらさげて試合をやり出した。満鉄チーム側が不当なことを云ひ又実際に行つた場合には、タイムを競技者自ら<sup>ママ</sup>宜しルールを繰り出して大議論が行はれる。当時試合の際の審判は大概余が其任に当つてゐたが、僅かばかり京大で指導を受けたからとてデリケートな処はわかる筈もなく威令全く行はれず、合議制審判と云ふ様な運動競技試合の原始的審判法の如き珍妙な試合が出来た。そして満洲ラグビー審判と云ふ様なローカルカラーが出来上つてしまつた<sup>272</sup>。

逆にいうと、このようなハンディキャップを負いながら、内地チームとの初対戦で優

<sup>270</sup> 山本芳松「満洲体育競技創設の跡」；同「体育に命を賭けて五十年」；朝日新聞社編『運動年鑑』大正 15 年版、朝日新聞社、1926 年、542 頁；「優勝戦に敗れたが奮闘して来た」『満日』1926 年 1 月 14 日；多田久「南満工専ラグビー半世紀」。

<sup>271</sup> 「ラ式のルールを全く無視」『満日』1926 年 1 月 14 日。

<sup>272</sup> 山本芳松「満洲体育競技創設の跡」。

秀な成績を収めた満洲チームの実力は高く評価できよう。

ところで、南満工業の対戦相手だった同志社中学には郭と張という2人の留學生がいた。郭も張も朝鮮人、中国人に共通する姓だが、同志社中学への留學生の傾向、朝鮮でのラグビーの普及（後述）を考慮すると、台湾からの留學生の可能性が高い<sup>273</sup>。同志社には台湾人ラグーの先輩がいた。1912年に同志社中学に入学、のち同志社大学ラグビー部主将を務めた陳清忠である。陳は1920年に同志社大学を卒業、台湾に戻って淡水中学の教師となり、ラグビーの普及に尽力、戦後は台湾ラグビー協会を発起し、「台湾ラグビーの父」と称される。台湾では満洲に一步先んじてラグビーが始まっていたのである<sup>274</sup>。同志社中学から早大に進み、早大ラグビー蹴球部主将を務めた柯子彰も台湾人である。柯は早大卒業後、1934年に満鉄に就職、満洲でラグビーをプレーすることになる<sup>275</sup>。

満洲ではラグビーはおもに日本人の間で広まったが、少ないながら中国人選手の姿も見られた。1926年9月の関東庁始政二十年記念運動会では、満洲医大に4人、南満工専と旅順工大にそれぞれ1人、中国人らしき名が見える（満鉄は唯一日本人のみのチームだった）<sup>276</sup>。

1926年11月の全満蹴球選手権大会は全国中等学校蹴球大会の満洲予選を兼ねて開催された。満鉄、満洲医大、旅順工大、南満工専、満鉄育成、大連商業、鞍山中学の7チームが参加した<sup>277</sup>。鞍山中学ラグビー部はこの年の5月、南満工業から転任した山本芳松の手でつくられた。矢沢邦彦校長は一部の選手や運動部を特別扱いすることを禁じていたため、ラグビーの指導は体操の時間に行われ、秋の運動会が終わったあとメンバーが編成された。鞍山中学にとって最初の試合が、全満蹴球選手権大会の中等

<sup>273</sup> 同志社中学に1945年までに入学した留學生835名のうち、朝鮮からの留學生は248名、台湾は548名、中国は39名であった（阪口直樹『戦前同志社の台湾留學生：キリスト教国際主義の源流をたどる』白帝社、2002年、33頁）。

<sup>274</sup> 池田辰彰「日本統治時代台湾ラグビー発展史：台湾の中等学校ラグビー史」『南島史学』85号、2017年；同「日本統治時代台湾ラグビー発展史：大正2年（1913）から昭和6年（1931）」『南島史学』88号、2020年。

<sup>275</sup> 高嶋航・金誠編『帝国日本と越境するアスリート』塙書房、2020年、226-234頁（執筆は東原文郎）。

<sup>276</sup> 『始政廿年記念運動会』1926年（玉川大学教育博物館所蔵）、50-51頁。

<sup>277</sup> 「いよ／＼廿一日はラ式選手権大会」『満日』1926年11月20日。

部決勝で、相手は大連商業だった。大連商業には、同年夏の甲子園で準優勝した野球部のキャッチャー桜井修がいた。まるで「相撲取りの様な」桜井は、試合終了間際に鞍山中学平野進のトライを阻んだ。このプレーで同点の機会を逸した鞍山中学は0対6で敗れた。ところが、年末に大正天皇が亡くなり、ラグビーの全国大会は中止され、大連商業は全国大会出場の機会を逃した<sup>278</sup>。桜井は明大に進学し、ラグビー選手として活躍、1932年に満鉄入りする。

一方、この大会で全国高専ラグビー大会の出場権を得た南満工専の3年生前田春蔵らも、工専最後の年だっただけに、全国大会中止の知らせに涙を飲んだ。1927年4月、前田は朝鮮総督府鉄道局に就職し、早速ラグビーを始める。前田はこれを「朝鮮ラグビーの幕開け」と誇るが、すでに前年にオックスフォード大学に留学していた徐丙義(YMCA)が京城中学にラグビーを紹介していた。朝鮮鉄道局に続いて、京城電気にもチームができた。12月に京城ラグビー倶楽部が設立され、第1回の朝鮮ラグビー大会が開かれることになる<sup>279</sup>。

### (3) 社会人ラグビーの広がり

ラグビーは学生の間で普及したものの、社会人チームは満鉄だけであった。1926年秋になって、ようやく2番目の社会人チームが誕生する。関東庁千歳倶楽部である。関東庁理事官の一乗勇進は高専ラグビー大会に出場した旅順工大が満洲ではよい相手がいなかったために、「内地高専に比較して技倆が落ち、しかも乱暴だと相当批難された」ということを聞きつけ、ならば関東庁が相手になって練習させてやろうとメンバーを集めた。経理課長をしていた安藤明道が三高でラグビーをした経験があるというので

<sup>278</sup> 長野勝定「創部のころの鞍中ラグビー」18-21頁；平野進「鞍中ラグビー初の公式戦」21-23頁。

<sup>279</sup> 前田春蔵「ラグビーと私」全満ラガーマンの集い編『全満ラグビー史』370-377頁所収；白石一朝「京商ラグビー部員の近況と思い出」京城公立商業学校ラグビー部OB会編『京商ラグビー部の回想』文化書房博文社、1985年、30-35頁；「ラ式蹴球団、満田氏等が組織する」『京城日報』1926年11月13日；「ラグビー初練習」『京城日報』1927年8月26日；「生声を挙げたラグビー倶楽部」『京城日報』1927年12月4日；道田生「半島ラグビー界展望」『朝鮮新聞』1929年2月27日。朝鮮ラグビー大会は第1回戦で京城電気と京城中学が対戦したが同点に終わり、第2回戦（第1回戦勝者対朝鮮鉄道局）は無期延期となった（「京電対京中無勝負」『京城日報』1927年12月19日）。

主将にかつぎあげ、茂木善作らが加わってチームができた<sup>280</sup>。安藤は1920年に京都帝大を卒業後、大蔵省入りし、1923年に関東庁に来任、ラグビーの普及に努めた。1930年に熊本税務監督局に転任するさい、安藤は「今のラグビーを盛り立てたのは僕だと言つてもいい、のだからね、この点では僕は立派に一つの功績を残し得たと自負してゐるわけだよ」と自らの功績を誇っている<sup>281</sup>。千歳倶楽部は1927年に旅順工大フレッシュメン倶楽部、大連商業に連勝、同年9月の同志社大学との対戦では3対21と惨敗を喫したが、同志社の選手から官庁でラグビー部のあるのは珍しいと賞められた。同志社大学は満鉄の招聘で来満、7戦全勝の成績で悠々と引き揚げていった<sup>282</sup>。

1928年2月、京都帝大の星名泰が満鉄に入社することが報じられた。京都帝大は1カ月前に初の全国制覇を成し遂げ、星名はその主将であった。この知らせを聞いた岡部は「星名君の満鉄入りを今迄知らずにゐました、彼は去年上海の極東オリンピックに於ても五種競技で優勝した程の人でラグビーの名選手である許りでなく陸上競技でも有数な人であるから大いに期待が出来る」と喜んだ。星名は満洲のラグビー界で活躍、戦後は同志社大学と京都大学のラグビー部監督として、日本ラグビー界の発展に大きく貢献することになる<sup>283</sup>。

星名だけではない。同志社大学ラグビー部から前年の満洲遠征にも参加した桂正一が旅順民政署に就職することになった。京都一商選手の今尾登（大毎記者）、明大選手の立上武三（満日記者）、神戸高商選手の石川直哉（国際運輸社員）ら優秀なラグーが次々と来連し、満洲ラグビー界は一挙に活気づいた<sup>284</sup>。満洲ラグビー界を統一する必要があると感じた岡部は、満洲ラグビー蹴球協会創立委員長として準備に奔走し、各方面からの了解も得て、11月3日に発会式を挙行了した。岡部はラグビー練習中に鎖骨を痛めていたが、怪我をおして設立の経緯を説明した。満洲ラグビー蹴球協会は満洲体育協会

<sup>280</sup>「昔はこれでも (29)」『満日』1936年8月13日。

<sup>281</sup>「安藤氏の功績」『大連新聞』1930年9月19日。

<sup>282</sup>「旅順グラウンドでダブル蹴球戦」『満日』1927年6月3日；「蹴球界の雄、同志社大学来る」『満日』1927年9月25日；朝日新聞社編『運動年鑑』昭和3年版、朝日新聞社、1928年、289頁。

<sup>283</sup>「京大ラ式選手星名泰君、満鉄に入社」『満日』1928年2月19日；高嶋航・金誠編『帝国日本と越境するアスリート』塙書房、2020年、97-105頁（執筆は東原文郎）。

<sup>284</sup>「蹴球試合」『満日』1928年4月22日；「実業対満鉄、ラグビー試合挙行」『満日』1928年10月19日。

の一加盟組織であるとともに、西部ラグビー蹴球協会の一支部でもあり、全満選手権、専門学校大会、中等学校大会を開催、また内地から強チームを招聘することを趣旨としていた。会長は満鉄理事小日山直登、副会長は関東庁秘書課長安藤明道と満日社長山崎猛、岡部は理事（のち副会長）に就任した。加盟団体は大連満鉄、全奉天、全遼陽、全鞍山、全撫順、旅順千歳倶楽部、大連実業（以上、一般）、旅順工大、南満工専、満洲教専、満洲医大（以上、専門学校大学）、鞍山中学、満鉄育成、大連商業、奉天中学（以上、中学校）であった<sup>285</sup>。

満洲ラグビー蹴球協会創設に先立って大連実業ラグビー倶楽部が結成され、11月25日に満日杯争覇実満ラ式蹴球戦が開催されることになった。満鉄側の選手は毎日午後4時に会社が終わるとすぐに大連運動場に駆けつけ、日が暮れるまでの1時間、岡部コーチのもと猛練習に励んだ。12月からの入営を控えた星名は不参加だった。一方、実業側は毎朝午前7時から出勤まで練習を重ねた。国際運輸専務の黒田誠は自ら激励に来るという力の入れようであった。実満戦当日は快晴で、ラグビーファンとして知られる満鉄副社長松岡洋右、満鉄理事小日山直登、満鉄調査課長佐田弘治郎、国際運輸取締役吉村英吉、主催者の満日社から尾間明取締役と米野豊実編集長が参観、観客は3000人に上った。松岡洋右の始球式で試合が開始され、満鉄が14対0で勝った。例の如く拡声器で解説を行った岡部によれば、実業はチームが組織されてから日も浅く、ルールを理解していない選手もいて、反則に次ぐ反則で苦しい立場に追い込まれたのだった<sup>286</sup>。

それから1カ月後、満鉄ラグビー部は、実業軍から4名の選手を加え、京都遠征に出発した。1月4日の大毎戦を28対8の大勝で幸先良いスタートを切るが、その後1勝1敗して迎えた最後の試合、明大戦は3対42と惨敗に終わった。大毎の久富達夫は精彩に欠いたこの日の満鉄軍について、「満洲は元気一杯のチームである、然してそれを唯一の特長とするチームである、それだから長途遠征の疲れが少々出て来た」と評し、

<sup>285</sup>「満洲ラグビー蹴球協会を組織」『満日』1928年11月2日；「全満ラグビー蹴球協会創立」『大連新聞』1928年11月2日；「満洲ラグビー蹴球協会生る」『満日』1928年11月5日；「満洲蹴球協会あらたに創立」『大連新聞』1928年11月5日。

<sup>286</sup>「両軍互ひに最後の猛練習」『満日』1928年11月21日；「男性的で勇壮なラグビー蹴球」『満日』1928年11月23日；「実業の奮闘空しく、優勝盃は満鉄軍の手に」『満日』1928年11月26日。

いつか満洲のチームが（イギリス本国を席卷したニュージーランドの）オール・ブラックスのように内地を席卷することもあるだろうと、その活躍に期待を寄せた<sup>287</sup>。

1929年4月、高松宮が連合艦隊とともに大連を訪れることになり、満鉄運動会と満洲ラグビー協会は高松宮が関心を持つラグビーの試合を举行することになった。4月10日、高松宮台覧のもと、満洲の学生選抜軍と満鉄軍が対戦した。観衆は2万人（一説には4万5000人）、満洲ラグビー界始まって以来の盛況だった。ラグビー初心者にもわかるように、満鉄運動会の渡辺諒が拡声器で解説した。いつもこの役を務めていた岡部は、満鉄理事小日山直登とともに高松宮を出迎え、競技場に案内する役を仰せついていた。高松宮による両軍選手拝謁ののち、試合開始、19対0で満鉄が大勝した。戦評によれば、台覧試合ということで両軍とも固くなり、オフサイドが続出した<sup>288</sup>。

1930年5月、満洲ラグビー協会は全満選手権大会を廃止することを決定した。選手権の前後3週間は他の試合ができず、ただでさえ短いシーズンがさらに短くなってしまふからである。これによって、試合数が20から60に増加した<sup>289</sup>。また新たに七人制ラグビーを導入することを決めた。日本で最初の七人制ラグビーは、この年2月に東京帝大グラウンドで行われたばかりだった<sup>290</sup>。

同じく1930年5月、秩父宮が来満、大連運動場で各種の台覧競技が举行された。満洲医大対全満鉄のラグビー戦も台覧の栄に浴した。ラグビーに造詣の深い秩父宮は、満洲のラグビーは内地に比べてあまり進歩していないようだ、オフサイドが多いし内地ではこのごろマークなどはやらないから5年ほど前のラグビーみたいだなどと専門的な批評をして、説明役の岡部と山本寿喜太を恐懼させた<sup>291</sup>。秩父宮からは「国際都市たる大連でラグビーを陸上競技場において行つて居るのか」との御下問もあった。じつは1929年に渡辺諒、岡部平太、高橋俊夫、飯沢重一らによりラグビー専用球場新設

<sup>287</sup>「満鉄 28-8 大毎」『大阪毎日新聞』1929年1月5日；「明大縦横に奮闘し、四十二点を挙げ大勝」『大阪毎日新聞』1929年1月11日；朝日新聞社『運動年鑑』昭和4年版、朝日新聞社、1929年、226頁。

<sup>288</sup>「実満蹴球戦を高松宮台覧」『満日』1929年3月19日；「台覧ラ式蹴球戦」『満日』1929年4月11日；「高松宮の台臨を仰ぎ、晴れのラグビー蹴球戦」『大連新聞』1929年4月11日。

<sup>289</sup>「満洲ラグビー蹴球協会委員会」『満日』1930年5月6日。

<sup>290</sup>日比野弘『日比野弘の日本ラグビー全史』ベースボール・マガジン社、2011年、35-36頁。

<sup>291</sup>「専門的御質問に恐懼」『満日』1930年5月9日。

運動が起こされ、関東庁の了解も得られたが、経費の都合がつかず、棚上げとなっていた。秩父宮の言葉がいわば約束手形となり、1931年に満鉄体育係は10万円の予算を要求してラグビー競技場を建てようとしたが、結局実現しなかった<sup>292</sup>。

1930年10月31日、朝鮮総督府鉄道局チームが来征した。監督は元南満工専選手の前田春蔵である。日本代表カナダ遠征に参加し、帰国してまもない元明大主将の知葉友雄も加わっていた。初戦の満鉄戦こそ0対15で完敗したものの、大連ラグビー倶楽部に11対6、満洲医大に17対12で勝利した<sup>293</sup>。朝鮮側は満洲チームのフォワードの強さ、体力の強さに驚きつつも、動作が荒いと感じたようだ。また、ファンの熱心さも強く印象に残ったようで、「これによつても満洲ラッガーの進歩は導かれて将来おそるべき進境を示すでせう」と記者に語っている<sup>294</sup>。

#### (4) 学生ラグビーの発展

1927年1月の全国蹴球大会が諒闇のため中止となったことはすでに述べた。ここでは1927年秋以降について紹介しよう（表32-1）。同年11月の全満蹴球選手権大会は中等部に満鉄育成と奉天中学、専門学校以上に南満工専、旅順工大、満洲医大、満鉄が参加し、奉天中学と南満工専が優勝、全国大会への切符を手にした。奉天中学フォワードの佐々木清夫の記録によれば、猛吹雪の大連を後にした一行は、神戸につくと「労務者」用の宿泊施設に案内された。大毎から交通費は補助が出たが、宿泊費は自腹である。節約のためには我慢せざるをえなかった。大会劈頭の天王寺中学との試合は24対3で完敗した。甲子園のグラウンドは内野と外野にまたがっており、内野でのスクラムは互角だったが、草が生えた外野では押し負ける。足が滑るのだ。地元の天王寺中学はそのことを考慮してスパイクの爪を長くしていた。さらに、ルールの違いもあって、

<sup>292</sup>「ラグビーと氷滑、今年の運動界を回顧して（下）」『満日』1931年12月26日；「大連運動場、今年の使用日程」『満日』1932年2月7日。秩父宮は「東洋唯一を誇るラグビー専用競技場」たる花園ラグビー場の開場式（1929年11月22日）に台臨していた（「花園ラグビー場」『大阪毎日新聞』1929年11月14日）。

<sup>293</sup>「遠征の京鉄軍、零敗を喫す」『満日』1930年11月3日；「京鉄見事に捷つ」『満日』1930年11月4日。大連実業ラグビー倶楽部は1929年秋に大連ラグビー倶楽部（略称は大俱）に改称した（「大連ラグビー位置決定」『満日』1929年9月9日）。

<sup>294</sup>「寒さには負けたが戦ひには勝つた」『京城日報』1930年11月9日。

表 32-1 学生ラグビー満洲・朝鮮代表

| 全国中等学校蹴球大会      |           | 全国高等専門学校ラグビー大会 |           | 備考                 |
|-----------------|-----------|----------------|-----------|--------------------|
| 第 9 回 (1926.1)  | 南満工業      | 第 2 回 (1926.1) | 旅順工大予科    | 南満工業準優勝            |
| 諒闇のため中止         | 大連商業      | 諒闇のため中止        | 南満工専      |                    |
| 第 10 回 (1928.1) | 奉天中学      | 第 3 回 (1928.1) | 南満工専      |                    |
| 第 11 回 (1929.1) | 京城中学      | 第 4 回 (1929.1) | 南満工専      | 南満工専準優勝            |
| 第 12 回 (1930.1) | 奉天中学 京城師範 | 第 5 回 (1930.1) | 満洲医大予科    |                    |
| 第 13 回 (1931.1) | 京城師範      | 第 6 回 (1931.1) | 旅順工大予科    | 京城師範優勝、<br>旅順工大準優勝 |
| 第 14 回 (1932.1) | 鞍山中学 京城師範 | 第 7 回 (1932.2) | 南満工専 普成専門 | 京城師範優勝             |

動けば反則となりペナルティを取られるという有様だった<sup>295</sup>。

1928 年 11 月、満洲ラグビー蹴球協会の発会式と同じ日に開かれた全満ラグビー選手権大会には一般 4 チーム、中学校 2 チームが参加、満鉄と鞍山中学が優勝し、その 2 週間後に開かれた全国高等専門学校蹴球大会満鮮予選には 3 チームが参加し南満工専が優勝した<sup>296</sup>。『鞍山中学ラグビー部史』によれば、鞍山中学は 11 月 15 日に満鮮代表の座をかけて安東で朝鮮代表の京城師範と対戦、6 対 15 で敗れたことになっている<sup>297</sup>。ただ、この試合を同時代史料で確認することはできない。朝鮮では 11 月 18 日から京城ラグビー連盟主催の選手権大会が開かれており、創部もない京城師範も出場していた<sup>298</sup>。これまで全国中等学校蹴球大会満鮮予選に朝鮮の学校が参加したことはなかったもので、満洲代表の鞍山中学が自動的に満鮮代表として参加するはずだったのではないだろうか。しかし、鞍山中学は代表辞退を申し出る。鞍山中学の校長は野球嫌いで有名な矢沢邦彦だった（第 5 話参照）。矢沢はラグビーの「満洲大会」出場は認めたが、それで十分と考えており、満鮮予選出場を許さなかったのである<sup>299</sup>。そこで、改めて満鮮予選を京城で実施することになり、12 月 25 日に京城師範と京城中学が対戦、

<sup>295</sup> 佐々木清夫「ペナルティで勝ちペナルティで負けた初出場」楡の実会（奉天第一中学校同窓会）編『楡の実（奉天一中創立七十週年記念）』楡の実会、1989 年、110-111 頁所収。

<sup>296</sup> 「満鉄工専を破り、育成鞍中に零敗」『満日』1928 年 11 月 5 日；「工専に凱歌揚る」『満日』1928 年 11 月 19 日。

<sup>297</sup> 上田義昌「満洲洲内外決勝で初勝利」鞍中ラグビー部 OB 会編『鞍山中学ラグビー部史』鞍中ラグビー部 OB 会、1987 年、25-27 頁所収；小高清「鞍中ラグビー創部のころ」鞍中ラグビー部 OB 会編『鞍山中学ラグビー部史』184-190 頁所収。

<sup>298</sup> 「ラグビーリーグ戦」『朝鮮新聞』1928 年 11 月 20 日。

<sup>299</sup> 「紛議を醸したラ式州外戦」『大連新聞』1930 年 11 月 16 日。

両校無得点に終わったため、翌日再戦し、京城中学が8対0で京城師範を破って、満鮮代表となったのである<sup>300</sup>。

1929年3月、朝鮮ラグビー蹴球協会が設立され、京城電気、倭城倶楽部、朝鮮鉄道局、京城中学、京城師範、OBの6チームが加盟した。12月1日から8日まで、同協会と大毎京城支局の主催で全国中等学校蹴球大会満鮮予選が開催、京城中学、京城師範、京城商業、龍山中学の4チームが参加した。すでに満洲では奉天中学が満洲代表に決まっており、大会前の報道では朝鮮代表が奉天中学と満鮮代表の座を争うことになっていた。京城師範が京城中学を破って朝鮮代表の座を射止めた3日後の『大阪毎日新聞』は京城師範が朝鮮代表、奉天中学が満洲代表に決まったと報じた<sup>301</sup>。詳細は不明だが、今回は満洲と朝鮮から各1校が全国大会に参加したわけである。

1930年11月の全国中等学校蹴球大会満鮮予選は、9日に鞍山で鞍山中学と奉天中学、大連で満鉄育成と大連商業が対戦し、州外と州内の代表を決定、16日に州内外の代表が大連で対戦、さらにその勝者が30日に安東で朝鮮代表と対戦することになっていた。ところが6日になって鞍山中学はたとえ勝ったとしても経費の都合で内地には行けないから、定期戦とみなすよう満洲ラグビー協会に申し入れた。9日の試合では鞍山中学が奉天中学に15対5で勝利した。11日、鞍山中学は先輩の斡旋で経費の目途がついたとして、協会に州外代表として推薦するよう求めたが、協会はこれを認めず、奉天中学が州外代表に推薦された。ところが奉天中学がこれを辞退したため、鞍山中学が改めて州外代表に推薦されるに至った<sup>302</sup>。経費の問題もさることながら、運動競技に対する校長の消極的態度や山本の転任（11日に撫順中学に転じた）なども重なった挙げ句の迷走劇であった。16日、満洲代表の座をかけた鞍山中学と満鉄育成の試合は3対3で決着がつかず、抽籤で鞍山中学の勝ちとなった。鞍山中学は朝鮮代表の京城師範と対戦したが、3対21で大敗した。京城師範は全国大会で優勝することになる<sup>303</sup>。

<sup>300</sup>「満鮮予選会」『大阪毎日新聞』1928年12月26日；「京城中優勝」『大阪毎日新聞』1928年12月27日。

<sup>301</sup>「中等学校ラ式予選」『京城日報』1929年11月30日；「京師優勝す」『京城日報』1929年12月10日；「四地方代表チーム決る」『大阪毎日新聞』1929年12月11日。

<sup>302</sup>「最初の声明通り鞍中は認めぬ」『満日』1930年11月12日；「奉中の辞退で新に鞍中を推薦」『満日』1930年11月13日；「紛議を醸したラ式州外戦」『大連新聞』1930年11月16日。

<sup>303</sup>満鮮予選の試合経緯は、鞍中ラグビー部OB会編『鞍山中学ラグビー部史』32-40頁の各記事

今回は高等専門学校大会のほうも満洲代表と朝鮮代表による予選が初めて実施された。朝鮮では中等学校に比べて高等専門学校のラグビーは立ち後れ、1929 年段階で普成専門にしかラグビーチームがなかった。1930 年に京城帝大予科、水原高農、京城薬専にラグビー部が創設され、同年秋季リーグには普成専門と京城帝大予科が参加した。そして、リーグ戦での対決で勝利した普成専門が朝鮮代表に推薦されたのである<sup>304</sup>。在満日本人チーム対朝鮮人チームの戦いは前者に軍配が上がった。本大会に出場した旅順工大は、名古屋高商に快勝、2 回戦で優勝候補の天理外語専門学校と対戦、大接戦の末これを破って決勝に進出した。決勝の相手は 2 連覇を狙う東京高師だった。旅順工大は天理戦で全力を使い果たしたうえに、暖房のない日本式旅館に慣れず体調を崩すものが続出、レギュラー 4 名が試合に出られず、0 対 38 で惨敗した<sup>305</sup>。

1932 年 1 月の第 14 回全国蹴球大会は満鮮予選が分離し、満洲と朝鮮からそれぞれ代表を派遣できることになった。前回の京城師範、旅順工大の活躍が評価されたのだろう。前年 11 月、満洲事変勃発にも関わらず予選が開かれ、鞍山中学と旅順中学が決勝に残った。旅順中学ラグビー部は同年春の飛岡文一教官就任を機に創設されたばかりであったが、飛岡と東京高師で同期だった関東庁体育研究所の岡沢亘をコーチにしてメキメキと実力をつけた。関東州のラグビーファンは誰も旅順中学が勝つとは考えていなかったが、満鉄育成、大連商業を破って、鞍山中学との決勝に進んだのである。前半、鞍山が 8 対 0 でリードするが、後半に旅順中学が得点を重ね、ついに 9 対 8 と逆転に成功した。そのままロスタイムに入り旅順中学優勝かと思われたが、終了間際に鞍山中学がトライに成功、初めて全国大会への切符を手にした。甲子園では秋田工業と対戦、0 対 26 で完敗した<sup>306</sup>。前年、経費を理由に推薦を断った鞍山中学だが、さいわい今回の遠征の収支報告が残っている（表 32-2）。大毎からの補助金（約 700 円）は全支出の 6 割ほどしかカバーできず、あとの 4 割を寄附に頼らねばならなかったこと

---

に詳しい。

<sup>304</sup> 尹明善「春季ラグビーリーグ戦後感（2）」『朝鮮新聞』1930 年 5 月 2 日；「秋のラグビー鳥瞰図 D」『朝鮮新聞』1930 年 10 月 24 日；「鮮満対抗のラ式両チーム」『京城日報』1930 年 11 月 25 日。

<sup>305</sup> 興亜寮史編纂委員会編『興亜寮史』382-383 頁；山田隆生「旅順工大ラグビー部の想い出」。

<sup>306</sup> 旅順中学校桜桂会誌六十周年記念号編集委員会編『桜桂会誌：60 周年記念号』旅順中学校桜桂会本部、1970 年、166-178 頁所収の各記事；鞍中ラグビー部 OB 会編『鞍山中学ラグビー部史』42-58 頁所収の各記事。

表 32-2 鞍山中学内地遠征費用

| 収入                 |             | 支出              |             |
|--------------------|-------------|-----------------|-------------|
| 大毎より補助             | 722 円 52 銭  | 汽車賃             | 64 円 89 銭   |
| 学校職員寄附             | 131 円       | 汽船賃             | 494 円 56 銭  |
| 在校生寄附 (334 人×60 銭) | 200 円       | 荷物運搬賃           | 8 円 50 銭    |
| 校友会支出              | 250 円       | 乗車賃 (電車、自動車、馬車) | 48 円 12 銭   |
| 旧職員寄附              | 15 円        | 宿泊料及謝礼          | 282 円 80 銭  |
| 父兄寄附               | 5 円         | 付添旅費 2 人分       | 247 円       |
| 卒業生寄附              | 10 円 50 銭   | コーチ旅費           | 51 円        |
| 有志寄附               | 30 円        | ボール代、通信費、雑費     | 32 円 21 銭   |
| 合計                 | 1364 円 02 銭 | 合計              | 1229 円 08 銭 |

がわかる<sup>307</sup>。

鞍山中学が全国制覇を果たすのは3年後のことである。

### 第 33 話 卓球

1880 年代にイギリスで誕生した卓球は、1902 年に日本に、さらに 1904 年に日本から中国に伝わった<sup>308</sup>。卓球は競技というよりは遊戯の一種として広まった。日露戦争時に本願寺が設置した大連倶楽部ではピンポン、大弓、テニスなどが行われていた<sup>309</sup>。1908 年に輸出商組合が設立した BC 倶楽部にはビリヤード、ピンポン、玉突などの設備があったというし、1911 年 2 月に熊岳城実業補習学校ではピンポンが冬季室内遊戯として盛んに行われていた<sup>310</sup>。その翌月にオープンした YMCA 会館にはピンポンの設備があった (第 40 話参照)。日本では大正年間に卓球は遊戯から「完全な競技」に発展する。名称も「ピンポン」から「卓球」へと改まった<sup>311</sup>。

1921 年 1 月、大連高女の水野谷初美教諭が、昨年まで大して旺盛でもなかったピン

<sup>307</sup> 鞍中ラグビー部 OB 会編『鞍山中学ラグビー部史』54 頁。

<sup>308</sup> 荻村伊智朗、藤井基男『卓球物語：エピソードでつづる卓球の百年』大修館書店、1996 年、52-55 頁；崔楽泉『中国近代体育史話』中華書局、1998 年、220-222 頁。

<sup>309</sup> 貝瀬謹吾「庭球思出誌」『読書会雑誌』9 卷 12 号、1922 年 11 月。

<sup>310</sup> 「BC 倶楽部の設立」『満日』1908 年 6 月 10 日；「ピンポン競技会」『満日』1911 年 2 月 16 日。

<sup>311</sup> 日本体育協会編『スポーツ八十年史』日本体育協会、1958 年、395 頁；荻村伊智朗、藤井基男『卓球物語』56-58 頁。

ボン競技が近時ようやく歓迎され、女学校でも冬季における唯一の室内運動として非常に盛んであると述べており、1920年冬に大連にピンポンブームが訪れたことがわかる。このピンポンブームを背景に、満日社は1921年2月にピンポン競技大会を開催することを発表した。1チームは5名で構成し、会費は5円、山本運動具店ルールに依り、1ゲーム10点制、2ゲーム先取で勝ちとし、サーブのひねり球は不可、ラケットの「打ち下し」は可とすることが決まった。山本運動具店は京都に本店があり、野球やピンポン用のボールを販売していた(第41話参照)。山本運動具店ルールの詳細は不明だが、当時は内地でもまだ統一ルールがなかった(1921年10月に統一ルールが制定される)。参加チームは、大連汽船、小学校、株式商品取引所、教育研究所、山本倶楽部、青年会(YMCA)、窯業試験工場、東拓会社、満鉄倉庫課、東倶楽部、鈴木商店、正隆倶楽部、ステーション倶楽部、大連工業会社、中央試験所、模型倶楽部、三井物産会社、撫順倶楽部、撫順医院の19チームで、撫順の2チーム以外はみな大連の社会人チームである。なかでも前評判が高かったのが、撫順倶楽部と中央試験所だったが、決勝に進んだのは撫順倶楽部と青年会で、数百名のファンが見守るなか試合が始まった。撫順倶楽部は1勝も挙げられないまま4人が敗退、残るは土生琢介主将1人となった。土生は劣勢を挽回し、青年会の5人の選手を次々と撃破、ついに優勝を勝ち取った<sup>312</sup>。撫順(天狗)倶楽部は翌年の第2回満洲ピンポン大会(撫順チームの参加により「大連」を「満洲」に改めた)でも優勝する<sup>313</sup>。

1922年11月、満日社は大連在住者に限定した第1回大連ピンポン大会を開催した。参加は28チームで、鈴木商店が優勝した<sup>314</sup>。翌1923年1月から3月にかけて、撫順、遼陽、奉天、旅順、ハルビン、鞍山でピンポン大会が開かれ、ピンポンブームは一挙に満洲の日本人の間に広まった<sup>315</sup>。撫順や鞍山の大会では「卓球」という名称が用いら

<sup>312</sup>「紀元節を第一日として挙行するピンポン競技大会」『満日』1921年1月16日；「南満ピンポン大会第一勝戦の盛観」『満日』1921年2月12日；「南満の覇権は竟に撫順軍の手に帰す」『満日』1921年2月15日。

<sup>313</sup>「天狗倶楽部覇を称す」『満日』1922年2月13日。

<sup>314</sup>「卓球第一勝戦の組合せ」『満日』1922年11月14日；「鈴木軍鮮かに優勝」『満日』1922年11月27日。

<sup>315</sup>(撫順)「撫順卓球大会」『満日』1923年1月20日；(遼陽)「ピンポン大会」『満日』1923年2月1日；(奉天)「ピンポン大会」『満日』1923年1月26日；(旅順)「ピンポン大会」『満日』

れた（内地で「卓球」の名称が広まるのは1921年から<sup>316</sup>）。次のシーズン、すなわち1923年冬から翌年春にかけて、鉄嶺、開原、公主嶺、安東でも大会が開かれた<sup>317</sup>。満洲の冬のスポーツといえばスケートくらいしかなかったが、スケートが可能な時期は12月下旬から2月中旬までと短かった。卓球のシーズンは秋の戸外スポーツが終了する11月から、春の戸外スポーツが始まる4月までで、満洲の長い冬にスケートを補完するスポーツとして短期間で定着することになった。当初、満日社は「民衆化体育の向上に資する目的で夏期は野球、冬は卓球、かるた」の競技会を開催していた<sup>318</sup>。しかし、カルタ大会はほどなくして大きく報じられなくなる。

驚いたことにはその頃〔1920年前後〕迄の満洲日日新聞の記事には一シーズンの間スケートの記事が全然見当たらないこともある。そうして全満カルタ大会だの全満ピンポン大会の記事が今日のラグビーや、スケーティングの記事の様に幅を利かせて居る。それ迄多くの者はやつぱり室内に閉ぢ籠つてピンポンやカルタばかりに夢中になつて居たと見える<sup>319</sup>。

スポーツの神様岡部平太の言葉である。「スケートの記事が全然見当たらない」というのは不正確だが、1920年代初頭に冬の娯楽が少なかったのは事実である。スケートや卓球のようなスポーツが盛んになるにつれ、カルタが（少なくとも紙面から）淘汰されたのである。

1924年2月の第4回満洲ピンポン大会には3連覇中の撫順のみならず、開原、鞍山、營口、旅順など沿線各地からの参加があった。鉄道倶楽部とKK社には中国人らしき名前も見られる。大会は真に全満規模のものになったと言えよう。激戦を制して31チー

---

1923年1月29日；（ハルビン）「ピンポン大会」『満日』1923年2月15日；（鞍山）「卓球大会」『満日』1923年3月20日。

<sup>316</sup> 荻村伊智朗、藤井基男『卓球物語』56-58頁。

<sup>317</sup> （鉄嶺）「ピンポン大会」『満日』1923年11月24日；（開原）「ピンポン会」『大連新聞』1924年2月21日；（公主嶺）「卓球大会」『大連新聞』1924年2月28日；（安東）「卓球大会」『満日』1924年3月11日。

<sup>318</sup> 「我社主催卓球戦」『満日』1924年2月5日。満日社主催のかるた大会については、栄元『租借地大連における日本語新聞の事業活動：満洲日日新聞を中心に』見洋書房、2021年、第6章「初春の吉例としての「歌かるた競技大会」」を参照。

<sup>319</sup> 岡部平太「スケート界を顧みて」『満日』1930年11月23日。

ムの頂点に立ったのは山本倶楽部だった<sup>320</sup>。

1924 年 10 月、満日社で満洲卓球協会の創立会議が開かれ、会長に満日社長小山内大六が就任した<sup>321</sup>。常任幹事には伊藤俊一（窯業試験場）、黒田善八（大連 YMCA）、村宗彦（満鉄鉄道部）、日高知新（満鉄教育研究所）、津田信憲（沙河口高小）が就任、沿線からは撫順の土生琢介、野村重俊、開原の須賀勝知、営口の山住堅造、鞍山の大谷薫が役員に選出された<sup>322</sup>。満洲卓球協会の常任幹事はいずれも 2 月のピンポン大会の委員であり、沿線の役員は同大会の出場者であるから、同協会は満日主催の満洲ピンポン大会を組織化したものと見ることができる。全満規模の競技別団体としては、武道を除いて最初のものである。ただし、沿線では奉天の参加が見られない。理由は定かではないが、このころ奉天では奉天卓球協会が独自の大会（満鮮卓球大会）を開催していた<sup>323</sup>。

1925 年 2 月 1 日、満洲婦人新聞主催、満洲卓球協会と満日社の後援で全満女子卓球大会（個人）が大連で開催された。参加者は「満洲婦人協会の一団を筆頭に通信局の事務員、大連病院分院の看護婦の諸嬢或は各女学校の生徒及び一般市中の夫人令嬢たち」数十名であった。この大会は女子限定の競技会としては 2 番目に早いもので、一般女性に開かれた競技会としては最初のものである。女子スポーツに対する理解がまだ少ないなか、『満日』はその意義について、いまや運動競技は世界的のものとなり、競技精神の涵養は女性にも必要で、「将来賢母としての諸嬢」が大会で得られる効果は少なくないと主張した<sup>324</sup>。一方、3 週間後に開かれた満日主催の第 5 回全満卓球大会では「卓球競技が従来婦女子の遊戯の如く見られ、緋手長袖を翻して遊んだ時代と全然其の趣きを異にし有髯有髪男子の鉄腕に依つて打ち出さるゝ熱球魔球は庭球野球に比して遜色なきに至」ったと卓球の男らしさが強調されている<sup>325</sup>。岡部がピンポンを低く

<sup>320</sup>「我社主催全満卓球戦組合抽籤決定」『満日』1924 年 2 月 9 日；「大連軍の雪辱したる我社の全満卓球大会」『満日』1924 年 2 月 12 日。

<sup>321</sup>「全満卓球協会」『満日』1924 年 10 月 5 日。

<sup>322</sup>「設立された卓球協会、委員の顔触れ極る」『満日』1924 年 10 月 12 日。

<sup>323</sup>「我社支社の後援で満鮮卓球大会」『満日』1925 年 2 月 10 日。後援は奉天体育協会、野田運動具店、満日奉天支社。

<sup>324</sup>「女子卓球大会競技の期日迫る」『満日』1925 年 1 月 28 日。

<sup>325</sup>「選手権を決める全満卓球大会は今日」『満日』1925 年 2 月 22 日。

評価したのは、まさしくこの「婦女子の遊戯」というイメージゆえであった（「卓球」の訳語も野球や庭球に伍するべく考案されたものだった）。

同年3月には満洲卓球協会主催で全満卓球個人選手権大会が開催された。不思議なことに、これまで男子の卓球はもっぱら団体競技として行われてきた（女子は個人のみ）。この大会は満洲で最初の男子卓球の個人競技会となった<sup>326</sup>。

7月、大連商業は大阪時事新報主催の全日本学生卓球大会に出場した。満洲卓球界最初の遠征であったが、準決勝で大阪歯専に惜敗した<sup>327</sup>。その大阪歯専を破って優勝したのは東京農大で、8月に大連に遠征してきた。大連軍は健闘したものの僅差で敗れた。東京農大の鈴木貞雄監督は、内地ではショートは初歩でロングを進歩したものとしているが、大連商業は全員ショート、大連軍もショートが多かったと述べている（ロング／ショートは卓球の打法。このほかカットがある）<sup>328</sup>。そもそも鈴木はロングを得意とし、1923、24年の全日本選手権大会に優勝、1924年に卓球の技術書を刊行した日本卓球界の第一人者であった。これを機に、満洲の卓球界もショートからロングへの移行が始まる。

12月に開かれた全満アマチュア卓球大会は、卓球の普及に伴い、新進者と老練者の差が拡大したことから、新進者向けの大会（個人）として創設されたものである。大会開催の発表から大会までの20日間に卓球用ラケットが500本も売れたというから、まさにタイムリーな企画であった。冬季の体力維持のため卓球に取り組んでいた満俱や実業の野球選手も参加した<sup>329</sup>。

1926年夏、満洲卓球協会は早大卓球部を招聘したが実現せず、代わりに上海に遠征軍を派遣することになった。宮内拵一、衣笠俊春ら選手6名と木下監督の一行は9月19日に大連を出発、青島経由で上海に乗り込んだ。初戦の上海倶楽部（日本人チーム）に負けたものの、中国倶楽部（中国人チーム）に連勝、上海倶楽部との2回戦にも勝ち、

<sup>326</sup>「満洲で初めて開かれる個人卓球選手権大会」『満日』1925年3月1日。

<sup>327</sup>「大連商業チーム準決勝に敗る」『満日』1925年7月28日。

<sup>328</sup>「農大卓球部満洲遠征を申込む」『満日』1925年7月17日；「卓球界の権威東京農大チーム」『満日』1925年8月6日；「最後の奮戦も奏功せず大連軍又も敗る」『満日』1925年8月18日。

<sup>329</sup>「全満卓球大会」『満日』1925年11月21日；「けふ行はるゝ卓球大会」『満日』1925年12月6日；三吉「興味の多い卓球競技」『満日』1926年1月1日。

優勝杯を獲得した。上海では数年来、日本人チームは中国人チームに勝てなかったというから、満洲チームの勝利は上海の日本人を元気づけたであろう<sup>330</sup>。上海倶楽部の城戸尚夫選手は大日本卓球協会の設立者のひとりで、当時は大日本卓球協会上海支部総幹事を務め、翌年に上海で開催される極東大会での卓球採用を働きかけているところだった（結局、公開競技として採用され、日本と中国が参加した）<sup>331</sup>。満洲卓球協会の上海遠征は、このような日中卓球界の交流の一翼を担ったことになる。

1926年11月7日、体育堂主催の体育卓球大会が開かれた。同大会の特徴は満洲選手権保持者の参加を不可としたことで、32チームが参加した<sup>332</sup>。11月28日には満洲卓球協会主催の関東州卓球大会が挙行された。これはもともと同協会が秋季選手権大会として計画していたもので、満洲選手権保持者を1チーム1人に制限していた。関東州卓球大会が16チームの参加を見たのに対して、12月12日に開かれた大連卓球大会のほうは6チームしか参加しなかった<sup>333</sup>。翌年5月の全満卓球大会も7チームしか参加しなかった<sup>334</sup>。表1からわかるように、このシーズン以降、少数の一流チームが全満卓球大会や大連卓球大会で覇を競い、二流以下のチームはこぞって体育卓球大会（1929年から全満アマチュア卓球大会）や同じく体育堂が1928年に創設したPA卓球大会（PAはボールの種類）に参加するようになった。

卓球人口の増加によって、卓球用具は大きく値下がりした。1920年の大阪屋号書店の広告ではピンポン具各種が2円から7円50銭で販売されていたが、1930年にはラケットが30～70銭、ネットが40銭～1円50銭、ボールは1ダース1円20銭で買うことができた<sup>335</sup>。

<sup>330</sup>「上海遠征と卓球選手予選」『満日』1926年8月19日；「白球うなり飛び卓球選手きまる」『満日』1926年9月6日；「上海に遠征した卓球軍めでたく凱旋」『満日』1926年9月29日；山下生「栄光輝く卓球上海遠征記」『満日』1926年10月13-14日。

<sup>331</sup>「上海乒乓連合比賽之發起」『申報』1926年4月28日。

<sup>332</sup>「卓球大会近づく」『満日』1926年10月27日；「主将会議で競技法の決定」『満日』1926年11月5日。

<sup>333</sup>「第一回関東州卓球大会開催」『満日』1926年11月13日；「関東州卓球大会の参加チーム」『満日』1926年11月26日；「十二日に開催の大連卓球大会」『満日』1926年12月11日。

<sup>334</sup>「何れ劣らぬ七チームの戦ひ」『満日』1927年4月29日。

<sup>335</sup>『満日』1920年11月28日；「年々盛になるピンポン」『満日』1930年12月4日。

表 33-1 大連卓球大会優勝チームおよび参加チーム数

| シーズン    | 全満卓球大会 |         |    | 大連卓球大会  |       |    | 関東州卓球大会 |       |    | 体育卓球大会  |       |    | PA 卓球大会 |  |  |         |         |    |
|---------|--------|---------|----|---------|-------|----|---------|-------|----|---------|-------|----|---------|--|--|---------|---------|----|
| 1920-21 | 1921.2 | 全撫順     | 19 |         |       |    |         |       |    |         |       |    |         |  |  |         |         |    |
| 1921-22 | 1922.2 | 全撫順     | 22 |         |       |    |         |       |    |         |       |    |         |  |  |         |         |    |
| 1922-23 | 1923.2 | 撫順天狗倶楽部 | 32 |         |       |    |         |       |    |         |       |    |         |  |  | 1922.11 | 鈴木商店    | 28 |
| 1923-24 | 1924.2 | 山本倶楽部   | 31 |         |       |    |         |       |    |         |       |    |         |  |  | 1923.11 | 山本倶楽部   | 23 |
| 1924-25 | 1925.2 | 山本倶楽部   | 26 |         |       |    |         |       |    |         |       |    |         |  |  | 1924.11 | 体育堂     | 22 |
| 1925-26 | 1926.2 | 撫順      | 14 |         |       |    |         |       |    |         |       |    |         |  |  | 1925.11 | 大連商業    | 15 |
| 1926-27 | 1927.5 | 鞍山      | 7  | 1926.12 | 用度課   | 6  | 1926.11 | 鮮銀    | 16 | 1926.11 | 大正小学  | 32 |         |  |  |         |         |    |
| 1927-28 | 1928.2 | 山本倶楽部   | 6  | 1927.11 | 用度課   | 8  | 1927.11 | 用度 A  | 14 | 1927.10 | 中央試験所 | 23 |         |  |  |         |         |    |
| 1928-29 | 1929.2 | 用度      | 9  | 1929.1  | 用度課   | 10 | 1928.11 | 中央試験所 | 13 | 1928.10 | 大連商業  | 19 |         |  |  | 1929.3  | 中央試験所 B | 16 |
| 1929-30 | 1930.2 | 中央試験所   | 7  |         |       |    | 1929.12 | 沙河口工場 | 13 | 1929.10 | (不明)  | 14 |         |  |  | 1930.2  | 天狗倶楽部   | 27 |
| 1930-31 | 1931.2 | 山本倶楽部   | 8  | 1930.11 | 山本倶楽部 | 7  |         |       |    | 1930.11 | 中央試験所 | 29 |         |  |  | 1931.1  | 中央試験所 A | 22 |
| 1931-32 | 1932.2 | 山本倶楽部   | 12 | 1931.11 | 大連商業  | 13 |         |       |    | 1931.11 | 橋立倶楽部 | 27 |         |  |  | 1932.4  | 中央試験所   | 8  |

外来チームの来征は、1925 年の東京農大以降、1935 年の日本学生卓球連盟軍まで見られないが、満洲チームの内地遠征は途切れることなく続く。1927 年 7 月には、大連商業と教育専門学校が大阪で開かれた全日本学生卓球大会に出場した<sup>336</sup>。同年 11 月には宮内拵一と衣笠俊春が東京の明治神宮体育大会に参加、ともに 1 回戦は不戦勝で、宮内は 2 回戦、衣笠は 3 回戦で敗れた。ロングで攻める内地選手にショートで対抗したが非常に困ったと述べており、満洲では依然ショートが幅をきかせていたことがわかる<sup>337</sup>。

1930 年 4 月、満洲卓球協会は全日本卓球選手権大会満洲予選を兼ねて全満卓球選手権大会を開催、斎藤成雄と吉丸美徳を派遣した。本戦では 2 人とも成績は振るわず、斎藤は帰国後に「あちらの選手は大抵学生です、而も打ち合ひの続くことは満洲の比ちやありません」と感想を述べ、満洲の卓球は改革が必要だと主張している<sup>338</sup>。満洲卓球協会は 1931 年の同大会にも選手を派遣するが、やはり良い成績を残すことはできなかったようである<sup>339</sup>。

<sup>336</sup>「大商卓球部全国大会出場」『満日』1927 年 7 月 13 日；「教専卓球遠征」『満日』1927 年 7 月 19 日。

<sup>337</sup>「卓球選手」『満日』1927 年 11 月 13 日。

<sup>338</sup>「満洲卓球が全日本的に進出」『満日』1930 年 3 月 28 日；「卓球選手権大会」『満日』1930 年 4 月 7 日；「満洲卓球は改革が必要」『満日』1930 年 5 月 12 日。

<sup>339</sup>「全日本卓球大会」『満日』1931 年 4 月 15 日。

## 第34話 馬術

満洲といえば馬賊、というのが戦前の日本人の満洲イメージの定番だった。満洲の新聞にも馬賊に関する記事がしばしばあらわれる。恐怖と浪漫の入り交じる日本人の馬賊イメージとはうらはらに、実際の馬賊とは「社会からドロップアウトしかねない人々と、「満洲」地域社会が共存していくうえで考案された、自衛のための政治的装置」だった<sup>340</sup>。ただ、主として都市部に居住していた在満日本人が馬賊に遭遇する機会はずっとなかっただろう。また、在満日本人が馬に乗る機会もきわめて限られていた。

大連には1907年以前に満鉄社員が組織した乗馬倶楽部があった。1908年1月の規則修正で、満鉄社員以外でも加入できるようになったとの記事が見られる<sup>341</sup>。詳細は不明だが、テニスなどの活動をしていた北公園の満鉄倶楽部の一部門だったと考えられる<sup>342</sup>。その前身は乗馬会で、満鉄はその所有馬6頭を引き受け、中村是公総裁、粕谷陽二技師（のちの満鉄総裁松岡洋右は粕谷の姪の夫に当たる）、富永忠一技師らが日曜日ごとに乗り回していたという<sup>343</sup>。

満鉄副総裁国沢新兵衛は、大連医院の尾見薫博士ら同好者を集めて乗馬会なる組織をつくったが、乗馬ならぬ落馬して大けがをしまい、乗馬を止めてしまった<sup>344</sup>。大正初めころから乗馬を始めたという尾見は2度の落馬にもめげず乗馬に勤しんでいたが<sup>345</sup>、1918年の年末に外遊のため大連を離れ、大連の乗馬熱は冷めた<sup>346</sup>。

1919年11月末、大連憲兵分隊長酒井周吉中尉の主唱で大連乗馬会設立の計画が発表され、翌年に正式に設立された。その趣旨は乗馬の趣味を普及し馬匹の改良に役立てることであった。発起人は中野有光（大連民政署長）、石本鎖太郎（大連市長）、野

<sup>340</sup> 澁谷由里『馬賊で見る「満洲」：張作霖のあゆんだ道』講談社、2004年、212頁。

<sup>341</sup> 「乗馬倶楽部の拡張」『満日』1908年1月9日。

<sup>342</sup> 「北公園倶楽部と弓術場」『満日』1908年6月21日に、「従来満鉄社員の有志によりて成れる満鉄北公園倶楽部にはテニス、スケーティング、ボート、競馬、玉突等の運動ありし」という。

<sup>343</sup> 「紳士の乗馬趣味」『満日』1909年2月15日。

<sup>344</sup> 「運動笑話」『満日』1916年8月7日；「大連の乗馬」『満日』1917年2月18日。

<sup>345</sup> 「尾見博士奇禍」『満日』1917年11月3日；尾見薫「落馬から得た人生観」『満日』1918年1月1日。後者の記事では「大連乗馬倶楽部」と記される。

<sup>346</sup> 「近く出来る乗馬会」『満日』1919年11月30日。

村龍太郎（満鉄総裁）、相生由太郎（大連商業会議所会頭）ら 16 名で、入会金 20 円以上、会費は毎月 15 円（持ち馬を使用する場合は 5 円）だった。乗馬は相変わらず金のかかる娯楽であった<sup>347</sup>。同年 4 月、大連乗馬会は西公園に専用の馬場を設置、会長に関東軍司令官立花小一郎を据えた。会員は 80 名、17 頭の日本産馬を有した<sup>348</sup>。7 月には大連新聞社の主催、大連乗馬会の後援で大連初の競馬会が開かれ、大成功を収めた<sup>349</sup>。一方、大連乗馬会発起人に名を連ねていた石本は、1920 年 3 月に神成季吉（大連商業会議所副会頭）、郭学純（大連華商公議会长）らと遼東乗馬倶楽部（遼東競馬倶楽部）を設立、臭水子（周水子）に馬場を建設した<sup>350</sup>。これと前後して、旅順、奉天、鉄嶺でも乗馬会が結成された<sup>351</sup>。大正 11 年版の『満蒙年鑑』は当時の乗馬熱の高まりを次のように記している。

乗馬も又運動の一として近来各方面に行はれる様になつた関東軍司令官河合〔操〕將軍の如きは馬匹に関し最も熱心な奨励家であるため遼東乗馬倶楽部や大連乗馬倶楽部なども大いに便宜を得て此高尚な運動熱を鼓吹して居る<sup>352</sup>。

1920 年前後に乗馬団体が簇生したことには、次のような背景があった<sup>353</sup>。日清、日露戦争で日本軍は軍馬の資質不足に悩まされたことから、政府は馬匹改良、軍馬増産をはかることを目的に馬政第一次計画（1906-1923 年度）を開始、1906 年に馬政局を設置した。また同様の目的から競馬を奨励したことで、各地に競馬会が誕生した。しかし、本来の意図とは違って、競馬はギャンブルとして人気が高まったために、1908 年に馬

<sup>347</sup>「近く出来る乗馬会」『満日』1919 年 11 月 30 日；「進捗せる大連乗馬会」『満日』1919 年 12 月 25 日；「大連乗馬会愈々設立さる」『満日』1920 年 1 月 18 日。

<sup>348</sup>「大連乗馬会の馬場開き」『満日』1920 年 3 月 30 日；「大連乗馬会馬場開き」『満日』1920 年 4 月 2 日。大連乗馬会は旧大連乗馬会と満鉄乗馬部が合同したものだという（「大連乗馬会五周年記念」『大連新聞』1925 年 3 月 18 日）。

<sup>349</sup>「本社主催大連競馬大会」『大連新聞』1920 年 7 月 2 日；「接戦多く興趣深し」『大連新聞』1920 年 7 月 25 日など。

<sup>350</sup>「迫ては競馬場なる筈の乗馬倶楽部が出来る」『満日』1920 年 3 月 4 日。

<sup>351</sup>「関東庁六月会の発会式」『遼東新報』1919 年 6 月 16 日；「奉天 乗馬倶楽部」『満日』1920 年 2 月 7 日；「鉄嶺有志の遼乗会」『大連新聞』1920 年 7 月 10 日。

<sup>352</sup>『満蒙年鑑』大正 11 年版、654 頁。

<sup>353</sup>関東州の競馬に関しては、山崎有恒「満鉄付属地行政権の法的性格：関東軍の競馬場戦略を中心に」浅野豊美、松田利彦編『植民地帝国日本の法的展開』信山社、2004 年；武市銀治郎『富国強馬：ウマからみた近代日本』講談社、1999 年を参照（以下、注記しない）。

券の発売を禁止すると、急速に衰退することになった。このため、陸軍は1910年代半ばより植民地での馬匹改良、軍馬増産を検討しはじめる。1918年6月、陸軍馬政局長官浅川敏靖中将が馬の視察のため朝鮮、満洲、華北を訪問した。浅川は大連で「大に馬を養へ、だん／＼不足する日本の馬、之を補充するは満蒙に限る」という談話を発表した<sup>354</sup>。浅川の談話に便乗して、同年10月には大連で競馬倶楽部設立の計画がたてられる。「先般浅川馬政局長官の来連してヤマトホテルで講演した事に基いて蒙古馬の改良を目的とする為めの標榜で株式会社とすれば営利的事業が見え透くから倶楽部組織」とするのだと新聞は報じる<sup>355</sup>。1919年3月、牛丸潤亮が満洲競馬法制定の請願書を帝国議会に提出、「邦人カ満蒙及西比利亜方面ニ活躍スルニハ特ニ馬匹ニ関スル思想ヲ普及」する必要がある、その方法として「馬券ヲ発行シテ競馬ヲ行」うのが捷徑であり、とくに満洲の場合は「蒙古方面ノ馬匹ヲ誘致改良」できると主張した<sup>356</sup>。結局、1920年5月の閣議決定により、勝馬的中者に商品券を贈呈する形式での競馬が認められた。1920年春の乗馬団体設立は、競馬法をめぐる一連の動きを見越したうえでなされたものであった。

1921年秋、陸軍と拓殖局、そして満洲の関東庁、関東軍、満鉄によって準備が進められた関東州競馬法は、馬券の販売に制限を設け、競馬場の経営を1社に限定し、その収益を公共事業に充てるという形で競馬の解禁を目指すものだった<sup>357</sup>。この方針を受けてと思われるが、遼東乗馬倶楽部は10月15-17日に予定していた競馬会を大連乗馬会と合同で開催した<sup>358</sup>。この年の年末に実施された満鉄社員の運動調査で、希望する運動の第2位に乗馬が入ったのも、大連の競馬熱の影響であろう<sup>359</sup>。しかし、原敬首相の

<sup>354</sup>「大に馬を養へ」『遼東新報』1918年6月28日。

<sup>355</sup>「大連に競馬の計画」『満日』1918年10月25日。

<sup>356</sup>『官報号外』1919年3月27日、衆議院議事速記録第30号。山崎有恒「満鉄付属地行政権の法的性格」は請願の提出者を「遼東競馬倶楽部牛丸潤亮」とするが、この時点でまだ遼東競馬倶楽部（遼東乗馬倶楽部）は存在しない。また山崎は1920年3月の遼東競馬倶楽部の設立を関東州競馬の誕生とみているが、先述のとおり大連乗馬会の設立のほうが早い。

<sup>357</sup>「関東庁競馬特許制」『満日』1921年10月7日。

<sup>358</sup>「秋空へ男性的な馬蹄の響を」『大連新聞』1921年10月5日：「秋空に駒の蹄の音高き競馬大会」『大連新聞』1921年10月14日。

<sup>359</sup>岡部生「社員の運動趣味：運動票に表れたる」『読書会雑誌』9巻1号、1922年1月。

暗殺、政権交代などのため、関東州競馬法は結局発布されなかった<sup>360</sup>。

競馬を巡る状況が大きく転換するのは1923年春である。内地で競馬法が制定され、同年7月に施行、関東州でも8月に関東州競馬令（「関東州ニ於ケル競馬ニ関スル勅令」）が発布されることになった。しかし、両者には大きな違いがあった。これまで大連の競馬では、上海、青島、天津からの転戦馬が主流だったが、これらは去勢牡馬だった。一般に牡馬のほうが速いからである。しかし、馬匹改良の鍵を握るのは牝馬である。関東州競馬令は競馬によって優秀な牝馬を集め、引退後は繁殖用の基礎牝馬とするため（全体の約1割が繁殖用で、残りのほとんどが馬車用となった）、出走馬を蒙古産牝馬に限定し、新馬の数を30頭以上とすることで新陳代謝を促した。競馬としての興味は若干そがれるが、馬匹改良、軍馬増産こそが真の目的だったから致し方ない。競馬場の経営は1社のみと限られたことから、その利権にありつくべく、競馬関係の団体が次々と結成された。そのなかには、内地で設立された（おそらく名義だけの）団体も少なくなかった<sup>361</sup>。のち、大連の諸団体を統合した大連競馬倶楽部が設立され、10月21日から同倶楽部公認第1回の競馬大会が周水子の競馬場で開催された<sup>362</sup>。

競馬令の発布によって、民間の乗馬熱も高まった。満鉄運動会に馬術部が新設されたほか、旅順騎友倶楽部、牛莊乗馬倶楽部、奉天騎団、長春乗馬会など乗馬団体が次々と結成された<sup>363</sup>。なお公主嶺では競馬熱が高まる以前から乗馬会が組織されていた。というのも、公主嶺は騎兵連隊の駐屯地だったからで、1922年度は会員数94名（うち新規30余名）であった。公主嶺地方事務所長の井上多美雄によれば、「公主嶺在住同胞と軍隊との間が兎角円満を缺く」ことを遺憾とし、乗馬を通じてその融和を図った

<sup>360</sup>「関東州競馬令」『読売新聞』1922年4月9日。

<sup>361</sup>「新競馬会発布と出願者色別」『大連新聞』1923年7月6日によれば、次のような団体が出願したという。大連乗馬会（大連）、大連競馬倶楽部（東京）、南満競馬倶楽部（大阪）、競馬倶楽部（東京）、遼東競馬倶楽部（大阪神戸）、満洲競馬倶楽部（東京）、大連馬匹改良協会（大連）、南満洲競馬倶楽部（東京）、南満競馬倶楽部（東京）、満蒙馬匹改良協会（大連）、旅大競馬倶楽部（内地大連）、満洲競馬倶楽部（大分）。

<sup>362</sup>「雨あがりの快晴と成り周水子の公認競馬」『大連新聞』1923年10月23日。

<sup>363</sup>「満鉄運動部に馬術部を新設するは頗る適切だ」『大連新聞』1923年5月31日；「旅順 騎友倶楽部」『大連新聞』1923年6月20日；「營口 乗馬倶楽部」『大連新聞』1923年8月3日；「奉天 奉天騎団生る」『満日』1923年8月19日；「長春 乗馬会発会式」『大連新聞』1923年10月17日。

ところ、軍旗祭では在住民と軍隊が一緒になってお祝いをするようになったという<sup>364</sup>。

1920年にいちはやく競馬大会を主催するなど、馬術の振興に熱心だった大連新聞社は、1925年に大連憲兵分隊の後援を得て、馬術講習会を開催した。これは「一部ブル階級の所謂娯楽機関としての意味でなく真に馬術をおそはりたいと云ふ一般人の為め」に2カ月間にわたって30名の初心者を対象に開催したものである<sup>365</sup>。女性の申込みも多く、抽籤で選ばれた受講者32名のなかには2名の女性が含まれていた<sup>366</sup>。このうち若月美枝子は8月31日に実施された遠乗会にも参加している<sup>367</sup>。乗馬に挑戦する女性はほかにも見られた。1922年、遼陽乗馬倶楽部に女性2、3名が参加するらしいと報じた記事は「満洲で婦人の乗馬は珍しい」とコメントしている<sup>368</sup>。1925年に鉄嶺青年団乗馬部が主催した遠乗会には女性4、5名が参加した<sup>369</sup>。女性の参加は歓迎されたものの、その数はきわめて少なかった。

1920年代半ばには乗馬熱は満鉄沿線にも広まる。1925年には安東で、翌1926年には鞍山で乗馬会が設立された。瓦房店青年団は乗馬熱の勃興に鑑み乗馬部設立を目論んだが、財政的に困難なため、「倶楽部組織に依頼して実現に努むる事」を確認した<sup>370</sup>。

こうした動きを背景に、満鉄運動会馬術部は1928年10月28日、第1回全満馬術大会を大連で開催した。参加団体は満鉄馬術部、大連乗馬倶楽部、大連青年団乗馬班、憲兵隊、警察、南満工専で、満鉄沿線からも個人の参加者が集まった<sup>371</sup>。

1929年にはいよいよ明治神宮大会に馬術代表を派遣することとなり、9月に海城の

<sup>364</sup>「南山麓乗馬場開き」『満日』1923年8月19日。

<sup>365</sup>「第一回馬術講習会開催」『大連新聞』1925年5月28日。

<sup>366</sup>「本社主催、憲兵隊後援、馬術講習会の人気」『大連新聞』1925年6月2日。

<sup>367</sup>「初秋の朝露を踏んで遠乗会の大成功」『大連新聞』1925年9月2日。

<sup>368</sup>「遼陽 乗馬倶楽部」『大連新聞』1922年2月11日。

<sup>369</sup>「再び復活した青年団の乗馬部」『満日』1925年9月24日。

<sup>370</sup>「安東 乗馬会発会式」『満日』1925年9月11日；「鞍山 乗馬会成立」『満日』1926年5月2日；「瓦房店 青年団の施設決議」『満日』1925年8月29日。大石橋で乗馬会ができたのも1925年前後と思われる（「大石橋 乗馬会復活運動」『大連新聞』1929年6月18日）。

<sup>371</sup>「荒天に嘶く馬上に晴の競技」『満日』1928年10月29日。おりしもこの日は大連医院で尾見薫博士の銅像の除幕式が行われていた。尾見は1925年9月に満洲を離れ、故郷の京都で余生を送っていたが、1927年4月に永眠した（「逝きし刀圭界の巨人、故尾見博士の銅像」『大連新聞』1928年10月29日）。

野砲兵連隊で予選会が開催された。大連、旅順、海城、長春から8名が参加、京都帝大卒で長春駅准職員をしていた清水滋（満鉄運動会長春鉄鞍会）が優勝した。予選会のさいに満洲の各乗馬団体と軍との間で協議がなされ、全満14団体を傘下に置く全満乗馬協会の設立が決まった。明治神宮大会には清水のほか、満鉄運動会大連支部馬術部の伊藤琴次が参加した。清水は紳士班で2位の成績を収めた<sup>372</sup>。

1929年10月に大連で開かれた第2回全満馬術大会には500名が参加した。第3回全満馬術大会は全満馬術協会の主催により海城で挙行された。婦人の参加も歓迎とのことだったが、どうやら参加はなかったようである。場所柄、前回ほどの参加はなかったが、それでも200名あまりが出場した<sup>373</sup>。

1931年の明治神宮大会予選は7月に海城で開かれた。営口乗馬会、大石橋乗馬会、撫順体協馬術部、遼陽乗馬会、大連満鉄運動会馬術部、海城、熊岳城、鉄嶺、撫順、大連競馬クラブ馬術部から20名が参加、5名が代表に選ばれた。その後、満洲事変が勃発したものの、満鉄馬術部教師戸高松夫ら3名が本戦に出場した<sup>374</sup>。満洲事変は満洲馬術界の発展を一時的に妨げることになる<sup>375</sup>。

## 第35話 柔道・剣道

### (1) 武道の濫觴

1906年9月、野戦鉄道の貝瀬謹吾らが中心となって野戦鉄道柔道会が設立された。そのさい配布された勧誘状には、柔道を始めた動機が次のように綴られている。

往年日露の戦役たる軍隊以外に直接間接に斯道〔柔道〕の効果を顕はしたるは既

<sup>372</sup>「満洲最初の馬術選手きまる」『満日』1929年9月15日；「馬術大会大いに賑ふ」『大連新聞』1929年10月21日；「全満馬術大会」『満日』1929年10月21日；「長春 神宮競技から清水選手帰る」『満日』1929年11月17日。

<sup>373</sup>「第二回全満馬術大会」『満日』1929年10月20日；「全満馬術大会種目決定す」『満日』1930年9月12日；「二百余名の選手が馬上に妙技を揮ふ」『満日』1930年9月29日。

<sup>374</sup>「神宮馬術競技満洲予選会」『大連新聞』1931年7月11日；「明治神宮の馬術競技」『大連新聞』1931年7月15日；「馬術選手派遣」『満日』1931年10月22日。

<sup>375</sup>松尾伝三郎「満洲馬術界概況」『満日』1933年1月12日。満洲国は競馬を国策として推進、大いなる発展を遂げる（山崎有恒「もう一つの首都圏と娯楽：植民地競馬場を中心に」奥須磨子、羽田博昭編『都市と娯楽：開港期～1930年代』日本経済評論社、2004年）。

に諸君の知悉せらるゝ所なり殊に戦後欧米各国が本邦斯道の達人を招聘して盛んに之れが研究をなすに徴するも其効と盛況とを知るに足る況んや新占領地に住し各国人士と競争場裡に立つもの常に心身の鍛練と護身の方法を講ずるは吾人の最も急務とする所なるに於てをや故に少壮有為の諸氏が職を満洲に奉ぜらるゝの今日偶々公務を終へ心身を爽快ならしめんには山紫水明の賞すべきなく現在に於ては球戯テニスの二を除き殆んど他に慰安の法なく空々寂々として日を消するは自然勇気の銷沈を来すべし即ち茲に同志を募り斯道研究の途を開き一は以て精神の壮快を得一は以て体育の発達を助け兼て護身の方法を講ずるは豈愉快ならずや<sup>376</sup>。

当時、柔術は欧米で大流行していた<sup>377</sup>。また、桂・ハリマン協定から満洲鉄道中立化の提案に至る一連の出来事に示されるように、アメリカは満洲の鉄道に強い関心を寄せていた。「新占領地」の日本人は柔道においても、また満洲においても、彼らに負けてはならなかったのである。さらに武道には精神と身体の鍛練のほか、慰安の役割が期待されていたことも、この文章から読み取れよう。野戦鉄道柔道会の会員数は約 50 人で、野戦鉄道提理部員の湯浅松之助が教師を務めた。同じころ、関東都督府民政部警務課は福岡から大木円治（大木一徳）を柔道教師として招聘した。警務課のほうは 300 人の生徒を抱えていたという<sup>378</sup>。大木はその後もずっと満洲にあって武道教育に携わり、1927 年に柔道範士、1930 年に剣道教士を授与されるなど、名実共に満洲武道界の第一人者となった。大木が 1933 年に離満するさいに、『大連新聞』は「満洲武道界の開拓者としての大木範士は満洲こそ日本の生命線であり、東洋平和の永遠の秘鍵を握るものだとの信念の下に其の後半生を満洲の土に捧ぐ可く一意武道の鼓吹宣伝指導に尽瘁し来つた」と大木を評価している<sup>379</sup>。

1906 年 12 月、乃木町（ロシア町）に 40 畳の広さを持つ道場が完成した。当時の大連で畳を手に入れることは難しく、警務課長浦太郎は宿舍用の畳を提供した。ところ

<sup>376</sup> 竹内黙庵『八面観 大連の二十年』168-169 頁。

<sup>377</sup> 藪耕太郎『柔道狂時代：20 世紀初頭アメリカにおける柔術ブームとその周辺』朝日新聞出版、2021 年。

<sup>378</sup> 竹内黙庵『八面観 大連の二十年』170-172 頁。満洲武道の歴史を語る資料として、前田久郎氏談「満洲武道界再度の黄金時代」『満日』1921 年 11 月 13 日もある。

<sup>379</sup> 「大木氏の我満洲武徳会開拓のあと」『大連新聞』1933 年 5 月 14 日。

がその暈はすぐに縁が擦り切れてしまう。すると浦警視はすぐに新しいものと取り換えさせた。もったいないというものもいたが、浦は「柔道は決して道楽でやるのではない国家の為め有為の士を造る必要で遣るのだ惜しくはない」と答えたという<sup>380</sup>。当時の雰囲気わかるエピソードである。

1907年1月、関東都督府民政部が大連から旅順に移転すると、大木も旅順に移った。湯浅は多忙のため欠席しがちで、野戦鉄道柔道会は一時閉鎖の噂も立ったが、大木が旅順から出張教授するなどして道場を支えた。1908年1月時点で満鉄柔道会（野戦鉄道柔道会から改編）では毎日午後5時から3、40名が稽古に励んでおり、会員の年齢は13、4歳から40歳くらいだった<sup>381</sup>。

大連における剣道の発展は柔道にやや遅れを取った。柔道の稽古が暈敷きの道場でなされていたとき、剣道の稽古は屋外で行われていた。当時、剣道をしたのはおもに警官で、鉄道関係者の姿はほとんど見られなかった。実際、1907年秋に満鉄調査課の平野正朝が満鉄に剣道会を作ろうとしたとき、同志を見つけるのに苦労した。大連民政署警務課には道場があったが、狭いうえに、警官以外は立ち入ることができなかった。たまたま、会計課の岩崎弥五郎が平野の提案に関心を示したことから、2人で1人分の道具を内地から買い求め、宿舍の庭先で稽古を始めた。1909年夏のことだった。平野によれば、これが満鉄剣道の揺籃であった<sup>382</sup>。

1910年4月、関東都督府と旅順民政署は広島高等師範撃剣教授の中島春海（一刀正伝無刀流）を教師に招いた<sup>383</sup>。5月には関東都督府管内の各警務署から選手を選抜し、撃剣と柔道の大会を開いた<sup>384</sup>。一方、満鉄のほうでは、かねて社内風教刷新の議論があり、この年から柔剣道を奨励することになった。6月、上京した中村是公満鉄総裁は嘉納治五郎に満鉄武道顧問の人選を依頼、嘉納は柔道の山下義韶と剣道の高野佐三郎

<sup>380</sup> 竹内黙庵『八面観 大連の二十年』177-178頁。

<sup>381</sup> 竹内黙庵『八面観 大連の二十年』176頁；「満鉄柔道会の盛況」『満日』1908年1月25日。

<sup>382</sup> 上西隆男編『平野正朝先生還暦記念集』第二編、平野正朝先生還暦記念集刊行会、1941年、11-12頁。

<sup>383</sup> 「新来の剣客」『満日』1910年4月22日。

<sup>384</sup> 「武術大試合」『満日』1910年5月24日；「警官武術大会」『満日』1910年5月26日；「武道大会雑観」『満日』1910年5月27日。

を推薦した<sup>385</sup>。9月初め、山下と高野を迎えて、第1回満洲柔剣道大会が満鉄の主催で開かれ、満洲各地から剣道に50名、柔道に100名がはせ参じた。山下と高野はその後、奉天、遼陽、長春、安東など満洲各地を回って武道の振興を促した<sup>386</sup>。9月下旬に満鉄運動会が発足すると（第38話参照）、満鉄柔道会は満鉄運動会柔道部に改められ、あらたに剣道部が結成された<sup>387</sup>。10月末には佐藤法賢五段が柔道上席教師、坂部小郎範士が剣道上席教師として満鉄に招聘され来連した<sup>388</sup>。

1911年8月、満鉄は乃木町に大連道場を建設、盛大な発会式を開いた。道場は木造平屋造りで京都の武徳殿をモデルにしていた<sup>389</sup>。9月末には嘉納治五郎を迎えて演武会が開催され、200名の健児が柔剣道に鎬を削った<sup>390</sup>。満鉄秋季柔道大会の始まりである。剣道のほうは、翌1912年4月に第1回満鉄春季剣道大会が開かれた<sup>391</sup>。満鉄道場が主催する両大会は満洲武道界の恒例行事となる。一方、関東庁は1912年3月に旅順に振武館を建設、5月には新道場完成を記念して、南満武道大会が開かれ、柔剣道に300人余りが参加した<sup>392</sup>。こうして満洲の武道界は、満鉄社員を主力とする大連道場（柔道は講道館系）と警務署員を主力とする武徳会系の旅順振武館を二大中心として展開していくことになる。

満鉄大連道場は1913年に柔道の藤森千春<sup>393</sup>、1914年に剣道の高野茂義をそれぞれ師範に招いた<sup>394</sup>。高野茂義は高野佐三郎の養子である。茂義は東京で十指に余る学校の剣道師範をしており、疲れのあまり神経衰弱気味だった。義父が満鉄師範の人選に困っていることを聞きつけ、保養を兼ねて満洲へ行くことを自ら志願したが、義父は承諾

<sup>385</sup>「満鉄の道場」『満日』1910年7月29日。

<sup>386</sup>「満鉄の武術館」『満日』1910年8月28日；「満鉄武術大会」『満日』1910年9月4日；「武術大会」『満日』1910年9月5日；「長春の武術大会」『満日』1910年9月9日；「奉天演武大会」『満日』1910年9月10日；「安東県武術大会」『満日』1910年9月16日。

<sup>387</sup>「満鉄運動会」『満日』1910年9月22日。

<sup>388</sup>「満鉄の柔道教師」『満日』1910年10月24日。

<sup>389</sup>「満鉄の道場」『満日』1910年7月29日；「大連道場発会式」『満日』1911年8月28日；「大連の武徳殿」『満日』1911年8月29日。

<sup>390</sup>「講道館長来満」『満日』1911年9月20日；「大連道場の演武会」『満日』1911年10月5日。

<sup>391</sup>「満鉄剣道大会」『満日』1912年4月23日。

<sup>392</sup>「振武館落成」『満日』1912年3月21日；「南満武道大会」『満日』1912年5月7日。

<sup>393</sup>「昔はこれでも(31)」『満日』1936年8月15日。

<sup>394</sup>「満鉄剣道師範」『満日』1914年12月10日。

しない。1年限りという約束で、ようやく義父の許しを得て来連したのだが、結局は30年余りを満洲で過ごすことになる<sup>395</sup>。

〔高野〕先生がロシア町に道場をお開きになった当時の満洲にはガムシャラな野武士ばかりで、本格的な剣の使い手は一人もいないという有様であったから、先生が道場を開いたと聞くや、或は遼陽から、或は奉天から或は四平街から、高野何者ぞと気負立って、道場破りに押しかけて来たものである。ところが先生は道場を大いに開いてこれらのサムライ達を気持ちよく迎え入れ、さておもむろに立って道場の真中を通し、暫らくの間、例の大上段で金しぼりにしてから笑顔で気合を抜いて解放しておられた。野武士達の中にはコソコソと裏口から帰ったものもあったが、中には即座に開眼して、先生の弟子となり、満洲剣道界に万丈の気炎を吐いた剣客もいた<sup>396</sup>。

満洲の寒稽古は高野にとって想像を絶するものだった。正月明けから長いときで1月末まで続く寒稽古は、毎朝午前5時ごろに始まる。剣道着は凍って袴のようになっている。道場の床を雑巾で拭くと2、3分もたたないうちに薄い氷が張る。ストーブを盛んにたいても、なかなか暖まらない。そんな厳しい環境だったが、国沢新兵衛副総裁ら満鉄の重役連も熱心に参加した。高野が来連して最初の大連道場の寒稽古では、柔道129人、剣道109人の皆勤者を出した<sup>397</sup>。寒稽古は年々盛んになり、1919年には柔道196人、剣道157人が皆勤を果たした<sup>398</sup>。

次に、満鉄附属地の状況に触れておこう。1910年代前半、関東州を除いて武道が最も盛んだったのは、おそらく遼陽であろう。1910年5月には遼陽警務署が講武館で武術大会を開催、沿線各地の警務署、遼陽駐在の師団司令部、歩兵連隊、工兵大隊、さらに満鉄などから70名が参加した<sup>399</sup>。同年秋に竣工した満鉄倶楽部には演武場が設けられ、柔道の飯村栄次三段が師範として着任した<sup>400</sup>。1913年時点で、瓦房店、大石橋、

<sup>395</sup> 高野茂義『剣道一路』産業経済新聞社、1956年、133-138頁。

<sup>396</sup> 門田重行「恩師高野先生を憶う」満鉄若葉会編『曠野に生きた若者たち』109-110頁所収。

<sup>397</sup> 高野茂義『剣道一路』145-148頁；「壮烈なる寒稽古」『満日』1915年1月17日；「寒稽古終る」『満日』1915年1月28日。

<sup>398</sup> 「寒稽古を終へて」『満日』1919年1月30日。

<sup>399</sup> 「連合武術大会」『満日』1910年5月25日。

<sup>400</sup> 「遼陽の演武場」『満日』1910年10月25日；「遼陽の武術稽古」『満日』1910年12月29日。

遼陽、奉天、撫順、鉄嶺、長春の満鉄運動会に柔道部が設置されていたが、師範は遼陽の飯村だけで（飯村は大石橋、撫順、奉天の師範を掛け持ちしていた）、大連の師範が毎月 2、3 回派遣されて指導を行っていた<sup>401</sup>。1912 年 6 月の新聞記事は遼陽で武道が盛んな理由として、満鉄運動部の責任者が熱心な運動論者であること、山口鹿太郎憲兵隊長が尚武家で夫人も柔道薙刀をよくすること、橋本清慎警務署長が武士道の鼓吹者で 3 度の食事よりも剣道を好んでいること、を挙げている<sup>402</sup>。

奉天には 1908 年にすでに奉天尚武会なる団体があり、翌年には奉天警務署が 2000 円を投じて演武場を設置していたが<sup>403</sup>、武道が盛んになるのは 1916 年以降である。この年 3 月、武道の普及と奨励を目的として武道奨励会が設立され、発会式を兼ねた演武会には 500 人あまりが参加した<sup>404</sup>。この武道大会は当初春秋 2 回開かれていたが、1918 年以降は秋のみの開催となり、州外で最大かつ最古の大会として続けられていく。

撫順では 1910 年 8 月に炭鉱の職員倶楽部が剣道具を購入し、小学校幼児運動場を仮道場にして剣道が始まった。撫順で剣道が柔道に先んじたのは、大連から転勤してきた平野正朝の存在が大きい。1911 年 4 月には満鉄運動会撫順支部が設置され、剣道部、柔道部が置かれるが、柔道部には道場がなく、活動休止の状態だった。1912 年 9 月、7000 円の工費をかけて修武館が建設されるにいたって、柔道部も活動を開始する<sup>405</sup>。1913 年 8 月には専任の武道教師（飯村栄次三段）が着任する<sup>406</sup>。他の附属地でも満鉄、警務署が武道の中心となり、また軍隊や中等以上の学校が存在するところでは軍人や学生も武道界の一翼を担った。

学校武道について一瞥しておこう。満洲の中等、高等教育機関には設立とほぼ同時に武道部が設けられていた。関東都督府中学（のちの旅順中学）は、1909 年の開校当初より野球やスケートを禁止した反面（生徒らは隠れてやっていたらしい）、武道を大

<sup>401</sup>「柔道部彙報」『満日』1913 年 4 月 7 日。

<sup>402</sup>「遼陽の武術界」『満日』1911 年 6 月 24 日。

<sup>403</sup>「奉天尚武会稽古始式」『満日』1908 年 1 月 30 日；「奉天演武場開場式」『満日』1909 年 10 月 19 日。

<sup>404</sup>「武道奨励会」『満日』1916 年 2 月 11 日；「武道奨励大会」『満日』1916 年 3 月 29 日。

<sup>405</sup>「運動会記事」『撫順』1 号、1912 年 11 月 18 日；嶋津正次「武道撫順の創建者」上西隆男編『平野正朝先生還暦記念集』第一編、116-118 頁所収。

<sup>406</sup>「武道彙報」『撫順』11 号、1913 年 9 月 18 日。

いに奨励していた。同年末に乃木希典大將らが中学を訪れ、生徒数名と剣道の試合をした。乃木は勝浦鞆雄校長に「生徒をあまりあまやかすすぎる」と苦言を呈した<sup>407</sup>。記録に残る最初の武道試合は1913年1月で、寒稽古の仕上げに実施された。十数日の寒稽古で205名の皆勤者が出たという。勝浦校長や服部精四郎教頭も参加した<sup>408</sup>。

1910年に開校した旅順工科学堂には、靈陽会という校友会があり、球戯、短艇、柔術、弓術、撃剣の各部があった。1913年6月には道場が完成する。柔道部は1910年代を通じて、校内大会、寒稽古、新入生編入試合などを行ったが、対外試合はなく、南満武道大会、満鉄武道大会に選手を派遣するのみで、衰微する一方だった<sup>409</sup>。

## (2) 武道の組織化

1919年の年末、関東庁の民政部長杉山四五郎、警務課長稲葉俊太郎、警察官練習所長島村駒吉らの斡旋で大日本帝国武徳会満洲支部の設立と武徳殿の建設が提唱された。30万円の寄附を募り、15万円で武徳殿を建設し、残り15万円を維持費に充てる予定だったが、春以来の財界不況のため資金集めは難航した。そこで官僚機構を通じて資金集めが図られたようで、たとえば鉄嶺に2500円、開原に4000円が割り当てられた<sup>410</sup>。翌1921年1月には会員800人、寄附金10万円を突破したと報じられ、同年10月の武徳会満洲支部発会式のさいには会員数は7000人に達していた。組織的な動員の結果であろう<sup>411</sup>。ただ、武徳殿はとうとう建設されずじまいに終わった。

武徳会の発会と時を同じくして、大連では講道館有段者会の結成準備が進められていた。発起人は岡部平太五段、藤森千春四段、前田久郎四段、島田秀誓四段、山本芳

<sup>407</sup>「座談会 旅中開校当時の思い出」旅順中学校桂会本部編『旅順のこと・母校のこと：旅順中学校桂会五十年記念誌』旅順中学校桂会本部、1963年、67-69頁所収。

<sup>408</sup>「中学生の武術」『満日』1913年1月26日。

<sup>409</sup>興亜寮史編纂委員会編『興亜寮史』35-36、814、817-818頁。

<sup>410</sup>「大日本帝国武徳会満洲支部を設立す」『満日』1920年2月18日；「大連に建設の満洲支部、武徳会は三十万円」『満日』1920年3月7日；「西公園に数千坪の地を相した大日本武徳会満洲支部の殿堂」『満日』1920年8月13日；「武徳会寄附金」『満日』1920年9月3日；前田久郎氏談「満洲武道界再度の黄金時代」『満日』1921年11月13日。

<sup>411</sup>「会員八百名に上り寄附金十万円」『満日』1921年1月8日；「満洲武徳殿の建築」『満日』1921年10月14日。寄附金は実際には6万円ほどしか納付されていなかったようである（「武徳殿は明年実現」『満日』1922年4月16日）。

表 35-1 1928 年主要武道大会

| 開催日       | 主催者          | 大会名                 | 創設年         |
|-----------|--------------|---------------------|-------------|
| 1 月 22 日  | 関東庁          | 関東州内中等学校連合武道大会      | 1928 (1922) |
| 2 月 5 日   | 満洲剣友会        | 全満剣道無段者優勝刀争覇戦       | 1924        |
| 2 月 11 日  | 満洲医大輔仁会武道部   | 全満武道大会              | 1914        |
| 2 月 19 日  | 大連講道館有段者会    | 全満柔道無段者団体優勝旗争覇戦     | 1923        |
| 4 月 22 日  | 満鉄運動会大連支部剣道部 | 春季剣道大会              | 1912        |
| 5 月 5 日   | 満鉄学務課        | 満鉄中等学校連合武道大会        | 1926 (1922) |
| 9 月 8 日   | 満洲剣友会        | 全満剣道三段以下有段者団体優勝刀争覇戦 | 1924        |
| 10 月 7 日  | 大日本武徳会満洲支部   | 全満武道大会              | 1916        |
| 10 月 21 日 | 満鉄運動会大連支部柔道部 | 秋季柔道大会              | 1911        |
| 11 月 25 日 | 奉天武道奨励会      | 全満武道大会              | 1916        |
| 12 月 2 日  | 大連講道館有段者会    | 全満洲柔道有段者団体優勝旗争覇戦    | 1923        |

松三段らだった。大連講道館有段者会の発会式は 1922 年 4 月で、当初の会員は 95 人、1 年後には 200 人に達した<sup>412</sup>。

一方、剣道の組織化は遅れ、1923 年 7 月になってようやく満洲剣友会が発足した<sup>413</sup>。支部の整備は剣友会が先んじ、同年に確認できるだけで安東、瓦房店、撫順、奉天に支部が設置されている<sup>414</sup>。大連講道館有段者会と満洲剣友会はそれぞれ春（2 月）に無段者、秋（剣道は 9 月、柔道は 11 ～ 12 月）に有段者の全満大会を開催するほか、内地チームの招聘、満洲チームの選抜派遣を行った。満洲剣友会は小学校、中等学校の全満大会開催を計画していたが実現しなかった<sup>415</sup>。

中等学校の全満大会は、1920 年 11 月に南満工業学校、大連商業、奉天中学、旅順中学、大連中学の武道関係者が集まって開催された武道教育協議会で検討され、1922

<sup>412</sup>「華を去り実に就き、青年の意気を振興し、スパルタ流の武を講ぜんと」『満日』1921 年 11 月 19 日；「体育奨励の爲め猛者連集ひ有段者会組織さる」『満日』1922 年 3 月 11 日；「在連有段者会、近く発会式を挙ぐる」『満日』1922 年 4 月 13 日；「柔道有段者会に対抗して、全満剣道家の結社剣友会生れん」『満日』1923 年 4 月 1 日；『満蒙年鑑』大正 12 年版、816 頁。

<sup>413</sup>「満洲剣友会組織されて」『大連新聞』1923 年 5 月 5 日；「満洲剣友会発会式」『満日』1923 年 7 月 6 日；「満洲剣友会発会式」『満日』1923 年 7 月 9 日。

<sup>414</sup>「剣友会支部設置」『大連新聞』1923 年 5 月 25 日；「剣友会の役員」『満日』1923 年 7 月 12 日；「満洲剣友会支部」『満日』1923 年 7 月 22 日；「武道奨励会内に剣友会支部」『満日』1923 年 8 月 19 日。

<sup>415</sup>「満洲剣友会諸計画」『大連新聞』1923 年 7 月 8 日。

年1月に第1回南満洲中等学校第1回連合武道大会が開催された。大連中学、旅順中学、奉天中学、大連商業、南満工業の5校から250名が参加した<sup>416</sup>。同大会は1926年1月に第5回大会が開かれたあと、州外中学校（1926年6月に第1回）と州内中学校（1928年1月に第1回）の大会に分かれた<sup>417</sup>。

表35-1は1928年に開かれた主要な武道大会の一覧である。1920年代前半の武道界組織化は、満洲武道界の量的拡大を促しただけでなく、質的向上ももたらした。それは、対外戦の成績からも見て取れる。そもそも外来チームが盛んに訪れるようになったのは組織化の結果であり、講道館有段者会と満洲剣友会が対外戦の主な窓口となった（詳細は次節を参照）。

量的拡大は有段者数に顕著にあらわれている。1921年に大連では柔道60名、剣道45名の有段者がいた<sup>418</sup>。大連講道館有段者会の会員は1923年時点で約200名だった<sup>419</sup>。1925年に柔剣道の有段者は全満で各200名、1930年には満鉄社員だけで有段者が柔道500名、剣道400名いた<sup>420</sup>。ただし、有段者の分布にはかなりの地域差があった。表35-2は1930年における四段以上の高段者の一覧である<sup>421</sup>。柔道60名のうち33名が大連、ついで奉天が10名、旅順と撫順が各5名である。剣道では66名のうち大連が28名、旅順が10名、奉天と撫順が各7名となっている。

1925年、満鉄、警務署、学校の道場は全満に約80カ所あった<sup>422</sup>。満鉄は1930年までに全満15都市に計16の柔剣道道場を整備した。これらはいずれも煉瓦造りで、冬季用の暖房設備を有していた。大連満鉄道場は満鉄本社横に工費30万円を投じて建設さ

<sup>416</sup>「南満中等学校連合の武道教育協議会」『満日』1920年11月7日；「全満中等学校連合武道大会」『満日』1922年1月14日；「全満中等学校連合武道大会」『満日』1922年1月27日；「南満武道大会」『満日』1922年2月1日。

<sup>417</sup>「州外中等学校武道及競技協議会」『満日』1926年5月5日；「竹刀相摩し、肉塊相撃つ」『満日』1926年6月9日；「全満中等校武道試合延期と成る」『大連新聞』1927年1月17日；「盛な健児の意気」『満日』1928年1月23日。

<sup>418</sup>「華を去り実に就き、青年の意気を振興し、スパルタ流の武を講ぜんと」『満日』1921年11月19日。

<sup>419</sup>「柔道有段者会に対抗して、全満剣道家の結社剣友会生れん」『満日』1923年4月1日。

<sup>420</sup>中松国彦「満洲武道界の過去とその将来」『満日』1925年1月6日；南満洲鉄道株式会社地方部編『地方経営梗概』昭和五年度、112頁。

<sup>421</sup>『満蒙年鑑』昭和6年版、543、546頁。

<sup>422</sup>中松国彦「満洲武道界の過去とその将来」『満日』1925年1月6日。

表 35-2 1930 年度地域別高段者

剣道 65 人（範士 2 人、教士 1 人、五段 24 人、四段 38 人）

|     |                                                                                                                                                       |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 大連  | 範士：高野茂義、教士：波多江知路、⑤前田久郎、星野五郎、長谷部正平、畑生武雄、山本勇治、高野慶寿、中西俊爾、④本多静、斎藤達三、肱岡武夫、平山孔久、岡部平太、和田勁、柴田一勝、森泉朝一、朝田定五郎、石橋賢英、庭川辰雄、田中忠一、船田清一郎、竹下栄治、熊本政之、山口安男、工藤重信、吉川正登、井上義人 |
| 旅順  | 範士：小関教政、⑤鶴野沢茂、今田庄吉、工藤次男、下藺鷹藏、阿部新三郎、④会田惣三、村田徹之、鈴木清夫、樽井八郎                                                                                               |
| 普蘭店 | ④柴田末蔵                                                                                                                                                 |
| 貔子窩 | ④古市六之助                                                                                                                                                |
| 瓦房店 | ④鳥海岩蔵                                                                                                                                                 |
| 鞍山  | ⑤三宅欣吾                                                                                                                                                 |
| 遼陽  | ④徳臣豊太郎                                                                                                                                                |
| 撫順  | ⑤宮沢常吉、守屋剛二、佐藤重蔵、阿部文雄、④根北常彦、中井清、宮原儀平                                                                                                                   |
| 長春  | ⑤樋口弥十、④亀山亨                                                                                                                                            |
| 営口  | ⑤岡田正美                                                                                                                                                 |
| 奉天  | ⑤篠原義雄、十川弥市、永田勝恵、内田直臣、④牛島義一、近藤平次郎、高垣信郎                                                                                                                 |
| 鉄嶺  | ④加藤英三、宮福恒松                                                                                                                                            |
| 安東  | ⑤黒岩盛高、④緒方勲、溝口勲                                                                                                                                        |

柔道 59 人（六段 6 人、五段 22 人、四段 31 人）

|    |                                                                                                                                                                          |
|----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 大連 | ⑥山田行正、岡部平太、二宮宗太郎、浜田有一、浅見浅一、⑤小谷澄之、山根福吉、塙孝一、縄田喜美雄、前田久郎、藤森千春、桜井弘之、吉田雄助、伊藤顕道、吉原政記、④渡辺奉綱、植草俊一、照井隆吉、和田次衛、宮後丈平、福島平助、西村秀太郎、松永正康、有田四郎、大山寿、高橋甲二、関憲次、小島一雄、吉田市郎平、石垣良隆、坂田修一、清水宗助、平山敬三 |
| 旅順 | ⑥大木一徳、⑤藤田順一、白土昌一郎、④大部二郎、島田智乗                                                                                                                                             |
| 鞍山 | ④山本芳松                                                                                                                                                                    |
| 遼陽 | ④有田志朗                                                                                                                                                                    |
| 奉天 | ⑤坂梨繁雄、鯨岡喬、江頭仁三、平田仲次郎、深谷甚八、④藤野賢六、高橋光雄                                                                                                                                     |
| 撫順 | ⑤佐々木雄哉、坂田輝夫、土居静男、④苑田真雄、小泉禎次                                                                                                                                              |
| 鉄嶺 | ④栗野俊一                                                                                                                                                                    |
| 長春 | ⑤川原二郎、末松正実、④梶義光、末永賢次                                                                                                                                                     |
| 安東 | ④伊東子之吉、萩原準                                                                                                                                                               |

元のリストには四平街に浜田有一五段がいることになっている（これは前年までの情報）が、浜田は大連にも挙げられているので削除した。

れ、1924 年末に完成した。柔道場剣道場は各 128 畳、床下にはスプリングが入れられ、観客 1200 名を収容することができ、その設備は日本一と称された。奉天満鉄道場と撫順満鉄道場はそれぞれ 1926 年と 1929 年に満鉄社員倶楽部に附設され、沿線随一の設備を誇った。満鉄は大連、奉天、撫順に柔剣道の専任武道教師（8 名）を置き、他の

都市には嘱託教師を配置するとともに、武道教師を巡回させ指導を行わせた<sup>423</sup>。

大連には満鉄道場のほかにもいくつかの道場があった。1924年の寒稽古を例にとってみよう<sup>424</sup>。

大連満鉄道場はこの年から朝稽古を廃止し、午後4時半からの夕稽古のみとした。初日の参加者は520名であった。かつては満鉄の理事たちがこぞって寒稽古に参加したものの、この年は剣道では赤羽克己理事が毎日出席し、柔道では山西恒郎理事が時折顔を見せるにとどまった。

沙河口満鉄道場は夕稽古に加え、4時半からの朝稽古も実施していた。柔道40名、剣道50名、少年の参加が多いのが特徴だった。大連警務署では200名の署員のうち120名あまりが寒稽古に参加した。参加率が高かったのは、山川吉雄署長が署員よりも先に道場にやってきて激励したためである。

沙河口振武館は100名、聖徳会練武場は「小数」の参加であった。このほか、各学校の道場でも寒稽古が行われた。沙河口振武館は1921年6月に同地在住の中松国彦らが中心になって開いた警察と民間の合同道場、聖徳会は1923年11月に聖徳会有志により開かれた道場である<sup>425</sup>。ほかにも満鉄埠頭道場、金子雪斎の大陸青年団振東社や鈴木商店の道場などがあった<sup>426</sup>。いわゆる町道場はあまり繁昌せず、一般市民は満鉄道場などを利用したようである。一部の警務署道場も一般市民に開放されていた<sup>427</sup>。1927年12月に前田久郎五段が尚徳館、翌年3月に中松国彦が練心館を開設すると、あらゆる階級を網羅する平民の一般的な民衆道場として歓迎された<sup>428</sup>。中松は熊本県出身、竹内

<sup>423</sup> 南満洲鉄道株式会社社地方部編『地方経営梗概』昭和五年度、112頁；「新築中の満鉄道場」『大連新聞』1924年8月13日；「新装成つた満鉄道場の寒稽古開始」『満日』1925年1月9日；「嘱託教師を廃して専任者が巡回教授」『満日』1931年10月8日；南満洲鉄道株式会社庶務部調査課編『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』南満洲鉄道、1928年、172頁。

<sup>424</sup> 「寒稽古道場廻り」『満日』1924年1月10-12日。

<sup>425</sup> 「振武館道場」『満日』1921年6月4日；「聖徳街の道場開き」『満日』1923年11月7日。

<sup>426</sup> 「夏知らぬ武道国、快よい木刀の響」『満日』1921年8月25日。

<sup>427</sup> 「満鉄大連道場、開放的に改善」『満日』1922年4月16日；「警務署道場、一般に開放」『満日』1923年12月15日。鈴木商店道場も一般に開放されていた（「柔剣の道場を一般に開放す」『満日』1922年8月10日）。

<sup>428</sup> 「尚徳館開設」『大連新聞』1927年12月12日；「尚徳館愈よ開場す」『満日』1927年12月16日；「尚徳館道場」『大連新聞』1927年12月16日；「中松市議の練心館」『大連新聞』1928年3月14日；「練心館道場開き」『大連新聞』1928年3月19日；「民衆道場練心館の盛況」『大連新聞』

三統流の柔術を修めた。かつて京城に練心館を開き、「日鮮青年の入門者を募」った。その後、上海に渡った。上海では宗方小太郎らと接触があったことが確認できる。大連に来てからは満日社員となる。1924年から1928年まで大連市市議員を務めた。のち奉天で道場を開いて中国人にも武道を教授、「満洲」武術を復興すべく満洲武術連盟の設立を図った<sup>429</sup>。岡部平太、福島清三郎、牛島辰熊ら武道とアジア主義を結びつけた人々の系譜に連なる人物といえる。

州外に目をやると、全満大会での撫順道場の活躍が目立つ（表 35-3）。撫順は炭鉱があった関係でスポーツ界も資金が潤沢だった（第 39 話参照）。撫順道場は 1922 年と 24 年に単独で朝鮮遠征を敢行したりもしている<sup>430</sup>。ちなみに撫順体育協会の 1929 年度の予算 2 万円のうち、柔剣道には 3800 円が割り当てられていた<sup>431</sup>。これは一武道部の予算としては破格に多い。

1931 年、満洲柔道界を揺るがす事件が起きた。斯界の第一人者たる山田行正六段が

表 35-3 武道主要大会優勝チーム

|      | 柔道有段       | 柔道段外     | 剣道有段 | 剣道段外 |
|------|------------|----------|------|------|
| 1923 | 旅順武徳会      | 若葉会、撫順道場 |      |      |
| 1924 | 旅順武徳会      | 大連商業     | 撫順道場 | 若葉会  |
| 1925 | 旅順武徳会、大連道場 | 大連商業     | 撫順道場 | 満鉄育成 |
| 1926 | 旅順武徳会      | 満鉄育成     | 大連道場 | 南満工専 |
| 1927 | 大連道場       | 満鉄育成     | 撫順道場 | 撫順道場 |
| 1928 | 大連道場       | 大連一中     | 大連道場 | 南満工専 |
| 1929 | 大連道場       | 奉天医大     | 大連道場 | 撫順道場 |
| 1930 | 大連実業団      | 撫順道場     | 奉天医大 | 満鉄育成 |
| 1931 |            | 撫順道場     |      | 大連二中 |

1928 年 3 月 30 日。練心館は 1930 年に大連中華青年会の会館跡地に移転した（「練心館改設」『大連新聞』1930 年 9 月 30 日）。

<sup>429</sup> 西尾達雄『日本植民地下朝鮮における学校体育政策』明石書店、2003 年、152、156 頁；「光荣ある市会議員の月桂冠を担へる人々（下）」『大連新聞』1924 年 11 月 6 日；大里浩秋「宗方小太郎日記、大正 3～4 年」『人文学研究所報』55 号、2016 年；「謀復興我国武術、将結成満洲武術連盟」『盛京時報』1937 年 5 月 21 日。

<sup>430</sup> 「柔剣道者の朝鮮遠征決定」『大連新聞』1922 年 8 月 4 日；「武道選手帰撫」『満日』1922 年 8 月 27 日；「撫順武道部朝鮮遠征」『満日』1924 年 8 月 22 日；「武道試合、撫順対平壤」『満日』1924 年 8 月 30 日。

<sup>431</sup> 「体育協会予算」『満日』1929 年 3 月 10 日。

満鉄柔道教師を辞任したのである。山田は長野中学出身で、東京警視庁師範をしていたが、1924年に渡満し、以来満鉄道場師範を務めてきた。全満洲軍の大將あるいは監督として活躍し、1929年に六段に昇進、同年の天覧試合に満洲代表として出場した。一方で囲碁、将棋、尺八は免許皆伝、満鉄柔道部野球団で投手を務めるなど（中学時代投手をしていた）、多趣味な人であった<sup>432</sup>。そんな山田が辞職に追い込まれた原因は彼の信仰にあった。山田は熱心なキリスト教徒で道場での礼拝を一貫して拒否してきた。ちょっと頭を下げれば済むじゃないかと忠告されても、「俺はな、クリスチャンで日本の神様を信じていないんだ。それで、お前の言うように形だけの頭を下げても、日本の神様をだますことになるんじゃないか」と答える始末だった<sup>433</sup>。

そもそも当時は柔道場に神棚が置かれていないことも多く、講道館の嘉納治五郎自身も神棚設置には乗り気でなかったという。ではなぜ山田の信仰が問われたのか。報道によれば、山田の信仰を快く思わない連中が、前年の福岡戦での敗戦を蒸し返し、昇段進級に対する不公平を鳴らし、山田排斥の策動を起こしたという<sup>434</sup>。山田が信仰していたのは、キリスト教のなかでもホーリネス教会と呼ばれる一派であった。満洲では1930年5月末に、安東高女の4人の生徒が神社参拝を拒否するという事件が起きて大問題となった。彼女らが属していたのがホーリネス教会だった<sup>435</sup>。山田の礼拝拒否がこの事件と結びつけられたのではないか。山田に代わり満鉄道場師範に就任したのは南満工専助教授の小谷澄之六段であった。小谷は1932年のロサンゼルスオリンピックにレスリング選手として参加、満洲国では官僚として体育の振興に尽くすことになる<sup>436</sup>。

<sup>432</sup>「尚武の五月（二）」『大連新聞』1927年5月6日；「満洲柔道界の実力と進歩」『満日』1929年1月20日；「天覧試合に晴れの出場」『満日』1929年4月25日。

<sup>433</sup>野口基城「柔道部側面史」満鉄若葉会編『曠野に生きた若者たち』111-121頁所収。この文章は満鉄辞任後、整骨院を開き、病のため帰郷して亡くなるまでの山田の暮らしぶりを伝えている。

<sup>434</sup>「信仰問題から突如山田六段追はれる」『大連新聞』1931年3月26日。

<sup>435</sup>「安東高女生が神社参拝を拒否」『満日』1930年5月30日；「神社参拝拒否問題」『満日』1930年6月1日；「安東神社参拝拒否事件」『満日』1930年6月6日；「神社参拝拒否の吉持使再び来安」『満日』1931年2月7日。

<sup>436</sup>高嶋航、金誠編『帝国日本と越境するアスリート』89-96頁（執筆は中嶋哲也）。

### (3) 外来チームとの対戦

外来チームの嚆矢は1918年の東亜同文書院柔道部であり、内地チームの来征は1920年の関西学院に始まる。1923年以降は毎年複数の遠征チームを迎えることになるが、最初の2年の成績は芳しいものではなかった。しかし、全満軍の対外戦成績をまとめた表35-4からうかがえるように、1925年以降の成績は圧巻で、内地や朝鮮のチームを次々となぎ倒した。とりわけ剣道の強さは目を見張るものがあった。外来チームの頻度は野球に次ぐ多さだった。興味深い試合も多いが、そのすべてを紹介するわけにはいかないの、ここでは満洲武道界（なかでも柔道界）が力を入れた満鮮対抗戦、東京学生連盟戦、全福岡戦を紹介したい<sup>437</sup>。

武道界での満鮮交流は、1921年7月に京城市管理局と満鉄撫順道場が安東小学校で柔剣道の対抗試合を行ったことに始まる。このときは撫順が柔剣道とも勝利を収めた<sup>438</sup>。同年10月には満鉄武道部一行18名が奉天から長春、安東、平壤、京城を回った<sup>439</sup>。1923年初め、大連と旅順の柔道有段者会は連名で朝鮮有段者会会長嘉

表 35-4 外来チーム一覧および勝敗表

| 年    | 対戦相手       | 柔道 | 剣道 |
|------|------------|----|----|
| 1918 | 東亜同文書院     | ×  |    |
| 1920 | 関西学院       |    | ?  |
| 1923 | 拓殖大学       | ×  |    |
|      | 東京高等師範     | ×  | ×  |
|      | ①満鮮対抗（柔道）  | ○  |    |
|      | 東亜同文書院     | ○  |    |
| 1924 | ①満鮮対抗（剣道）  |    | ○  |
|      | ②満鮮対抗（柔道）  | ×  |    |
|      | 東京大相撲柔道団   | ×  |    |
|      | 京城鉄道       | ○  | ○  |
| 1925 | ②満鮮対抗（剣道）  |    | ○  |
|      | 東京・京都帝大    | ○  |    |
|      | ③満鮮対抗（柔道）  | ○  |    |
|      | 関西大学       | ○  |    |
| 1926 | 明治大学       |    | ○  |
|      | 東京大相撲柔道団   | ○  |    |
|      | 三高         |    | ○  |
|      | 京城鉄道       | ×  | ○  |
| 1927 | 東京・京都帝大    |    | ○  |
|      | ④満鮮対抗（柔道）  | △  |    |
|      | 東亜同文書院     | ○  | ○  |
|      | 東京高等師範     |    | ○  |
| 1928 | ③満鮮対抗（剣道）  |    | ○  |
|      | 京都武専       | ○  |    |
|      | ⑤満鮮対抗（柔道）  | ○  |    |
|      | ①東京学生連盟@東京 | ○  |    |
| 1929 | 明治大学       | ○  |    |
|      | 京都武専       |    | ○  |
|      | 全大阪        |    | ○  |
|      | 京都帝大       | △  |    |
| 1930 | ②東京学生連盟    | ×  |    |
|      | 慶應義塾大学     |    | ○  |
|      | 全福岡        |    | ○  |
|      | 日本大学       | ○  |    |
| 1931 | 全大阪        | ○  |    |
|      | 関西大学       |    | ○  |
|      | 三高         |    | ○  |
|      | ③東京学生連盟    | ○  |    |
| 1932 | 同志社大学      | ○  |    |
|      | 早稲田大学      |    | ○  |
|      | 駒澤大学       | ○  |    |
|      | 大日本武徳会京都支部 |    | ×  |
| 1933 | 朝鮮鉄道局      | ○  |    |
|      | 全福岡        | △  |    |
|      | 関西大学       | ○  |    |
|      | 松山高商       |    | △* |

\* 満日は引き分け、大連新聞は松山高商の勝ちとする

<sup>437</sup> 古賀残星『講道館今昔物語：柔道発達史』三元堂書店、1934年、198、202-206頁。

<sup>438</sup> 「満鮮の武道争覇戦」『満日』1921年8月3日。

<sup>439</sup> 「武道部の粋を選つて」『満日』1921年9月30日；「初段から三段まで、柔剣両部の達人」『満日』1921年10月15日；「沿線から朝鮮へ遠征」『満日』1921年10月23日；「武道修業団」『満日』

納徳三郎に対して挑戦状を送った。朝鮮側も満洲軍との対戦を考慮していたところだったので、この挑戦に応じ、4月に安東小学校で第1回の満鮮柔道試合が開催された。観衆は1200人<sup>440</sup>。勝負は大将戦にもつれこみ、満洲の岡部平太五段が朝鮮の河津彦四郎四段を電光石火の早業で下し、満洲軍に凱歌が上がった。この試合を観戦した古賀残星いわく「かくして満洲軍は勝った。満鉄は多くの俊豪を招いて柔道王国を築いている。厩大なる資本とそのぼう漠たる風土とは柔道家には何よりの魅力であろう。高らかに馬賊の歌を唱うだけの余裕があった。まっ赤に燃えながら地平線の彼方に沈み行く太陽はまさに満洲柔道家の心の象徴ではないだろうか<sup>441</sup>」。ついで同年11月にやはり安東で剣道の満鮮対抗試合が開催された。満洲軍は平山孔久二段の7人抜き、畑生武雄三段の5人抜きで優勢に試合を進め、最後は二刀流で出場した岡部平太三段が朝鮮の三将、副将、大将を相次いで破り、25人のうち11人の不戦者を残して大勝した。岡部にとっては「剣道における私の最高試合」だった。審判を務めた高野佐三郎は岡部に四段を授与した。なお、当日の試合の様子は『満日』特派員の中松国彦によって詳細に伝えられた<sup>442</sup>。

柔道で惜敗し剣道で大敗した朝鮮軍は雪辱を期して、翌1924年早々にまず柔道の対抗戦を申し込んできた。朝鮮側は新義州での開催を求め、満洲側は大連か京城での開催を希望した。大連側がこのような希望を出したのは、「首都」のごとき晴れの場所で競技したほうが便利であり、張り合いもあり、また柔道奨励にも有意義であるという理由からであった。結局、大会は新義州での開催となった<sup>443</sup>。満洲軍で最初の白星を挙げたのは若き日の牛島辰熊三段である。長兄義一をたよって渡満し、大連道場で稽古に励んでいた。牛島は小玉達夫を破るが、続く伊藤時次初段とは引き分けて退いた。

---

1921年11月13日。

<sup>440</sup>「鴨緑江の水温む春四月、満鮮の武道家安東に会議」『満日』1923年2月16日；「満鮮対抗柔道戦と全鮮軍猛練習」『満日』1923年3月17日；「尚武晴れの江畔で鮮満柔道試合、満洲軍覇を唱ふ」『満日』1923年4月16日；「安東県に於ける満鮮柔道戦」『大連新聞』1923年4月17日。大連新聞は観衆を2000人とする。

<sup>441</sup>岡部平太『コーチ50年』大修館書店、1960年、327頁。

<sup>442</sup>「我が全満の剣道軍、鎧袖一触して鮮軍を屠る」『満日』1923年11月26日；「勝敗の跡を尋ねて」『満日』1923年11月29-30日；岡部平太『コーチ50年』328-335頁。

<sup>443</sup>「鴨江の水温む頃、満鮮柔道対抗戦」『満日』1924年2月2日；「陽春の頃を待つ満鮮柔道争覇」『大連新聞』1924年2月16日。

その後も両軍相譲らず、最後は満洲軍大将鯨岡喬五段が朝鮮軍副将岡野幹雄四段に敗れ、満洲軍は惜敗した<sup>444</sup>。剣道もこれに続けとばかり、朝鮮側は持田盛治教士を招聘して猛練習を行い、朝鮮全土から選手を選抜して満洲との戦いに臨んだ。積雪のなか1500人の観衆が集まった。序盤は朝鮮側が優位に進めるも、牛島義一四段の8人抜きで互角の戦いとなり、満洲軍三将の十河弥市五段が朝鮮軍の三将藤崎善次郎、副将堀切源一、大将秋野憲治を倒して満洲軍が凱歌を奏した。試合後は小学校講堂に両軍が集い親睦会を開き「今日の激戦の跡を物語りつゝ和気藹々裡に<sup>ママ</sup>参会」した<sup>445</sup>。ただし、『朝鮮新聞』は異なる状況を伝えている。十河対秋野の試合で審判小関政教が宣告を3回も取り消し、いずれも満洲側に有利な判定だったため、朝鮮側が抗議、「満場総立」となったすえ、朝鮮軍は席を蹴って引き揚げ、優勝旗も授与されないままに終わったという<sup>446</sup>。真相は不明である。

1925年の満鮮対抗柔道試合の開催は、剣道戦が終わってすぐに決まった。満洲側のかねての希望にそって大連での開催となる<sup>447</sup>。会場は西公園テニスコートに設置された臨時の柔道場だったが、そこで使用される畳に対して、朝鮮軍の山城興政監督から抗議が出た。通常はイグサの畳が用いられるが、会場の畳はズック (doek) を編んでつくられていた。満洲軍岡部監督によると、満洲では湿度の関係でイグサの畳を用いておらず、満鉄道場もやはりズックの畳を使っているのだった。この問題は今後の協議に委ねられた<sup>448</sup>。引き分けの多い試合で、勝負は大将戦にもちこまれ、満洲軍二宮宗太郎五段が朝鮮軍の副将倉田健之助五段、大将金丸伊三郎五段を相次いで下し、満洲軍

<sup>444</sup>「此の一戦の惜敗は満軍の好刺戟である」『満日』1924年3月30日、4月1-2日；「戦跡を顧みて」『朝鮮新聞』1924年3月30-31日、4月2日；牛島辰熊先生古稀記念会編『志士牛島辰熊伝』志士牛島辰熊伝刊行会、1974年、9頁。岡部は欧米出張のため不在だった。

<sup>445</sup>「不戦者を残して満洲軍再び優勝」『満日』1924年11月25日；「戦の跡」『満日』1924年11月27-29日；「満洲軍美事優勝」『大連新聞』1924年11月25日；「朝鮮軍悲憤の涙を呑む」『京城日報』1924年11月25日。

<sup>446</sup>「誤審続出した鮮満剣道試合」『朝鮮新聞』1924年11月25日；「中止になった鮮満剣道大会」『朝鮮新聞』1924年11月26日。

<sup>447</sup>「満鮮対抗柔道試合」『大連新聞』1924年12月5日。

<sup>448</sup>「満鮮柔道試合協議会」『満日』1925年4月26日；「メンバー交換も了り、けふ晴れの試合」『満日』1925年4月26日；「鮮満対抗試合、前評定緊張す」『大連新聞』1925年4月26日；「論戦に花が咲いて、愈々本日実戦に」『大連新聞』1925年4月26日。

は雪辱を果たした<sup>449</sup>。二宮は早大出身、1924年の第1回明治神宮競技大会柔道青年組の優勝者である。この年、剣道の満鮮対抗試合は「支那地方の動乱」を理由に中止となった<sup>450</sup>。

1926年3月、全満鮮と全九州の対抗試合の計画が浮上した。福岡の佐村嘉一郎七段が中心となって進めていたもので、「東洋第一の対抗試合として斯界空前の盛観を呈すべし」と期待されたが、朝鮮側は経費などの問題で留保し、ついに立ち消えとなった<sup>451</sup>。同年5月、第4回満鮮対抗柔道試合が京城で開催された。京城運動場の特設会場には朝鮮側応援団300人、満洲側応援団200人を含む6000人とも万余とも伝えられる観衆が集った。これまでと違い女性の観客も多数見られた<sup>452</sup>。両軍相譲らず、勝負は大將戦に持ち込まれた。満洲軍山田行正五段と朝鮮軍岡野幹雄五段の対戦はついに引き分け、無勝負に終わった。朝鮮の寺山幸一四段の振る舞いは物議をかもした。寝技が不得手な寺山は、相手の江頭仁三四段が寝技に持ち込もうと襟をとると、上衣を脱ぐという行為を繰り返した。審判を務めた磯貝一八段もこれを問題視したが、朝鮮軍監督益田俊夫は、ゆえなく寝技に引き込もうとする江頭四段も卑怯というべきで、また満洲軍の島田智乗四段は抑えられようとしたとき、わざと帯を解いてタイムにしたと逆に満洲側を批判している<sup>453</sup>。『朝鮮新聞』の記者は、第1回大会は全軍の勝負に重きを置かなかったのも、自由に技を出しあって互いに雌雄を決するという状況だったのに、今回は全軍の勝負に力こぶを入れたため、引き分けとなりがちで見苦しいところもあったと評している<sup>454</sup>。延期になっていた第3回満鮮剣道試合は1926年10月に大連

<sup>449</sup>「鮮満対抗の柔道戦、満洲軍遂に優勝す」『満日』1925年4月27日。

<sup>450</sup>「鮮満対抗剣道試合」『朝鮮新聞』1925年11月25日；「延期されて居た満鮮剣道大会」『満日』1926年7月16日。時期的に見て郭松齡の兵変と思われるが、大会に関する事前の報道すら一切ないのは不可解である。

<sup>451</sup>「鮮満の柔道家が全九州の猛者と熊本で対抗試合を計画」『釜山日報』1926年3月4日；「鮮満対九州の柔道試合、当分保留に決定」『朝鮮時報』1926年4月19日。

<sup>452</sup>「全土の榮譽を賭けた柔道晴れの試合」『京城日報』1926年5月31日；「必勝の気全軍に漲り、鮮満柔道戦開かる」『朝鮮新聞』1926年5月31日。

<sup>453</sup>「接戦又接戦、遂に引分け」『京城日報』1926年6月1日；「応接室 卑怯な柔道」『京城日報』1926年6月1日。

<sup>454</sup>「柔道大会短評」『朝鮮新聞』1926年6月1日。

で開かれたが、剣道はまたも満洲軍の大勝で幕を閉じた<sup>455</sup>。

1927年5月の第5回満鮮対抗柔道試合を前に、過去2回の大会で引き分けが多かったことに鑑みて、「満洲側では本年は飽くまで決戦し勝敗を決する意気で従来の協定を改革して明治神宮で行はれてゐる審判規定を採用」することを朝鮮側に申し入れた<sup>456</sup>。満洲側の認識では、新しい規定は学生柔道出身者が多く寝技が得意な満洲軍に不利で、立技に優れた朝鮮軍に有利なものだった<sup>457</sup>。これに対して、朝鮮側は違った角度からこの問題を見ていた。

斯る高段者の試合は内地の講道館本部でも見られぬもので鮮満の誇りとして足るものである。ところがこの柔道戦か年を経回を重ねる度毎に漸次資本戦になつて行く事は頗る遺憾に堪えない事だ……爾来朝鮮軍でもドシ／＼選手を入れて居るが満洲軍は満鮮の厖大な資本で所謂金にまかして日本一流の選手を入れる、これでは柔道戦では無く資本戦だから金のあるものが勝ちといふ事に軍配が上る困つた現象……こういふ資本戦に対抗するには失張引分主義の寝術で向ふ方法がある、これは一高二高の対抗戦の時小田常胤氏の創案したもの……朝鮮も爾来資本では負けるから寝術で行つて兎に角いい処まで漕ぎ付けて来た、それが鮮満柔道戦の経過ぢや。ところが本年はドーカ、引分封じの新規定の審判法でおまけに満鮮では金にまかして日本一の戦士を揃<sup>ママ</sup>てサア来い……朝鮮軍としては唯一の利器はとられ先方は資本で来いと四こを踏む満鮮柔道戦はここにおいて無意味じやといふ事になる<sup>458</sup>。

朝鮮側からは、柔道の「普遍的発達を期する」ため、選手の数を増やし、勝ち抜きではなく星取り形式とし（星取り形式は1人1試合となるため少数の強い選手が試合を決めてしまうのを防ぐことができた）、選手資格を1年以上の在住者とする提案がなされた。満洲側は「複雑な事情」があるとして態度を保留した<sup>459</sup>。満洲側が態度を保留し

<sup>455</sup>「不戦八人を残して満洲軍美事に勝ち」『満日』1926年10月26日。

<sup>456</sup>「満鮮柔道試合を鮮軍にいどむ」『満日』1927年2月21日。

<sup>457</sup>「今年満洲軍は油断がならぬ」『満日』1927年3月19日。

<sup>458</sup>石森久弥「無意義なる鮮満柔道戦」『朝鮮新聞』1927年4月12日。岡部もまた小田の引き分け戦法に悩まされたひとりである（拙著『国家とスポーツ』44-45頁）。

<sup>459</sup>「満鮮対抗柔道戦の打合せ終る」『満日』1927年5月5日。

たのは、この春来満した猿丸吉雄ら有力選手を代表にするつもりだったからである。

新しい協定のもとで行われた対抗戦は、依然として引き分けが多かった。最後の2試合、すなわち朝鮮軍副将古沢勘兵衛五段と満洲軍三将江頭仁三五段、朝鮮軍大将岡野幹雄五段と満洲軍副将二宮宗太郎五段の対戦も引き分けだった。満洲軍大将岡部平太五段はこの時マラリアにかかり、とても試合のできる状況ではなかった。満洲側は三将と副将が引き分けて大将を試合に出させないという「秘密な策戦」を立てていたのだった<sup>460</sup>。

試合後、朝鮮側から満鮮対抗はこれで打ち切りたいとの意向が満洲側に伝えられた。『大連新聞』は、満洲軍三将江頭と朝鮮軍副将古沢の試合で古沢が果敢に攻めたのに対して、江頭が守りに徹して引き分けに持ち込んだことに朝鮮側は不満を持ったことが原因ではないかという説を挙げている。この戦いぶりは一般観覧者の眼にも卑怯に映ったが、これは満洲軍の策略だった<sup>461</sup>。ただ、朝鮮側の不満はこの試合にあったのではなく、朝鮮軍応援団長石森久弥のいう満鮮対抗の「資本化」、あるいは岡部の言葉でいえば「選手補給路の相違」にあった。「満洲側の学生採用は殆んど無限であるが、朝鮮側の警察官の採用には限度があって、到底満鮮試合の永続は望めな」かったのである。石森は「朝鮮軍としては来年より内地遠征を行ひ武道奨励は勿論一面朝鮮宣伝に資して貰ひ度いと思ふ」と、今後は内地との関係を深めるよう提案していた<sup>462</sup>。満洲側は「満鮮斯道発展上最も有意義であるこの大会を中絶するが如きは実に遺憾である」として、12月2日に朝鮮側に挑戦状を出すが、朝鮮側は「経費」を理由に応じなかった。剣道の満鮮対抗も同じ理由で中止となった<sup>463</sup>。その後も何度か満洲側からの働きかけがあったが、結局実現には至らなかった<sup>464</sup>。

朝鮮側が満鮮対抗を打ち切りたいと考えていることは、すでに事前の協議で伝えら

<sup>460</sup> 岡部平太『コーチ 50 年』338-340 頁。岡部は三将を山田行正としているが、記憶違いである。

<sup>461</sup> 「満洲軍とは爾今試合せず」『大連新聞』1927 年 5 月 31 日。

<sup>462</sup> 岡部平太『コーチ 50 年』336-337 頁；石森久弥「朝鮮柔道軍の敗因」『朝鮮新聞』1927 年 6 月 5 日。

<sup>463</sup> 「満鮮対抗柔道試合」『満日』1927 年 12 月 4 日；「満鮮対抗の各競技中止さる」『満日』1928 年 2 月 17 日。

<sup>464</sup> 「昭和三年以来中絶中の満鮮柔道試合を復活」『大連新聞』1930 年 3 月 31 日；「大連—京城柔道戦を計画」『大連新聞』1930 年 12 月 4 日。

れていたようである。満洲側は朝鮮側に先んじて内地に目を向けていた。岡部はなんと満洲対日本（講道館）の対抗戦を計画したのである。満鮮対抗の約2週間前、満洲柔道界は講道館に対して挑戦状を出した。これに関して、岡部は次のように語っている。

何んと云つても講道館本部は日本柔道界の総本山で名人達人とも云はれる人が多数居るし地方から招集することも出来るし之等を全部選抜して掛つて来らるれば如何に満洲軍と雖も相当の苦戦に陥るは当然であらうと思ふ然し之まで満洲軍は多く受けて立つと云ふ試合ばかりをやつて来たのであるが今回だけは玉碎主義で突進出来るので何処まで押せるか押せるだけ押して見るつもりである一行は監督共廿五名位の予定である講道館として恐らく紅白試合を申込まれた事は今回が始めてだらうと思ふからドンな陣容で迎へるか柔道界の面白い問題である兎も角吾々が満洲仕込みの元気で以て東京に攻上ると云ふ事は勝敗に関係なく動もすれば近来少々理屈なくなつてゐる柔道界に若々しい元気を注ぎ込む事だけは確である<sup>465</sup>。

講道館館長嘉納治五郎のもとを飛び出して満洲にやって来た岡部がこの一戦にかける思いは並々ならぬものがあつたに違いない。「玉碎主義」といいながらも、勝算がなかったわけではなさそうである。講道館からは「講道館は全国の総本山だから一地方との試合はせぬ」との返事があつた。岡部は、満洲と朝鮮との合同で行くから練習試合でもいいのでやってくれと食い下がったが、結局プライドの高い講道館に振られてしまい、東京学生連盟軍と対戦することになった<sup>466</sup>。岡部はマラリアが完治しないまま監督として満洲軍を率い東京に向かった。満洲軍は大將二宮五段を残して見事に学生連盟を破った。試合の経過については、岡部による微に入り細に亘る文章があり、また拙著でも記したので、ここでは繰り返さない<sup>467</sup>。

朝鮮というライバルを失った満洲柔道界にとって、東京学生連盟との対戦は満鮮対抗にかわる一大イベントとなった。第2回戦は翌年7月に大連で行われた。学生連盟軍は副将阿部信文五段（東京高師）が満洲軍の副将江頭仁三五段、大將縄田喜美雄五

<sup>465</sup>「東京に攻め上る満洲軍の意気」『満日』1927年5月19日。

<sup>466</sup>岡部平太『コーチ50年』337-338頁。

<sup>467</sup>岡部平太『コーチ50年』340-355頁；拙著『国家とスポーツ』170-172頁。

段を相次いで撃破し、雪辱を果たした<sup>468</sup>。将来のさらなる活躍を期待された阿部だったが、今回の遠征の帰途に腸チフスを患い、これが原因となって選手生命を断たれる<sup>469</sup>。第3回戦は1929年10月、ふたたび大連で開かれたが、阿部を欠く学生連盟軍は満洲軍の敵ではなかった。1930年に予定されていた第4回戦は満洲事変後に持ち越しとなるが、1939年の第11回大会まで学生連盟軍との対戦は続くことになる。

1930年5月、「福岡、熊本対県試合の中止から相手を失った福岡県と、満鮮対抗試合の中止から無聊をかこつ満洲軍」が意見の一致を見て、福岡軍と満洲軍の対抗試合が福岡で開かれることになった<sup>470</sup>。第1回戦は福岡で開かれ、福岡が大将、副将をのこして勝利した。第2回戦は大連で開かれ、引き分けに終わった<sup>471</sup>。

満洲から内地への遠征について見ておこう。毎年5月に京都で開催される武徳祭大演武会には早くから在満日本人選手の姿が見られた。管見では、1909年の第14回大演武会に参加した真鍋政弥が最も早い事例である<sup>472</sup>。1915年の第19回武徳祭大演武会には、細川弥太郎（旅順民政署）、前田久郎（鉄嶺警務署）、山崎幸次（長春警務署）、本多護（安東警務署）、天野品市（奉天警務署）、清田正直（大連民政署）、緒方武（旅順工科学堂）の7名が参加している<sup>473</sup>。1920年代に入ると、明治神宮大会や大学・高専、中等学校の各種全国大会に選手が送られるようになる。また、団体としては、満鉄柔道部が1927年6月（東京学生柔道連盟戦）と1930年5月（全福岡、全大阪戦）に、満洲剣友会が1926年11月に、満鉄剣道部が1929年5月（武徳祭ほか）に、それぞれ内地遠征を実施している。最後のものは、いわゆる天覧武道大会への参加を兼ねており、指定選士の部で高野茂義、府県選士の部で畑生武雄が準優勝した（柔道は山田行正、小谷澄之、和田次衛が出場）。地元満洲では圧倒的な強さを誇った満洲チームも内地遠

<sup>468</sup>「大将を残して学生軍遂に雪辱」『満日』1928年7月2日。

<sup>469</sup>「今年来満する内地柔道界猛者」『満日』1929年6月6日。この記事では阿部が腸チフスで「死亡」したになっているが、これは誤りである。

<sup>470</sup>老松信一『柔道百年』時事通信社、1966年、193頁；「奮戦の甲斐もなく満洲軍つひに敗る」『満日』1930年5月12日。

<sup>471</sup>「満洲軍の雪辱遂に成らず、大接戦に終始引分け」『満日』1931年5月25日。

<sup>472</sup>「本部記事」『武徳誌』4篇6号、1909年6月5日。真鍋は1916年時点で安東警務署剣道教師をしており、安東武術研究会を組織したことが新聞に載っている（「武術研究会」『満日』1916年3月6日）。

<sup>473</sup>「武徳会参列成績」『満日』1915年5月15日。

征での成績は芳しくないことが多く、満洲剣友会による内地遠征は3勝3敗の成績だった<sup>474</sup>。

## 第36話 弓道

弓道は満洲で最も古い歴史を持つスポーツのひとつである。満洲最初の弓道場は日露戦争に従軍していた軍人軍属に娯楽を提供していた本願寺倶楽部が1905年に大連北公園に設置した大弓射場である。本願寺倶楽部師範の西野福吉は日置流印西派の弓術家で、台北の大日本武徳会で師範をしていたが、戦地でひと儲けすべく知己を頼って来連、軍の御用商人をしていたところ、師範への就任を求められたのだった<sup>475</sup>。この弓道場には、とくに海軍の軍人がよく出入りしたという。日露戦争後、本願寺から道場の経営を受け継いだ満鉄北公園倶楽部は、この弓道場を改築し、電灯を設備して夜間でも練習できるようにした。同倶楽部は「満鉄」の名を冠しているものの、部員の紹介があれば誰でも入会することができた。倶楽部の中心人物は野戦鉄道技師として従軍し、その後満鉄社員となった内田満直と貝瀬謹吾である。内田は平岡熙が結成した日本で最初の野球チームの一員でもあった（平岡の弟寅之助は大連光明洋行の支配人をしていた）。西野は常盤公園（のちに松公園、その後に松林小学校）にも道場を設けた<sup>476</sup>。

1908年7月、旅順弓術倶楽部が設立されると、西野は同倶楽部の師範に就任するため大連を去った。北公園の道場は長岡なる人物が、常盤公園の道場は安達丈平が引き継ぐ。満鉄会計課長の安田錐蔵は、北公園道場の長岡師範を輔佐し、「弓道は弓術にあらず弓道なり」と唱え、満鉄の弓道を大いに発展させた<sup>477</sup>。1910年9月に発足した満鉄

<sup>474</sup>「三勝三敗で全満剣道軍」『満日』1926年11月21日；前田生「オール満洲軍武者修行の記」『大連新聞』1926年11月15-18、21-23日。

<sup>475</sup>「大連倶楽部の近況」『東京朝日新聞』1905年6月19日。

<sup>476</sup>竹内黙庵『八面観 大連の二十年』181-182頁；「旅順弓術倶楽部発会式」『満日』1908年7月28日；貝瀬謹吾「内田満直君追悼の辞」古庄重一編纂『小松台文存』113-116頁所収。「弓の話」『大連新聞』1921年10月23日によれば、本願寺の弓術倶楽部は「明治四十年〔1907〕二月」に「満鉄運動部」に引き継がれたという。

<sup>477</sup>竹内黙庵『八面観 大連の二十年』183頁。

運動会には弓術部が設けられ、内田満直、飯田郁、堤治助が弓術部幹事に就任した<sup>478</sup>。一方、常盤公園の道場は、1915年に安達が青島に移ったさい閉鎖された<sup>479</sup>。

撫順では野戦鉄道提理部第一採炭班時代より弓術部が設けられ、1906年には競射大会が開かれた。1910年に炭鉱職員倶楽部に弓術部が新設され、旧来の用具を引き継ぎ、1911年7月に最初の大会を開催した。1912年時点で正部員35名、准部員10名を数え、毎月日置流道曹派萩原龍太郎が来て指南をしていた<sup>480</sup>。

大連市民の間で弓道が盛んになるのは1918年5月に中井理介が自宅に矢場を開いて以降のことである。中井を師範とする弓道組織は1919年1月に大日本弓術会大連支部となり、相生由太郎を支部長に迎えた。大日本弓術会は、日置流竹林派家元の本田利実を師と仰ぐ根矢鹿兎が1909年に設立した日本最大の弓道団体である。1919年6月に財団法人化したさい、大日本弓道会と改称した<sup>481</sup>。五賀友継と李燦雨によれば、1924年に根矢が台湾を訪問して以降、大日本弓道会は外地や海外での弓道普及に取り組んだ。台湾には46もの支部があったという<sup>482</sup>。とすれば、大連支部は最初の外地支部だったのかもしれない。支部長の相生は大連商業会議所会頭だが、彼が名ばかりの支部長でないことは、1909年2月に北公園弓術倶楽部主催の弓術射初大会に参加し、「左利射弓際立つて可笑しかりき」と評されていたことからわかる<sup>483</sup>。

旅順弓術倶楽部師範をしていた西野は大連に移り、青島から戻った安達丈平らと新道場を設立すべく、市民に寄附を募った。この話を聞きつけた実業家の古財治八が真っ先に5000円を寄附した。1万円の寄附金を集めた西野らは、西公園に弓道場を建設した。1919年10月の道場開きは、大連尚武会弓術倶楽部発会式を兼ねて行われ、おりしも来連中の肅親王も臨席した。大連尚武会について詳しいことはわからないが、すでに1908年の新聞には見えることから、日露戦争直後に設立されたものと推測される。歴代民政署長が同会会長を務めた。弓術倶楽部の師範は、もちろん西野だった<sup>484</sup>。

<sup>478</sup> 「満鉄運動会」『満日』1910年9月22日。

<sup>479</sup> 竹内黙庵『八面観 大連の二十年』184頁。

<sup>480</sup> 「運動会記事・弓術部」『撫順』1号、1912年11月18日。

<sup>481</sup> 「弓の話」『大連新聞』1921年10月23日。

<sup>482</sup> 五賀友継、李燦雨「大日本弓道会の成立・展開と組織形態」『体育学研究』63巻1号、2018年。

<sup>483</sup> 「弓術射初大会」『満日』1909年2月13日。

<sup>484</sup> 竹内黙庵『八面観 大連の二十年』184頁；「尚武会弓術部発会式挙行」『満日』1919年10月6

1921 年秋の時点で大連市内には 5 つの主要な道場があった<sup>485</sup>。いずれも月額 3 円ほどの会費が必要だった。満鉄運動会弓術部は北公園に道場を持ち、会員 150 名、師範は伊藤建夫だった。同年に満鉄社員に対して実施されたアンケートで、弓道は庭球、乗馬、野球について希望者の多い運動であった(9300 票のうち 1500 票)<sup>486</sup>。大日本弓道会大連支部は小沢太兵衛ら実業家の会員が多く、その総数は 50 ～ 60 名だった。師範は中井理介で、1922 年には敷島広場に新道場を建設した。同会は沙河口にも道場を有していた。1921 年に設立されたばかりの通信局弓術部は安達丈平を師範とし、部員は 100 名あまりいた。一方、西野を師範とする大連尚武会弓術倶楽部は衰勢に向かっていた。1922 年 12 月の記事によれば、財界不況と好適な師範者を得ないことに加えて、最近「しるしばんてん印絆纏」党、すなわち職人たちが多数入会したため秩序が維持しがたくなったことが原因だった。大日本武徳会満洲支部に助けを求めた結果、尚武会弓術倶楽部は武徳会満洲支部弓道部に改組され、武徳会から支給される毎年 600 円の補助金で運営された<sup>487</sup>。しかし、この金額では不足が生じるため、1923 年 6 月に弓道部研究会が組織され、その会費で不足分を補填した。師範は京都帝大弓道師範の笠原方正を招聘した<sup>488</sup>。

武道のなかでも弓道は広く女性の参加が見られる点が特徴である。1919 年 7 月、神明高女に弓道場が設置され、翌 1920 年には西野福吉が弓術部師範に迎えられた<sup>489</sup>。弓道は数少ない女性向けの冬のスポーツとしても重要であった。神明高女は 1923 年 8 月に満日主催で開かれた第 1 回全満洲弓道競技大会に参加、近的で 14 点を挙げ、7 位と健闘した。しかし遠的を棄権したため、総合順位は 14 位に終わった。この大会には、

---

日：「大連尚武会の弓術発会式」『満日』1919 年 10 月 13 日；「陸軍記念日祝賀会景況」『満日』1908 年 3 月 12 日。

<sup>485</sup>「弓の話」『大連新聞』1921 年 10 月 23 日。

<sup>486</sup>岡部生「社員の運動趣味」。

<sup>487</sup>「瀕死状態の尚武会」『満日』1922 年 12 月 10 日；「弓術倶楽部は武徳会で維持」『満日』1922 年 12 月 13 日。

<sup>488</sup>「人格向上」『満日』1923 年 5 月 2 日。加藤三吉は「市助役伊佐氏が京大名誉教授で笠原方正といふ漢英学者で弓道教士立派な人格者を迎へられて、青年連は非常に敬慕し熱心稽古したものである。然しその博学と懇切且難得人格を以てして、なほその期待に反したことは非常に気の毒であつた」と笠原について述べている（「昔はこれでも (23)」『満日』1936 年 8 月 7 日）。

<sup>489</sup>「大連神明高等女学校沿革史」満洲美会編『合歓の花』168-176 頁所収；「女子体育奨励の爲め大連高女に弓術部」『満日』1920 年 1 月 5 日；『満蒙年鑑』大正 12 年版、820 頁。

大連の各弓道団体のほか、鞍山、鉄嶺、撫順、瓦房店、旅順、奉天、普蘭店、大石橋、遼陽、旅順、営口の弓道団体が参加、満鉄本社が優勝した<sup>490</sup>。1925年8月の第2回大会には、神明高女の在校生と卒業生が参加した。参加22団体のうち、在校生は大日本弓道会と同率の18位、卒業生は22位と振るわなかった<sup>491</sup>。その前月に開かれた満鉄弓道大会には満鉄婦人協会と社員家族の女性10名が出場している<sup>492</sup>。

1926年夏、長春高女で弓術部が設置された。女生徒の胸部の發育を促すことが狙いで、全校生徒の3分の1にあたる約80名が参加し、放課後に練習に励んだ。長春高女では薙刀も導入しようとしたが、適当な指導者が得られず、断念したようである<sup>493</sup>。後述するように、外来チームとの対戦で、女性が男性に混じって満鉄軍や大連軍の代表として活躍したのは、弓道ならではの光景であった。女流弓道家への熱い眼差しは1931年夏に『満日』で連載された「女流弓道家」にも窺える<sup>494</sup>。また、神明高女卒業生の参加に見られるように、学校卒業後も続けられるという点で、弓道は陸上競技やバスケットボールのような女子スポーツと異なっていた。

1920年代後半の大連と旅順における代表的な弓道団体には満鉄、武徳会、通信倶楽部があり、学校関係では大連の神明高女、弥生高女、南満工専、奉天の満洲医大、旅順の工大、撫順小学校などに弓道部があった<sup>495</sup>。こう見ると、男子中学校の不在が際立つ。旅順中学には1932年度に弓術部が存在したことを確認できるが、翌年度にはなくなっている<sup>496</sup>。このほか、満鉄運動会の各支部にも弓道部が設けられていた。とりわけ、日本人が少ないために満鉄運動会支部が存在せず、娯楽や体育に乏しい松樹のような満鉄の中間駅にも弓術部が存在したことは留意されてよい<sup>497</sup>。

1925年春、大日本武徳会弓道教士石原七蔵が満鉄運動会弓道部教師として招聘され

<sup>490</sup>「近づく全満弓術大会へ、錦上花の女流選手」『満日』1923年8月3日；「弦声高鳴る日」『満日』1923年8月13日。

<sup>491</sup>「紅一点を交え明日に迫った全満弓道大会」『満日』1925年8月22日；「全満に亘る猛者を網羅し第二回全満弓道大会」『満日』1925年8月24日。

<sup>492</sup>「満鉄全線の弓道大会」『満日』1925年7月20日。

<sup>493</sup>「高女で弓術部開始」『満日』1926年7月13日。

<sup>494</sup>『満日』1931年7月10-17日に連載。

<sup>495</sup>このうち撫順小学校については、『満蒙年鑑』大正16年版、590頁に言及がある。

<sup>496</sup>『桜桂会誌同朋会報』二十五周年記念号、旅順中学校桜桂会、1934年7月、310頁。

<sup>497</sup>「松樹弓術部」『満日』1926年8月27日。

た。日置流竹林派家元本多利実の高弟のひとりである石原の来連を契機に、満洲の約 2000 名にのぼる弓道家の多くが日置流竹林派に鞍替えした<sup>498</sup>。内地と違って満洲には弓道の伝統も派閥もなかったので、指導者の影響が大きかったのだろう。石原は同年 7 月に日本最高段位となる七段に昇進、さらに 1927 年には弓道範士の称号を授けられている<sup>499</sup>。

1926 年 10 月、満鉄弓道部は武徳会の制度にならい、段級試験制度を制定した<sup>500</sup>。満洲には 1927 年時点で三段の段位者が 10 名いた。その後、この数字は増えていき、1928 年に三段 30 名、有段者 80 名、1929 年に四段 9 名、三段 30 名、有段者 120 名、1930 年に四段 16 名、三段以下の有段者 200 名となった。「数年来内地の学校団体等の強豪と交戦して未だ曾て 1 回も敗北した事がな」い満洲弓道界を『満蒙年鑑』は「内地の斯界に対して鬱然たる一敵国を為す観がある」と自画自賛した<sup>501</sup>。

次に外来チームとの対戦状況を見てみよう。1923 年 4 月には初の外来チーム、京城鉄道部を迎え、満鮮対抗の弓道競技会が大連で開かれた。第 2 回は 1924 年 4 月に京城で、第 3 回は 1925 年 6 月に大連で、第 4 回は 1926 年に京城で開かれ、いずれも満鉄側が勝利した。1928 年に安東で開かれた第 5 回戦は引き分けに終わる<sup>502</sup>。

1925 年 6 月に満鉄の招聘により来連した早大弓術部は内地からの最初の遠征チームだった。同部師範の浦上栄は日置流印西派の弓道家で、1927 年に大日本武徳会より範士の称号を授けられ、戦後に十段まで昇進する。熱戦が期待されたが、266 対 190 で満鉄の圧勝に終わった<sup>503</sup>。早大に続いて、1926 年に全九州、1927 年に日本弓道団、1928 年に関学高商部、1929 年に東京生弓会（現在、一般財団法人本多流生弓会）と、

<sup>498</sup>『満蒙年鑑』大正 15 年版、626-627 頁。『満蒙年鑑』昭和 3 年版、628 頁は「斯道に親しむ者全満に約 1 千余」と記す。

<sup>499</sup>「満鉄弓道大会」『満日』1925 年 7 月 19 日；「石原師範弓道範士に列せらる」『満日』1927 年 6 月 3 日。

<sup>500</sup>『満蒙年鑑』昭和 3 年版、628 頁。

<sup>501</sup>『満蒙年鑑』昭和 4 年版、487 頁；『満蒙年鑑』昭和 5 年版、503 頁；『満蒙年鑑』昭和 6 年版、553 頁。

<sup>502</sup>「鮮満選手弓術試合」『満日』1924 年 4 月 12 日；「鮮鉄弓術部、満鉄軍と試合」『満日』1925 年 6 月 21 日；「両軍必死の戦ひ、三度満鉄軍勝つ」『満日』1925 年 6 月 29 日；『満蒙年鑑』昭和 3 年版、628 頁；「満鮮対抗弓術大会」『満日』1928 年 8 月 23 日。

<sup>503</sup>「弓術競技」『満日』1925 年 6 月 15 日。

毎年のように遠征チームが満洲を訪れては、満鉄によって撃破された。このうち満鉄対全九州は125対113、東京生弓会は90対80と接戦だったが、日本弓道団、関学高商部には大勝している<sup>504</sup>。全九州戦では満鉄チームに上利末子が出場、日本弓道団戦では大連連合軍チームに石井浄恵、文子姉妹が出場した。後者の試合は127対129で大連連合軍の惜敗に終わったが、石井文子は大連軍で2番目の好成績を挙げ健闘した<sup>505</sup>。ちなみに日本弓道団を率いた大平射仏こと大平善蔵は、石原七蔵、阿波研造と並んで本多利実門下の「三ゾウ」と称される実力者だった<sup>506</sup>。

外来チームに対し無敗を誇る満鉄軍は1928年4月に内地遠征を敢行した。全関東に敗れ、福岡と引き分けたものの、早大、生弓会、全京城に勝って帰連した<sup>507</sup>。1929年の生弓会の満洲遠征は、生弓会にとって前年の復讐戦だったが、目的を果たすことができなかった。生弓会は本多の弟子が組織した団体で、本多流二世宗家の本多利実が遠征軍を率いた<sup>508</sup>。

1931年は満洲弓道界にとって多事の1年となった。春には石原範士の引退問題が持ち上がった。同年11月、石原は満洲を去り、故郷福岡に帰って道場を開くことになる<sup>509</sup>。ポスト石原時代を見越してだろうか、大連では弓道のさらなる普及発達を図るため、通信局、満鉄本社、武徳会、沙河口の4道場が関東州弓道リーグ戦を組織、通信俱樂部が第1回夏のリーグ戦を制した<sup>510</sup>。前述の「女流弓道家」が連載されたのもこのころである。

満洲の弓道は長い歴史を持つだけでなく、内地を凌駕する実力を持ち、ラグビーやバスケットボールなどの新興スポーツに比べて遥かに普及していた。女性の参加が顕著であることも目を引く。しかしながら、新聞での扱いは概して小さく、剣道や柔道

<sup>504</sup>『満蒙年鑑』大正16年版、590頁；『満蒙年鑑』昭和3年版、628頁；『満蒙年鑑』昭和4年版、487頁；『満蒙年鑑』昭和5年版、503頁。

<sup>505</sup>「弓道大試合、満鉄軍勝つ」『大連新聞』1926年8月30日；「見事な技倆を魅せた紅二点」『満日』1927年6月7日。

<sup>506</sup><http://hondaryu.net/members/enkaku>

<sup>507</sup>『満蒙年鑑』昭和4年版、487頁。

<sup>508</sup>「東京生弓会、満鉄の招聘で」『大連新聞』1929年8月14日。

<sup>509</sup>「最近紛糾続きの満鉄運動会を改造」『満日』1931年4月8日；小野崎紀男編『弓道人名大辞典』日本図書センター、2003年、49頁。

<sup>510</sup>「弓道リーグ戦」『満日』1931年4月29日；「優勝した通信クラブ」『満日』1931年7月27日。

と比べても地味な存在だったことは否めない。

## 第 37 話 射撃

内地と同様、満洲でも軍隊、警察、在郷軍人会で射撃は主たる活動のひとつだった。一方、民間人として最も際立つのは満鉄運動会射撃部の活動である。同射撃部は 1911 年に設立された<sup>511</sup>。1914 年には社員以外の一般市民(市中)からも会員を募ることとなり、1915 年から毎年夏に競技会、秋に競猟会を開催した<sup>512</sup>。1916 年秋時点で会員数は 56 名であった<sup>513</sup>。1920 年 8 月、ちょうど 10 回目となる射撃大会のさい、満鉄運動会射撃部から市中の部員が分離して大連猟友会を設立することが決まった。創立総会は 10 月に開かれ、関東軍司令官立花小一郎大将が会長を務めることになった。この時点で会員は 70 名であった<sup>514</sup>。かたや満鉄射撃部は 8 月で廃止となった<sup>515</sup>。もともと満鉄社員は少なかったのだろう。

1921 年春、西公園に射的場を設置し、一般市民に射撃の普及を図るべく大連小銃射的協会が組織されたが、おりからの不況もあって、11 月になっても 1 万 2000 円の経費のうち 3000 円しか集めることができなかった<sup>516</sup>。

1923 年に入ってもなく、大連市民射撃会が結成され、4 月に発会式が挙行された。会員数は 700 名に達した。名誉総裁には川村竹治満鉄総裁、会長には村井啓太郎大連市長、副会長には同会の生みの親ともいえる満鉄人事課の浜田幸太郎が就任した。会費は年額 4 円、もしくは月額 40 銭であった<sup>517</sup>。軍縮たけなわのこの時期に大規模な射

<sup>511</sup>「満鉄射撃部発会式」『満日』1932 年 3 月 20 日。

<sup>512</sup>「満鉄射撃部拡張」『満日』1914 年 12 月 11 日；「射撃競技大会」『満日』1915 年 8 月 4 日；「満鉄の競猟会」『満日』1915 年 12 月 10 日。競猟会は 1916 年以降は 10 月に開かれた。

<sup>513</sup>「第二回競猟会」『満日』1916 年 10 月 8 日。

<sup>514</sup>「大連競射会」『満日』1920 年 8 月 11 日。

<sup>515</sup>「猟友会組織されん」『大連新聞』1920 年 8 月 23 日；「猟友会創立総会と各役員決定」『大連新聞』1920 年 10 月 20 日。

<sup>516</sup>「小銃智識普及の会」『満日』1921 年 11 月 4 日。

<sup>517</sup>「武徳涵養を標榜して大連市民射撃会生る」『満日』1923 年 1 月 10 日；「大連市民射撃会生る」『大連新聞』1923 年 2 月 17 日；「市民射撃会発会式」『満日』1923 年 3 月 18 日；「盛会を極めた市民射撃発会」『満日』1923 年 4 月 4 日。

撃会が誕生したのは理由がある。1922年夏、いわゆる山梨軍縮にともない満洲の独立守備隊の一部撤退が発表されると、満洲では撤退反対運動が起きた<sup>518</sup>。しかし、運動のいかなく、翌年春に二個独立守備隊の撤退が実施された（守備隊の完全撤廃が撤回されるのは1925年春）。射撃会の設立は、自らを守ろうとする市民の意志の現れであった。

大連市民射撃会は毎年数回～十数回拳銃射撃大会と小銃射撃大会を開催した。1924年2月に開催された拳銃射撃大会には女性数名を含む200名が参加し、初心者には憲兵から拳銃の扱いについて懇切な指導を受けた<sup>519</sup>。1925年9月の中等学校への軍事教練導入を間近に控えた7月の市民射撃大会には大連一中生徒50名が参加、伏見台小学校の生徒も見学に訪れた<sup>520</sup>。学生の参加増にともない、1927年7月の小銃射撃大会は一般の部と学生の部に分けられた<sup>521</sup>。1928年春時点における大連市民射撃会の会員内訳は、一般市民117名、警察官81名、学生9名、婦人9名であった<sup>522</sup>。自発的に射撃をしようという学生はまだ少なかったようである。

射撃団体設立の動きは沿線各地にも波及した。1923年には鉄嶺射撃会、翌年には長春獵友会、奉天市民射撃会が設立され、各地の軍隊、警察、在郷軍人会、青年団も市民の参加を募って射撃大会を開催するようになる<sup>523</sup>。たとえば撫順では警務署が拳銃射撃大会を開催した。この大会は、馬賊と強盗で有名な撫順には護身用として拳銃を所有する者が171名いるが、練習の機会もないということで開かれた<sup>524</sup>。

1926年4月、帝国海軍練習艦隊の一員として来連した伏見宮博義王は関東州内で狩猟を楽しんだあと、大連市民射撃会と大連獵友会に金一封を下賜した<sup>525</sup>。両会はそのお金で優勝カップを作成、8月に大連獵友会が全満クレ射撃大会を、10月に大連市民

<sup>518</sup>「撤退反対連合運動起る」『満日』1922年8月13日など。

<sup>519</sup>「射撃大会」『大連新聞』1924年2月11日。

<sup>520</sup>「折柄の曇天にて絶好の射撃日和」『満日』1925年7月6日。

<sup>521</sup>「市民小銃射撃大会」『満日』1927年7月20日。

<sup>522</sup>「市民射撃会今年の予定決る」『満日』1928年2月26日。

<sup>523</sup>「射撃会組織」『大連新聞』1923年7月25日；「長春獵友会」『大連新聞』1924年8月23日；「奉天市民射撃会」『大連新聞』1924年9月27日。

<sup>524</sup>「拳銃射撃会」『満日』1925年5月30日。

<sup>525</sup>「伏見宮殿下射撃会と獵友会に金一封を御下賜遊ばさる」『満日』1926年4月24日。

射撃会が全満射撃大会をそれぞれ開催した。前者には 45 名、後者には 57 団体、300 名余りが参加した<sup>526</sup>。これ以後、両大会は満洲で最も権威のある射撃大会となる。

1931 年春に実施された満鉄運動調査の結果をもとに、同年 9 月、満鉄運動会に相撲、軟式野球、体操、遠足、射撃部を増設することが決定された<sup>527</sup>。調査で多かったのは「狩猟」であるが、射撃部として設立されることになったのは、当時の緊迫した情勢と無関係ではないだろう。その直後に勃発した満洲事変は、射撃部設立の必要性をいっそう高めた。1932 年 3 月、ついに満鉄運動会射撃部の復活を見た<sup>528</sup>。各学校でも射撃部が次々と設立されることになる<sup>529</sup>。

ところで、同じく軍事と関わりの深い馬術と比べて、射撃への女性の参加は顕著であった。というのも、射撃は「主人の留守中強盗にでも襲われた時の事を考へたとき大に必要」と考えられたからである<sup>530</sup>。実際、「馬賊」の襲撃事件はたびたび新聞で報じられているので、女性に射撃の技術が必要と考えられたのも当然である。満鉄運動会射撃部にも婦人社員が参加したし、大連市民射撃会は女学生班の設置を決定している<sup>531</sup>。1933 年 4 月には満日婦人部が第 1 回大連婦人射撃大会を開催、一般の部に 48 名、女学生の部に 124 名が参加した<sup>532</sup>。日本で最初の女性だけの射撃大会かもしれない。

## 第 38 話 満鉄と満鉄運動会

### (1) 満鉄と満洲

#### [1] 教化慰藉事業

満鉄、すなわち南満洲鉄道株式会社は、日露戦争の結果ロシアから得た東清鉄道の

<sup>526</sup>「伏見宮御紋章入りの優勝盃を得た」『満日』1926 年 8 月 9 日；「けふ開かる、全満射撃大会」『満日』1926 年 10 月 17 日；盛況を極めた春日池畔の全満洲射撃大会」『満日』1926 年 10 月 18 日。

<sup>527</sup>「満鉄運動会に五部を増設」『満日』1931 年 9 月 15 日。運動調査については第 38 話を参照。

<sup>528</sup>「満鉄射撃部発会式」『満日』1932 年 3 月 20 日。

<sup>529</sup>たとえば、旅順中学では 1933 年度に射撃部が創設されている（「本校射撃部創設を祝して」『桜桂会誌同朋会報』二十五周年記念号、旅順中学校桜桂会、1934 年 7 月、307-308 頁所収）。

<sup>530</sup>「撫順全市民の拳銃射撃大会」『大連新聞』1931 年 6 月 5 日。

<sup>531</sup>「市民射撃会で女学生班新設」『満日』1932 年 2 月 27 日。

<sup>532</sup>「素晴らしい『当り』軍国女性纖手の武装」『満日』1933 年 4 月 28 日。

一部をもとにして、1906年に設立された国策会社である。当初の資本金は2億円、年間総収入1250万円、社員は1万3000人だった。当時の日本の国家予算が5億円、資本金1億円をこえる会社はなかったから<sup>533</sup>、満鉄がいかに巨大な企業だったかがわかる。1920年度には資本金が4億4000万円、年間総収入1億7473万円、社員3万7000人に達し、1920年代を通じてほぼこの水準を維持した。

満鉄は早くからスポーツに取り組んだ。この点は企業スポーツ史研究でも注目されてきたが、その代表的著作といえる澤野雅彦『企業スポーツの栄光と挫折』（青弓社、2005年）ですら、『満洲倶楽部野球史』から満洲倶楽部の活動を紹介するにとどまっている。後述するように、野球は満鉄のスポーツ活動のごく一部にすぎず、その全容はほとんど明らかになっていない。歴大な満鉄研究もこれまでスポーツに焦点を当てることはなかった。もちろん、スポーツは満鉄が展開した広範な事業のごく一部を占めるにすぎない。しかしながら、スポーツがその一部を構成する「教化慰藉事業」は、とりわけ個々の社員にとって、ひいては満鉄という会社にとって、はたまた在満日本人社会にとって、けっして無視できない意味を持っていた。過大な評価かもしれないが、「教化慰藉事業」は、個々の社員が、満鉄という会社が、在満日本人の社会が、中国大陸に存在しつづけるための重要な鍵のひとつであった<sup>534</sup>。またそれは、中国という外国で、大量の日本人を雇用し、大規模な事業を営まねばならなかった満鉄の宿命でもあった。したがって、満鉄のスポーツ事業を明らかにすることで、企業とスポーツの関係という今日的課題の歴史的淵源に迫ることができるだけでなく、満鉄や在満日本人社会に対する理解を深めることができるだろう<sup>535</sup>。

本論に入るまえに、「教化慰藉事業」について確認しておかねばならない。この言葉は『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』でスポーツなどの事業を概括する名称として用いられている。「教化慰藉事業」は第10章「社員の福祉増進施設」に挙げられる5

<sup>533</sup> 北岡伸一『後藤新平：外交とヴィジョン』中央公論新社、1988年、89頁。

<sup>534</sup> 南満洲鉄道株式会社総裁室能率班編『満鉄庶務事情』（満鉄社員会、1941年、159頁）は満鉄初代総裁後藤新平が厚生事業に関心を払ったことについて、「社員永住の基礎たる家庭の充実と情操の涵養に重点を置いたことは誠に明瞭と謂はねばならぬ」と高く評価している。

<sup>535</sup> 1920年代以前の在満日本人社会に関する数少ない研究として、塚瀬進『満洲の日本人』吉川弘文館、2004年を挙げておく。

つの項目のひとつであり、他の4つは社員共済制度、社員貯金身元保証金及受取延期金、満鉄社員会、満鉄社員消費組合となっている。「教化慰藉事業」として具体的に挙げられるのは、講演講習会、満鉄読書会、社員倶楽部、満鉄婦人協会、人事相談、家庭研究所、児童保護、趣味の養成、慰安車其他、運動施設となっている。満鉄の福利厚生事業の一環として「教化慰藉事業」があり、さらにその一環としてスポーツに関する事業があったとまとめることができる<sup>536</sup>。澤野は企業スポーツを、福利厚生型、教化訓練型、広告宣伝型に分類したが<sup>537</sup>、満鉄のそれは福利厚生型であったといえる。

満鉄のスポーツ事業は、その対象によって、社員スポーツ、学校スポーツ、一般スポーツに分けられる<sup>538</sup>。学校スポーツは、満鉄が満鉄附属地で運営する学校を対象とする。一般スポーツは本来満鉄が会社として関与すべきものではないが、満洲では満鉄という一会社のスポーツと一般のスポーツの境界はそれほど明確ではなかった。人口についていえば、満鉄社員とその家族は、1920年代の在満日本人の約4割を占めていた<sup>539</sup>。満鉄が主催する各種運動会、競技会には非満鉄社員も数多く参加した。また、満鉄が整備したスポーツ施設は広く一般に開放されていた。したがって、満鉄スポーツの全容をみるには、学校スポーツや一般スポーツにも目を向ける必要があるが、両者についてはこの史話の至る所で触れているため、ここで繰り返すことはしない。本話では社員スポーツに限定して話を進めていきたい。

<sup>536</sup> 南満洲鉄道株式会社庶務部調査課編『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』164-178頁。

<sup>537</sup> 澤野雅彦『企業スポーツの栄光と挫折』青弓社、2005年、45-47頁。

<sup>538</sup> 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』下巻、龍溪書舎、1977年（1939年刊の複製）、658-741頁は「社員体育」「学校体育」「一般体育」と分類する。

<sup>539</sup> たとえば、1928年の在満日本人人口約20万人に対して、満鉄社員は21248人、その家族は51471人を占めた。日本人（内地人）人口は、関東庁編『関東庁統計要覧』昭和3年、22-23頁、満鉄社員数は、南満洲鉄道株式会社庶務部調査課編『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』135-136頁、および南満洲鉄道株式会社編『南満洲鉄道株式会社第三次十年史』南満洲鉄道、1938年、108-110頁を参照。社員2万人に対して家族が6万人という調査結果は、大連在勤満鉄日本人社員の世帯数に関する調査（南満洲鉄道株式会社庶務部社会課編『大連在勤満鉄日本人社員生計費調査 自大正十三年十月至翌十四年三月』南満洲鉄道株式会社、1926年、21頁）、満鉄附属地の社員と家族に関する統計（南満洲鉄道株式会社地方部庶務課編『地方経営統計年報』昭和三年度、28-33頁）ともおおむね一致する。

## [2] 満鉄社員と健康

そもそも満鉄社員とはどういう人々だったのか。社員は職員、雇員、傭員（時期によって分類や呼称が異なる）に分けられ、職員は高等専門学校卒業以上、雇員は中等学校卒業程度、傭員は高等小学校卒業もしくはそれと同等の学力を持つものとされた。1926年度（当時雇員はいなかった）には職員が8689人、傭員が26479人、嘱託が229人いた。うち中国人は職員188人、傭員14596人、嘱託22人で、中国人が社員の41.8%を占めた<sup>540</sup>。女性社員は1933年で1075人（うち既婚者が約100人）であった<sup>541</sup>。

社員スポーツの主力は日本人男性職員であった。1927年に日本人社員約2万人を対象になされた調査では、平均年齢は33-34歳、26歳から34歳の中堅社員の月収は100-200円で、社員の約20%にあたる4000人が独身であった<sup>542</sup>。1926年の調査では26-30歳の社員が最も多く21.6%、31-35歳の社員がこれに次いだ<sup>543</sup>。1924年の独身者に対する別の調査では、3701人のうち独身社宅に入居するものが2522人、そのうち小学校卒が1229人（48.7%）、中学校卒が941人（37.3%）、大学専門学校卒が352人（14.0%）、年齢は20歳以下が330人、20-25歳が1290人、26-30歳が703人、30歳以上が199人だった<sup>544</sup>。学歴に関するデータは、このほか1935-37年分が利用できるが、1935年の場合、大卒9.9%、中卒41.7%、小卒48.3%だった<sup>545</sup>。後述するように、男性職員は満鉄運動会に全員加入が義務づけられており、社員スポーツの中心となっていたが、その数は日本人社員の42.2%、全社員の24.5%にすぎなかった。職員の多くは日勤で午後4時には退社することができた。平日の稽古や練習、あるいは試合の開始時間を午後4時とするのが多かったのはこのためである<sup>546</sup>。彼らは傭員にくらべて給料にも時間にも

<sup>540</sup> 南満洲鉄道株式会社庶務部調査課編『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』137-138頁；天野博之『満鉄を知るための十二章：歴史と組織・活動』吉川弘文館、2009年、179-180頁。

<sup>541</sup> 天野博之『満鉄を知るための十二章』160-161頁。

<sup>542</sup> 「三十三、四歳平均で半数以上が九州人」『満日』1928年2月22日。

<sup>543</sup> 林采成『東アジアのなかの満鉄：鉄道帝国のフロンティア』名古屋大学出版会、2021年、157-158頁。

<sup>544</sup> 「満鉄在勤独身者調べ」『大連新聞』1924年2月27日。

<sup>545</sup> 林采成『東アジアのなかの満鉄』162頁。

<sup>546</sup> たとえば満鉄大連道場の稽古時間は午後4-6時だった（「満鉄大連道場」『大連新聞』1922年4月16日）。奉天の満鉄社員は満鉄運動会に向けて毎日午後4時から猛練習をした（「満鉄運動会各選手猛練習」『満日』1926年9月7日）。勤務形態について、満鉄の状況はわからないが、

余裕があった。とくに若い独身男性職員は、ほかに娯楽も少なく、スポーツに打ち込む環境が整っていたといえる。

一方で、彼らは満鉄社員のなかでもっとも健康に問題がある人々だった。満鉄社員の死亡原因の第一は伝染病で、なかでも結核が多かった。満鉄社員の結核罹患率（1000人当たり罹病数）は1926-31年の平均で59.4だったが、これは日本国鉄の10.3、日本内地の19.1、在満日本人の20.6のいずれよりもはるかに高い数値だった。とりわけ独身者の罹患率が高かったが、それは彼らが独身宿舎で不節制、不規律な生活を送り、冬季には狭い閉鎖空間での蟄居を強いられたためとされる<sup>547</sup>。

逆に、屋外労働に従事することの多い中国人社員は、毎日新鮮な空気を吸い、肉体が鍛えられたために、罹患率、廃疾率、死亡率が低かった。労働条件の悪い中国人社員のほうが「安楽」な労働環境で働いていた日本人社員よりも健康であるという状況を、林采成は「植民地雇用構造という「文明」が来したアイロニー」と呼んでいる<sup>548</sup>。

したがって、衛生事業や「教化慰藉事業」に力を注がねばならなかったのは、中国人の低廉で豊富な労働力が利用可能であるにもかかわらず、日本人中心主義<sup>549</sup>を貫いた満鉄の宿命であったといえる。

## (2) 1910年代以前

### [1] 満鉄慰藉係

1907年4月の営業開始と時を同じくして、満鉄は主要都市で病院を運営し公医を配置した。初代満鉄総裁後藤新平は医師でもあり、また内務省衛生局や台湾民政長官を歴任するなかで、衛生事業の重要性を強く認識していた。北岡伸一は後藤による衛生事業を現地人に対する恩恵、あるいは満洲の文明化という文脈でとらえたが<sup>550</sup>、それはまずもって満鉄社員のための施設であり、ついで在満日本人のための施設であった<sup>551</sup>。

---

日本の国鉄の場合、1929年時点で日勤44.1%、一昼夜交代19.4%、乗務16.0%、循環交代8.5%などとなっていた（林采成『東アジアのなかの満鉄』36頁）。

<sup>547</sup> 林采成『鉄道員と身体：帝国の労働衛生』京都大学学術出版会、2019年、287頁。

<sup>548</sup> 林采成『鉄道員と身体』288、310-311頁。

<sup>549</sup> 林采成『東アジアのなかの満鉄』145-204頁。

<sup>550</sup> 北岡伸一『後藤新平』96-101頁。

<sup>551</sup> 林采成『鉄道員と身体』292頁。

1907 年 4 月、東京で万国学生基督教青年会大会が開かれた。大会に参加した後藤総裁は世界文明に対する日本の使命、その完遂に満鉄の果たすべき役割を語り、来会者に「道徳的援助」を求めた。来会者のひとりで鉄道 YMCA 創立にも関わったモーズ (Richard Cary Morse) は、大会終了後に大塚素、ヒバードとともに満洲にやって来た。モーズは、後藤総裁に鉄道 YMCA が「鉄道従事員ノ品性ヲ高潔ニシテ其能率ヲ増加スルニ尽力」したこと、「上下ノ意思疎通ノ一助トシテ満鉄従事員ニ精神的慰安ヲ与ヘ生活ノ向上改善ヲ計ル為メ青年会事業ヲ施設」するよう促したが、このときは実現に至らなかった<sup>552</sup>。

1909 年 11 月、満鉄総裁中村是公は、満鉄沿線および中間駅の在勤者とその家族を慰藉し、あわせて上意下達、下情上通の機関となすべく、満鉄庶務課に慰藉係を設置し、大塚素をその主任に迎えた<sup>553</sup>。大塚のもとで慰藉係は編み物の奨励、草花や野菜の種子配布、園芸講習会の開催、書籍の貸与、医薬品の配布、講演、演劇、音楽の巡回、結婚の仲介、家庭相談、慶弔の世話に至るまで、「広汎且ツ多種多様」な事業を展開した。満鉄は会社を「大なる一家族と見做して慰問部〔慰藉係〕は其後見役相談役」を任じたのである<sup>554</sup>。大塚がバスケットボール普及のため、大連 YMCA のアメリカ人青年と沿線を回ったことは第 30 話でも触れた。満鉄の慰藉事業に対しては、「要は人物の問題にて宗教臭を帯べるも亦悪感を与ふる所以……主観的に顔色青き青年が道学先生的態度を以てする故好感情を買ひ得ざるや必せり」という批判もあったが<sup>555</sup>、慣れない気候風土に暮らす社員に対する不可欠の事業として継続された。

大塚は 1917 年夏から約半年間、アメリカに出張した。フォード自動車会社を視察した大塚は、近年アメリカで Social welfare、Social betterment、Social service と称される社会事業が発達しているとして、次のように述べる。

古来東洋ニテ「人ニ在テ法ニアラズ」ト言ヒ古セシ文句ヲ、米国ニテハ今更ノ如

<sup>552</sup> 南満洲鉄道株式会社編『南満洲鉄道株式会社十年史』南満洲鉄道、1919 年、144-145 頁。後藤は 1907 年 5 月に総裁就任後はじめて大連を訪れていた。

<sup>553</sup> 南満洲鉄道株式会社編『南満洲鉄道株式会社十年史』145 頁；室田保夫「大塚素小論：その生涯と思想」『キリスト教社会問題研究』40 号、1992 年 3 月。

<sup>554</sup> 南満洲鉄道株式会社編『南満洲鉄道株式会社十年史』145-146 頁；「満鉄の慰問部」『満日』1912 年 11 月 13 日。

<sup>555</sup> 「満鉄の慰問部」『満日』1914 年 5 月 22 日。

ク之ヲ強調シ、真誠ナル事業成功ノ根基ハ全ク人ニ在リトナシ、人ノ待遇、人ノ健康、人ノ訓練、陶冶等ニ深甚ノ注意ヲ払フ<sup>556</sup>。

企業にとって最も重要なのは「能率」であった。そのために企業は科学的な経営管理法を現場に導入するだけでなく、社員の労働外の時間をも管理しようとした。それを徹底的に実行していたのがフォード社であった。社員の待遇改善、生活向上は、結局のところ企業の能率増進の手段であった<sup>557</sup>。後藤総裁に青年会事業の導入を促したモーズの言葉を思い出してもらいたい。社員の品性と能率には相関関係があると考えられていたのだ。もちろん、YMCA にとって福音こそが重要であり、能率は会社に自らのプログラムを採用させる大義名分だったかもしれないが、いずれにせよ両者は福利厚生導入で一致することになる。そして、大塚素は満鉄と大連 YMCA を繋ぐ役割を果たしたのである<sup>558</sup>。

1918 年 2 月現在の『社員録』を見ると、大塚は理事長室人事課に配属されており、慰藉事業も人事課の担当となったようである<sup>559</sup>。1920 年に大塚が亡くなると、鞍山製鉄所工場係主任の大沢慎一が慰藉係主任となった<sup>560</sup>。

能率のその後に触れておこう。満鉄では 1925 年に社長室に能率係が設置される。その係長にスポーツマン貝瀬謹吾が就任したのはたんなる偶然ではないだろう。能率係は 1930 年 6 月に計画部能率課に昇格し、満鉄の経営を支えることになる<sup>561</sup>。

<sup>556</sup>「フォード自動車会社（デトロイト市）職工待遇梗概」（南満洲鉄道株式会社総務部調査課編『調査資料』7 輯、南満洲鉄道株式会社総務部調査課、1919 年）。

<sup>557</sup>新倉貴仁『「能率」の共同体：近代日本のミドルクラスとナショナリズム』岩波書店、2017 年は、「能率への配慮」の先駆者として大塚を取り上げる。ただし、宗教的側面は捨象されている。機械化にともなう労働者の非人間化とレクリエーション、YMCA、スポーツの関係については、新雅史『「東洋の魔女」論』イースト・プレス、2013 年、32-54 頁を参照。

<sup>558</sup>中村は公、国沢新兵衛、大塚信太郎ら当時の満鉄重役の多くが大連 YMCA に関わっていた。大塚は 1918 年 5 月から 7 月まで鉄道員囑託として日本全国の鉄道を視察してまわり、7 月 19 日に鉄道院総裁官邸でその報告を行う（「思ふがまゝ」大塚素遺稿編纂委員編『大塚素遺稿』大塚素遺稿編纂委員、1923 年、85-164 頁所収）。大塚の経験は日本の鉄道にも影響を与えたことになる。ちなみに当時の鉄道院総裁は中村是公だった。

<sup>559</sup>「社員録（一九一八）」芳賀登ほか編『日本人物情報大系⑩』皓星社、1999 年所収。

<sup>560</sup>満洲日報社編『満蒙日本人紳士録：附満蒙銀行会社要覧』満洲日報社、1929 年；「体育奨励に運動票」『大連新聞』1921 年 3 月 26 日。

<sup>561</sup>天野博之『満鉄を知るための十二章』236-245 頁。

## [2] 満鉄運動会

満鉄の前身である野戦鉄道のころからすでに社員による自発的なスポーツ活動が始まっていた。その中心人物のひとりが野戦鉄道提理部技術部運輸班車輛長として日露戦争に従軍した貝瀬謹吾であった。1905年6月、貝瀬は技術部建築班軌道長の谷直諒らと野戦鉄道庭球倶楽部を、翌年9月にやはり谷らと野戦鉄道柔道会を設立した。1906年11月に満鉄が誕生すると、前者は満鉄庭球倶楽部、後者は満鉄柔道会となった。さらに、1908年1月に大連スケーティング倶楽部、同年8月に水泳倶楽部、1909年4月に大連野球団、同年9月に大連端艇倶楽部と、満鉄社員が組織するスポーツ団体が次々と誕生した。また1909年7月には、満鉄社内風教刷新のために柔剣道を奨励する方針が立てられ、柔道が見習夜学校の正課に採用されたほか、剣道も道場が完成次第、教授されることが決まった。まもなく満鉄の新道場が竣工し、柔道の山下義韶、剣道の高野佐三郎を招いて第1回満洲柔剣道大会が盛大に開かれた（第9、14、17、29、35話参照）。

満鉄運動会は1910年9月21日に「職員の体軀を健全にし精神を修養せしめ以て風教を刷新し併せて社務の振興を謀る」ことを目的に設立された。会長に中村是公総裁、副会長に国沢新兵衛副総裁、委員長に久保田勝美理事、委員に堀三之助（工務課長）、安田錐蔵（会計課長）、川村鉦治郎（調査課長）、朝倉伝次郎（鉱業課長）、田沼義三郎（作業所長）が就任した。日本人の職員、練習生、見習は全員が会員となり、職員外の社員（雇員、傭員）も委員長の承認があれば会員となれた<sup>562</sup>。職員には満鉄運動会への加入と会費の納入が課されたが、活動は自発的であった。

満鉄運動会の設立は、企業スポーツの歴史から見ても群を抜いて早く、かつ大規模である。その形態から見て、学校の校友会に近い。当時の満鉄の重役はみな若く、総裁の中村は42歳、理事の犬塚などは35歳の若さで、率先してスポーツに取り組んだ。創業期の重役と社員の関係について築島信司（1911年入社）は、重役には若い人が多く、社員との関係は密接だったと述べている。また全体の雰囲気として「自由の気風」にあふれており、「現場の一社員でもほんとうに会社の大事業に参画して」いる気持ちに

<sup>562</sup>「満鉄運動会」『満日』1910年9月22日。

なれたとも述べている<sup>563</sup>。

満鉄運動会には漕艇部、陸上競技部、柔道部、剣道部、弓術部、野球部、庭球部、地方部の8部が設けられた。これらの多くは前身の組織を吸収して成立したもので、すでに競技会開催などの実績を有していた。各部は満鉄運動会から補助金を支給されたほか、会費とは別に部員から部費を徴収し、独自に活動を展開した。のちには射撃部(1911年)、水泳部(1913年)、スケーティング部(1915年)が加わる(第9、14、37話参照)。

満鉄運動会の最初の事業は1910年10月9日に開催した「満鉄運動会」だった。大連の満鉄社員全員とその家族に加え、社外の人々も参加した。「満鉄運動会」(以下、イベントを指す場合「」を付す)は、満鉄運動会最大の事業となり、大連に春を告げる年中行事として定着する<sup>564</sup>。

1910年9月に満鉄運動会が設立された時、地方部(支部)はまだ設立されておらず、地方部規則を作成し、10月25日までに満鉄庶務課に送付することが各地方に求められていた。会員の少ない地方は満鉄運動会を組織するのではなく、遠足などの企画を実施することとされた<sup>565</sup>。すでに遼陽では満鉄連合運動会が開かれていたし、撫順では満鉄運動会に相当する組織が存在した。詳しい状況がわかる撫順について見ておこう。

撫順では野戦鉄道提理部第一採炭班に職員倶楽部が設けられ、1906年11月3日に弓術部が競射大会を開いている。野戦鉄道提理部の廃止(1907年4月)にともない、職員倶楽部は撫順炭坑職員倶楽部に改まった。その規程によれば、同倶楽部の目的は「会員相互ノ智識ヲ交換シ不幸ヲ救済シ体育ヲ奨励シ親睦ヲ敦シ並ニ娯楽ヲ享有スル」ことにあった。会長は撫順炭坑長で、炭坑職員は全員加入の義務があり、会費は月収の額によって3円50銭(月収800円以上)から20銭(月収30円以下)と定められた。職員倶楽部には読書会、運動会が附設されていたが<sup>566</sup>、後者が満鉄運動会撫順支部に改められ、1911年5月に発会式と第1回運動会を開催した<sup>567</sup>。満鉄運動会撫順支部規則に

<sup>563</sup> 塚瀬進『満洲の日本人』25頁。

<sup>564</sup> 「満鉄の運動会」『満日』1910年10月10日。

<sup>565</sup> 「満鉄運動会地方部」『満日』1910年10月16日。

<sup>566</sup> 「撫順炭坑職員倶楽部規程」『撫順』1号、1912年11月18日。

<sup>567</sup> 「満鉄運動会」『満日』1911年4月11日；「運動部発会式」『満日』1911年5月6日；「撫順の

よれば、会員は職員（「男子ニ限ル」とある）と支部長が承認した者で、競走部、柔道部、剣道部、球技部、弓術部が設置され、会費は1カ月20銭であった<sup>568</sup>。

撫順以外では、5月7日に長春、5月14日に大石橋、7月16日に公主嶺で満鉄運動会支部が発足したことが確認できる<sup>569</sup>。この年、満鉄運動会の主要事業である「満鉄運動会」が開催されたのは、撫順のほか、安東、長春、遼陽、瓦房店、大石橋、鉄嶺、公主嶺の各地で<sup>570</sup>、翌1912年には奉天、本溪湖、営口<sup>571</sup>、1913年には大連の沙河口、四平街でも「満鉄運動会」が開催されたことが確認できる<sup>572</sup>。その後、鞍山（1919年）、大連（1925年）、開原（1925年）にも支部が設立され<sup>573</sup>、1931年までに15地方に16支部が成立する<sup>574</sup>。

初期の満鉄運動会の財政に関するデータはあまり残されていない。後述するように、1920年に満鉄運動会の予算が3万円に増額され、活動が大幅に強化されたとするなら、

大運動会』『満日』1911年5月6日。

<sup>568</sup>「満鉄運動会撫順支部規則」『撫順』1号、1912年11月18日。

<sup>569</sup>（長春）「長春の運動会」『満日』1911年5月11日；（大石橋）「大運動会」『満日』1911年5月12日；（公主嶺）「公主嶺柔剣道大会」『満日』1911年7月22日。

<sup>570</sup>（安東）「満鉄大運動会」『満日』1911年5月6日；（長春）「長春の運動会」『満日』1911年5月11日；（遼陽）「遼陽の運動会」1911年5月11日；（瓦房店）「満鉄運動会」『満日』1911年5月18日；（大石橋）「運動会」『満日』1911年5月18日；（鉄嶺）「大運動会余聞」『満日』1911年5月18日；（公主嶺）「公主嶺柔剣道大会」『満日』1911年5月22日。南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附屬地経営沿革全史』下巻、791頁は満鉄運動会安東支部が1915年12月に設けられたとするが、たとえば安東県の遠足を伝えた1912年の記事には「満鉄運動会支部」と書かれており（「安東県 雑俎」『満日』1912年10月6日）、支部の設立が1915年以前であることは確実である。

<sup>571</sup>（奉天）「雑信」『満日』1912年4月13日；（本溪湖）「運動会」『満日』1911年5月12日。営口の場合、新聞記事で確認できるのは、「営口の運動会」『満日』1913年5月14日が一番早い、が、「満鉄運動会」『大連新聞』1923年5月17日には「第十二回陸上大運動会」と記されており、逆算して1912年が第1回大会になると判断した。

<sup>572</sup>「沙河口運動会」『満日』1913年10月3日。「四平街運動会」『満日』1914年4月11日には前年の運動会への言及がある。

<sup>573</sup>満鉄運動会鞍山支部は1920年に第2回陸上運動会を開催した（「満鉄運動会」『満日』1920年4月15日）。「運動会支部」『満日』1925年3月24日によれば、4月1日から満鉄運動会規則が改正され、開原にも支部が置かれた。この改正で本部と大連支部が分離され、翌年3月に大連支部幹事改選に関する初めての記事が掲載されている（「満鉄運動会大連支部」『満日』1926年3月13日）。

<sup>574</sup>南満洲鉄道株式会社地方部編『地方経営梗概』昭和6年度、南満洲鉄道地方部庶務課、1932年、116頁。

1910年代は3万円をかなり下回る金額だったであろう。

支部の会計に関しては、1911年10月から翌年9月末までの撫順支部の決算が残っている<sup>575</sup>。収入総額は2272円、うち「本部補給金」が835円、会費が927円となっている。会費は1人1カ月20銭なので、会員数は386人と推定される。支出は庭球部133円、野球部147円、剣道部673円、柔道部150円、弓術部233円、競技部（スケート）211円であった。この年は御大喪のため秋季運動会が中止され、陸上競技部の677円余りが支出されなかった。剣道部の支出が突出しているが、うち610円が備品費である。撫順では1912年9月に修武館が完成し（第35話参照）、剣道部は従来の仮道場から移転しているので、それにまつわる費用だろうか。また、安東支部の1917年予算は、収入が847円、支出が陸上運動会300円、庭球145円、柔剣道部300円、氷上運動会130円となっている<sup>576</sup>。撫順と比べて財政規模の違いが目につく。

満鉄運動会は日本人男性職員の加入が義務づけられていたが、それ以外の者でも加入が認められた。たとえば、遼陽支部では職員と雇員は全員会員だったが、1917年には傭人も準会員となることが義務づけられた（会費は半額）<sup>577</sup>。これに対して撫順支部は保守的で、1923年ようやく傭員の加入を認めた。もっとも、傭人も会員にすべきだという主張は早くも1913年に現れていた<sup>578</sup>。「正公」なる人物は、職員と傭人が一緒に運動すれば「職員の威厳を損じて威令行はれざるに至るの恐あり」と反対する人がいるが、道場や野外で身体を強壮にし精神を健全にすることで、日本武士道の精華を発揮できるだけでなく、余暇に「不善」に手を染める余裕もなくなるから、傭人も包含した「満鉄従事員の全部に亘るの運動会」にすべきだと主張した<sup>579</sup>。1922年の大連「満鉄運動会」を前に、岡部平太は「元来満鉄は社員の無階級を標榜し公平無差別待遇を自称して居るにも係はらず今回運動競技出場者は雇員以上を資格者と制定して居るのは実に奇怪千万で婦人社員や傭員は人間でないとして取扱つて居るのは時代錯誤も甚

<sup>575</sup> 満鉄運動会撫順支部「運動会会計報告」『撫順』2号、1912年12月18日。

<sup>576</sup> 「満鉄運動会支部」『満日』1916年12月10日。

<sup>577</sup> 「運動支部拡張」『満日』1917年1月15日。

<sup>578</sup> 「満鉄運動会差別撤廃」『満日』1923年2月2日。

<sup>579</sup> 正公「撫順だより」『撫順』5号、1913年3月18日。

だしい」と主張した<sup>580</sup>。こうした主張から、これらの人々が「満鉄運動会」から排除されていたことがわかる。この時点で岡部の主張は認められなかった。

以上みてきたように、満鉄社員の身体管理体制は後藤新平、中村是公総裁によって確立された。このふたりは台湾総督府から赴任したという点で共通する。後藤が病院を設置するなど衛生に注意を払ったのに対し、中村は慰藉係と満鉄運動会を設け、精神と肉体の両面で社員の健康のさらなる向上をはかった。社員とその家族の（精神的、肉体的、社会的）健康に対する関心は、いわゆる満鉄大家族主義<sup>581</sup>に由来する家父長的、恩情的な動機に基づいていたが、民族、ジェンダー、階級によって濃淡の差があった。またそうした関心が能率という「科学」に基づいていたことは留意すべきであろう。

### （3）1920年代前半

#### 〔1〕 岡部平太の来満と第1回体育運動調査

第一次世界大戦は東アジアに空前の好景気をもたらした。満鉄でも業務は増大したが、物価が騰貴したために（大連の消費者物価指数は34.8（1914年）から126.6（1919年）に上昇した）、実質賃金はかえって低下した。外傷や疾病が原因で退社した社員の数は1917年に1000人当たり26.7人に達した。一方で満鉄よりも条件のよい就職口には事欠かなかった。その結果、採用率が増加するとともに、離職率も増加した。労働争議も頻発した。満洲で1918年から1920年の3年間に労働争議に参加した日本人の数は3574人に達した。同じころ、スペイン・インフルエンザが猛威を振るい、関東州の日本人の死亡率は1919年に25.1（1000人当たり）となった。満鉄社員の死亡率はこれより低かったが、やはり1919年にピークを迎える。1920年には戦後恐慌に見舞われ、満鉄では職員514人、雇員786人、傭員6200人、合計7500人もの人員整理が行われた<sup>582</sup>。

1919年に『実業之日本』は、満鉄がスポーツを奨励する理由について、内地から招

<sup>580</sup>「近づきたる満鉄運動会」『大連新聞』1922年4月25日。

<sup>581</sup> 高橋泰隆『日本植民地鉄道史論：台湾、朝鮮、満州、華北、華中鉄道の経営史的研究』日本経済評論社、1995年、172頁；林采成『東アジアのなかの満鉄』169-173頁。

<sup>582</sup> 林采成『東アジアのなかの満鉄』181頁；林采成『鉄道員と身体』276頁；末光高義『支那の労働運動』南満洲警察協会、1930年、247頁；天野博之『満鉄を知るための十二章』64頁。

き入れた社員がややもするとホームシックにかかり、職を辞して国に帰るものが多いため、「社員が望郷の念に駆られんとする防止策として運動部を設置し野球庭球を奨励した」と説明し、満鉄はこれがため「数万金」を投じて各地に大運動場を設置し、強制的に運動を行わせた結果、望郷の念に駆られて辞職するものがなくなったと述べる<sup>583</sup>。しかし、満鉄社員の離職率の増大はホームシックという個人的要因よりも、上述したような満鉄をめぐる労働・生活条件の悪化の結果とみるべきである。

だからこそ満鉄は、1919年4月に社長に就任した野村龍太郎のもと、給与を改正し(8月)、社員会を設立するなど、社員の労働・生活条件改善を図ったのである。スポーツ事業も強化された。1921年度より満鉄は満鉄運動会の予算を3万円に増額し、「大々的發展を図る」ことになった。その目的は「社員の意気を練り士気を鼓舞して併せて身体の強壯を図」り、「事務上に於ける能率に資」することにあった。中心人物である人事課次席竹上六三郎によれば、従来運動は一部の優秀者に独占されていたので、運動を普及させるためにも、満鉄道場を本社内に移転し、庭球場を増設するなどして、昼休みや退社後に「鳥渡一試合をやつて終日の鬱血を散じ清新の気を転換」できるようにしようとした。竹上は満鉄共済会の統計を挙げ、死亡者10人のうち7人は入社後3年以内のものであると指摘し、これは学校を卒業したばかりの青年が「急激な社員生活に運動不足から身体の保健を顧慮しない結果」であるから、退社時間を1時間繰り上げて運動の時間に当てたいと語った<sup>584</sup>。

これに対して「覆面記者」は、資本金4億4000万円もの大会社でテニスコートが大連にひとつしかないというのは「東洋一でもあり世界一でもあります」と皮肉り、「活動する分子の健康を増進する事が能率の増進する理由」であるから、テニスコートをたくさん作るよう求めたうえで、次のように述べる。

我々第三者から見ると運動に対する満鉄の金の出し方が少すぎるようだ……  
五万の社員を有し一ケ年三万円位の金を出して不思議がらぬようでは駄目だ、此  
点は副社長に御願し人気振作士気緊張の為年に十万内外の金を御支出になつてそ

<sup>583</sup> 一記者「全国大会社商店の体育施設」『実業之日本』22巻19号、1919年9月15日；東原文郎「〈体育会系〉就職の起源：企業が求めた有用な身体：『実業之日本』の記述を手掛かりとして」『スポーツ産業学研究』21巻2号、2011年。

<sup>584</sup> 「社員の士気を鼓舞、満鉄運動部大々的發展を図る」『満日』1920年12月11日。

の例を後世に遺され何十年の後に於てもその功績を謳歌されるよう願ひたい、そして野球でも撃剣でもテニスでも弓でも重役が時々やつてそれに実業側の人でも社員でもいやいやながらやらせるようにせねばいけません<sup>585</sup>。

この批判を意識してか、翌年1月に満鉄の松本烝治理事らが登山に出かけ、運動奨励の模範を示した。

満鉄本社では運動を大々的に奨励して体育を練り心神健全なる社員の養成に努め人と共に事務の能率を高めんとする事であるが今年こそは大いにこれを実現して大氣勢を揚げんとしてゐるそれには先づ下級の社員の上に口先許りで運動を鼓吹奨励する計りぢや不可ぬとあつて各課長から幹部連迄各その範を示さんとあつて・・・・・・・・<sup>586</sup>。

たとえば片山義勝理事は、「何だこれ位の寒さに引込んでゐられるものか」「大に耐寒運動をやるべきだ」と、零下10度の屋外でテニスを敢行したのだった<sup>587</sup>。

1921年春、満鉄は満鉄運動会の活動強化とともに、社員の体育運動に関する調査を実施した。調査を担当した満鉄人事課慰藉係主任大沢慎一はその趣旨を次のように語った。

此度運動票と云ふものを作製して各社員に配布し之に従来実行して来た運動及び其の程度や新に実行希望の運動種類其他を記入せしめ之に依つて社員の体育運動に関する趣味の程度或は其の傾向等を数字的に調査し之を基礎として今後大に体育運動の指導奨励に力を致さんとするのである尚従来一般に野次的に他の運動を参観するのみで自から体育運動を実行しない者の多い事は甚だ遺憾であるから今後は没趣味でない限り成るべく多くの社員に体育本位で各種運動を奨励したい考へで今回は先づ大連のみで運動票調べをなしつゝある次第であると<sup>588</sup>。

満鉄人事課は毎年全社員の身体検査を実施してきたが、1921年春の結果は芳しいものではなかった。病気の多くは「満洲固有の呼吸器病」あるいは脚気で、気候風土の

<sup>585</sup> 覆面記者「運動忘年怪焰」『満日』1920年12月26日。

<sup>586</sup> 「自慢の健脚に踏破る寒山」『満日』1921年1月13日。

<sup>587</sup> 「商事部の耐寒庭球」『満日』1921年1月16日。

<sup>588</sup> 「体育奨励に運動票」『大連新聞』1921年3月26日。

変化により生活状態が変化するために生じたと考えられていた<sup>589</sup>。満鉄は社員採用にあたり、嚴重に身体検査を実施し、頑健なもののみ採用する方針を立てた<sup>590</sup>。同年秋には九州大学の解剖学教授桜井恒次郎を招聘して大連第四小学校で体操の講習会を開き、桜井の提唱する紳士体操を各課所で実施させた<sup>591</sup>。

桜井の講習会は9月24日から5日間開催されたが、そこには満洲スポーツの将来を大きく変える男も参加していた。水戸高等学校体操講師岡部平太である。岡部が柔道の師匠である嘉納治五郎と袂を分かち、さらに水戸高等学校校長とも意見を違え、みずからの「体育理念を実施できるところは、日本人の新天地、強大な満鉄王国においてほかにはない」と考えて、友人の四角誠一（奉天中学教諭）を頼って満洲に転がり込んできたのは1921年9月初めのことであった。四角らの尽力で満鉄入社を果たした岡部は、社長室人事課慰藉係に配属される<sup>592</sup>。おりしも人事課ではスポーツ奨励に取り組んでおり、岡部は絶好のタイミングでやってきたといえるだろう。

これ以降、岡部が満鉄社員スポーツの指揮を執ることになる。春以来、人事課で実施されてきた体育運動調査をまとめて、『読書会雑誌』に発表したのも岡部である<sup>593</sup>。岡部は1920年度の20歳未満の社員の死亡率が28%、21歳から25歳までが17%に達したという共済組合の恐るべき統計を挙げ、「最も清新で奮闘的である可き初任青年者の死亡率、罹病率は、全会社の事務能率の上から見て、決して閑却される可き問題ではない」と述べる。続いて「文化生活」（文化的生活）が身体的には「人類の退化」をもたらすとして、体育の必要性を説く。そのうえで体育運動調査のデータを分析する。この調査は満鉄日本人社員9331人を対象とし、これまで経験した運動、現在実行中の運動、将来希望する運動、興味を持っている運動を挙げさせたものである。ここでは

<sup>589</sup>「満鉄社員の健康が次第に不良になる」『満日』1921年8月12日。

<sup>590</sup>「満鉄の社員採用方針、嚴重に身体検査」『満日』1921年7月19日。

<sup>591</sup>「体操学の泰斗」『満日』1921年9月25日；「満鉄紳士体操」『満日』1921年11月4日。これより前、紳士体操は朝鮮の学校にも大きな影響を及ぼしていた（西尾達雄『日本植民地下朝鮮における学校体育政策』207-229頁）。

<sup>592</sup>「女子体育の側面観（一）」『満日』1921年9月29日；拙著『国家とスポーツ』100頁；四角誠一「岡部君の思い出」岡部平太遺稿集刊行会編『スポーツ・勝負・人間：岡部平太遺稿集』岡部平太遺稿集刊行会、1968年、328-336頁所収。

<sup>593</sup>岡部生「社員の運動趣味」。

現在実行中の運動について見ていきたい。

表 38-1 は各項目の票数を集計したものである。大連は 2396 票、奉天は 929 票、撫順は 1326 票、長春は 678 票の回答があり、その他の都市を加えた合計が 9331 票である。1921 年度の満鉄社員 36397 人のうち、職員は 4297 人、雇員は 5208 人、日本人傭員は 12059 人、中国人傭員は 14757 人だった<sup>594</sup>。当時の満鉄運動会会員資格は基本的に職員と雇員（そのほとんどが日本人男性）であり、その合計人数 9581 人は体育運動調査の回答数 9331 票にほぼ等しいから、この調査は満鉄運動会のほぼ全員を網羅していることになる。

満鉄社員のあいだで最も広く実践されていたスポーツはテニスである（大連で 24.2%、撫順で 35.2%、全体で 32.2%）。それに続くのが野球、強健法、水泳、スケート、体操で、その後に各種武道が来る。意外なのは陸上競技で、蹴球（サッカー）の 3 分の 1 にすぎない。都市ごとの特徴も興味深い。短艇は大連で 156 人（6.5%）が実践し

表 38-1 満鉄体育運動調査

|      | 大連   | 奉天   | 撫順   | 長春  | その他  | 全体    |
|------|------|------|------|-----|------|-------|
| 庭球   | 579  | 278  | 467  | 140 | 1542 | 3006  |
| 野球   | 359  | 175  | 186  | 80  | 675  | 1475  |
| 強健法  | 297  | 151  | 243  | 111 | 627  | 1429  |
| 水泳   | 275  | 59   | 80   | 28  | 758  | 1200  |
| 氷滑   | 185  | 113  | 157  | 38  | 423  | 916   |
| 体操   | 191  | 65   | 170  | 78  | 351  | 855   |
| 剣道   | 125  | 61   | 124  | 55  | 378  | 743   |
| 柔道   | 138  | 45   | 84   | 38  | 242  | 547   |
| 雑    | 149  | 38   | 92   | 16  | 151  | 446   |
| 弓術   | 67   | 51   | 48   | 17  | 260  | 443   |
| 角力   | 67   | 56   | 42   | 22  | 233  | 420   |
| 乗馬   | 66   | 35   | 28   | 2   | 212  | 343   |
| 短艇   | 156  | 6    | 7    | 7   | 69   | 245   |
| 蹴球   | 40   | 20   | 11   | 37  | 88   | 196   |
| 遠足   | 16   | 6    | 19   | 7   | 41   | 89    |
| 陸上競技 | 20   | 5    | 6    | 5   | 25   | 61    |
| ゴルフ  | 13   | 1    | 2    | 2   | 13   | 31    |
| 合計   | 2743 | 1165 | 1766 | 683 | 6088 | 12445 |
| 回答者数 | 2396 | 929  | 1326 | 678 | 4002 | 9331  |

<sup>594</sup> 南満洲鉄道株式会社庶務部調査課編『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』135-136 頁。

ているが、内陸の3都市には（当然ながら）ほとんどいない。内陸で盛んなのはスケートだが、同じ内陸でも長春ではそれほど盛んではない。一方、長春は社員数に比して蹴球が盛んという点で目立つ。各都市の票数の合計を回答者数で割ると、大連 1.14、奉天 1.25、撫順 1.33、長春 1.01、その他 1.52、全体 1.33 で、平均して社員 1 人が 1 つ以上のスポーツを実践している計算になる。大連の値があまり高くないのは、ほかに多様な娯楽を利用できたからだろうか。

岡部自身は紙幅の関係からか、詳しい分析はせず、次のように総括している。

陸上競技、ゴルフ、蹴球が盛んなる可き今日運動界の大勢に反して、却つて少数なるは、未だ之等の運動が満洲に普及し居らざる現状を示すものであらう。其他柔剣道、乗馬に、経験と趣味を有する者甚だ多きにかゝらず、実行者の著しく少数なるは、設備の不十分なる為、実行の困難なるか、また社員平均年齢の増進等の原因に左右されてるのではあるまいか<sup>595</sup>。

満鉄ではこの調査を参考に今後の社員スポーツ奨励の計画を立てた。「希望運動」2 位だった馬術部が満鉄運動会に新設されるのは競馬解禁後の 1923 年 6 月のことだった。馬術部の会費は高級社員で 1 カ月 7 円 50 銭と高く、多くの社員の希望を満たせたとはいえない（第 34 話参照）。

満鉄では競技会に参加する社員を出勤扱いにしていた。スポーツの普及につれ、その適用に制限をかける必要性が生じたのか、1923 年末に満鉄は主催者と競技の性質によって出勤の扱いを変えることにした。満洲の競技会のうち、①大連の満鉄運動会各競技部が主催する競技会、②奉天、撫順で開催される武道大会、③安東スケート大会、④満鮮柔剣道対抗競技（満洲剣友会、講道館有段者会が推薦したものに限る）、⑤各競技の選手権大会、⑥関東州外野球大会、は出勤扱いとなった。満洲から遠征する各部選手は社長の認可により、極東大会やオリンピックの参加者は全満競技連合が推薦し会社が派遣する場合に限り、それぞれ出勤扱いとなった。その他の競技会でも社長の認可があれば、出勤扱いとなった<sup>596</sup>。

<sup>595</sup> 岡部平太「社員の運動趣味」。

<sup>596</sup> 「満鉄社員の運動競技出場規定」『満日』1923 年 12 月 19 日。

## [2] 体育係と社員会

1922 年 1 月 17 日の職制改正で社長室のもとに社会課が新設され、「社員ノ福祉増進ニ関スル事項」「社員ノ共済及慰藉ニ関スル事項」「社宅ニ関スル事項」「社員ノ消費組合其ノ他生計ニ関スル事項」を所轄することになった<sup>597</sup>。この変更に伴い、慰藉係も人事課から社会課に移った。社会課長の牧野虎次は同志社英学校出身で、1887 年に大塚素とともに洗礼を受けた人物である<sup>598</sup>。慰藉係主任はこれまでと同じく大沢慎一が務めた。

1922 年 3 月、満鉄運動会は満鉄体育会と改称される。社会課慰藉係主任の大沢慎一は「より明瞭濃厚に体育といふ精神を以て各種運動を奨励」するためであるとし、春の陸上運動会、秋の海上運動会もお祭り気分を廃して体育本位に、オリンピックゲーム式に改め、広く沿線各地からも選手を参加させる方針であると語った<sup>599</sup>。結局、満鉄体育会という呼称は定着せず、満鉄運動会の呼称が使用され続けることになる。

1922 年 10 月に社会課の改革が実施され、音楽と調査の 2 係を新設、講演を慰藉係から読書会系の所管に変更、運動と独身舍宅管理を合併した、と『大連新聞』は報じている<sup>600</sup>。早川千吉郎総裁の死去（1922 年 10 月 14 日）のあと、満鉄総裁に就任した川村竹治は翌 1923 年 4 月 21 日に職制改正を実施、社会課は庶務部所属に変更された。この時の社会課内部の編成は庶務係、調査係、共済係、慰藉係、運動会、読書会、人事相談だったと思われる<sup>601</sup>。『満鉄附属地経営沿革全史』は 1923 年に体育係が設置され、「社員体育に関する事務が本格的に処理されるやうになつた」と記す<sup>602</sup>。これは、管見の限り、体育係設置に関わる唯一の記事だが、この時点ではまだ体育係は設置されていなかったはずである。

1924 年 2 月 26 日、社会課の体制が刷新された。新体制の下で社会係は「社員の教

<sup>597</sup> 南満洲鉄道株式会社庶務部調査課編『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』75 頁。

<sup>598</sup> 室田保夫「同志社人物誌（49）牧野虎次」『同志社時報』72 号、1982 年 3 月。牧野は 1923 年 11 月 9 日に審査役に異動、田村羊三が後任の社会課長となる。

<sup>599</sup> 「満鉄運動会を体育会と改称」『満日』1922 年 3 月 5 日；「満鉄体育会」『満日』1922 年 3 月 16 日。

<sup>600</sup> 「満鉄社会課改革」『大連新聞』1922 年 10 月 21 日。

<sup>601</sup> 南満洲鉄道株式会社庶務部調査課編『南満洲鉄道株式会社第二次十年史』92-93 頁；「満鉄社会課刷新」『大連新聞』1924 年 2 月 27 日。

<sup>602</sup> 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』上巻、705 頁。

養並に団体訓練に関する事項」、慰藉係は「趣味、娯楽、慰安、副業生活改善に関する事項」を管轄することとなり、運動会業務が庶務係に、読書会業務が社会係に移された。『大連新聞』は運動会や読書会のように「妙な立場」にあったものが庶務係、社会係に併合されたことを「非常にいゝ思ひつき」と評価している。運動会については、「今迄選手や競技の為めのみ計画されつゝあるかの怨みのあつた運動会を一般社員及家族の運動会」とするべくなされたものであった<sup>603</sup>。ちなみに、運動会主任の岡部は当時洋行中であった。

社会課のたびかさなる改革は、社会課の存在意義が問われていたことの裏返しである。1924年7月に『大連新聞』が報じた社会課廃止論によれば、社会課の「社会」とは満洲全体の社会という意味で各種事業を実施しているが、結局は「満鉄一部者の便利であつて在満邦人は何等便利を受けてゐない」という。戸山学校軍楽隊を招請するのに1万円を投じたり、左団次を呼ぶのに巨額の金を投じたりしたことを、「興行師然たる醜態」と非難したのである<sup>604</sup>。

1925年から1926年にかけて、満鉄社内では社員団体結成の動きが活発化する。1926年2月に社員会創立準備委員会が設置、5月に準備委員会が開かれ、社員会の設立趣旨、綱領、宣言、規約などが発表された。綱領の第3項は「会社の健全なる発達を基調とし社員共同の福祉を増進すること」となっており、消費組合、共済会、社員倶楽部、運動会、読書会などの慰藉修養事業を社員会のもとに置き、内容を充実するとともに、社員の自治的修養に資することが目指された<sup>605</sup>。社員会は社会課の主要事業を吸収するつもりだったのである。準備委員会幹事には岡部平太、二宮宗太郎も名を連ねており、社会課の了解のもとで協議が進められていたように見えるが、実はそうではなかった。社会課共済係主任をしていた松浦開地良は10年後に当時の様子を次のように振り返っている。

十五年の夏だつたと思ひます、当時の社会課長は田村羊三さんだつたが、みんな

<sup>603</sup>「満鉄社会課刷新」『大連新聞』1924年2月27日；「満鉄社会課、分担の長所」『大連新聞』1924年2月28日。

<sup>604</sup>「無為にして、無用の長物、満鉄社会課を廃す可し」『大連新聞』1924年7月24日；「満鉄社会課、不評の声高し」『大連新聞』1924年8月1日。

<sup>605</sup>「社員会十年史①」『協和』195号、1937年6月15日。

集れといふので各主任が集つた、今度社員会といふものが出来るやうになるが、社員の福祉施設は全部社員会でやる計画だ、各自は肚を決めていただきたい、かういふやうなお話であつた、尚各係の従事員の身分にも関係することだから慎重に考へて貰ひたいといふことを言ひ渡されたのです。そのときある者は社員会に行つてよいと言ひ、ある者はさういふ団体が出来ても俺なんか行かないといふ。当時の社員会の仕事の中には社会的な、すべて満鉄社員に関する福祉施設をやることが含まれてをり消費組合も入れる計画になつてをつた。その時分は反対の声が相当濃厚であつて・・・・・・社会課のやつてゐる仕事の中で理屈から言つても一番先に社員会としてやらねばならぬのは運動会だといふので、その仕事を扱ふことになつた、運動会の係だつた岡部君は真先に社員会に行かねばならぬのが甚だ不平であつた訳で、この申合せは極く秘密にして貰はなければ困ると言つてあつたのに、岡部君はそれを裏切つて、遼東新報に「社員会と戦ふ」といふ記事を出したのです。そこで燎原の火の勢ひだつた社員会も、直接それに携はらない者の目には危ふくなつて来たやうに見えた、入会反対の声が益々多くなつた<sup>606</sup>。

岡部の記事は確認できないが、1926年8月4日の準備委員会の議事に「遼東新報所載岡部平太氏の意見に対する弁明に関する打合」があるので、7月末から8月初旬にかけてのことだと思われる<sup>607</sup>。松浦によれば、社員会準備委員会の中心メンバーで社会課員の奥村慎次が社員会は福祉施設を研究する機関、もしくは施設を要求する自治機関だと説明したことで、社会課の合意が得られ、その後は順調に話が進んだという。しかし、社員会は社会課の事業の移管を断念したわけではない。消費組合、共済会、読書会、音楽会、運動会ではそれぞれ社員会に事業を移管できるか検討したが、読書会以外はいずれも移管不可の結論だった。満鉄運動会の検討結果は下記の通りだった<sup>608</sup>。

#### 一、会社運動会を社員会に移譲の件

本部の性質上収入少きに反し多大の経費を要し収入も従て強制的ならざれば確

<sup>606</sup>「社員会の十年を語る座談会①」『協和』191号、1937年4月15日。

<sup>607</sup>「社員会十年史②」『協和』197号、1937年7月15日。

<sup>608</sup>「社員会十年史②」。

実を期し難く、其の経営に就ても尚ほ講究を要する点あるを以て本件に就ては当分の間現状の儘とし社員会は希望、意見等ある場合に於ては之を提議し会社の考慮に資すること

## 二、会社と別個に社員会にて直に運動の一部を実行する件

本件に就ては一方に会社の運動会存置せらるる以上各社員の負担も重複することとなり実行困難なるべく又実効も少しと思考さるる故会社の運動会存続期間には直に運動の実行は之を見合すを可とす

1926年12月6日の第1回評議員会ではなおも「満鉄運動会を可成本会に移行せんとする趣旨に於てその能否時期方法を調査すること」が協議された<sup>609</sup>。結局これは実現せず、1927年4月に社員会が発足すると、満鉄運動会と社員会運動部が併存することになる。初年度の社員会運動部長は社会課長の小倉鐸二、1928年度は満鉄運動会主任の岡部平太だった。社会課が庶務係に属していた満鉄運動会を格上げして体育係を新設したのは、こうした社員会の動きを牽制するためだったのではないだろうか。岡部の肩書きが従来の満鉄運動会主任から満鉄体育係主任に変わるのは、まさしく彼が社員会運動部長を務めていた時であった<sup>610</sup>。

婦人社員も組織化される。1924年4月、大連在勤の満鉄婦人社員によって相互親睦修養機関、満鉄婦人協会が設立された。1930年時点で満鉄全婦人社員1600名のうち、300名が加入していた。同協会は研究部、趣味部、体育部に分かれ、1929年度に体育部が実施した活動は「五月祭、五月祭舞踊講習会、大石橋娘々廟参拝、湯崗子温浴、日本舞踊、童謡舞踊講習会、バスケットボールチームの組織及練習、競技出場、女子卓球大会有志出場」であった<sup>611</sup>。

<sup>609</sup>「社員会十年史②」。

<sup>610</sup>管見の限り、「独逸選手を迎へ、全満軍と陸上競技」『満日』1929年1月29日が最も早い。同日の『大連新聞』の記事は「満鉄運動会岡部平太」と記している（「国際競技大会を奉天で開催」『大連新聞』1929年1月29日）。

<sup>611</sup>南満洲鉄道株式会社総務部労務課編『社員福利施設概要』南満洲鉄道株式会社、1930年12月、58-35頁。

## (4) 1920年代後半以降

## [1] 体育ボールの奨励

1929年7月に内閣総理大臣に就任した浜口雄幸は、蔵相に井上準之助を起用、金解禁を断行すべく、緊縮財政をとるとともに、国民には消費節約を呼びかけた。この動きに呼応して、満鉄社員会では保々隆矣幹事長の陣頭指揮のもと生活改善運動に積極的に取り組むことになった。生活改善運動の内容は多岐に亘ったが、健康と体育もそのひとつである。社員会共済部長の松浦開地良は1929年10月の『協和』生活改善特集号に寄せた記事で、日本人社員の疾病比率が中国人社員の3倍弱であること、中国人の疾病はマラリア、皮膚病、眼疾など衛生思想の欠陥に起因するものが多いのに対して、日本人は伝染病、結核、呼吸器や消化器の病気であることを、社員とその家族の疾病のために満鉄は年間1000万円以上の損失を被っていることを挙げ、生活改善で健康を保つことの重要性を説いた<sup>612</sup>。

満鉄社員会や生活改善委員会から体育振興の必要性が叫ばれたことから、社会課体育係でも具体的な方法を考慮していたが、1929年11月12日に満鉄社会課、満鉄社員会、生活改善委員会、各課所の代表による合同会議で全社員にバレーボールを奨励することが決定された。バレーボールが選ばれたのは、選手独占の弊が少ない、技倆の熟練に時間がかからない、費用と場所をとらない、年齢差が関係しないという特性を踏まえてのことだった。また、満鉄顧問で鞍山製鋼所社長の伍堂卓雄がかつて呉海軍工廠でバレーボールを奨励し好成績を収めたことも考慮された<sup>613</sup>。

伍堂は東京帝大工科から海軍入りし、1928年12月に呉海軍工廠長を以て退役、満鉄顧問に就任した。伍堂は海軍工廠に科学的管理法を持ち込み、能率増進を達成した。バレーボールの奨励も、労使関係の改善を目的としており、呉海軍工廠のバレーボールチームは全国制覇も成し遂げることになる。伍堂は満鉄でも能率増進に力を入れ、1931年2月の『協和』社業能率増信号に巻頭言を寄せている。また、満鉄退任後の1942年には日本能率協会会長になった<sup>614</sup>。

<sup>612</sup> 松浦開地良「先づ健康より」『協和』12号、1929年10月15日。

<sup>613</sup> 「満鉄全社員に排球を奨励」『満日』1929年11月13日。

<sup>614</sup> 拙著『軍隊とスポーツの近代』262-263頁；伍堂卓雄「社業能率増進の要諦」『協和』43号、1931年2月1日。

満鉄でバレーボール普及の中心となったのは、人事課労務係主任にして満鉄社員会組織部長、生活改善委員の二村光三であった。二村は東京帝大法科を卒業後、海軍に入り主計士官として活躍、1925年に予備役となり、満鉄に入社した。1919年から1921年まで労働問題研究のためイギリス、ドイツに留学、また満鉄入社後も中国各地の労働運動を視察し、その成果を『満洲ニ於ケル労働運動対策』としてまとめている。二村は労働運動発生の原因を探る過程で、中国人労働者の思想の変化に着目している。具体的には、社会正義の観念、愛国思想、団結心の高まりであり、また西洋の模倣、公德心の向上、戸外運動遊戯の漸増、落書の内容などにも変化の跡をうかがうことができた。二村はとくに赤化煽動対策として、日本人と中国人の意思疎通の機会を増やすことを提案し、そのひとつの手段として、日本人と中国人が一緒に遊戯運動をすることを挙げたのだった<sup>615</sup>。この小冊子は五三〇事件を調査し、満洲で同様の事件が起こるのを防ぐことを目的として書かれた。実際、バレーボールが奨励される1930年までに、満洲の赤化は現実問題となっていた。1927年7月と1928年4月に大連で中国人共産党員が大量検挙される事件が起きており、日本人の側でも共産党の活動は広がっていた<sup>616</sup>。

以上から、バレーボール奨励の背後には生活改善と労使関係改善という2つの文脈（能率増進という点では一致する）があったことが想定される。後者については、初期の満鉄社員会が傭員からの待遇改善要求に苦慮していたことを付言しておきたい。満鉄社員会運動部と競合関係にあった満鉄社会課体育係にとっても、バレーボールの奨励は重要な意義があった。そもそも体育係は、選手優先と批判された満鉄運動会への反省から、より大衆的な社員スポーツを推進するべく設置されたものだからである。

体育係は社員の罹病率増加に鑑み、1929年から1930年春にかけて社員の健康増進のための具体的方策を検討しており、バレーボール（のちに「体育ボール」と称され

<sup>615</sup> 二村光三『満洲ニ於ケル労働運動対策：中部支那ニ於ケル大正十四年春ノ大労働争議ニ鑑ミ満洲地方ニ於ケル今後ノ労働運動対策ヲ論ズ』南満洲鉄道庶務部社会課、1925年、13-22、37、56頁。

<sup>616</sup> 末光高義『支那の労働運動』南満洲警察協会、1930年、199、213頁。

る<sup>617)</sup>はそのひとつにすぎなかった<sup>618)</sup>。1930年3月に満鉄社会課が発表した社員の健康増進のための努力目標は以下のようなものだった<sup>619)</sup>。

①体育ボールの奨励（指導者派遣）、②捕球場の増設（簡易にスポンジボールの出来得る位の野球場を増設す）、③庭球コートの増設、④スケート場の増設、⑤社員の徒歩通勤奨励（ポスターを作成し徒歩週間を作り宣伝す）、⑥遠足奨励、⑦婦人社員に運動強制（デンマーク体操実施）、⑧体育技師の巡回コーチ、⑨夏季キャンプ生活奨励、⑩体育館の設置、⑪児童日光浴室の設置、⑫中小学の運動場を一般に開放される様交渉（州外はすでに実行）

同じく1930年3月には満鉄東京支社が今年の社員採用は「成績より健康第一」で実施するとの方針を発表した<sup>620)</sup>。半年後、専門学校出身の新社員102人について追跡調査したところ、健康なものは67人であった。疾病者が35人いたわけだが、これは1年間の社員疾病患者数平均100人中80人に比べると半数以下であり、例年5人程度いる肺結核患者も本年は1人だけであった（満鉄は肺結核だけで年間26万円あまりの共済金を支出していた）。この調査に基づき、満鉄は今後も健康本位で社員を採用する方針を固めた<sup>621)</sup>。翌年度の満鉄入社希望者の体格検査に立ち会った結核療養所の遠藤繁清博士は、大学専門学校出身の満鉄入社希望者は170-180人いたが、その半数は「こちらからお断りしたい様な人」で、スポーツマンと自称する人に案外悪い人が多かったと述べている<sup>622)</sup>。

社会課の意欲的な健康増進目標は最後の悪あがきだったのかもしれない。1930年6月の職制改正で社会課が廃止され、体育係は地方部学務課の管轄となったからである。

学務課へヌーツと入ってきた体育係の岡部平太氏、きはめていんぎんなる態度で「僕の所はどうやら全部こちらへ御厄介になることになるらしいので余りいぢめぬ

<sup>617)</sup> 管見の限り、「バレーボールを全社員に奨励」『大連新聞』1930年2月15日が「体育ボール」の語が見える最も早い史料である。

<sup>618)</sup> 「体育増進を具体的に研究」『大連新聞』1930年1月27日；「温室気分打破は先づ健康第一」『大連新聞』1930年2月25日；「満鉄の社会課から社会の社会課へ」『大連新聞』1930年3月29日。

<sup>619)</sup> 「満鉄社員の健康を増進する努力目標」『満日』1930年3月13日。

<sup>620)</sup> 「成績より健康第一」『満日』1930年3月28日。

<sup>621)</sup> 「健康本位で採用の満鉄社員」『満日』1930年11月11日。

<sup>622)</sup> 「スポーツマンの体格が比較的わるい」『大連新聞』1931年1月27日。

様にお願ひします、前もつてあやまつておきます、どうぞよろしく」とスピーディな婿入の挨拶、面喰らつた学務課の人達目をパチクリ、何しろ柔剣道の猛者達八人を引具して御大以下いづれも美事な巨軀を運び込もうといふのだから、学務課の今後の椅子の修繕問題が俄然持ち上る<sup>623</sup>。

この変更により、体育係は社員の体育スポーツのみならず、学校の体育スポーツにも積極的に関わっていくようになる。一方で、この変更は、教化慰藉事業を統一的に実施するセクションが満鉄からなくなったことを意味する。

1931年4月、地方部学務課は職制改革を実施、社会教育係、体育係、教育施設係、学事係の4係体制となり、体育係主任の岡部平太は新設の体育指導員に転任した。また従来、労務課福祉係が所轄してきた諸事項も漸次社会施設係に移すことになった。岡部の後任となった沖弥作はスポーツ界では無名の事務家であり、この人事は体育係がさらに一般体育重視に傾いたことを示す<sup>624</sup>。競技スポーツ重視だった岡部も、この頃にはスポーツと体育の一致を唱えており、その象徴が体育ボールであった<sup>625</sup>。

## [2] 満鉄運動会の発展と第2回体育運動調査

1920年代を通じて、スポーツの普及と多様化が進んだ。この間、満鉄は多大な資金をスポーツ施設の整備に投じた。1930年度末までの累積事業費は、柔剣道場が26万2217円、弓道場が4万4216円であった。各地の陸上競技場と野球場に対しては19万9520円が投じられ、これらとは別に、大連運動場に32万円、奉天の国際運動場に17万円がつぎ込まれた。水泳プールにも13万6813円が費やされた<sup>626</sup>。こうした施設のほとんどが1920年代に建設されたものである。もっとも、累計100万円を超すスポーツ設備費も、1930年度の総支出1億6643万円と対照すれば、雀の涙に等しいと評価できるかもしれない。

<sup>623</sup> 「「岡平」さんが学務課へ、早くも婿入の挨拶」『満日』1930年6月13日。

<sup>624</sup> 「満鉄地方部学務課、職制の大改革」『満日』1931年4月8日；「体育係の改革で、岡部氏は体育視学に」『満日』1931年4月9日；「満鉄学務課の職制改正発表さる」『大連新聞』1931年4月11日；「満鉄学務課の職制改正発表さる」『満日』1931年4月11日。

<sup>625</sup> 拙著『国家とスポーツ』220-221頁。

<sup>626</sup> 『地方経営梗概』昭和五年度、111-118頁。

スポーツの発展にともない、満鉄運動会も拡大した。1925年に満鉄運動会の規定が変更され、大連の満鉄運動会が全満鉄を管轄する本部と大連を管轄する支部に分離された<sup>627</sup>。1930年度までに満鉄運動会には蹴球部（ラグビー）、競泳部、球技部が新設された<sup>628</sup>。1931年度の満鉄運動会の財政規模は約8万円になっている<sup>629</sup>。

支部の活動も充実した。表38-2は満鉄運動会本部と1920年代の各支部について、所属の競技部を一覧にしたものである。野球、庭球、柔道、剣道、弓道はすべての支部に、陸上競技、氷滑、水泳は本溪湖を除くすべての支部に置かれていたことが確認できる。特徴として、野球と庭球を除き、球技関係の部が少ないことが挙げられる。表38-2は、満洲における各種スポーツの普及度がある程度反映しているであろう。もっとも、第39話で詳述するように、1920年代には各地で体育協会が結成されており、両者を合わせてみる必要がある。

表38-3 満鉄運動会各支部所属競技部一覧

|       | 野<br>球 | 庭<br>球 | 柔<br>道 | 剣<br>道 | 弓<br>道 | 陸<br>上<br>競<br>技 | 氷<br>滑 | 水<br>泳 | 蹴<br>球 | 馬<br>術 | 軟<br>式<br>野<br>球 | 競<br>泳 | 球<br>技 | 漕<br>艇 | 相<br>撲 | 射<br>撃 | 体<br>操 | 遠<br>足 | 対<br>象<br>年<br>代 |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|------------------|--------|--------|--------|--------|------------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|------------------|
| 満鉄運動会 | ○      | ○      | ○      | ○      | ○      | ○                | ○      | ○      | ○      | ○      | ○                | ○      | ○      | ○      | ○      | ○      | ○      | ○      | 1910-1931        |
| 大連    | ○      | ○      | ○      | ○      | ○      | ○                | ○      | ○      | ○      | ○      |                  | ○      | ○      | ○      |        | ○      |        |        | 1928-1932        |
| 遼陽    | ○      | ○      | ○      | ○      | ○      | ○                | ○      | ○      | ○      | ○      |                  |        |        |        |        |        |        |        | 1925-1932        |
| 開原    | ○      | ○      | ○      | ○      | ○      | ○                | ○      | ○      |        | ○      |                  |        |        |        |        |        |        |        | 1925-1931        |
| 鉄嶺    | ○      | ○      | ○      | ○      | ○      | ○                | ○      | ○      | ○      | ○      |                  |        |        |        |        |        |        |        | 1926-1929        |
| 安東    | ○      | ○      | ○      | ○      | ○      | ○                | ○      | ○      |        |        |                  |        |        |        |        |        |        |        | 1930             |
| 瓦房店   | ○      | ○      | ○      | ○      | ○      | ○                | ○      | ○      |        |        |                  |        |        |        |        |        |        |        | 1930             |
| 四平街   | ○      | ○      | ○      | ○      | ○      | ○                | ○      | ○      |        |        |                  |        |        |        |        |        |        |        | 1927             |
| 公主嶺   | ○      | ○      | ○      | ○      | ○      | ○                |        |        |        |        |                  |        |        |        |        |        |        |        | 1925             |
| 本溪湖   | ○      | ○      | ○      | ○      | ○      |                  |        |        |        |        |                  |        |        |        |        |        |        |        | 1924             |

<sup>627</sup> 「運動会支部」『満日』1925年3月24日。

<sup>628</sup> 『地方経営梗概』昭和5年度、111頁。

<sup>629</sup> 文部大臣官房体育課編『本邦ニ於ケル体育運動団体ニ関スル調査』昭和8年度、文部大臣官房体育課、1933年、379頁。ただし、1930年度は約6万4000円であった（文部大臣官房体育課編『殖民地ニ於ケル体育運動団体ニ関スル調査』23頁）。うち満鉄からの補助金は4万6000円で、あとは会費収入だった。雇員以上の全男性社員が年間2円を納付し、傭員と女子社員は希望者のみ会員となることができ年間1円を納付した。鉄道教習生、育成学校の生徒は会員だったが、会費は無料だった（南満洲鉄道株式会社総務部労務課編『社員福利施設概要』40-41頁）。

表 38-4 満鉄運動会遼陽支部予算

| 収入   | 会費   | 補助金  | 利子等 | プール | 合計   |     |     |     |     |     |       |      |      |
|------|------|------|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-------|------|------|
| 1925 | 1130 | 1382 | 20  |     | 2899 |     |     |     |     |     |       |      |      |
| 1929 | 1036 | 1565 | 50  | 600 | 3317 |     |     |     |     |     |       |      |      |
| 1930 | 872  | 1300 | 30  | 500 | 2702 |     |     |     |     |     |       |      |      |
| 支出   | 陸上競技 | 野球   | 庭球  | 柔道  | 剣道   | 道場  | 弓道  | 氷滑  | 水泳  | 蹴球  | 陸上運動会 | 庶務費等 | 合計   |
| 1925 | 380  | 350  | 350 | 240 | 240  |     | 140 | 220 |     | 100 | 843   |      | 2988 |
| 1929 | 716  | 216  | 150 | 460 |      |     | 225 | 501 | 586 | 100 |       | 363  | 3317 |
| 1930 | 400  | 80   | 204 | 100 | 100  | 474 | 358 | 50  | 637 |     |       | 279  | 2702 |

表 38-3 は満鉄運動会遼陽支部の 1925、1929、1930 年度予算である<sup>630</sup>。総額と各部費がかなり変動していることが見て取れる。とりわけ、1929 年度から 1930 年度の差が大きい、これは 1930 年に遼陽の満鉄工場が撤廃され、多数の社員が遼陽を去ったことによる<sup>631</sup>。満鉄工場の撤廃は遼陽の日本人社会に大きな打撃を与えたが、スポーツ界でもその影響は深刻だった。野球、氷滑の部費が激減し、蹴球部（ラグビー）が廃止された。

満鉄運動会支部の収支に関する史料は、遼陽のほか、四平街と安東のものが利用できる。四平街の満鉄社員数は満鉄工場撤廃後の遼陽とほぼ同じである。1927 年度の収入は会費 719 円、補助金 957 円などで、合計 1853 円となっており、各部費は陸上競技 300 円、野球 500 円、庭球 200 円、柔剣道 100 円、弓道 150 円、水泳 500 円、氷滑 200 円となっている<sup>632</sup>。なお、遼陽、四平街とも水泳部費が多いのは、プールを運営していたからである（いずれも 1927 年にプールが設置された）。四平街の場合、プールの建設費に 7000 円をかけたが、その後に 1130 円の施設費が必要となった。満鉄運動会からの補助金は 500 円（上記予算の水泳部費）、プール利用者からの会費は 300 円で、な

<sup>630</sup>「運動会の予算」『満日』1925 年 6 月 11 日；「運動部の予算会議」『満日』1929 年 6 月 28 日；「運動会支部予算」『満日』1930 年 4 月 11 日。

<sup>631</sup>1927 年度に 769 人いた日本人社員（満鉄附属地居住者に限る）が 1930 年度には 600 人に減少している（南満洲鉄道株式会社地方部庶務課編『地方経営統計年報』昭和 3 年度、28-29 頁；南満洲鉄道株式会社地方部庶務課編『地方経営統計年報』昭和 5 年度、52-53 頁）。

<sup>632</sup>「運動部補助金」『満日』1927 年 5 月 21 日；「運動会予算の分配」『満日』1927 年 6 月 3 日。四平街の日本人社員は 1928 年度に 602 人だった（南満洲鉄道株式会社地方部庶務課編『地方経営統計年報』昭和 3 年度、30-31 頁）。

お 300 円余りが不足し、懷事情は厳しかったようだ<sup>633</sup>。1927 年度の安東支部決算は収入 4874 円、支出 3782 円だが、内訳は不明である<sup>634</sup>。

1931 年春、満鉄運動会は大きな危機に直面していた。柔道の山田行正の信仰問題や弓道の石原七蔵の引退問題を契機として（第 35、36 話参照）、満鉄運動会を改造せよ、満鉄運動会を廃止せよ、満鉄運動会を純然たる満鉄社員の娯楽機関にせよなどといった声があがっていた<sup>635</sup>。一方で、満鉄運動会大連支部では 1931 年春までに競泳部、球技部、さらに翌 1932 年春までに射撃部、1932 年夏に相撲部が新設された<sup>636</sup>。

1929 年に満鉄を去った元総裁山本條太郎と元副総裁松岡洋右は 1932 年 2 月に満鉄運動会に対して金 1000 円を寄贈している。これを受けて、満鉄運動会では 11 個の優勝杯を作成し、以下に挙げる各競技の主要大会に寄贈することにした<sup>637</sup>。

満鉄運動会陸上競技大会沿線支部対抗競技、満鉄運動会陸上競技大会満鉄傍系会社対抗競技、満洲南部陸上競技会、奉撫対抗競技会、鉄開四公競技大会、弓道全線大会、州外野球大会、関東州野球大会、全満鉄体育ボール大会、満鉄運動会柔道大会、満鉄運動会剣道大会

最初の 2 つは大連の「満鉄運動会」で実施される種目である。陸上競技が 4 つ、地域対抗競技が 2 つ、野球が 2 つ、柔道、剣道、弓道、体育ボールが各 1 つという配分であった。全満のトップレベルの大会だけでなく、多種多様な大会を奨励する方針が見て取れる。

1931 年 3 月、満鉄学務課は 10 年ぶりに運動趣味の調査を実施し、同年 7 月に結果を公表した<sup>638</sup>。対象は日本人社員全員で、男性は 1 万 8864 人、女性は 887 人（1931 年度の満鉄日本人社員の 93.2% に当たる）。調査は運動趣味のうち、過去に経験のあるも

<sup>633</sup>「水泳プールに非難の声起る」『満日』1927 年 8 月 9 日。

<sup>634</sup>「安東満鉄運動会及倶楽部決算」『大連新聞』1928 年 4 月 20 日。

<sup>635</sup>「最近紛糾続きの満鉄運動会を改造」『満日』1931 年 4 月 8 日；「満鉄の運動会、近く改廃を見ん」『満日』1931 年 4 月 8 日。

<sup>636</sup>「満鉄運動会大連支部幹事」『満日』1931 年 4 月 14 日；「満鉄運動会幹事改選」『満日』1932 年 4 月 12 日；「満鉄運動会に相撲部新設」『満日』1932 年 7 月 16 日。

<sup>637</sup>「十一競技大会に」『満日』1932 年 2 月 19 日。

<sup>638</sup>「運動趣味の珍しい調査」『満日』1931 年 3 月 6 日；「興味ある満鉄の運動調査」『大連新聞』1931 年 7 月 14 日。

の、現在実践中のもの、将来やりたいものを挙げるという形でなされた。それぞれの項目を票数の多い順に並べ替えたのが表 38-4 である。

一見してわかるように、1921 年と比べて運動の種類が増えている。経験者が半数を越える運動は、男性社員では水泳、遠足、登山、体操、軟式庭球、女性社員では遠足、体操、卓球、登山、排球、軟式庭球、水泳である。男性社員は 1 人あたり 6.7 種類、

表 38-5 満鉄運動趣味調査

| 過去に経験した運動趣味 |       |       | 現在実行中の運動趣味 |       |      |       | 将来に希望する運動趣味 |       |      |       |     |
|-------------|-------|-------|------------|-------|------|-------|-------------|-------|------|-------|-----|
| 男           |       | 女     | 男          |       | 女    |       | 男           |       | 女    |       |     |
| 水泳          | 12241 | 遠足    | 748        | 釣魚    | 6419 | 卓球    | 303         | 釣魚    | 7005 | 遠足    | 436 |
| 遠足          | 11149 | 体操    | 676        | 遠足    | 5947 | 遠足    | 260         | 遠足    | 6550 | 卓球    | 368 |
| 登山          | 10136 | 卓球    | 585        | 水泳    | 5840 | 登山    | 166         | 登山    | 6171 | 登山    | 318 |
| 体操          | 9722  | 登山    | 562        | 軟式庭球  | 5253 | 体育ボール | 154         | 軟式庭球  | 5543 | 軟式庭球  | 286 |
| 軟式庭球        | 8143  | 排球    | 516        | 登山    | 4789 | 軟式庭球  | 124         | 水泳    | 5297 | 体育ボール | 180 |
| 剣道          | 7547  | 軟式庭球  | 478        | 卓球    | 4395 | 体操    | 106         | 強健法   | 3846 | 水泳    | 149 |
| 卓球          | 6918  | 水泳    | 478        | スポンヂ  | 3850 | 水泳    | 101         | 卓球    | 3709 | 体操    | 117 |
| スポンヂ        | 6563  | 体育ボール | 411        | 体操    | 3611 | スケート  | 63          | 弓道    | 3685 | スケート  | 113 |
| 柔道          | 6118  | 陸上競技  | 311        | 強健法   | 2907 | 排球    | 46          | 体操    | 3439 | 強健法   | 83  |
| 陸上競技        | 6051  | スケート  | 291        | スケート  | 2721 | 強健法   | 42          | スケート  | 3429 | 排球    | 74  |
| ボート         | 5415  | 釣魚    | 164        | 体育ボール | 2499 | 陸上競技  | 22          | スポンヂ  | 2978 | 釣魚    | 66  |
| 相撲          | 5207  | 弓道    | 114        | 狩猟    | 1406 | 釣魚    | 18          | 体育ボール | 2897 | ボート   | 52  |
| スケート        | 4957  | ボート   | 94         | 陸上競技  | 1362 | ボート   | 15          | 馬術    | 2895 | 馬術    | 38  |
| 狩猟          | 3648  | 野球    | 93         | 剣道    | 782  | 弓道    | 6           | 狩猟    | 2668 | ゴルフ   | 38  |
| 馬術          | 3545  | 強健法   | 70         | 弓道    | 744  | 狩猟    | 4           | 剣道    | 1551 | 弓道    | 36  |
| 体育ボール       | 3500  | スポンヂ  | 64         | 野球    | 733  | 馬術    | 3           | ボート   | 1258 | 陸上競技  | 29  |
| 強健法         | 3494  | 競泳    | 27         | ボート   | 618  | 準硬球   | 2           | 陸上競技  | 1240 | ダンス   | 9   |
| 排球          | 2499  | 狩猟    | 19         | 馬術    | 537  | 硬球    | 2           | ゴルフ   | 1042 | 野球    | 8   |
| 弓道          | 2451  | ダンス   | 17         | 柔道    | 514  | ゴルフ   | 2           | 柔道    | 1035 | 狩猟    | 8   |
| 競泳          | 1711  | 蹴球    | 11         | 相撲    | 418  | ダンス   | 2           | 野球    | 751  | 準硬球   | 7   |
| 野球          | 1054  | 馬術    | 9          | 排球    | 344  | 剣道    | 1           | 排球    | 705  | 硬球    | 7   |
| 釣魚          | 1043  | 柔道    | 6          | ゴルフ   | 191  | 野球    | 1           | 相撲    | 486  | 撞球    | 3   |
| ラグビー        | 772   | 剣道    | 5          | 競泳    | 169  | 競泳    | 1           | 硬球    | 457  | 柔道    | 2   |
| 蹴球          | 611   | 準硬球   | 5          | ラグビー  | 124  | 相撲    | 1           | 競泳    | 412  | ラグビー  | 2   |
| 硬球          | 557   | 硬球    | 5          | 硬球    | 123  | スキー   | 1           | ラグビー  | 369  | 蹴球    | 2   |
| 準硬球         | 510   | ゴルフ   | 4          | スキー   | 114  | 柔道    | 0           | 準硬球   | 295  | 競泳    | 2   |
| ゴルフ         | 266   | ラグビー  | 3          | 準硬球   | 109  | ラグビー  | 0           | スキー   | 167  | スキー   | 2   |
| スキー         | 181   | 相撲    | 1          | 撞球    | 43   | 蹴球    | 0           | 蹴球    | 101  | 剣道    | 1   |
| 撞球          | 46    | スキー   | 1          | 蹴球    | 40   | スポンヂ  | 0           | 撞球    | 40   | スポンヂ  | 1   |
| ダンス         | 24    | 撞球    | 0          | ダンス   | 17   | 撞球    | 0           | ダンス   | 35   | 相撲    | 1   |
| ボーリング       | 12    | 拳闘    | 0          | ボーリング | 9    | 拳闘    | 0           | ボーリング | 11   | 拳闘    | 0   |
| 拳闘          | 6     | ボーリング | 0          | 拳闘    | 3    | ボーリング | 0           | 拳闘    | 4    | ボーリング | 0   |

女性社員は6.5種類の運動を経験し、男性社員は3種類、女性社員は1.6種類の運動を  
 実行中であった。

女性に関して言うと、野球（硬式野球とソフトボール）の経験者が少なからずおり、  
 蹴球（サッカー）、ラグビー、柔道、剣道も数は少ないながら経験者がいることは興味  
 深い<sup>639</sup>。

現在実行中のものと将来希望するものを見ると、釣魚、卓球、遠足、登山など気軽  
 に楽しめるものが上位を占めている。男性の現在実行中の項目で上位10位のうち、満  
 鉄運動会で部が設けられていたのは水泳、軟式庭球、スケートのみであった。社員が  
 取り組んでいるスポーツと満鉄運動会の組織に大きな齟齬があったことがわかる。ほ  
 どなくして満鉄運動会大連支部に新たに軟式野球部、体操部、遠足部が新設されたのは、  
 この調査結果を踏まえてのことだろう<sup>640</sup>。

## 第39話 競技団体

### (1) 満洲体育協会

満洲ではつとに満鉄が競技団体を組織していたが、満鉄運動会は基本的に満鉄の日  
 本人男性社員のための組織であった（第38話参照）。それでも、社会やスポーツ界が  
 満鉄中心で回っている間は大きな問題にはならなかった。しかし、とりわけ第一次世  
 界大戦に伴う好景気が大連を潤し、「市中」（非満鉄関係者）の人々が社会やスポーツ  
 界で影響力を持つようになってくると、満鉄中心の既存のあり方には不都合が生じて  
 くる。それは野球界での実業と満鉄の絶交（第3話参照）をもたらしたひとつの要因  
 でもあった。かくて満鉄と市中の双方を包括する競技団体の必要性が意識されるよう  
 になる。

1919年末、大連のスポーツ関係者の間で体育協会設立の気運が高まった。

満洲運動界は今年に至つて黄金時代を現出したかの觀を呈した野球に庭球に柔道

<sup>639</sup> 満洲の女子野球については、拙稿「女子野球の歴史を再考する：極東・YMCA・ジェンダー」『京  
 都大学文学部研究紀要』58号、2019年3月を参照。

<sup>640</sup> 「満鉄運動会幹事決定」『満日』1932年12月27日。

に剣道に其他時と処とに於て盛んな活動を呈した然し盛んだつた反面には何時も物足らぬ感じに打たれるものがあつたそれは云ふまでもなく総合的でないからである全満洲を統一してそして一定の時と処とを定めてオリンピック大会を開き研究的に運動を進めて今日の黄金時代を続け度いと云ふ相談が寄々其道の人達の間に唱へられてゐる又台湾にも朝鮮にも体育協会が既に設けられて統一的に活動しつつ、あるのにそれ等よりも一歩進んでゐる満洲に未だ体育協会の起らぬのは遺憾であると云ふ議論もあつて満洲運動界の統一は目下の一問題とせられてゐるが次第に話は具体的に進みつゝ、ある先達で開かれた全満洲中等学校体育部協議会の席上でも奉天中学堂は全満中等学校連合のオリンピック大会挙行と同じく武道大会挙行とを提議をした程で気運は十分熟して来てゐる大連満鉄本社運動部の有力者は満鉄運動会を中心として満洲体育協会を設立し各新聞社を後援者として来年は新に活動を開始する決心を以て奔走中であるが各運動家も熱心に尽力してゐる満洲運動界の為に体育協会の設立は喜ぶべき事である<sup>641</sup>。

しかし、満洲体育協会設立は難航した。満鉄と市中の根深い対立が原因であつた。1920年5月、シカゴ大学野球チームが来満するとの報に接し、『満日』はオール大連チームを組織してこれに当たるとともに、満洲体育協会をつくって「運動界の向上発達を図るの機関たり参謀本部」となすべきだと主張した。さらに、満俱と実業の対立を念頭に、些細な感情の背離から協力できないものは「球界の賊」で断乎糾弾すべきだと強い調子で訴えた<sup>642</sup>。

状況が変化するのは1920年秋のことである。実満戦を復活させるべく満日社が斡旋に乗り出し、翌年早々に実満定期戦の開催が決定する（第3話参照）。これと並行して、1920年12月に大連体育協会が設立される。発起人は『満洲運動界』の発行人大島秋豊、同編集人洪川春秋、遼東新報社会部長早川巳之利、野球関係では満俱の岸一郎、大門勝、人見止戈三、実業の中島謙、安藤忍、石本秀一、テニス関係では満鉄の飯河道雄、三井物産の伊達正男らで、満鉄と市中の有力者がバランス良く配置されていた。機関誌

<sup>641</sup>「運動界統一の爲め体育協会設立か」『満日』1919年12月5日。朝鮮体育協会の設立は1919年2月だが、台湾体育協会の設立は1920年11月である。

<sup>642</sup>「オール大連を作れ」『満日』1920年5月31日。結局、シカゴ大学チームは来満しなかった。

として『運動世界』を創刊する予定だったが、同誌が刊行された形跡はない<sup>643</sup>。『満日』に週1回連載された「運動界」がその代わりだったようである。それも、1920年11月28日から1921年3月6日までの間で、それ以外に大連体育協会の活動を確認することはできない。大連体育協会はゆくゆくは満洲体育協会となる計画で、1921年2月には奉天に支部が設置され、平岡溪堂が主任となった<sup>644</sup>。

1921年5月に上海で開かれる極東大会に向けて、日本各地で陸上競技の第一次予選会が挙行された。朝鮮や台湾など外地でも予選が開かれたが、満洲では予選が開かれなかった。満洲には陸上競技を統轄する組織がまだなかったからである。そのため、満洲の選手は朝鮮予選に参加することが推奨された<sup>645</sup>。朝鮮予選の10マイルマラソンで2位に入った小野田セメントの縄田尚門は大連から参加した選手のひとりであった<sup>646</sup>。縄田はこのあと早大に進学、中距離で日本を代表する選手となる（第19、21話参照）。

1921年7月に大連を訪れた大日本体育協会の岸清一会長は青島、台湾、京城を引き合いに出しつつ、オール満洲統一の運動機関がないのは遺憾だと述べ、「満鉄は汽車を走らせるのみが本来の使命でもあるまいからもつと開放的に体育方面にも自ら率先してオール満洲の体育機関に助力し其統一を達成せしむる様して呉れなくては困る」と苦言を呈した<sup>647</sup>。

1921年10月末、山田直之介（同年4月に満鉄入社）も、「今後は是非共満洲体育協会の如きものを設けてオリンピック競技を広く全満洲に普及せしめ、時には満洲オリンピック大会を開いて大に満洲競技界の向上進歩を謀るべきだと訴えた<sup>648</sup>。このように満洲に体育協会が必要だという声は、満洲の内外で起こっており、体育協会設立の機は熟していた。ただ満洲はそれを推進する人物を欠いていた。いや、正確に言えば、

<sup>643</sup>「満洲運動界発展の指南車、大連体育協会生る」『満日』1920年11月14日；「運動界の権威者」『満日』1920年12月18日。

<sup>644</sup>「体育協会発展」『満日』1921年2月21日。

<sup>645</sup>「満洲からの参加を希望」『満日』1921年3月20日。

<sup>646</sup>「鮮人選手予選賑ふ」『満日』1921年4月18日。

<sup>647</sup>「全満洲の運動界に一統一機関欠如す」『大連新聞』1921年7月31日。青島では、1921年3月12日に青島体育協会発起人会が開催されている（「体育協会設立」『満日』1921年3月19日）。

<sup>648</sup>山田直之介「満洲に推薦したいハイハードル競技」『大連新聞』1921年10月31日。

その人物はすでに満洲に来ており、これから活動を始めようとしていたのである。

1921 年 9 月、水戸高校で体育講師をしていた岡部平太が、職を辞して満洲にやってきた。岡部は当時の日本でスポーツに関する最先端の知識と経験を持つ人物だった。満鉄に入社した岡部は人事課慰藉係に配属され、満鉄の体育事業を任されることになる（第 38 話参照）。岡部の来満は偶然の産物であったが、満洲では岡部を受け入れる機運が十分に熟していたのである。

岡部が最初に手掛けたのは、「満鉄運動会」の改革と競技団体の設立であった。1922 年 5 月 7 日に開かれた「満鉄運動会」は、従来の「お祭騒ぎ」から一転して、慰安の要素を残しつつも、正式の競技会に準ずる形で実施された（第 19 話参照）。これと並行して、岡部は関屋悌蔵と体育協会設立に向けて奔走した<sup>649</sup>。1921 年春に東京帝大を卒業して満鉄に入社した関屋も、岡部と同様に満洲の新参者だった。それゆえ、満鉄と市中の対立から比較的自由的な立場にあって、両者の団結を推進することができたのだろう。

「満鉄運動会」の 4 日後、全満洲競技連合会（全満競技連合）の発起人会が開催された。全満競技連合の目的は、「満洲に於ける競技の健全なる発達普及を図る」ことで、「主として陸上競技、水泳、野球、庭球、柔道、剣道、氷滑を奨励指導」し、日本選手権大会や国際競技会などの満洲代表を選抜し派遣することだった。実際、この時期に設立が進められたのは、翌年に大阪で開かれる極東大会に満洲から選手を派遣するためであった。全満競技連合はその名の如く競技団体の連合体として構想されたが、この時点で存在した競技団体、すなわち大日本武徳会満洲支部、大連市民射撃会、大連講道館有段者会は結局その傘下に入ることはなかった。「満洲体育協会」という名称が使われなかったのは、岡部の考えによるところが大きいだろう。岡部はつねに（運動）競技と体育を峻別し、自らを競技の側に置いてきた。運動競技は『運動年鑑』に寄せた「運動場に出るまで」の主題だったし、今村嘉雄の論文「体育と競技は別か」に対する批判「競技は体育か」で声高に主張したことである<sup>650</sup>。第 38 話で見たように、一時期は体育と競技の一致を説いた岡部だが、戦後はふたたび競技と体育を峻別する立

<sup>649</sup>「体育協会の設立と各種運動競技の進歩」『大連新聞』1922 年 4 月 23 日。

<sup>650</sup>岡部平太「運動場に出るまで」（朝日新聞社編『運動年鑑』大正 9 年版、朝日新聞社、1920 年）；今村嘉雄「体育と競技は別か」『体育と競技』8 巻 1 号、1929 年 1 月；「競技は体育か」『体育と競技』8 巻 2 号、1929 年 2 月。

場に戻った。次に挙げる 1959 年の文章からも、「体育協会」という名称への不快感を見て取ることができる。

スポーツと体育の二つの相異なる概念の対立、交錯は今年あたりこそ見事に精算され更に大きく時代を築くべきではなかろうか。少しくラデカルに物を考える者にとって、この二つの概念は完全に別々の道を辿るべき性質のものであり、突き進めば進むほど両者の溝は深く遠く隔てられ勝になる。新らしい体育の道を拓かんとする者にとって現状はまことにもどかしい限りであろう。日本のスポーツ界に於て体育協会は府県、郡市、大学より小学校に至るまで、体育協会という造語のニュアンスに引き摺られて体育という母屋(おもや)まで独裁しようとしている。一方体育科教育に於てその担当教師はスポーツマンでないという過度の遠慮から、その概念の正しい吟味を怠り、思想の埒外に於けるじゅうりんにも謙虚な沈黙をつづけている<sup>651</sup>。

このほか、嘉納治五郎が創設し岸清一が会長を務める大日本体育協会への反発もあったらう(とくに岸とは仲が悪かった)。満洲体育協会という名称はあたかも大日本体育協会の下部組織のような印象を与えるからである。満洲にあって岡部はつねに内地のスポーツ界と対等であろうとし、またそれを越えようとしてきた。1924 年 5 月、全満競技連合は「名前が通俗的でない」という理由で満洲体育協会と改称する。岡部の洋行中にこの措置が取られたことは、岡部が全満競技連合の名称に強くこだわっていたことをうかがわせる<sup>652</sup>。

1922 年 8 月 30 日、全満競技連合の発会式が開かれた。会長は早川千吉郎(満鉄社長)、理事長には大蔵公望(満鉄理事)が就任した<sup>653</sup>。全満競技連合最初の事業は、発会式の翌日に開催された全満水上競技選手権大会で、これは極東大会予選を兼ねていた(第 14 話参照)。さらに 10 月に陸上競技とテニス、12 月にサッカー、翌年 1 月にスケートの全満選手権大会を開いた(第 9、19、28、29 話参照)。

<sup>651</sup> 岡部平太「年頭所感」『体育科教育』8 巻 1 号、1959 年 12 月。

<sup>652</sup> 「満洲体育協会と改むる全満競技連合」『大連新聞』1924 年 5 月 4 日；林田学「十有余年を顧みて実に感慨無量、満洲体協を去るに臨み」『満日』1935 年 7 月 9 日。

<sup>653</sup> 「全満競技連合成る」『満日』1922 年 9 月 1 日；「全満競技連合事業計画成る」『満日』1923 年 1 月 20 日。拙著『国家とスポーツ』110-120 頁でも初期の全満競技連合の諸事業を紹介した。

1923 年の全満選手権開催計画は表 39-1 の通りであった。なお、表中 (×) は未開催に終わったものである。この時点で武道大会の開催がすでに放棄されており、武道団体との調整がうまくいかなかったことがわかる。野球はなお希望を繋

表 39-1 1923 年度全満競技連合事業計画

|        |                          |
|--------|--------------------------|
| 1 月    | 氷上競技                     |
| 6 月    | バレーボール、バスケットボール (10 月開催) |
| 8 月下旬  | 水上競技                     |
| 8 月下旬  | 女子水上競技 (×)               |
| 9 月    | 庭球                       |
| 9 月    | 女子庭球 (×)                 |
| 10 月初旬 | 陸上競技                     |
| 10 月中旬 | 女子陸上競技 (×)               |
| 10 月下旬 | 野球 (×)                   |
| 10 月下旬 | サッカー                     |

いでいたようだが、これも失敗に終わった。このほか、女子の競技会が多数予定されていたのが注目される。これは、岡部が女子スポーツ振興に熱心だったことと関係があるだろう。岡部は 1921 年秋に来満してすぐに女子体育を語っていた<sup>654</sup>。満洲でも女子体育への理解は徐々に広がっていたが、競技会に参加するとなると話は別である。1922 年 5 月の「満鉄運動会」に岡部は婦人社員の参加を求めたが、認められなかった (第 38 話参照)。同年 8 月の全満水上選手権で女子選手が活躍したが、優秀な成績を収めた飯村敏子と杉江正子が極東大会に参加するには、世論を慎重に見極めねばならなかった (第 14 話参照)。結局、全満競技連合の初年度の活動に対しては、「竜頭蛇尾」という評価が下されている<sup>655</sup>。

全満競技連合の経費は 6000-7000 円かかると想定されていた。初年度は満鉄から年間 3000 円の補助を受け、一般有志からも 3000 円の寄附を得ていた<sup>656</sup>。しかし、会員数が約 300 名と伸び悩み<sup>657</sup>、ドル箱である野球からは協力が得られず、満鉄からの補助と寄附金頼みの運営を強いられたようである。

1924 年夏には大連で「植民地オリンピック」の開催が予定され、またおそらく運営の中心を担ってきた岡部の洋行が決まったこともあって、全満競技連合は専任主事を

<sup>654</sup> 岡部平太「女子体育の側面観」『満日』1921 年 9 月 29 日 -10 月 1 日。

<sup>655</sup> 「満洲の運動界」『満日』1924 年 1 月 1 日。

<sup>656</sup> 「全満洲の運動競技を統一し、名選手を輩出せん」『満日』1922 年 7 月 30 日。

<sup>657</sup> 「競技連合の努力で期待」『満日』1923 年 3 月 23 日。1931 年 9 月末でも会員数は 300 名だった (『満蒙年鑑』昭和 7 年版、397 頁)。

置くこととなり、1923年11月に元満日記者で「浪人生活」をしていた林田学が主事に採用された<sup>658</sup>。林田は主事就任当時を「競技界の先達たる岡部平太氏や、関屋悌蔵氏からドレだけ叱られたか、又ドレだけ教へられたか」と回顧しているが、そんな林田のもとで満洲体育協会は大いに発展し、1930年度には14185.27円の収入を得て、以下で紹介するようにさまざまな事業を手がけるまでに成長する<sup>659</sup>。

いま試みに1929年度の満洲体育協会の事業を見てみよう（表39-2）。これだけの事業を1万円弱の予算でまかなうことはとうてい困難だっただろう。年度当初の計画では、このほか内地テニスチームの招聘、欧洲スケート選手招聘、クロスカントリーレース開催などが予定されていた<sup>660</sup>。欧洲スケート選手とはクラス・ツンベルグのことだが、結局実現しなかった（第10話参照）。クロスカントリーレースは大連アスレチック倶

表 39-2 1929 年度満洲体育協会事業計画

|              |                   |    |
|--------------|-------------------|----|
| 5月19日        | 全満ハンディキャップレース@大連  | 主催 |
| 6月2日         | 全満バレーボール選手権大会@大連  | 主催 |
| 8月11日        | 全満中等学校水上選手権大会@大連  | 主催 |
| 8月15日        | 全満洲対明大対抗水泳競技@大連   | 招聘 |
| 8月17-18日     | 全満洲対京都帝大対抗陸上競技@大連 | 招聘 |
| 8月25日        | 関東州内外対抗軟式庭球試合@大連  | 主催 |
| 9月1日         | 全満水上選手権大会@大連      | 主催 |
| 9月15-22日     | 全満硬式庭球選手権大会@大連    | 主催 |
| 9月15日        | 全満軟式庭球選手権大会@大連    | 主催 |
| 9月27-30日     | 明治神宮体育大会夏季大会@東京   | 派遣 |
| 10月6日        | 全満陸上競技選手権大会@大連    | 主催 |
| 10月19-20日    | 日独支国際陸上競技大会@奉天    | 派遣 |
| 10月27日-11月3日 | 明治神宮体育大会秋季大会@東京   | 派遣 |
| 11月23日       | 全満男子籃球選手権大会@大連    | 主催 |
| 12月1日        | 全満女子籃球選手権大会@大連    | 主催 |
| 1月26日        | 全満水上競技選手権大会@奉天    | 主催 |
| 2月2日         | 満鮮スケート大会@安東       | 共催 |

<sup>658</sup>「全満洲競技連合」『大連新聞』1923年11月27日；林田学「十有余年を顧みて実に感慨無量、満洲体協を去るに臨み」『満日』1935年7月9日。

<sup>659</sup>文部大臣官房体育課編『殖民地ニ於ケル体育運動団体ニ関スル調査』23頁。同書によれば、朝鮮体育協会の収入は20602.70円、台湾体育協会は12756.28円であった。なお、満洲体育協会は関東庁からも補助金1000円を受けるようになっていた（「体協補助金」『大連新聞』1929年7月16日）。

<sup>660</sup>「昭和四年に行はれる主なる運動界行事」『満日』1929年3月9日。

楽部が主催することになる。

満洲体育協会と相前後して、種目別競技団体も設立されはじめる。表 39-3 は 1931 年以前に設立された主な種目別競技団体である。1920 年代前半に武道、後半に陸上競技、ラグビー、バスケットボールの競技団体が設立されたことがわかる。これらの競技団体はいずれも大連（と旅順）を拠点としていた。

表 39-3 満洲の競技団体

|                  |            |
|------------------|------------|
| 1921 年 10 月 9 日  | 大日本武徳会満洲支部 |
| 1922 年 2 月 11 日  | 大連市民射撃会    |
| 1922 年 4 月 16 日  | 大連講道館有段者会  |
| 1923 年 7 月 8 日   | 満洲剣友会      |
| 1924 年 10 月 8 日  | 満洲卓球協会     |
| 1926 年 6 月ごろ     | 大連陸上競技連盟   |
| 1928 年 11 月 3 日  | 満洲ラグビー蹴球協会 |
| 1928 年 12 月 11 日 | 大連籃球連盟     |
| 1931 年 10 月 18 日 | 満洲学生陸上競技連盟 |

## (2) 地域別競技団体

表 39-4 は地域別競技団体の設立状況をまとめたものである。これらの組織が「体育協会」を名乗るのは、全満競技連合が満洲体育協会に改称して以後のことである。

ハルビン日本人倶楽部は 1920 年春に 3 万円の基金を得て設立され、野球部、庭球部、スケート部、柔道部、剣道部があった<sup>661</sup>。次に早い安東運動団は 1920 年 3 月に設立され、庭球、野球、

水上運動、陸上運動の各部があり、民団の補助と寄附で運営されていた<sup>662</sup>。1922 年に内紛が生じて萎靡不振に陥ったことから、1923 年 7 月に安東運動協会に改組された。新しい協会は「運動競技の進展につれ、満鉄運動会安東支部と市民と

表 39-4 満洲の地域別競技団体

|                  |                           |
|------------------|---------------------------|
| 1919 年春          | ハルビン日本人運動倶楽部              |
| 1920 年 3 月ごろ     | 安東運動団（1923 年 7 月に安東運動協会）  |
| 1922 年 9 月 24 日  | 営口運動協会                    |
| 1924 年 8 月       | 開原体育倶楽部                   |
| 1924 年 9 月 23 日  | 奉天体育協会                    |
| 1925 年 5 月ごろ     | 鉄嶺運動協会（1931 年 5 月に鉄嶺体育協会） |
| 1925 年 9 月 6 日   | 遼陽体育協会                    |
| 1926 年 6 月 29 日  | 長春体育協会                    |
| 1927 年 7 月 13 日  | 撫順体育協会                    |
| 1928 年以前         | 四平街体育協会                   |
| 1929 年 12 月 16 日 | 旅順体育協会                    |
| 1930 年 7 月 1 日   | 鞍山体育協会                    |
| 1931 年 6 月 1 日   | 公主嶺体育協会                   |

<sup>661</sup>「哈爾賓野球界だより」『野球界』12 巻 1 号、1922 年 1 月。

<sup>662</sup>「運動団の設立」『満日』1920 年 3 月 17 日。

を打つて一丸となし、対外的に  
 当る場合の組織として生れたもの」で、庶務、野球、庭球、スケート、相撲の5部で構成された。会費は月3円だった<sup>663</sup>。安東や営口でいちはやく市中側の競技団体が組織されたのは、他の附属地に比べて満鉄社員とその家族の割合が低かったことが背景にあるだろう（表 39-5）<sup>664</sup>。

奉天の事情はやや複雑である。『満鉄附属地経営沿革全史』によると、「確か大正十二年の夏

の頃であつたと思ふ。何でも三、四人の人々が集まつて座談をして居る内に急に思ひ立つて名乗りを上げ」て奉天体育協会が設立されたという<sup>665</sup>。このころ満鉄奉天地方事務所が体育機関の統一を計画していたことは、たしかに新聞報道にも見える<sup>666</sup>。これと並行して、満鉄側有志と市中側有志が協力してプールの建設を満鉄に働きかけていた（第15話参照）。こうした満鉄と市中の協力関係が奉天体育協会の設立をもたらしたのだが、実際の設立までには紆余曲折があった。

奉天体育協会の発会式が開かれるのは、それから1年以上も経った1924年9月23日のことである。会長は満洲医大の久保田晴光教授で、常務委員に十河弥市、斎藤兼吉、

表 39-5 都市別満鉄社員・家族数

|     | 満鉄社員・家族 | 日本人人口 | 満鉄社員割合 |
|-----|---------|-------|--------|
| 撫順  | 10783   | 15174 | 71.1   |
| 瓦房店 | 2252    | 3210  | 70.2   |
| 大石橋 | 1914    | 3022  | 63.3   |
| 鞍山  | 3739    | 5943  | 62.9   |
| 遼陽  | 3084    | 5159  | 59.8   |
| 本溪湖 | 1381    | 2691  | 51.3   |
| 鉄嶺  | 1402    | 2805  | 50.0   |
| 四平街 | 1983    | 4033  | 49.2   |
| 公主嶺 | 924     | 2175  | 42.5   |
| 長春  | 3259    | 9543  | 34.2   |
| 開原  | 898     | 2644  | 34.0   |
| 奉天  | 6346    | 20570 | 30.9   |
| 営口  | 675     | 2393  | 28.2   |
| 安東  | 3127    | 11559 | 27.1   |
| 合計  | 41767   | 90921 | 45.9   |

<sup>663</sup>「庭球界の内訌」『大連新聞』1922年6月10日；「安東雑俎」『大連新聞』1922年6月26日；「運動界不振」『大連新聞』1923年5月21日；「安東運動団大に陣容を整ふ」『満日』1923年6月16日；「運動協会」『大連新聞』1923年7月12日；「安東運動協会」『満日』1923年7月12日。南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』下巻、794頁は「大正十三年」設立とするが誤りである。

<sup>664</sup>表 39-5 は昭和3年度の『地方経営統計年報』をもとに、各附属地の日本人人口に占める満鉄社員とその家族の割合を示している。日本人人口に朝鮮人は含めていない。なお、満鉄にはごく少数の朝鮮人社員がいるが、大勢に影響はないため除外していない。

<sup>665</sup>南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』中巻、757頁。

<sup>666</sup>「体育機関の統一計画」『満日』1923年7月14日。

木谷辰巳らが就任した。10月17日に奉天陸上競技大会の開催を計画していたが、これが実現したかどうかは定かではない<sup>667</sup>。11月10日、「従来奉天の体育協会は具体的のものでなし極めて薄弱なものであつた」ことから、これを具体的組織として理想的な体育協会となすべく、役員会が開かれた。その模様を紹介した『大連新聞』と『満日』は、協会の経費について、「他に財源を求める」「満鉄から寄贈を受ける」と報じている<sup>668</sup>。役員会に出席した満鉄奉天地方事務所の山西恒郎所長が、奉天駅の赤帽の請負からえられる利益を奉天体育協会の維持費に充てることを提案もしくは了承したようだ<sup>669</sup>。

こうした奉天スポーツ界統一の動きに対して、在郷軍人会支部と青年団は「自分等の仕事の邪魔」をしていると不満を持ち、青年団は次のような決議文を発表した。

従来青年団は各其の土地に於ける体育の奨励思想の善導知識の啓発をなして来たものであるが体育協会も青年団の体育奨励と同目的を有してゐるものであるから二つの機関を設くる必要ない経費の如きも地方事務所の如き行政的機関はわが青年団に補助すべきものであるのに独り体育会は駅赤帽収入を利用してゐるではないか<sup>670</sup>。

奉天の青年団は1919年に組織され<sup>671</sup>、スポーツ方面でさほど目立った活動をしてきたわけではない。とはいえ、1923年7月に在郷軍人会と青年団の有力者が発起した桜倶楽部は「国民精神の向上を計り品性を修養し体力を鍛へ武技を練り国体擁護の実を挙ぐる」ことを目的とし、射撃、乗馬、武道のほか「野球、角力、野営、遠足等」や「国民的体操」を実施することを事業内容に掲げていた<sup>672</sup>。桜倶楽部の誕生を報じた記事は、奉天地方事務所が体育機関の統一を計画していることを報じた記事と同じ日に掲載されており、すでにこの時点から奉天スポーツ界では2つの組織が対抗していた可能性

<sup>667</sup>「神嘗祭の佳き日に陸上競技大会開催」『満日』1924年10月17日。

<sup>668</sup>「奉天体育協会成る」『大連新聞』1924年11月13日；「体育連盟組織の協議会」『満日』1924年11月13日。「協会の経費は満鉄より寄贈すべく」とあるが、これが決議文に見える「駅赤帽収入」であろう。

<sup>669</sup>南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』中巻、758頁。

<sup>670</sup>「体育会は青年団に包含せらる可きである」『満日』1924年11月25日。

<sup>671</sup>「青年団組織」『満日』1919年2月17日；「青年団」『遼東新報』1919年5月2日。

<sup>672</sup>「桜倶楽部生る」『満日』1923年7月14日。

がある。そして、先の決議文からは、スポーツ界の主導権よりも経費の問題が青年団の不満の根底にあったことがわかる。

11月27日、奉天体育協会と在郷軍人会、青年団の代表が集まってこの問題を協議した結果、奉天のあらゆる運動機関を網羅する一大運動協会を設立することで合意が成立した<sup>673</sup>。その2日後にさらに具体的内容に関する協議が行われ、体育部と修養部からなる奉公会を組織することになった<sup>674</sup>。奉天体育協会は奉公会から毎年4000円の援助を受けることになっていた<sup>675</sup>。一方、奉天体育協会と満鉄運動会奉天支部の関係については、『満鉄附属地経営沿革全史』が、満鉄運動会は満鉄社員の保健体育を目的とし、奉天体育協会は奉天市民の体育向上を主眼とし、両者は組織や経費などにおいても別個の存在であったが、「二者常に一体表裏の関係」にあり、「相互扶助の状態」にあったと述べている<sup>676</sup>。

鞍山でスポーツが盛んになるのは1918年に鞍山製鉄所が設置されて以降で、満鉄運動会支部の設置も1919年と他支部に較べてかなり遅かった（第38話参照）。体育協会設立に向けた取り組みは1924年からなされてきたが、1925年12月に鞍山製鉄所庶務課長長浜哲三郎らの発起で鞍山体育協会が設立されることとなり、翌春早々に発会式が開かれると報じられた<sup>677</sup>。『満鉄附属地経営沿革全史』も、満鉄側だけでスポーツが発展することは「鞍山の体育上面白くなく又不利でもある」ことから、1926年に市民満鉄合同の体育協会が設立されたとする<sup>678</sup>。ただ、その後鞍山体育協会が活動した痕跡は見られない。さらに、1929年の満鉄運動会にさいして次のような記事が見られ、満鉄と市中の関係がうまくいっていなかったことがわかる。

従来満鉄の運動会は満鉄従事員のみの催しで町側は他所もの扱ひの感があつて市

<sup>673</sup>「奉天のあらゆる運動団体を網羅して一大運動協会を設立」『大連新聞』1924年11月29日。

<sup>674</sup>「奉天会を組織す」『大連新聞』1924年12月2日。

<sup>675</sup>南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』中巻、758頁。

<sup>676</sup>南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』中巻、758頁。

<sup>677</sup>「体育協会生る」『大連新聞』1925年12月12日；「体育協会設立」『満日』1925年12月16日。

<sup>678</sup>南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』中巻、468-469頁。『満鉄附属地経営沿革全史』は「地方事務所庶務係長阿比留乾二等の斡旋」により組織されたとするが、新聞記事には阿比留の名前は見え、長浜が中心的役割を果たしたように記されている。さらにいえば、当時の地方事務所庶務係長は中島守一だったはずである。

民をして不愉快さを覚へしめて居たものであるが本年からは町側からの参加を歓迎すると言ふ事になつたので町側としても年来の希望であり・・・・・・実業、警察、郵便局等が合同し町側連合軍として出場する事に決定し直に其旨満鉄運動会支部長に通知する処あつた<sup>679</sup>。

鞍山体育協会が設立されるのは、それから約1年後のことだった<sup>680</sup>。鞍山体育協会の創立年度（1930年度）の会計は、収入は4250円で、満鉄からの補給金が1600円、満鉄側会費は1490円、賛助特別普通会員会費550円などである。満鉄側会員のうち、職員と準職員は420人、傭員は650人であった。市中側は賛助会員50人、特別会員40人、普通会员70人である。会員構成から満鉄が主体だったことがわかる。支出については表39-6を参照されたい<sup>681</sup>。

比較のために、鞍山体育協会と財政規模がほぼ等しい四平街体育協会の1930年度の予算を紹介しよう。収入は4000円、うち満鉄からの補助金が1100円、満鉄側会費が1250円、市中側会費が700円だった。各部費は野球部の700円が

表 39-6 鞍山体育協会 1930 年度支出

|        |        |
|--------|--------|
| 秋季運動会費 | 500 円  |
| 野球部    | 1200 円 |
| 柔剣道部   | 400 円  |
| 競技部    | 400 円  |
| 氷上部    | 150 円  |
| 庭球部    | 500 円  |
| 弓術部    | 300 円  |
| 蹴球部    | 200 円  |
| 水泳部    | 250 円  |
| 卓球部    | 50 円   |
| スポンジ部  | 90 円   |
| 予備費    | 200 円  |

最多で、水泳部600円、陸上部400円、相撲部400円、庭球部250円などとなっている<sup>682</sup>。いずれの体育協会でも野球部費が多いが、とくに鞍山では野球部が優遇されていたことがわかる。

炭鉱の街撫順も満鉄の存在感が大きかった。ながらく撫順のスポーツとは満鉄のスポーツのことであった。

撫順は昔から非常に運動の盛な所である。此れは撫順の在住者が大部分は満鉄社員であり、又其の大部分が炭礦従事員であるからである。即ち多数の者が同一境遇に置かれて居るのと、年齢が相接近してゐる為と、学校出身者が多い為である。

<sup>679</sup>「従来の慣習を破り町側からも参加」『満日』1929年8月26日。

<sup>680</sup>「鞍山体育協会創立委員会」『満日』1930年7月1日。

<sup>681</sup>「鞍山体育協会創立委員会」『満日』1930年7月1日。

<sup>682</sup>「体育協会予算」『満日』1930年6月8日。

尚又歴代の炭礦幹部が運動に理解を持ち且之を奨励せられ、其の上中堅社員が良く後輩を指導せられたのも大なる原因である<sup>683</sup>。

その撫順でも 1927 年 7 月に体育協会が設立される。かつて奉天で体育協会設立に多大な援助をした山西恒一郎が撫順炭鉱次長を務めており、撫順でも体育協会設立に大きな役割を果たした。満鉄からの補助金は 1 万 3000 円あったが、それでは足りず、会費を徴収して 2 万円弱の収入を得る計画だった<sup>684</sup>。『満鉄附属地経営沿革全史』によれば、満鉄運動会撫順支部では運動に関する経費を、炭鉱から産出される石炭の原価に上乘せする形で徴収してきた。ところが 1928 年度にこの制度が廃止され、経費に不足を来すようになった。これが直接の契機となって撫順体育協会が設立されたという（前述したように、体育協会設立は 1927 年である）。さらに撫順では野球部後援会の会員券収入を野球部のみならず支部全体で活用しており、撫順体育協会はこれも引き継いだ<sup>685</sup>。1929 年度の予算を見ると、収入は 2 万円で満洲体育協会の約 2 倍の規模があった。競技別の支出は、野球部 5200 円、柔剣道 3800 円、陸上競技 1850 円、庭球 1400 円、水泳 1400 円、弓道 750 円などとなっている<sup>686</sup>。

1931 年まで体育協会がなかった公主嶺でも、市中と満鉄の合流の動きは早くから始まっていた。1926 年の状況は次のようであった。

例年挙行の春季陸上大運動会及び水泳プール、スケート其他あらゆる運動競技と娯楽機関は所謂満鉄社員のもので無論経費の点もあるので市民側は総てに分離的行動をとつてをるので満鉄側との親みにうとく其間融和を缺いてをるような感があると云ふ多数者の言に春季陸上大運動会の如きは市民側と合同にしてはとの説が各方面に台頭したが何分公園の運動会場が狭隘の結果大家族の観覧席に不足をつげると云ふことで沙汰止みとなつたまゝ、今日に至つた……<sup>687</sup>。

翌 1927 年の運動会は満鉄と市民合同で開催することが決まったものの、1929 年になっ

<sup>683</sup> 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』下巻、987 頁。

<sup>684</sup> 「体育熱の勃興目覚し」『大連新聞』1927 年 5 月 25 日；「愈々成立した撫順体育協会」『満日』1927 年 7 月 15 日。

<sup>685</sup> 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』下巻、987-988 頁。

<sup>686</sup> 「体育協会予算」『満日』1929 年 3 月 10 日。

<sup>687</sup> 「運動会の協議会」『満日』1926 年 11 月 17 日。

でも、「沿線各地で挙行しつゝある運動会は市民の親睦融和上非常なる効果を収め各地とも年中行事として重きをなしてをるので公主嶺に之れが実現を見ぬのは遺憾とするところ<sup>688</sup>」となお合同の運動会は実現できないままだった。1931年3月によりやく体育協会役員会が開催され、6月に発会式が開かれた<sup>689</sup>。

以上のように体育協会は各地それぞれの事情で成立したもので、大連の満洲体育協会の統制下にはなかった。1926年春に満鉄沿線各地を視察した満洲体育協会の林田主事は、満洲体育協会と各地の体育協会の関係について次のように述べている。

長春体協を満洲体協の支部と云ふ事は今の処相互に困難な事情あらむも日本に於ける体育協会にしても神宮競技にしても目下の処満洲では満洲体育協会を認めて居るばかりで派遣選手の如きも満洲体協の名によらねばならず又費用の分担なども實際沿線には何等課して居ない様な状態であるが将来は實際的に本部支部と云つた関係に置きたいので所謂現満洲体育協会は大連にも大連体育協会なるものを置き奉天、長春、安東の如き大都市の体育協会を合したものの、名称としたいのであるが今直に斯の如き更新は経費の都合もあり各地事情を異にする点もあるので困難であるから本問題は将来として其積りで今後は満洲体育協会との間に連絡を取り相互助け合つて行きたい<sup>690</sup>。

1929年になっても事情は変わらず、「遺憾に思はれるのは……各地に体協なるものを有しその間の連絡全くなきことであるこれら多くの体協はよろしく一丸となつて内地体協に対すべきではなからうか」という批判がなされている<sup>691</sup>。もちろん、地方の側でも言い分はあった。1930年1月26日に奉天で開催された全満氷上競技選手権大会に対して、斎藤兼吉は主催者となった満洲体育協会に対する不満をぶちまけている。

全満氷上選手権大会というのは、満洲氷滑界の恩人、医大の久保田晴光博士が中心となられて、奉天新聞社後援の下に毎年奉天で開いて来た……今から

<sup>688</sup>「市民運動会挙行」『満日』1929年6月28日。

<sup>689</sup>「オール公主嶺体育協会生る」『大連新聞』1931年3月17日；「新しく生れた公主嶺体育協会」『大連新聞』1931年6月4日。

<sup>690</sup>「全満体育協会」『満日』1927年5月20日。

<sup>691</sup> 太郎冠者「昭和四年の運動界を迎へて」『満日』1929年1月2日。

七年前、奉天体育協会と満州体育協会とが合同で主催することになった。それがいつの間にやら奉天体協の名は失せてプログラムには主催満州体育協会とのみ印刷されている。これについての私の率直な意見を述べると、歴史を無視して全然満州体育協会に移管するということは、色々な点で遺憾である、そうしない方が良かったと思えてならない<sup>692</sup>。

これは彼の不満の序の口で、以下細部にわたって問題点が並べ立てられている。地域別、競技別の各団体が体系化されていくのは、満洲国が成立してしばらくしてからのことである<sup>693</sup>。

## 第40話 大連 YMCA

日露戦争にさいして慰問事業を展開したのは仏教界に限らない（第29話参照）。日本 YMCA も軍隊慰労事業を展開していた。その第一陣として満洲に出かけたのがカーライル・V・ヒバード（Carlisle V. Hibbard）と落合吉之助であった。ヒバードは1876年生まれ、ウィスコンシン大学を卒業後、YMCAに入り、1902年来日、日本 YMCA で活動していた<sup>694</sup>。彼ら2人に続いて、益富政助、大塚素らが韓国と満洲の各地に慰労部を設け、兵士の入浴、散髪、家族との通信に便宜を図ったほか、新聞雑誌の閲覧、音楽、講談、伝道などの活動を展開した<sup>695</sup>。ただし、日露戦争中およびその直後の YMCA の軍隊慰労事業にはスポーツが含まれていなかったようである。北米 YMCA ではすでにスポーツが重要な事業のひとつになっていたが、日本 YMCA はまだその重要性を認識していなかった。

1906年9月、トマス・ウイン（Thomas C. Winn）が中心となって大連に日本基督教会が設立され、11月に大連キリスト教青年会（大連 YMCA）が組織された。YMCAに

<sup>692</sup> 日本スケート史刊行会編『日本スケート史』247頁。

<sup>693</sup> 拙稿「満洲スポーツの歩み」高嶋航、佐々木浩雄編『満洲のスポーツ史：帝国日本と東アジアスポーツ交流圏の形成』青弓社、2023年所収。

<sup>694</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』191-192頁。

<sup>695</sup> 本話の内容は拙稿「大連 YMCA と「文明化の使命」」『スポーツ史研究』35号、2022年と一部重複する点がある。

は夜学校が設けられ英語と商業が講じられるが、うち商業科はのちに拡充されて商業学校となる（大連商業学校の前身）<sup>696</sup>。大塚素もふたたび大連にやって来て、商業学校の運営に携わった。1908年4月にはこれらキリスト教関係の団体（青年会、日曜学校、商業学校、慈恵病院、婦人会、婦人救済所、禁酒会、日本基督教会）が合同で運動会を開催した。経費310円、参加者は1000名ともいわれ、当時大連で最大の運動会だった<sup>697</sup>。

遼陽は日露戦争の激戦地のひとつで、一時期関東都督府が置かれ、多数の軍人が駐在していたが、戦後は軍人の数が減少したため、1908年9月に日本YMCA同盟は遼陽から引き揚げた。翌年4月、新天地でのキリスト教伝道にさいして青年会の必要性を痛感した遼陽教会は遼陽YMCAを設立した。会にはテニスやベースボールの器具が備え付けられていたという<sup>698</sup>。

このころヒバードは北米にあって大連YMCA会館建設の資金集めに奔走していた。1909年末、ヒバードは大連に戻る。彼が集めた5万円の基金で会館の建設が始まったのは1910年6月であった<sup>699</sup>。ヒバードや大塚素らの尽力で1911年2月に大連YMCAが発足、3月1日に会館の開館式が挙行された<sup>700</sup>。さっそく、新会館では、ボーリング、柔道、剣道、バスケットボールなどの活動が始まった<sup>701</sup>。5月にはテニスコートが完成し、ヒバードが体育クラスを組織、国沢新兵衛、須田鋼鑑、大塚素らが参加した<sup>702</sup>。

このころ天津の中国人YMCAから運動競技の申し込みがあったが、時期尚早として見送られた<sup>703</sup>。6月以降、野球部、水泳部が相継いで設立され、ハンドボール、バレーボールなども始まった。まだ大連市内に野原も残っていたところに、「千燭の電灯が輝き、想像だにしなかつた、整つた体育機具を設へた体育館が建てられ」たことは、「体育の言

<sup>696</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』63頁。

<sup>697</sup> 「基督教団体大運動会」『満日』1908年3月22日；「連合運動会順序」『満日』1908年3月30日；「連合運動会と決算」『満日』1908年4月9日。

<sup>698</sup> 「遼陽基督教青年会」『満日』1909年5月30日。

<sup>699</sup> 「新築青年会館」『満日』1910年10月23日。当初の募集予定額は7万円だった（「青年会館の新築」『満日』1909年5月30日）。

<sup>700</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』64頁。

<sup>701</sup> 「青年会館竣成」『満日』1911年4月2日；「青年会館と会員」『満日』1911年4月12日。

<sup>702</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』73、206頁。

<sup>703</sup> 「青年会彙報」『満日』1911年6月4日。

業さえ一般化されてみなかった当時としては物珍しく且つ一つの驚異であつた」と『恩寵廿年』は記す<sup>704</sup>。

大連 YMCA 初年度の会員は 598 名で、うち日本人が 575 名、西洋人が 18 名、中国人が 5 名であった。日本人の職業構成は、銀行（20 名）、官吏（47 名）、商人（69 名）、職人（17 名）、大企業の社員（211 名、うち満鉄社員 143 名）、学生など（42 名）、未分類（138 名）となっている。主事は守瀬与三吉、名誉主事はヒバードで、満鉄副総裁国沢新兵衛ら大連の有力者が評議員に就任した<sup>705</sup>。ヒバードは 1911 年 9 月付の北米 YMCA 国際委員会あて報告書で、気候および社会的条件により体育事業が大いに必要とされること、大連 YMCA は日本で最良の体育館を持つが体育主事が必要であることを訴えている<sup>706</sup>。

このリクエストに応えるため、1912 年 1 月に北京の清華大学体育教授シューメーカー（Arthur Shoemaker）が来連し、4 カ月にわたって体育の講習をすることになった。シューメーカーはコロンビア大学を卒業、YMCA 国際訓練学校を経て、アメリカ東海岸でプレーグラウンドの監督や YMCA の体育主事を務めたのち、中国にやって来た<sup>707</sup>。シューメーカーは「近時泰西の科学的鍛錬の方法」によって多数の「縉紳実務家青年」（壮年組 8 名、青年組 30-40 名）を指導した<sup>708</sup>。同年秋にはインドアベースボール場が新設され、内地に先駆けてインドアベースボールが行われた。ヒバードは投手として活躍した。このほか、サッカーが行われていたことも確認できる<sup>709</sup>。

1913 年末に YMCA を紹介した『遼東新聞』の記事によれば、YMCA の体育関連事業は次の通りであった。

<sup>704</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』206 頁。

<sup>705</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』88-104 頁。守瀬については、同書 195 頁を参照。

<sup>706</sup> C. V. Hibbard, "Annual Report for Year Ending September 30, 1911." 陳肅、達格瑪・蓋茨 (Dagmar Getz)、大衛・克勞森 (David Klaassen) 整理、趙炬明審校『美国明尼蘇達大学図書館蔵基督教男青年会檔案：中国年度報告 (1896-1949)：附国際幹事小伝及会所小史』広西師範大学出版社、2012 年、4 巻、253-255 頁所収。

<sup>707</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』84、194 頁；「体育教師招聘」『満日』1912 年 1 月 7 日。

<sup>708</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』84 頁。

<sup>709</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』85 頁；拙稿「女子野球の歴史を再考する」；「大連市青年会」『開拓者』7 巻 9 号、1912 年 9 月；「青年会週報」『満日』1912 年 10 月 13 日；「青年会週報」『満日』1912 年 10 月 20 日。

体育場は最も完備せるものにして、室内運動場の設備及器具の如きは、真に完璧に近く、スチームの備へあるが故に厳寒の候と雖も、尚ほ三春の如き暖気あり、実務家のため毎日時間を制定して体操、擊劍、柔道等の指導をなし、ピンポン、ヴァレーボール、バスケットボール等の興味ある競技を行ひ、其の他運動設備としてはテニスコート三個所を有し、野球団將た満洲に覇を唱へ、弓道には長さ十五間の射的場あり、夏期には又水泳の指南あり・・・・・・冬期青年の屋外運動に便する為め、西公園町兎島冷蔵庫側の沼地凍結を利用し、同所にスケーティングコートを設け、夜間アーク灯を点じて、此勇壮なる運動を奨励しつゝあり<sup>710</sup>。

日本 YMCA 体育主事ブラウン (Franklin H. Brown) も、1914 年 9 月の報告書で、大連 YMCA について、日本で唯一系統的な体育プログラムが実施されている YMCA であり、それを導入したのがシューメーカーで、ヒバードがそれを維持していると評価している<sup>711</sup>。大連 YMCA は当時日本で最先端の体育事業が行われた場所であった。

1912 年、前田叢司が早稲田実業を卒業し大連光明洋行に就職した時のこと、「夜分なんか青年会に遊びにいけと勧められたものでここでは酒も煙草も喫はないのだからと、独身者には非常にいゝ所だから」と言われ、大連 YMCA に通った。当時、「大連の運動競技の権利を握つてゐた」のが YMCA であった。前田らは YMCA に無断で実業団という野球チームを作ったために、YMCA の人たちは激怒した。実業団との初戦に 8 対 9 で惜敗した青年会チームは、名を満洲倶楽部に改め、2 回戦、3 回戦に勝利した (第 3 話参照)。このように、満洲二大野球チームのひとつ満洲倶楽部は青年会チームを基礎として成立したものであった。

ヒバードは 1915 年 1 月に大連を離れ、ヨーロッパで捕虜収容所での慰問事業に携わった<sup>712</sup>。大戦中、YMCA はヨーロッパの軍隊に対してスポーツ活動を大々的に推進したが、ヒバードもその一翼を担ったのである。長女のエスタは同志社女子専門学校で英文学教授、戦後に同志社女子大学初代校長を務めた<sup>713</sup>。

<sup>710</sup>「其頃の青年会」『遼東新報』1913 年 12 月 30 日 (大連基督教青年会編『恩寵廿年』250-253 頁所収)。

<sup>711</sup> Franklin H. Brown, "Annual Report for the Year Ending September 30, 1914."

<sup>712</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』192 頁。

<sup>713</sup> エスタ・L・ヒバード『エスタ・L・ヒバード自伝：ある宣教師っ子の思い出』同志社女子大学、

1915年9月末、アメリカからジョン・ソーディとカルトン・パワーが来連、大連 YMCA で英語を教えるかたわら、「最も缺陷を感じ居りし体育部の指導」に任じたとあるので、スポーツ活動は一時停滞していたのだろう。この2人を迎えて大連 YMCA ではスポーツ事業が活性化する<sup>714</sup>。

1916年3月、満鉄慰藉係主任で大連 YMCA 理事も務める大塚素は、ソーディとパワーを連れて奉天、長春、撫順を回り、バスケットボールとバレーボールを紹介した。これを機に撫順ではバスケットボール熱が高まり、大連遠征が企てられたが、ソーディとパワーが病気のため無期延期となった。1917年3月、「芝罘外国語学校」の学生がベックの引率で来連、YMCA とバスケットボール、バレーボールの試合をして、大連側が快勝した（第30話参照）<sup>715</sup>。

野球も復活する。1916年夏、青年会野球チームが再建され、ソーディが毎夕熱心にコーチした<sup>716</sup>。しかし、ほどなくしてソーディが長沙へ去ると、野球チームは消滅したようである<sup>717</sup>。YMCA 野球団が大連球界に再デビューするのは1917年夏のことで、6月15日に創設が決定、山口海旋風（のち探偵小説家として知られる）が監督に就任、7月に民政署土木課との初戦を白星で飾った。その後、野球部は元満洲倶楽部の相内重太郎を迎え、連戦連勝の活躍で、営口への遠征、関西学院との対戦など大連球界を賑わせた<sup>718</sup>。これだけ派手な活動をするには元手が必要だが、幸いこの年には野球部のために400円を越える寄附があった。柔道部、剣道部、相撲部、短艇部、室内野球部も組織され、相撲部は満洲学生相撲、短艇部は第8回満鉄短艇競漕大会に出場した。これと関連して、短艇部に100円、相撲部に150円ほどの寄附がなされている<sup>719</sup>。

1918年2月の『満日』によれば、青年会野球部は「実業と満俱との間に立て両者の意思の疎通を計ると云ふ重き使命を有して生れた」もので、「満洲野球界の円満なる発

---

1999年。

<sup>714</sup>「青年会の新教師」『満日』1915年10月1日；「大連市青年会」『開拓者』10巻11号、1915年10月；大連基督教青年会編『恩寵廿年』193、207-208頁。

<sup>715</sup>大連基督教青年会編『恩寵廿年』208頁；「日支籠球大試合」『満日』1917年3月23日。

<sup>716</sup>「野球叢談」『満日』1916年7月4日。

<sup>717</sup>ソーディは1916年9月末に大連を去った（“Mr. J. D. Sawdey,” *MDN*, September 22, 1916）。

<sup>718</sup>山口海旋風「YMCA 野球部の回顧」大連基督教青年会編『恩寵廿年』302-309頁所収。

<sup>719</sup>大連基督教青年会編『恩寵廿年』400-401頁。

展」という重責を課されていた<sup>720</sup>。満洲倶楽部と大連実業団は1916年7月の試合を最後に絶交状態にあった（第3話参照）。青年会はこの両チームの間を取り持つ役割を期待されていたというわけである。しかし、同年6月の関東州野球大会への参加を最後に、青年会野球部の活動は見られなくなる。なぜか。

1917年2月時点の大連YMCAは、国沢新兵衛、大内丑之助、古郡良介ら大連の名士を評議員に、江原忠、大塚素らを理事に迎え、主事守瀬与三吉、副主事古閑亮が実務に当たっていた<sup>721</sup>。運動部には50名が在籍しており、英語学校では守瀬、古閑、パワー、ソーディらの講義を60名が受講していた。会員数は481名で、創設時よりも100名ほど減少していた。その原因は主事と副主事の対立にあった。1915年にヒバードが大連を離れると、対立はさらに高まった。守瀬は有能で熱心なキリスト教信者だったが、なぜか信者側にも青年側にも人望がなく、面と向かって罵倒するものさえいた。古閑は「斯うしたグループの人に似ず砕けた人」で、信者側には評判が良くなかったが、青年側には人気があった。ヒバードの後任ロイ・D・ハドソン（Roy D. Hudson）が着任したとき、大連YMCAは爆発寸前の火山のような状態だった。この対立には野球チームも関わっていた。古閑副主事は熱心な野球ファンで野球部を支援したが、守瀬主事は運動競技に理解も興味も示さず、野球部にはひととき冷淡で、野球部員はみな彼に反感を抱いていた。信者側も「青年会」の名前を冠したこの野球チームが教会のあらゆる規則を破り、「悪の世界の精神」のまたとない模範になっていると見なしていた。ハドソンは守瀬主事と古閑副主事に他のポストを斡旋、2人を大連YMCAから去らせることで問題を解決した<sup>722</sup>。そのさい、青年会野球部も解散させられたと思われる。1918年6月の関東州野球大会を最後に、青年会野球部は大連野球界から姿を消した。

新体制のもとで大連YMCAは勢いを取り戻し、1919年6月には会員数935名を数え

<sup>720</sup>「本年の野球界」『満日』1918年2月25日。

<sup>721</sup> 古閑については、大連基督教青年会編『恩寵廿年』197頁参照。

<sup>722</sup>「風紀地に墜つ」『満日』1918年2月18日；Roy D. Hudson, “Annual Report of Roy D. Hudson, Secretary Young Men’s Christian Association, Dairen, Manchuria, for the Year Ending September 30, 1918.”（陳肅、達格瑪・蓋茨、大衛・克勞森整理、趙炬明審校『美国明尼蘇達大学図書館蔵基督教男青年会檔案』11巻、444-448頁所収）。守瀬は辞任後、ヨーロッパでの軍隊慰問事業に従事、コロンビア大学、ユニオン大学で学ぶ。帰国後、満鉄に入社した。古閑は辞任後、満鉄に入社、その後大連民政署の嘱託となる（大連基督教青年会編『恩寵廿年』195、197頁）。

るに至った<sup>723</sup>。大連のスポーツシーンに YMCA がふたたび登場するのは 1921 年のことである。同年 2 月、大連 YMCA 会館を会場にして開かれた第 1 回大連ピンポン競技大会で青年会チームは決勝戦に進出、撫順倶楽部をあと一歩まで追い詰めながら、惜しくも優勝を逃した（第 33 話参照）。

1921 年 11 月、大連 YMCA は新名誉主事ダーギン (Russell L. Durgin) を迎えた。ダーギンは 1915 年にダートマス大学を卒業、1919 年から東京 YMCA で活動していた。ダーギンは 1926 年まで大連 YMCA に奉職、その後東京に戻り、ロサンゼルスとベルリンの両オリンピックでは日本のリエゾンオフィサーとして参加、世界レクリエーション会議に出席、また 1938 年の日本厚生協会発起人となるなど、日本におけるレクリエーション運動の推進に貢献した。1942 年まで日本にとどまり、戦後は GHQ の政治顧問としていち早く日本に戻り、YMCA の再建に尽力した<sup>724</sup>。ダーギンは赴任するとすぐにバスケットボール、バレーボール、インドアベースボール、ボーリングなどの室内スポーツを推進した。それらは「ヒバードの時代から長らく中断されてきた」ものだった<sup>725</sup>。1910 年代初めから大連に住んでいたというダーギンの妻もスポーツ好きで、日本人女性にテニスやバレーボールやバスケットボールなどのスポーツを奨励していた<sup>726</sup>。

1922 年、YMCA は黒田善八（のち満洲国体育連盟主事）を専任体育指導者として招聘、ただちに東京の主事養成所に派遣した<sup>727</sup>。黒田の学歴について、人名辞典には 1923 年に日本基督教同盟主事養成所を卒業したとのみ記されるが<sup>728</sup>、同志社倶楽部の一員としてサッカーの試合に出ていることから（第 28 話参照）、同志社と繋がりを持っていたと推測される。同志社倶楽部のチームメイトには芥川光蔵がいた。芥川は大連 YMCA 創設時以来の会員で、のちには理事も務める人物である<sup>729</sup>。黒田の招聘は芥川の尽力で実現したのではないか。大連 YMCA は黒田のもとで、バスケットボールとバレーボー

<sup>723</sup>「大連基督教青年会」『開拓者』14 巻 6 号、1919 年 6 月。

<sup>724</sup> 半谷謙寿、栗原邦秋「Russell L. Durgin に関する研究：Russell L. Durgin が果たした我国レクリエーション運動における功績」『レクリエーション研究』28 号、1993 年 10 月。

<sup>725</sup> “Indoor Sports at Y. M. C. A.,” *MDN*, January 14, 1922.

<sup>726</sup> 「大連のお若い婦人達よ」『満日』1922 年 3 月 29 日。

<sup>727</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』209 頁。

<sup>728</sup> 中西利八編『満洲紳士録 第四版』満蒙資料協会、1943 年、399 頁。

<sup>729</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』91 頁によれば、芥川は 1911 年 1 月に入会している。

ルの普及を図る。

1923 年 4 月、大連 YMCA のバレーボールチームが極東大会予選に参加するため東京へ遠征し、関東予選で優勝、日本代表の座をかけて神戸高商と対戦したが、大敗した（第 31 話参照）。

同年 10 月、全満競技連合が陸上競技選手権大会を開催したさい、バスケットボールとバレーボールの試合も実施され、大連中学と大連 YMCA が出場、バスケットボールは大連中学、バレーボールは大連 YMCA が勝った（この大会は以後、全満選手権大会として開催される）。一方、大連 YMCA も同年 11 月にバスケットボールとバレーボールの競技会を独自に開催した。この大会は翌年には排球籃球競技大会として開かれ、1925 年 10 月に全満籠球大会、1926 年 6 月に全満排球大会へと発展する。1923 年には野球部も復活し、関東州野球大会に出場するが、同年秋以降はその活動を確認することができない。

スポーツ界での華やかな活躍とは対照的に、青年会の活動は「行詰まり」の状態にあった。1926 年 7 月時点で会員数は 550 名にまで落ち込んでいた（表 40-1）<sup>730</sup>。劣勢を挽回するための方策として、従来の会館（本館）の横に煉瓦造りの新館を増築することになった。工事は 1925 年 10 月から始まり、翌年 7 月に竣工、経費は 10 万円であった<sup>731</sup>。これまで本館の体育場はホールと兼用であったが、新館が完成したことで、もっぱら体育活動に充てられることになり、各種の運動器具が設置された。また、事業拡張の第一歩として、1927 年 2 月に東京から日本 YMCA 同盟名誉主事ブラウンが招かれ、スポーツと遊戯の講習会が開かれた<sup>732</sup>。その後もバレーボールとバスケットボールの分野で、大連 YMCA は中心的役割を果たし、会員の黒田善八や原田修三らは指導者としても活躍した。

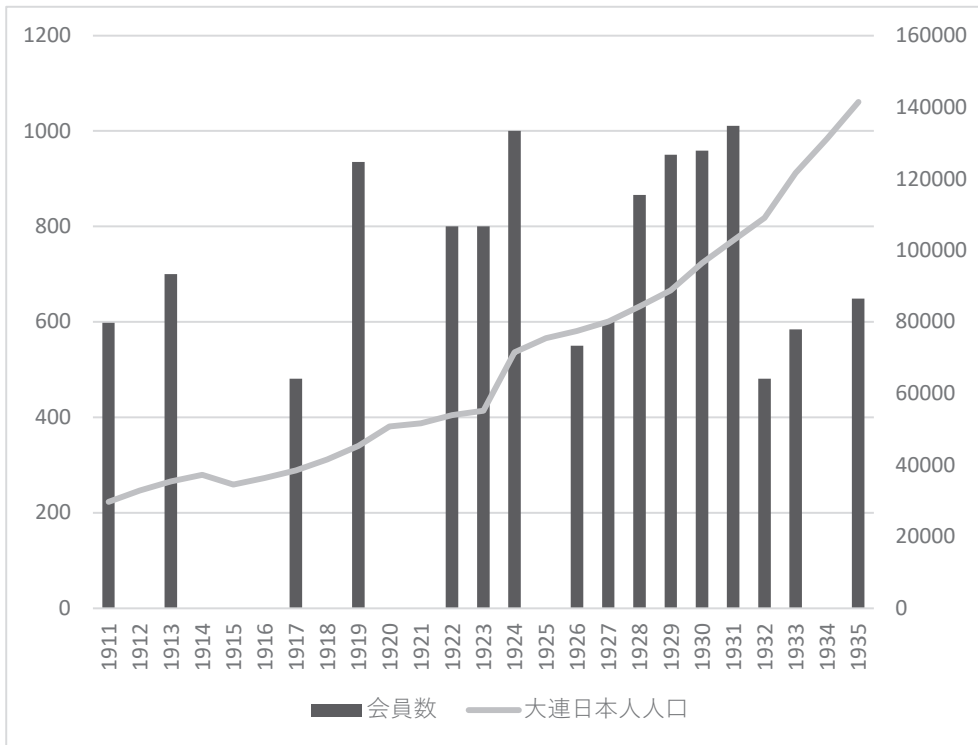
1930 年度に会員数は 1149 名に達する。翌年度には 1092 名の退会者と 423 名の入会

<sup>730</sup> 各年度の『満蒙年鑑』、『満洲社会事業年報』、『全国教化団体名鑑』、および『恩寵廿年』や関連する新聞報道をもとに作成。

<sup>731</sup> 「敷島町青年会館、盛大なる開館式挙行」『大連新聞』1926 年 7 月 5 日；「近く竣成する青年会館」『満日』1926 年 5 月 15 日；「増築工事竣工した基督教青年会館」『満日』1926 年 7 月 4 日。

<sup>732</sup> 「体育講師のブラウン氏」『満日』1927 年 2 月 5 日；「ブラウン氏体育講習会」『満日』1927 年 2 月 28 日。

表 40-1 大連 YMCA の会員数



者が出て、会員数は481名となった。この数字だけをみると、会員がほとんど入れ替わったことになる。ちなみに、1931年度の室内体育場利用者はのべ6670名、ボーリング利用者はのべ2008名、排球講習会が6回実施され、のべ360チームが参加したとの記録が残る<sup>733</sup>。かくも排球の参加者が多いのは、体育ボール導入の影響であろう（第31話参照）。

大連 YMCA は、東アジア全域に広がる YMCA のネットワークに組み込まれていたこと、中国人にも人気のあったバスケットボールとサッカーを実践していたことから、満洲における日本人と中国人のスポーツ交流の窓口の役割を果たした。先述の通り、大連 YMCA 設立後すぐに天津 YMCA から対抗競技の申し出があり、1917年には「芝罘外国語学校」を迎えてバスケットボールとバレーボールの試合が行われている。1924年には、大連中華 YMCA と連絡を取り、「日華親善の一助として華人の参加を大いに歓迎」したため、毎晩40～50名の日華人青年が YMCA 会館にやって来て、同じ

<sup>733</sup> 満洲社会事業協会編『満洲社会事業年報』満洲社会事業協会、1932年12月、69頁。

プレーを楽しみ、食事を共にした<sup>734</sup>。

関東軍が張作霖を爆殺し張学良が東三省の支配者となったあと、関東州外の中国人チームとの交流が盛んになる。1928年に東北大学、1929年に芝罘 YMCA、馮庸大学、1930年に馮庸大学、ハルビン YMCA が大連を訪れ、大連 YMCA とバスケットボールやサッカーの試合をした<sup>735</sup>。しかし、1930年に刊行された『恩寵廿年』は、中日親善はいまだ十分その目的を達成できていないと述べる<sup>736</sup>。

満洲事変後、大連 YMCA は大幅な会員減に見舞われる(表 40-1)。大連 YMCA は「満人」青年への働きかけを強め、日本語の商業学校(大連商業講習所)を設立したほか、体育、宗教を指導した<sup>737</sup>。1934年度の事業概要では、体育場の使用人数が日本人 60 回のべ 900 名、「満人」147 回のべ 2700 名と、「満人」の利用が日本人を上回った。翌年度は日本人 72 回のべ 850 名、「満人」150 回のべ 3750 名、「露人」40 回のべ 360 名と、やはり「満人」の利用が日本人より多くなっている。しかしながら、「満人」の会員は少なく、1935年度の通常会員 580 名のうち、「満鮮人」は 47 名を占めるにすぎなかった<sup>738</sup>。

満洲事変後の大連 YMCA は、なおも排球と籠球の全満大会を主催していたが、大連の日本人スポーツ界における「指導的使命」はもはや過去のものとなっていた<sup>739</sup>。大連 YMCA 主催の全満籠球大会は 1940 年 10 月を最後に開かれなくなる。

## 第 41 話 運動具店

日露戦争の最中に貝瀬謹吾が大連でテニスをする事ができたのは、そこにロシア人がつくったコートがあり、またロシア人の店にボールとラケットがあったからであ

<sup>734</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』209 頁。

<sup>735</sup> 拙稿「満洲における日中スポーツ交流(1906-1932)」。

<sup>736</sup> 大連基督教青年会編『恩寵廿年』247 頁。

<sup>737</sup> 稲葉好延「我が大連 YMCA」『開拓者』30 巻 10 号、1935 年 10 月、25-26 頁。

<sup>738</sup> 満洲社会事業協会編『満洲社会事業年報』満洲社会事業協会、1934 年 12 月、223-229 頁；満洲社会事業協会編『満洲社会事業年報』満洲社会事業協会、1935 年 12 月、232-240 頁。

<sup>739</sup> 稲葉好延「我が大連 YMCA」。表 40-1 からは、大連の日本人人口に占める YMCA 会員の割合が徐々に低下していたことが読み取れる。

る（第 29 話参照）。このように、スポーツに用具は欠かせない。大連では早くも 1905 年 4 月下旬には日本人の商店でテニスの用具を購入できるようになっていた<sup>740</sup>。当時はまだ運動具の専門店はなく、書店、自転車店などが運動具を売っていた。1908 年に自転車店の十字堂がスケートを取り寄せたことはすでに紹介したが（第 9 話参照）、1928 年に体育堂主人も「確廿年ほど以前だと思ひますが当時伊勢町に十字堂と云ふ自転車屋があつた、その当時大連には自動車が一二台しかなかつた時代だつたのにその主人は自動車を持つて居ると云ふ摩登振りでその上スケートを売つて居た、それが大連に於けるスケートの販売の最初だと考へます」と語っている<sup>741</sup>。

奉天野球界の草分け的存在である田中幸英は明治末年の運動具に関してこう述べている。

当時の事だから独立した運動具店等はなく、大連の大阪屋と鉄嶺の大阪屋が書店の傍ら販売してゐた程度で奉天の大阪屋は小西辺門にあるにはあつたが書籍だけしきや扱はず、遙々大連まで買出しに行くのが関の山で、〔明治〕四十四年には前年度から引続く黒死病禍の真たゞ中を戦戦兢々として鉄嶺大阪屋迄調達に出向いた事等を記憶してゐる<sup>742</sup>。

大阪屋号書店は、1904 年に営口で開業した雑貨店大阪屋が前身で、のち書店に転向、大連を拠点とし、満鮮各地に支店を展開していた<sup>743</sup>。

大連でも手軽に入手できるわけではなかった。大連実業野球団の柄沢幸男によれば、実業団の初期時代〔1912 年前後であろう〕に一番こまつたのは道具を売る運動具店のなかつたことだつた、ボールは三越の支店に頼んで本店からひいてもらつたがさて縫目がほころびると選手がつくろいをなほしたものだ。実業団として最初の道具を買入れたときは三越光明洋行安宅商会それから高橋〔強平〕さん、前田〔俊介〕さんの五名、合計五百円也で道具を買入れた<sup>744</sup>。

<sup>740</sup> 貝瀬謹吾「庭球思出誌」『読書会雑誌』9 卷 12 号、1922 年 11 月。

<sup>741</sup> 「スケート夜話」『満日』1928 年 12 月 23 日。

<sup>742</sup> 田中幸英「大正初期の頃（一）」『満日』1941 年 1 月 28 日。

<sup>743</sup> 大阪屋号商店の歴史については、湯原健一「大阪屋号書店小史」『愛知大学国際問題研究所紀要』153 号、2019 年 2 月を参照。ただし、運動具については触れられていない。

<sup>744</sup> 宮崎愿一、安藤忍、立上武三編『大連実業野球団二十年史』安藤商店、1932 年、45 頁。

という。

1916年6月、関東州野球大会の創設を記念して、大阪屋号書店、志岐組雑貨部、満書堂文具部が『満日』に広告を出した。いずれも内地の運動具店（東京山川商店、美満津商店、大阪中村商店、京都山本商店）の特約店、満洲代理店であることを謳っていた<sup>745</sup>。

満洲で最初の運動具専門店は大連市伊勢町の山本商店大連支店（山本運動具店）で、1916年3月に京都山本商店の支店として開かれた。翌1917年の第2回関東州野球大会以降、山本運動具店は大会に花輪や懸賞を提供するなど積極的に宣伝活動を展開した。『満日』には、関東州野球大会で、折れたバットを見てニヤリとしている山本卯太郎支店長のイラストが掲載されたことがある。バットが折れれば折れるほど、売り上げも増すというわけである<sup>746</sup>。

1936年に、清田正憲（1918年に大連実業団に入団）は当時の野球用具が和製と舶来品のどちらかと聞かれ、「上海から入って来た舶来のバットを使つてゐました。売つてゐるところは三越と満書堂、今の大山通の文房具店で、ロンドン製とかいてありました」と答え、値段はバットが1本6～8円、ボールが粗目65銭、細目80～85銭だったと述べている<sup>747</sup>。1924年に後述の体育堂が内地製のバットを2円50銭～6円50銭で売っていたことと比較すると<sup>748</sup>、かなり高かったことがわかう。

1920年10月、桑原潔美なる人物が大阪美津濃商店と特約を結び安価に運動具を提供するとのふれこみで美満洲商店を開店した<sup>749</sup>。翌年5月の関東州野球大会で花環を寄贈、8月に来連した神戸高商野球団の試合の観覧会員章販売店に挙げられていることから、1年近くは営業していたようだが、その後の消息は不明である<sup>750</sup>。1922年2月の

<sup>745</sup>『満日』1916年6月11日（広告）。

<sup>746</sup>「スパイクの煙」『満日』1920年5月22日。

<sup>747</sup>「BM戦の昔を語る⑤」『満日』1936年6月1日。

<sup>748</sup>『満日』1924年4月16日（広告）。

<sup>749</sup>「運動具店開業」『満日』1920年10月25日。

<sup>750</sup>「優勝チームへ」『満日』1921年5月12日；「神戸高商実業団野球試合観覧会員章」『満日』1920年8月28日。当時はまだ入場料の徴収が禁止されていた（第4話参照）。観覧会員章は美満洲運動具店のほか、大阪屋号書店、山本運動具店、満書堂書籍部、山崎新聞店、共益社で販売された。

美津濃運動具の広告は美満洲商店に触れないばかりか、「販売店募集」と書いているので、美満洲商店はこの時点ですでに廃業していたと思われる<sup>751</sup>。

1920年代大連における二大運動具店のひとつ、体育堂が大山通りに開店したのは1922年3月のことである。設立者は和洋雑貨を扱う白石洋行の元支配人、遠山源造であった<sup>752</sup>。山本運動具店と体育堂はライバル会社としてさまざまな形で張りあうことになる。ここでは卓球について見ておこう（第33話参照）。

1921年2月、満日社主催のピンポン大会に、山本運動具店は山本倶楽部を組織して参加するが、1回戦で強豪撫順軍に当たり、あえなく敗れた<sup>753</sup>。翌1922年2月の第2回満洲ピンポン大会と11月の第1回大連ピンポン大会（満日社主催）に、山本運動具店は優勝旗を寄贈、さらに山本倶楽部として参加をした<sup>754</sup>。翌1923年の第2回大連ピンポン大会には体育堂も参加し、山本倶楽部と体育堂が決勝戦に進出した。開店してまもない体育堂にとって、山本運動具店寄贈の優勝旗を勝ち取る宣伝効果は絶大なものがあつたはずだが、山本倶楽部に惜敗した<sup>755</sup>。山本倶楽部は1924年2月の第4回全満洲ピンポン大会も制するが、同年11月の第3回大連卓球大会では体育堂が優勝、翌年2月の第5回全満洲卓球大会ではまたもや山本倶楽部と体育堂が決勝戦で対戦し、山本倶楽部が2連覇を果たす、という具合に両チームは鎬を削った<sup>756</sup>。卓球大会に参加するだけではあきたらず、1926年11月に体育堂が体育卓球大会を創設すると、1930年12月には山本運動具店がMP優勝旗争奪卓球大会を開催した<sup>757</sup>。1932年2月、満洲卓球協会が大会で使用するボールの販売者として、山本運動具店と体育堂を指名したのも、これまでの貢献が評価されたのだろう<sup>758</sup>。

運動具店が卓球に力を入れたのは、卓球が軟式テニス、軟式野球、スケートなどと

<sup>751</sup>『満日』1922年2月5日（広告）。

<sup>752</sup>「体育堂開業」『満日』1922年3月28日。

<sup>753</sup>「南満ピンポン大会第一勝戦の盛観」『満日』1921年2月12日。

<sup>754</sup>「我社主催ピンポン大会優勝チームへ」『満日』1922年2月5日；「ピンポン大会の優勝者へ贈る」『満日』1922年11月23日。

<sup>755</sup>「我社の主催せる卓球戦」『満日』1923年11月26日。

<sup>756</sup>「大連軍の雪辱したる我社の全満卓球大会」『満日』1924年2月12日；「互の妙技に火花を散らした卓球戦」『満日』1924年11月24日；「覇権は遂に山本軍へ」『満日』1925年2月23日。

<sup>757</sup>「体育卓球大会」『満日』1926年10月20日；「MP優勝旗争奪卓球戦」『満日』1930年11月21日。

<sup>758</sup>「卓球協会で使用ボール指定」『満日』1932年2月7日。

ならんで満洲で最も人気のあるスポーツだったからである（第 38 話参照）。もちろん、軟式テニスや軟式野球でも積極的な宣伝を展開していた。たとえば、体育堂は 1925 年 9 月にスポンヂボール大会、1930 年 10 月にアマチュア庭球大会を主催している<sup>759</sup>。1931 年 7 月に日本軟式野球協会大連支部が設立されると、体育堂店主遠山源造は常任理事に就任、体育堂に支部の事務所を置いた。もちろん、同支部の主催する大会では体育堂が販売する軟式ボールが使用された<sup>760</sup>。

大連には運動具店がいくつあったのか。大連商工会議所編『大連商工名録』（大連商業会議所、1927 年）の「運動具店」の欄に挙げられる運動具店は以下の通りである。

表 41-1 大連市内運動具店

| 業種別       | 卸／小売 | 商号     | 氏名／会社名  | 営業所     |
|-----------|------|--------|---------|---------|
| 運動具、書籍、文具 | 卸、小  | 大阪屋号商店 | 浜井松之助   | 浪速町 138 |
| 運動具、書籍、文具 | 卸、小  |        | 合資会社満書堂 | 浪速町 94  |
| 運動具、柔剣道具  | 卸、小  | 山本運動具店 | 山本卯兵衛   | 伊勢町 94  |
| 運動具、柔剣道具  | 卸、小  | 陸商会    | 合資会社体育堂 | 大山通 32  |
| 運動具       | 小    | 田邊商店   | 萩原芳雄    | 浪速町 126 |
| 撃剣道具      | 小    | 古川直    |         | 淡路町 11  |
| 撃剣道具      | 小    |        | 笹岡久安    | 淡路町 10  |
| 大弓        | 小    |        | 浜田龍次郎   | 奥町 82   |

このほか、三越のような百貨店から、雑貨屋、靴屋などの中小商店、さらには中国人の露店市場である「小盗市場の軒先にまでグローブ、ミットに代つてスケートが時を得顔にぶらさがつて居」た<sup>761</sup>。満鉄社員消費組合も運動具を販売していた<sup>762</sup>。この日本最大の消費組合の参入は、運動具店にとって大きな脅威だったはずである。

1929 年の『満日』の記事によれば、山本運動具店と体育堂の年間売上高は 9 万 2000 円で、うち野球が 1 万 9300 円、庭球が 1 万 9000 円、陸上競技が 1 万 9000 円、蹴球が 9700 円、スケートが 7500 円、卓球が 4000 円、その他 1 万 3500 円だった。売上の 8

<sup>759</sup>「スポンヂボール大会」『満日』1925 年 9 月 7 日；「大連アマチュア庭球大会」『満日』1930 年 10 月 6 日。

<sup>760</sup>「スポンヂ野球の統一を図る」『満日』1931 年 7 月 9 日。

<sup>761</sup>「満洲スケート界今冬は多事」『満日』1928 年 12 月 2 日。

<sup>762</sup>「満鉄社員消費組合分配単価表」『協和』13 号、1929 年 11 月 1 日。

割 5 分が大連で売られ、残り 1 割 5 分が奉天、長春、撫順などに売られた。大口の消費者である満洲倶楽部は東京の玉沢運動具店から、大連実業団は東京のカジマヤから直接ボールを購入していたし、三井物産、正金銀行、日本郵船はテニス部の硬球をロンドンから直接輸入していた。三井だけで年間 100 ダース、1000 円分を輸入していた。このほか、市内の各運動具店や三越でも運動具が売られていた。野球用具に関しては、体育堂では売上高の 3 分の 1 をバット（うち 6 割が舶来品）、山本運動具店では自社製ボールが占めていた。庭球の売上高の 7 割は軟球で、体育堂ではラケットを年間約 2500 本売りさばいていた。蹴球はサッカーが 6 割 5 分、ラグビーが 3 割 5 分を占めた。最大の得意先は学校である。また、大連は自由港のため関税がかからず（内地では運動具に 50% の関税がかかった）、日本製品と舶来品の価格差があまりなかった。ゴルフと硬式庭球には舶来品が多かったが、この 2 つのスポーツはブルジョアの愛好者が多いためだという。中国人への販売は、体育堂は売上高の 5 分、山本運動具店では 1 割で、その多くがサッカー関係、残りが服装や庭球用具だった。最近中国人のあいだに運動熱が高まっており、日本人運動具店が「此の方面に活躍してくれる事を熱望してやまぬ」と記事は記す<sup>763</sup>。山本運動具店は中国語新聞『泰東日報』に広告を出すなどしていたが<sup>764</sup>、結局のところ中国人向けの販売額は大幅に増加することはなかったと思われる<sup>765</sup>。日本人相手の商売しかない（できない）というのは在満日本人の商人の通弊だったからである。柳沢遊はこれを「共食主義」と呼んでいる<sup>766</sup>。

1930 年 1 月、東京の玉沢運動具店が大連連鎖街に支店を開設した<sup>767</sup>。玉沢運動具店も玉沢倶楽部を組織してアイスホッケー大会に参加したり、中学校の準硬球大会を開催したりして、売上を伸ばした<sup>768</sup>。満洲事変からほどなくして姿を消した山本運動具店に代わって、大連を代表する運動具店となる。

大連以外に目を向けると、旅順の小森運動具店、奉天の野田運動具店、増田運動具店、

<sup>763</sup>「用具から見た満洲運動界」『満日』1929 年 10 月 29-30 日。

<sup>764</sup>『泰東日報』1929 年 3 月 23 日（広告）。

<sup>765</sup>中国人側の状況は定かではない。今後の課題としたい。

<sup>766</sup>柳沢遊『日本人の植民地体験：大連日本人商工業者の歴史』青木書店、1999 年、74-75 頁。

<sup>767</sup>「玉沢運動具店」『満日』1930 年 1 月 19 日。

<sup>768</sup>「関東州氷滑大会ホッケー予選」『大連新聞』1931 年 1 月 16 日；「準硬球複試合」『満日』1931 年 5 月 10 日。

営口の田口運動具店、安東の坂井屋運動具店、鉄嶺のまつや運動具店など各都市に運動具専門店があり、運動具の販売だけでなく、スポーツの振興にも努めていた。なかでも、奉天の野田運動具店は1922年という早い時期からスポーツ大会を開催し、奉天スポーツ界の発展を支えていた<sup>769</sup>。

内地の商人も満洲のスポーツの興隆に熱い視線を注いでいた。大阪市役所商工課貿易調査係は外務省に体育器具調査を依頼した。これに対する遼陽日本領事館の報告(1925年2月3日付)が残っている<sup>770</sup>。それによれば、遼陽、鞍山で体育器具を扱う日本人の商店には下記のものがあった(中国人の商店は該当なし)。

表 41-2 遼陽、鞍山の運動具店

|                       |        |        |
|-----------------------|--------|--------|
| 遼陽東洋街七                | 金光堂    | 北川武八郎  |
| 遼陽白塔大街七               | 中村屋    | 藤本熊吉   |
| 遼陽 <sup>マモ</sup> 家大街三 | 大川運動具店 |        |
| 鞍山赤城町一二三              | 大盛堂    | 酒瀬川伝太郎 |
| 遼陽、鞍山両地ニ於ケル満鉄会社消費組合   |        |        |

同報告は満洲(とくに遼陽)のスポーツの状況について次のように分析する。夏季は野球、庭球(大部分が軟式)、マラソン、ゴルフ、乗馬が盛んで、冬季はスケートが唯一の運動となり、満鉄や邦人有志が時々運動競技大会を開催している。中国人はあまり運動をしないが、満鉄経営の学校に通う中国人の間では運動が盛んになりつつあり、夏季は庭球、冬季はスケートをしている。宣教師ら外人は、硬式庭球以外はあまりしない。そのうえで、満鉄沿線に在住する日本人の間でスポーツが年々盛んになっているので、庭球、野球、スケート用具の対満輸出は見込みがあるが、ゴルフは時期尚早である。この報告を受けて、大阪市役所がどのように対応したかは不明である。

日本人が多く、各種スポーツの盛んな大連のような所はさておき、満鉄沿線各都市での運動具販売は厳しい競争にさらされていた。1930年12月の「北満に於ける日本商品の劣勢なるものに関する調査(上巻)」は、ハルビンでの運動具販売の状況を伝え

<sup>769</sup>「少年野球大会」『満日』1922年10月16日。

<sup>770</sup>「体育器具調査方ニ関スル件」(JACAR〔アジア歴史資料センター〕: B12082492000)。

てくれる。同地のスポーツの状況もわかるので、簡単に紹介していく<sup>771</sup>。

野球は日本人だけで、しかも衰退しつつあり、各運動具店は取り扱いを中止している。スケートはフィギュア用が最も多く、次いでホッケーで、スピード用のロングはあまり売れない。スケートは広く流行しており、すべてドイツ製で、日本製品は値段が倍もするうえ、品質も「到底問題で無い」。ホッケー用スティックはカナダ製が用いられる。日本製は折れやすく高い。テニスも人気があり、イギリス製のものが歓迎されている。ただ、ハルビンに遠征してくる日本人選手に刺戟されて、ロシア人も日本製品を買うようになってきた。競争相手は安価なインド製品である。中国人は上海製を使用しているが、安いだけで品質はよくない。ネットや革製ボールは上海製が多く、日本製より 40% 安い。ランニング靴はドイツ製やアメリカ製は高いので日本製がほとんどを占める。中国側の学校で運動熱が盛んになっているので、将来はハルビンで作られるようになると観測されている。結論として、テニスのラケットが有望であるとし、内地の選手が遠征するさい、広告として使ってもらうのが「最も利き目がある」。テニスや陸上競技で日本選手が進出するにともない、日本製運動具への信頼も高まったことがわかる。

1930 年の調査で日本製品は酷評されていたが、1935 年の調査では日本製品はシェアを拡大している<sup>772</sup>。たとえばスケートは、かつてはドイツ製が独占していたが、日本製品が増大していた。日本製品の品質が向上したこともあるだろうが、満洲国建国とそれに伴う日本の北満進出、とりわけ北満鉄道の買収が最大の要因であろう。

## 第 42 話 中国人のスポーツ I (史興隆兄弟と水泳)

満洲の日本人小学校では 1910 年から集団水泳を実施してきた。日本側が運営する中国人向け初等教育機関である公学堂もほどなくして集団水泳に参加した(第 15 話参照)。1919 年夏、夏家河子海水浴場で海水浴をしていた中国人が倒れているのが発見

<sup>771</sup>「北満に於ける日本商品の劣勢なるものに関する調査(上巻)」『哈爾濱商品陳列館パンフレット』150 号、1930 年 12 月。

<sup>772</sup>「哈爾濱に於ける運動具及附属品」(JACAR: B09041634500)。

され、コレラが原因であることが判明、夏家河子は游泳禁止となった<sup>773</sup>。この出来事から中国人も海水浴を楽しんでいたことがわかる。とはいえ、一般に中国人は水泳に対する関心が低かった。

1920年7月に設立された大連中華青年会の最初の事業はコレラ予防の講演会・映画会と海水浴だった<sup>774</sup>。大連中華青年会の呼びかけに約20人の青年が応じ、傅立魚会長の引率で浜町に向かうが、入口に海水浴禁止（コレラのため）の張り紙があったため、急遽老虎灘に向かった。まったく泳げないものが十数人おり、日本人の水泳教師に泳ぎを教わった（傅立魚と親しい大陸青年団団長の金子雪斎が教師を紹介した）<sup>775</sup>。傅立魚はこれまで海水浴の有益無害なることを主張してきたが、世間の人々は誤解して「体が弱いものは〔海に〕入るべきではない」とか「海水は冷たいので〔海に〕入るのは耐えられない」などと言っているとして、翌8月に「海水浴と衛生」と題する文章で海水浴の利点を詳しく論じた<sup>776</sup>。

1922年に陸上運動会を開催した大連中華青年会は、1923年8月に第1回水上運動会を開催する。開会の挨拶で、傅立魚は「中国は大陸国家で海岸線が短いため、中国人は水上運動にあまり注意してこなかった。水上運動は陸上運動より重要で、身体を鍛錬できるだけでなく、水上で不測の事態を防止することができ、非常に有益なものである」と水泳の意義を強調した。競技には大連中華青年会、電鉄青年団、大連の各公学堂の生徒らのべ300人が参加、観客は2000人に達した<sup>777</sup>。

第2回水上運動会は1924年9月に開かれた。前回は初めての大会であり、また水泳の経験者も多くなかったことから、日本人も大会役員として運営に加わったが、今回役員は中国人だけで構成した<sup>778</sup>。日本人は顧問としての参加で、岡部平太、関屋悌蔵、

<sup>773</sup>「夏家河子に真性虎疫発生せり」『満日』1919年7月25日；「夏家河子禁止」『満日』1919年7月29日。

<sup>774</sup>汪小村「会務記事」『大連中華青年会会報』創刊号、1921年7月。

<sup>775</sup>「中華青年会海水浴開始」『泰東日報』1920年7月23日；「青年軍開場飛躍」『泰東日報』1920年7月27日。

<sup>776</sup>「海水浴と衛生」『泰東日報』1920年8月8日。

<sup>777</sup>「華人水上運動会」『満洲報』1923年8月26日。

<sup>778</sup>「明日挙行之水上運動大会」『満洲報』1924年9月6日。

山本芳松、和田次衛ら十数人の名が挙がっている<sup>779</sup>。

大連で盛んだった遠泳大会に中国人が初めて参加したのは1925年のことである。この年の3マイル遠泳大会に叢樹茂ら大連中華青年会の会員5名が参加した。参加者40名中、完泳者は25名で、うち4名が中国人だった<sup>780</sup>。

史家兄弟の長男、史興隆が登場するのは、同じく1925年8月に開かれた第3回水上運動会である。沙河口公学堂の生徒だった史興隆は少年組200mと400mで3位に入っている<sup>781</sup>。

それから1年で史は大いに力をつける。1926年の第4回水上運動会で史は50m自由形(37秒)、200m自由形(3分16秒)、400m自由形(7分7秒)に優勝した<sup>782</sup>。史興隆、叢樹茂、白永興の3人は水上運動会の2日後に開かれた満鉄水泳部主催の水泳大会にも参加、史が400m自由形と1500m自由形(27分53秒4)に、白が200m平泳ぎに優勝したほか、叢も50m自由形で2位に入った<sup>783</sup>。とりわけ史の活躍は日本側の目を引いた。

此の大会に於て今迄問題にもされてゐなかつた支那側の水泳界が此の大会に於て認められて来たことは特筆に値する傅立魚氏が中華青年会の水上大会で将来の吾々は極東大会にも万国オリンピック大会にも選手を此の満洲から出しスポーツを通じて世界の青年諸君と大いに親まねばならぬと激励したのも故ある事と思はれる。沙河口公学堂の史興隆君が一般の競泳四百米突千五百米突に好レコードで優勝した事は同大会に於ける一大収穫で……泳ぎ方も体のこなしもよいから将来は良いコーチに就いて大いに技を磨けば極東に覇を競ふ事も出来やう<sup>784</sup>。

1927年8月、10年ぶりに10マイル遠泳が挙行された。前回はだれも完泳できず、満洲の海で10マイルは不可能だと考えられたが、今回は35名の参加者が完泳した(第14話参照)。この35名のなかに、2名の中国人が入っていた。孫広琛と白永興である。

<sup>779</sup>「中華青年会水上運動会」『満日』1924年9月7日。

<sup>780</sup>「中華青年会四童子、三英哩遠泳」『泰東日報』1925年8月11日。女子も初めて参加し、13歳の飯村昌子が完泳している(「三哩の遠泳会」『満日』1925年8月11日)。

<sup>781</sup>「第三次中華水上運動会紀略」『泰東日報』1925年8月31日。

<sup>782</sup>「中華青年会主催之水上運動会盛況」『泰東日報』1926年8月31日。

<sup>783</sup>「盛会を極めた満鉄水泳大会」『満日』1926年9月1日。

<sup>784</sup>「水煙の跡」『満日』1926年9月2日。

孫は19歳、中華青年会小学校を卒業して、天津の南開中学に在籍しており、陸上競技とサッカーの選手でもあった。父の孫子傑は大連中華青年会の武術教師、また山東同郷会副会長を務めていた<sup>785</sup>。白永興は華商英日文補習学校を卒業し、黄県崇実学校に進学、サッカーや武術にも秀でた<sup>786</sup>。

同月の第5回水上運動会で史興隆は50m自由形(35秒2)、200m自由形(3分8秒2)、400m自由形(6分45秒8)に優勝<sup>787</sup>、翌1928年8月の第6回水上運動会では50m自由形(30秒)、200m自由形(3分3秒4)、400m自由形(6分37秒4)、800m自由形(14分)に優勝した。史は「日本水泳界名流の合田〔和田次衛〕の得意の門生」で、和田はいつも史の泳ぎを見守り、その勝利を喜んだ。ふたりの関係は「運動は国境を分かたず」と描かれた<sup>788</sup>。第6回水上運動会は、張作霖が関東軍に爆殺され、大連中華青年会会長の傅立魚が関東庁当局に逮捕・追放された直後に開かれたことに注意する必要がある。大連中華青年会は中華ナショナリズムの象徴から日中友好の象徴へとその役割を転換させつつあり、和田と史の師弟関係は大連中華青年会の新たな役割を誇示するのに相応しいエピソードだったからである<sup>789</sup>。ちなみに、大連中華青年会主催水上運動会の顧問でもあった和田は満鉄社員で、1921年の極東大会では日本代表水泳主将を務め、1923年の極東大会にも出場した。柔道家としても活躍し、1929年のいわゆる天覧武道大会に満洲代表として参加している(第14、35話参照)。

1929年、史興隆はもはや大連中国人の代表ではなく、全満洲の代表になっていた。同年8月に明大水泳部が来征したさい、史は全満洲軍の一員として1500m自由形に出場した。さらに9月の全満水上選手権大会では、1500m自由形に24分14秒7の満洲新記録で優勝している<sup>790</sup>。その1週間後の大連中華青年会主催第7回水上運動会で史は

<sup>785</sup>「中華健児之榮譽」『泰東日報』1927年8月10日。同記事は「孫広珠」とするが他の史料(「中華青年会小学校高等第一班学生調査表」『青年翼』5巻6・7号、1926年7月1日など)により、「孫広琛」が正しいと判断した。

<sup>786</sup>「成績美満之水上運動会」『満洲報』1924年9月16日；「中華健児之榮譽」『泰東日報』1927年8月10日。

<sup>787</sup>「中華青年会主催、中華水上運動会」『泰東日報』1927年8月21日。

<sup>788</sup>「悲壯環境中之中華水上運動会」『泰東日報』1927年8月28日。

<sup>789</sup>大連中華青年会については別稿を準備している。この間の政治的背景については、拙稿「満洲における日中スポーツ交流(1906-1932)」を参照。

<sup>790</sup>『満蒙年鑑』昭和5年版、507-508頁。

役員に招聘され、正式の競技ではなくデモンストレーションに参加した。史は南満工専に進学していたが、同校に水泳部はなく、引き続き和田の指導を受けていたようである。史の弟、史興鷺も活躍した。興鷺は成年組 200m 自由形（3 分 21 秒）、400m 自由形（6 分 59 秒）で、ダントツの 1 位だった<sup>791</sup>。この大会は女子の参加を奨励した点でも注目される。女子の水泳はまさに「破天荒」の出来事だった。大連中華青年会の冷晴昧（11 歳）、白永珍（12 歳）、張婉華（12 歳）が 50m 自由形に参加した<sup>792</sup>。

1930 年、史興隆は東三省の代表、さらに中国の代表へと飛躍する。この年は 5 月に東京で極東大会が開かれる。その前月に杭州で開かれる全国運動会が中国代表を決定する全国予選を兼ねていた。その全国運動会に遼寧省から出場する選手を決める予選会が 3 月に瀋陽で開催された。水泳に関しては、瀋陽に適当なプールがなかったため、大連の保健浴場で予選が行われた（第 16 話参照）。水泳の遼寧省代表 8 名のうち、4 名（孫広琛、宋子仁、史興隆、叢樹茂）が大連中華青年会の選手で占められた<sup>793</sup>。全国運動会で史興隆は 440 ヤード自由形、1 マイル自由形で 1 位、100 ヤード自由形で 2 位、50 ヤード自由形で 3 位となり、個人総合優勝を果たした<sup>794</sup>。史はついに中国一の水泳選手となったのである。しかし、極東の壁は厚かった。400m 自由形の B 組予選で史興隆は 6 分 16 秒 4 の 4 位（最下位）に終わった。棄権者が出た関係で出場者全員が決勝に進むことができたが、史はやはり最下位の 7 位であった。決勝のみの 1500m 自由形と 200m リレーも最下位であった<sup>795</sup>。結果は出なかったものの、中国代表として日本やフィリピンの選手と競技したことは、史興隆の民族意識を大いに刺激したであろう。

1930 年の第 8 回水上運動会では、史家の三男、興陸（沙河公学堂）がデビュー、

<sup>791</sup>「水泳家史興隆被聘為職員」『満洲報』1929 年 8 月 29 日。南満工専には 1912 年の校友会設立とともに水泳部が設けられたが、1926 年に廃止された（南満洲工業専門学校編『南満洲工業専門学校創立三十年誌』南満洲工業専門学校、1942 年、216 頁）。

<sup>792</sup>「中華水上運動会、歓迎女界奮起」『満洲報』1929 年 8 月 18 日；「中華水上運動会、競技成績続誌」『満洲報』1929 年 9 月 10 日。白永珍は白永興の妹だろう。

<sup>793</sup>「参加全国運動<sup>ママ</sup>大遼寧省選会之水泳選手」『満洲報』1930 年 3 月 21 日。実際に杭州に派遣されたのは 6 名だった（大連の 4 名を含む）。大連側は史興鷺を遼寧省代表に入れるよう働きかけたようだが（「水泳選手選出後与遼寧選手一同出発」『満洲報』1930 年 3 月 21 日）、実現しなかった。

<sup>794</sup>「游泳」『申報』1930 年 4 月 11 日。

<sup>795</sup>大日本体育協会編『第九回極東選手権競技大会報告書』大日本体育協会、1930 年、228-232 頁。

少年組 400m 自由形で 2 位に入った。今回は史興隆も競技に参加、50m 自由形(32 秒 4)、800m (13 分 32 秒) に優勝、史興鷺も 200m 自由形で優勝し、800m 自由形では兄について 2 位に入るなど、史家三兄弟が大活躍した<sup>796</sup>。史興隆はその翌週に開かれた満洲体育協会主催、全満水上選手権大会に出場、400m 自由形 (5 分 52 秒 2) と 1500m 自由形 (23 分 18 秒 6) で優勝した。このうち 1500m 自由形は満洲新記録であった<sup>797</sup>。

1931 年、史興隆は興鷺を連れて、瀋陽の馮庸大学に転学した<sup>798</sup>。史興隆、興鷺兄弟は奉天軍 (満鉄附属地代表チーム) の一員として競技に参加したほか<sup>799</sup>、大連中華青年会主催の第 9 回水上運動会にも興陸とともに参加した。一方で 3 人は 9 月に全国運動会遼寧省予選に出場し、史興隆は 50m 自由形 (33 秒 6)、100m 自由形 (1 分 21 秒 3)、400m 自由形 (6 分 12 秒 4)、1500m 自由形 (24 分 25 秒 1) の各種目に優勝、とくに 400m と 1500m は中国の全国新記録だった (ただし、未公認記録)。興鷺、興陸も好成績を収めた<sup>800</sup>。10 月に予定されていた全国運動会が開かれていれば、兄弟 3 人が揃って出場する場面が見られたかもしれないが、満洲事変の勃発もあって、全国運動会は無期延期となった。

満洲事変後、瀋陽にいた史興隆は 1932 年夏に南京に移り、中央大学で学業を続けた<sup>801</sup>。興鷺も兄について南京に行ったが、月末には大連に戻ったようである。興鷺は 8 月 28 日に開かれた満洲体育協会主催、全満水上競技選手権に出場し、1500m 自由形で 3 位に入った<sup>802</sup>。

1933 年 7 月、第 17 回華北運動会 (青島) に史興鷺、史興陸、さらに妹の史瑞声が参加、高級個人総合で史興鷺、中級個人総合で史興陸が 1 位、女子個人総合で史瑞声が 2 位となった<sup>803</sup>。8 月 13 日の大連青年会 (大連中華青年会の後身) 主催、第 10 回水

<sup>796</sup>「第八屆中華水上運動大会誌盛」『泰東日報』1930 年 8 月 26 日。左記史料では「史興録」「史興祿」と記すが、他の史料 (大連市地方志編纂委員会辦公室編『大連市志・体育志』235 頁など) の記述より「史興陸」に改めた。

<sup>797</sup>「満洲体育協会主催の全満水上選手権大会」『満日』1930 年 9 月 1 日。

<sup>798</sup>畢殿元「去年連濱運動界」『泰東日報』1932 年 1 月 1 日。

<sup>799</sup>たとえば、7 月 5 日の大連育成対全奉天水泳競技、7 月 26 日の州内外対抗水泳大会など。

<sup>800</sup>「游泳予選比賽詳誌」『泰東日報』1931 年 9 月 14 日。

<sup>801</sup>「史興隆昆仲最近成績」『申報』1932 年 9 月 18 日。

<sup>802</sup>「満洲水泳界の躍進、四つの記録」『大連新聞』1932 年 8 月 29 日。

<sup>803</sup>「第十七屆華北運動大会詳紀」『体育周報』2 巻 25 期、1933 年 7 月 29 日。左記史料をはじめ、

上運動会に史兄弟の姿はなく、瑞声だけが参加（所属は大連青年会）、100m で優勝している<sup>804</sup>。史興鷺は8月27日開催の全満水上競技選手権大会に姿を見せ、1500m 自由形に満洲新記録（22分34秒5）で優勝した<sup>805</sup>。史興鷺、興陸、瑞声の3人は10月に南京で開かれた第5回全国運動会にも出場、武漢にいた史興隆もかけつけてコーチを担当した。史興鷺の活躍は目覚ましく、400m 自由形（5分51秒9）と1500m 自由形（23分27秒6）に全国新記録で優勝した<sup>806</sup>。このとき史興鷺はインタビューに答えてこう語った。

私たちは小さい頃から大連で生まれ育ちました。もともと大連は日本の植民地に等しかったのですが、東三省が滅んでからは、さらに言うに及ばず、すべてが日本化してしまいました。だから私たちが受けた教育は完全に東洋式〔日本式〕で、目下大連の小中学校はみな日本人が運営しています。……私と弟の興陸はいま中華青年会中学で学んでいます。大連でいまなお祖国の風を保っているのはこの中学だけで、教科書は中国語を主体としています<sup>807</sup>。

そこに妹の瑞声がやって来て、記者はどこの学校に通っているか尋ねたところ、瑞声は日本の小学校（兄らと同じ沙河口公学堂であろう）と答え、大連には中国の小学校がないこと、兄がいま中央大学の水泳指導員をしていることを付け加えた。記者は笑って、「私は君を亡国奴と罵ったりしないよ」と慰めた。

大会閉幕後、各地の代表が帰郷するなか、史家の4人はいまや満洲国となった東北の地を取り戻すよう中国人に訴えかけるべく、長江横断水泳に挑戦した。はじめは渋っていた南京市当局も汽船を提供して緊急の事態にそなえさせた。長江兩岸に1万人あまりの観衆が見守るなか、史兄弟は約23分半で長江を渡りきった<sup>808</sup>。翌月、史興隆は

---

各史料には史興陸ではなく史興隆と記されている。たんなる誤記かもしれないが、興陸が興隆の名前でエントリーした可能性もある。

<sup>804</sup>「争闘好身手、表演於水中」『満洲報』1933年8月20日。

<sup>805</sup>「満洲新記録二つ」『満日』1933年8月28日。

<sup>806</sup>「男游泳決賽総成績」『申報』1933年10月20日。大連青年会附属初級中学は1932年に廃止されている。史瑞声が大連には中国の小学校がないと述べているのは誤りで、大連青年会附属小学校は存続していた。

<sup>807</sup>「浪裏白条史興鷺、難兄難弟還有難妹」『中央時事周報』2巻42期、1933年。

<sup>808</sup>「全運會閉幕後、史家兄妹望錦標対泣」『申報』1933年10月24日；「史氏昆仲渡江成功」『申報』1933年10月26日。

中央陸軍軍官学校の体育教官に招聘された<sup>809</sup>。

史興隆は翌 1934 年に 2 度目の長江横断に成功した<sup>810</sup>。1935 年の第 6 回全国運動会には役員として参加、1936 年には興鷺と 3 度目の長江横断を敢行した<sup>811</sup>。1937 年に予定されていた第 7 回全国運動会のさいには、東北から中国内地に逃れてきた選手を集めて東北代表の選手団を送るべく、劉長春らと準備委員会を組織するなど、一貫して中国側で活動を続けた<sup>812</sup>。

これに対して、史興隆の弟と妹は異なる選択をした。1933 年の全国運動会後、「帰る先がない」彼らは長江横断に挑戦した。この愛国的挑戦は中国国内で大々的に報道されただけでなく、大連の『満洲報』にも「中国青年游泳家」が横断に成功したことが報道され<sup>813</sup>、関東州当局の耳にも達したはずである。だが、史興鷺らはいつのまにか大連に戻っている。

1934 年 7 月には史興隆兄妹 4 人が滞在先の牯嶺から北平の東北体育協進会に華北運動会游泳表演比賽への参加を求め、東北体育協進会はすぐに北上して北平市予選に参加するよう返事したという記事が『申報』に出ている<sup>814</sup>。史興隆はアマチュア規定違反で出場できなかったが、他の 3 人は 8 月 6 日の北平市予選に参加すると報じられた<sup>815</sup>。しかし 3 人は予選に姿を見せなかった。それでも 3 人は遼寧省代表に選ばれたが、華北運動会には参加しなかった<sup>816</sup>。以後、1936 年の 3 度目の長江横断を除いて、史興鷺、興陸、瑞声が中国側の競技会に出場した形跡はない。1933 年に全国運動会から戻るさい、今後中国側の競技会に出場しないことを約束させられた可能性がある。

1934 年のシーズン、大連二中の生徒となった史興鷺は日本側の競技会に参加し活躍

<sup>809</sup>「一月来之体育界」『勤奮体育月報』1 卷 3 期、1933 年 12 月。

<sup>810</sup>「史興隆二次横渡長江」『申報』1934 年 10 月 29 日。

<sup>811</sup>「全運会裁判員発表」『申報』1935 年 9 月 18 日；『北晨画刊』9 卷 9 号、1936 年 8 月 22 日。

<sup>812</sup>「東北五省市準備参加全運会」『申報』1937 年 7 月 26 日。

<sup>813</sup>「中国青年游泳家、游泳飛渡長江」『満洲報』1933 年 11 月 2 日。

<sup>814</sup>「華北運動会定期举行游泳比賽」『申報』1934 年 7 月 29 日。牯嶺は江西省の避暑地。このとき江西省の南昌で江西水上運動会が開かれていた。

<sup>815</sup>「東北游泳代表、今日在中南海選拔」『華北日報』1934 年 8 月 4 日；「華北游泳賽参加者已有七個单位」『華北日報』1934 年 8 月 5 日；「史興鷺兄妹、今日来平」『華北日報』1934 年 8 月 6 日。

<sup>816</sup>「参加華北游泳賽之各单位、今日可到齐」『華北日報』1934 年 8 月 9 日；「華北游泳比賽大会、明下午举行揭幕礼」『華北日報』1934 年 8 月 10 日。

した。史興鷺は7月29日の州内外対抗水上競技大会（奉天）、8月19日の全滿中等学校水泳大会（大連）、26日の全滿水上選手権大会（大連）、9月1日の州内中等学校水泳大会（大連）に出場、400m自由形と1500m自由形では無敵の強さを誇り、前者で5分31秒2、後者で21分55秒1の「滿洲」新記録をたたき出した<sup>817</sup>。また史興陸も全滿水上競技選手権の100m平泳ぎ、200m平泳ぎで2位に入っている<sup>818</sup>。興陸は翌1935年に大連二中に入学したようで、同年9月1日の州内男子中等学校水泳大会では、史興鷺が自由形で、史興陸が平泳ぎで、それぞれ大会新記録を樹立した<sup>819</sup>。

1937年7月、日大競泳部が8年ぶりに大連に来征した。前回の来征では史興陸が全滿洲軍の一員として戦ったが、今回は史興鷺と興陸が全滿洲軍の一員として戦った<sup>820</sup>。1938年7月に早大水泳部が来征すると史兄弟は関東州軍の代表に、翌8月の滿鮮対抗競技会では滿洲軍の代表に選ばれている<sup>821</sup>。兄興陸とは対照的に、興鷺とその弟妹は、日本側の世界で活動することを選択したように見える。

史兄弟に関する中国側の小伝は、彼らの愛国的側面に焦点を当てる。そこでは、史興陸の全国運動会や極東大会での活躍、興鷺、興陸、瑞声が参加した1933年の全国運動会と長江横断、そして黒石礁・傅家庄間の遠泳大会が取り上げられる。この遠泳大会は、「大連日本統治当局」によって挙行され、黒石礁から傅家庄までの5500mの区間を泳ぐ競技会である。第1回大会は1935年に開かれ、3年連続で優勝すると優勝杯を永久に保持できる。史兄弟は1936年に初めて参加し、史興鷺が優勝する。史は3年連続で優勝し、優勝杯を譲り受けるはずだったが、「日本侵略者当局」は5年連続優勝でなければならないと言って優勝杯を返還させた。史の5連覇がかかった大会では旅順の海軍の選手を参加させるとともに、中国の舢板を日本の漕船に改めた（史兄弟が中国人漁師からアドバイスをもらえないようにするためか？）。これを見た史兄弟は大会への参加を取り止めた。大会の日は波風が高く、だれ一人完泳できなかったとい

<sup>817</sup> 滿洲文化協会編『滿洲年鑑』昭和9年版、滿洲文化協会、1934年、611-612頁。

<sup>818</sup> 「良コンデイションに新記録続出す」『満日』1934年8月27日。

<sup>819</sup> 「史兄弟・輝かしく大会新記録を樹立」『満日』1935年9月2日。

<sup>820</sup> 「日大、滿洲対抗水泳大会選手決定」『満日』1937年7月16日；「滿洲軍を終始圧倒、日大堂々大勝す」『満日』1937年7月18日。

<sup>821</sup> 「早大歓迎競泳大会」『満日』1938年7月6日；「滿鮮際游泳」『泰東日報』1938年8月20日。

う<sup>822</sup>。

遠泳大会の愛国的ナラティブは事実と大きく異なる。この遠泳大会は満日社の主催で1934年8月12日に第1回大会が挙行され、1時間41分33秒2のタイムで優勝した大藤正巳に大連市長杯が贈られた<sup>823</sup>。史兄弟は1936年の第3回大会に初出場、史興鷺が1時間37分15秒の新記録で優勝、興陸も3位に入った<sup>824</sup>。史興鷺は1939年の第6回大会で4連覇を果たし、記録も1時間27分23秒6にまで短縮した<sup>825</sup>。1940年は大会そのものが開かれなかった。1941年の第7回大会で史興鷺は1時間26分23秒の大会新記録で優勝する<sup>826</sup>。最後の大会となる1942年の第8回大会では旅順の海軍選手が初めて参加した。優勝は中村強輔（海軍）で、タイムは1時間51分37秒だった<sup>827</sup>。この優勝タイムからみて、史興鷺は出場しなかったと思われる。1940年に大会が開かれなかった理由は定かではないが、史興鷺の5連覇を阻止するためでなかったことは明らかである。

大連市福星街三一四の自宅には老父（六二）と二中在学の弟興鷺君の三人暮らし、一昨年一月母親を失つてからは兄弟二人で老父を慰め食事から一切の家事を引き受けてゐるのだ。殊に昨夏本社主催の黒石礁 - 傅家庄間の遠泳で三連覇を遂げて栄あるカップを永遠に獲得、今はなき母の墓前に供へて報告したといふ、聞くものをして感激させたものだが、既に満洲電業に就職も決まり一家喜びの中に同君を訪へば、“自分は卒業後も水泳を続けたいと思ひますが、会社の都合でどこまで許されるか・・・”とつゝ、ましく語つた【写真は自宅にて本社寄贈のカップを前に喜びの史君】<sup>828</sup>

この記事とそれに附された写真から明らかなように、3連覇を果たした時点で史は優

<sup>822</sup> 李生「三十年代名聞泳壇の史家兄妹」『大連体育史料』1986年1期。

<sup>823</sup> 「満洲水泳界の壮挙、あす遠泳大会」『満日』1934年8月12日；「夏の海を征服して、長距離遠泳終る」『満日』1934年8月13日。

<sup>824</sup> 「新記録を樹立し、史（兄）君優勝す」『満日』1936年8月26日。

<sup>825</sup> 「史選手、四年連覇」『満日』1939年8月7日。

<sup>826</sup> 満洲日報社編『満洲年鑑』昭和17年版、満洲日報社奉天支社、1942年、411頁。

<sup>827</sup> 満洲日報社編『満洲年鑑』昭和18年版、満洲日報社奉天支社、1943年、368頁。

<sup>828</sup> 「学窓を巣立つ選手①」『満日』1939年3月1日。

勝杯を「永遠に獲得」していたのである<sup>829</sup>。たしかに5連覇がかかった大会に史は出場できなかったが、それは大会そのものが開かれなかったからである。海軍選手が参加し、史の連覇が止まったのは事実だが、それは史が（1940年の大会中止を挟んで）5連覇を果たしたあとだった。優勝杯をめぐるさまざまなストーリーは創作といってよい。

中華ナショナリズムの立場からすれば、1934年以降の史興鷺らの活動は正当化しうるものではなかった。史興鷺と興陸は日本の租借地で日本の学校に通い、日本側の競技会で活躍した。さらには関東州や満洲の代表選手を務めた。大連二中を卒業した史興鷺は満洲電業に就職した。こうした履歴は、新中国で大いに問題視されたはずである。迫害を逃れるためにも、さまざまな愛国的ナラティブが創作されたことは想像に難くない。もちろん、日本側の報道や史料から浮かび上がる史兄弟のイメージが彼らの本当の姿かといえ、そうともいえまい。残された史料から個人の内面をうかがうことは不可能だが、史家という単位でみたとき、長男が中国側につき、次男以下が日本側についたことは、動乱の時代を生き延びる一種の戦略だったととらえることができるかもしれない。あるいは、史興陸だけが中国を代表して国際競技会に出場した経験があり、その経験が興陸をして弟や妹と異なる道を歩ませたのかもしれない。現実は複雑であり、愛国者／漢奸といった単純な二分法で説明できるようなものではない。

#### 第43話 中国人のスポーツ II（陸上競技）

東三省で最初の運動会は、1908年5月に吉林の文武学堂で開かれた<sup>830</sup>。関東州内では、1910年10月に金州公学堂南金書院が小学校と公学堂の連合運動会を開催、翌1911年4月には満鉄が満鉄附属地および関東州内の各小学校、中学校、公学堂、女学堂の連合運動会を開催したのが早い事例である<sup>831</sup>。詳細は不明だが、1920年代前半の事例から推測すると、「連合」といっても、日本人児童と中国人児童は別々に競技した可能性が高い。

<sup>829</sup> ちなみに、史興鷺が1936年から1938年まで授与された優勝杯、1938年に「永遠に獲得」した優勝杯、1939年の4連覇時に授与された優勝杯はそれぞれ異なるものである。

<sup>830</sup> 王曉晨「東北近代体育的伝播与発展研究（1911-1931年）」博士論文、北京体育大学、2016年。

<sup>831</sup> 「金州の運動会」『満日』1910年10月1日；「学校大運動会誌盛」『泰東日報』1911年4月21日。

1917 年 4 月に天津で開かれた第 5 回華北運動会に、東三省の学校(黒竜江の第一師範、第一中学、甲種農業学校、甲種工業学校、そして奉天中学) が初めて参加、黒竜江第一中学の董維翰が 10 マイル走で優勝した(タイムは 1 時間 4 分 4 秒)<sup>832</sup>。董はその翌月に東京で開かれた第 3 回極東大会に中国代表として参加、10 マイルマラソンに出場したが、折り返し点に達する前に棄権した(他の 2 名の中国代表も棄権)。優勝した橋本源市のタイムは 55 分 57 秒 2 だった<sup>833</sup>。

こうして、東三省は中国のスポーツ界に組み込まれていったが、関東州の中国人はそこから取り残されていた。奉天で開かれ、遼寧省の多数の学校が参加した第 9 回華北運動会(1921 年 5 月 20-21 日)でもやはりそうだった。この大会の 5 マイル走を 30 分 9 秒 8 で制した馬龍驤は南満医学堂の学生で、上海で開かれた極東大会(5 月 30 日-6 月 4 日)に中国代表として参加、1 マイル走と 5 マイル走に出場している<sup>834</sup>。

1920 年 7 月に設立された大連中華青年会は 1922 年 5 月に第 1 回陸上運動会を開催、これが大連における本格的な陸上競技の始まりとなる。各種学校のほか、中華体育団、銭鈔組合、電気作業所、大連中華 YMCA を含む 11 団体が参加した。

同年 10 月に来連した中華 YMCA のジョン・グレーは、翌年の極東大会に大連からも選手を送るよう呼びかけた<sup>835</sup>。さらにグレーは 11 月 6 日付けで全国の体育関係者に発した通告で、各地の予選は 5 月 10 日までに完了し、5 月 14 日までに全国予選開催地である上海に来るよう求めた<sup>836</sup>。しかし、大連中華青年会は極東大会に参加するのは時期尚早と考えたようである。というのも 1923 年の第 2 回陸上運動会は、極東大会華北予選を兼ねた華北運動会(5 月 3-4 日)の 10 日後に開かれたからである。今回は 20 団体が参加、大連の中国人の間にスポーツ熱が高まりつつあることを示した。たとえば、旅順師範学堂(1918 年設立)は今回初めて参加し、秋には最初の校内運動会を開催し

<sup>832</sup> 国家体委体育文史工作委员会、全国体総文史資料編審委員会編『華北運動会(1913～1934 年)』(『体育史料』第 15 輯)、人民体育出版社、1990 年、26 頁。

<sup>833</sup> 大日本体育協会編『第十回極東選手権競技大会報告書』大日本体育協会、1934 年、17 頁。

<sup>834</sup> 国家体委体育文史工作委员会、全国体総文史資料編審委員会編『華北運動会(1913～1934 年)』56-61 頁；「奉天選手出発」『満日』1921 年 5 月 28 日；大日本体育協会編『第十回極東選手権競技大会報告書』24-25 頁(「馬龍祥」と記されている)。

<sup>835</sup> 「体育家葛雷君、過連之集餐会」『満洲報』1922 年 10 月 25 日。

<sup>836</sup> 「吾国籌備第六次遠東運動会之計画」『申報』1923 年 1 月 1 日。

ている<sup>837</sup>。

1925年3月、大連中華青年会は5月初に済南で開かれる華北運動会に選手を派遣することを決定、体育教員の双瑩璞が訓練を担当することになり、選手を募集した<sup>838</sup>。結局、選手の派遣は実施されず、華北運動会（4月24-25日）より2週間以上遅れて、5月10日に第4回大会が開かれた。参考までに、第4回大会以降の記録を表43-1に示しておく。記録の網掛け部分は1931年時点の最高記録である。

1926年、関東庁始政二十年記念運動会が開かれた。小学校（日本人）と公学堂・普通学堂（中国人）は別々に実施され、100mでは劉長春が公学堂高等二年C組で一位（13秒）となっている。中等学校以上は日本人と中国人が一緒に競技をした。優秀な記録を挙げると、中等学校1500mで龐世栄（旅順二中）が優勝（4分48秒4）、中等学校800mで朱連仲（熊岳城農業学堂）が2位、孫本恕（旅順二中）が3位、中等学校走幅跳で梁徳彰（旅順二中）が優勝、などがある。女性の参加は少なく、中国人は公学堂児童のみ、日本人は小学生が多数参加したものの、あとは神明高女、弥生高女、旅順高女からそれぞれ数名が参加したにすぎない<sup>839</sup>。

1927年の第6回陸上運動会は、大連運動場の完成を待ち、10月に開催されることになった。大連中華青年会は「田徑賽練習団」を組織し、大会に備えることにした。同会はサッカー、武術、卓球、水泳などの活動をしていたが、陸上競技に関しては恒常的に活動しておらず、陸上運動会を年1回開くだけであった。今回練習団を組織した直接の原因は、この年に上海で開かれた極東大会で中国陸上競技陣が惨敗を喫したことにある<sup>840</sup>。大連中華青年会はこれまで極東大会には関わってこなかったが、今回の惨敗を機に方針を改めたのである。中国本土との関係強化の背景には、大連における民族運動の高まりという政治的要因もあった。その中心となっていたのが大連中華青年会であり、各種労働者団体だった。7月24日、関東州当局は共産党員を多数逮捕し、大連の共産党組織に大きな打撃を与えた。その余波で、中華工学会、中華印刷職工連合会、沙河口工学会、中華増智学校などが陸上運動会に参加できず、参加団体数は

<sup>837</sup>「堂友会記事」旅順師範学堂堂友会『堂友会誌』創刊号、1928年。

<sup>838</sup>「中華青年会募集華北大運動会選手」『泰東日報』1925年3月17日。

<sup>839</sup>『南満教育』特別号、1926年11月15日。

<sup>840</sup>「中華青年会將擬設田徑賽練習団」『泰東日報』1927年9月2日。

表 43-1 中華陸上運動会記録

| 中華陸上運動会  |                   |            |                   |                  |                  |                   |                   |             |             | 1931 年度中国最高記録 |  | 満洲記録<br>(1931) |  |
|----------|-------------------|------------|-------------------|------------------|------------------|-------------------|-------------------|-------------|-------------|---------------|--|----------------|--|
| 第四回 1925 |                   | 第五回 1926*  |                   | 第六回 1927         |                  | 第七回 1928          |                   | 第八回 1929    |             | 第九回 1930      |  | 第十回 1931       |  |
| 100m     | 李蔭庭<br>13 秒 4     | 11 秒 8     | 周維璞<br>11 秒 2     | 劉長春<br>11 秒 0    | 周維璞<br>11 秒 8    | 于文江<br>11 秒 4     | 于文江<br>11 秒 8     | 傅金城、<br>招壽昌 | 11 秒 0      | 10 秒 8        |  |                |  |
| 200m     | 李蔭庭<br>26 秒 4     | 27 秒 0     | 薛維倫<br>24 秒 0     | 劉長春<br>24 秒 4    | 周維璞<br>24 秒 8    | 于文江<br>24 秒 4     | 趙乾仁<br>24 秒 2     | 傅金城         | 23 秒 0      | 22 秒 0        |  |                |  |
| 400m     | 于文江<br>1 分 3 秒 0  | 1 分 1 秒 2  | 劉長春<br>55 秒 8     | 劉長春<br>55 秒 0    | 于文江<br>56 秒 6    | 周家慶<br>56 秒 0     | 喬世臨<br>55 秒 1     | 劉長春         | 51 秒 8      | 51 秒 6        |  |                |  |
| 800m     | 王繼文<br>2 分 25 秒 8 | 2 分 24 秒 2 | 龐世英<br>2 分 18 秒 2 | 于希渭<br>2 分 10 秒  | 馬得剛<br>2 分 9 秒 4 | 馬得剛<br>2 分 9 秒 0  | 于希渭<br>2 分 4 秒 7  | 于希渭         | 2 分 1 秒 1   | 1 分 59 秒 8    |  |                |  |
| 1500m    | 尤得邦<br>5 分 57 秒 6 | 4 分 50 秒 0 | 郭清忠<br>4 分 40 秒 0 | 馬得剛<br>4 分 26 秒  | 馬得剛<br>4 分 43    | 張宝祥<br>4 分 24 秒 4 | 于希渭<br>4 分 24 秒 0 | 于希渭         | 4 分 15 秒 4  | 4 分 14 秒 6    |  |                |  |
| 10000m   |                   |            |                   | 張宝祥<br>34 分 46 秒 | 趙銘三<br>34 分 33 秒 | 趙鳳岐<br>35 分 40 秒  | 趙鳳岐<br>35 分 22 秒  | 劉古学         | 34 分 52 秒 9 | 32 分 50 秒 8   |  |                |  |
| 110mH    |                   |            |                   |                  |                  | 劉仁秀<br>17 秒 4     | 劉仁秀<br>16 秒 9     | 蕭鼎華         | 16 秒 0      | 15 秒 3        |  |                |  |
| 200mH    |                   |            | 周維璞<br>28 秒 0     | 劉先举<br>29 秒 0    | 蔡寿山<br>27 秒 8    |                   |                   |             |             |               |  |                |  |
| 400mR    |                   |            |                   |                  |                  |                   | 電鉄<br>48 秒 0      |             |             | 45 秒 0        |  |                |  |
| 800mR    |                   |            |                   |                  |                  |                   | 電鉄<br>1 分 43 秒 4  |             |             | 1 分 32 秒 7    |  |                |  |
| 走幅跳      | 郭玉成<br>5m08       | 5m20       | 梁德璋<br>5m73       | 李顯章<br>6m00      | 傅忠乾<br>5m86      | 劉仁秀<br>5m98       | 劉仁秀<br>5m81       | 鄧約翰         | 6m64        | 7m41          |  |                |  |
| 走高跳      | 周景華<br>1m57       | 1m46       | 姜国慶<br>1m52       | 李顯章<br>1m65      | 劉占敬<br>1m68      | 王嶽東<br>1m60       | 咸增榮<br>1m63       | 李仲三         | 1m84        | 1m80          |  |                |  |
| 棒高跳      | 周景華<br>2m48       | 2m90       | 李顯章<br>3m30       | 李顯章<br>3m00      | 牟長楨<br>2m90      | 咸增榮<br>2m80       | 任明亮<br>2m90       | 符保盛         | 3m70        | 3m79          |  |                |  |
| 三段跳      |                   |            |                   |                  |                  | 劉仁秀<br>12m44      | 王德祥<br>12m35      | 司徒光         | 13m41       | 15m24         |  |                |  |
| 砲丸投      | 郭清思<br>9m86       | 一米九 **     | 于德忠<br>9m72       | 劉仁秀<br>11m39     | 劉仁秀<br>11m85     | 劉仁秀<br>12m28      | 劉宝大<br>12m57      | 宮万育         | 11m77       | 14m34         |  |                |  |
| 円盤投      |                   |            |                   |                  |                  | 劉仁秀<br>30m0       | 郭清榮<br>29m82      | 周連增         | 36m50       | 38m10         |  |                |  |
| 槍投       |                   |            |                   |                  |                  | 孫承祀<br>37m78      | 孫承祀<br>38m80      | 王季淮         | 47m65       | 54m46         |  |                |  |

\* 選手名は不明

\*\* 記事のママ

1926年の17から12に激減した（以後、1931年まで、11～13団体で推移する）<sup>841</sup>。

1928年9月、御大典記念事業として日仏競技（22～23日）、国際オープン競技（24日）、中等以上学生競技（25日）、高等女学校、小学校、公学堂競技（26日）が開かれた。学生競技はいずれも州内対州外という形式をとったが、小学校と公学堂は依然として別々に実施された。中等学校の州内外対抗競技では、中国人選手が大いに活躍した。たとえば、800mと1500mは上位3人が全員中国人選手だった。この両種目で優勝したのは金州農業学堂の于希渭だった<sup>842</sup>。もし劉長春が出場していれば、短距離は劉が優勝したはずである（劉は学生ではなかったので出場できなかった）。というのも、10月14日に開かれた第7回陸上運動会で劉は短距離3種目を制したが、そのタイムはいずれも州内外対抗の中等学校優勝記録を上回っていたからである<sup>843</sup>。10月17日に関東庁体育研究所が開催した第4回戦跡リレーでは、今回から設けられた中等学校の部で旅順二中が初優勝した（第21話参照）。

1928年6月の張作霖爆殺後、東三省の支配者となった張学良は、スポーツを大々的に推進、自ら校長を務める東北大学に多数の優秀な選手を集めた。劉長春をはじめ、劉先挙、龐世榮、薛玉祥ら大連の有力選手がこぞって東北大学に入学し、陸上競技の主力選手となった。1929年5月末に瀋陽（奉天）で開かれた華北運動会で劉長春は短距離三冠を達成、遼寧省は男子高級組で優勝、中級組でも準優勝した<sup>844</sup>。

1930年は極東大会の開催年である。3月に遼寧予選、4月に全国運動会が開かれ、中国代表が決まることになっていた。大連中華青年会は于南洲監督、王蘭コーチ、8名の選手を遼寧予選に派遣した。うち陸上競技選手は男子が馬徳剛（馬得剛）、女子が范淑和、季鳳英、劉娥煌、曹桂芳、胡素芝であった<sup>845</sup>。馬は落選したが、女子選手は全員遼寧代表に選ばれた。全国運動会で遼寧は男子陸上競技で団体優勝、姜雲龍、劉長春、蕭鼎華、張齡佳が中国代表に選ばれた。このうち大連ゆかりの選手は劉長春と張齡佳

<sup>841</sup> 大連市地方志編纂委員会辦公室編『大連市志・中共地方組織志』大連出版社、2001年、19頁。

<sup>842</sup> 「旅大与満鉄沿線中等以上日校学生競技」『泰東日報』1928年9月26日。

<sup>843</sup> 中等学校の100mは11秒4、400mは55秒6だった（200mは実施されず）。

<sup>844</sup> 国家体委体育文史工作委員会、全国体総文史資料編審委員会編、『華北運動会（1913～1934年）』122-146頁。

<sup>845</sup> 「中華運動員一行已起程赴遼矣」『満洲報』1930年3月14日。

である<sup>846</sup>。

1930年9月、大連の男女陸上選手19名がハルビンへ遠征した。一行はハルビンのロシア人、中国人選手と対戦する予定だったが、ハルビン警察当局が直前になって延期を要請、ハルビン行きを断念した<sup>847</sup>。ハルビンは中国女子陸上競技のメッカであり、孫桂雲、呉梅仙、劉静貞ら有力選手を擁していた。しかし、ハルビンに行けなくなったことで、女子選手は活躍の舞台を奪われてしまった。一方、男子選手は瀋陽で馮庸大学、同沢中学と対抗試合を行い、両校に勝利した<sup>848</sup>。

翌10月、瀋陽で東北四省連合運動大会が開かれた。大連中華青年会は劉仁秀、于文江、馬徳剛、張宝祥、于清濱、于邦富、孫福慶、周家慶を派遣した。女子選手は種々の都合により参加できなかった<sup>849</sup>。団体では男子高級で東北大学が圧勝、大連中華青年会は3位に終わった。個人成績では、男子高級で蕭鼎華が1位、張齡佳と劉長春が2位、傅宝瑞が3位で、大連の劉仁秀は4位に入った。東北大学の張齡佳、劉長春、傅宝瑞も大連ゆかりの選手なので、大連勢が席卷したといっても過言ではない<sup>850</sup>。

1931年4月、大連中華青年会の女子陸上選手6名（胡素芝、劉娥煌、曹桂芳、季鳳英、譚英立、冷清昧）が隋碧城（中華青年会学校教員）の引率で煙台に遠征、煙台女子選手を圧倒した。凱旋時の記事には、青天白日旗と優勝のペナントを手に持つ6人の写真が附されている<sup>851</sup>。参考までに、表43-2に大連中国人女子の記録と在満日本人女子の記録を挙げておく。

5月10日、第10回陸上運動会が開かれた。今回から女子と少年の選手権が設けられた。参加団体は13組（成年5組、少年4組、女子4組）、参加人数は1382人（成年

<sup>846</sup>張齡佳（山東蓬萊人）は、「連濱男女田徑健児、勵行冬期練習」『泰東日報』1930年12月7日や蘭〔王蘭〕「一九三一年～大連運動界の希望」『泰東日報』1931年1月1日などの記事で、大連の選手として紹介されている。

<sup>847</sup>「健児二十余名昨晚離連北上」『泰東日報』1930年9月14日；「連哈連欽運動大会、因謠言延期举行」『泰東日報』1930年9月15日。

<sup>848</sup>「所謂埠際田徑賽、大連軍在瀋獲勝」『満洲報』1930年9月16日。

<sup>849</sup>「参加東四連運」『泰東日報』1930年10月9日。

<sup>850</sup>「熙々攘攘之第一屆東四連運閉幕」『泰東日報』1930年10月15日。

<sup>851</sup>「巾幗運動健將、明晨連袂赴魯」『泰東日報』1931年4月16日；「中青女子田徑遠征隊、果然奪得錦標歸」『泰東日報』1931年4月22日。

表 43-2 大連中国人女子陸上競技記録

|       | 1931 女子記録 |        | 1931 満洲女子記録 |        |
|-------|-----------|--------|-------------|--------|
| 50m   | 劉娥煌       | 7 秒 5  |             |        |
| 100m  | 高金翠       | 14 秒 7 | 高見静         | 13 秒 3 |
| 200m  | 劉娥煌       | 32 秒 6 | 高見静         | 27 秒 3 |
| 80mH  | 劉娥煌       | 15 秒 4 |             |        |
| 400mR | 中華青年会     | 59 秒 5 |             |        |
| 走幅跳   | 胡素芝       | 4m17   | 森本温子        | 4m59   |
| 走高跳   | 高金翠       | 1m20   | 平塚順子        | 1m32   |
| 砲丸投   | 譚英立       | 6m394  | 坂田政代        | 10m43  |

650 人、少年 537 人、女子 187 人) だった<sup>852</sup>。久々に競技界にカムバックした于希渭が 800m と 1500m で全国記録を破った<sup>853</sup>。5 月末には済南で華北運動会が開催、遼寧は陸上競技団体のトラック高級組、中級組とフィールド高級組で優勝、フィールド中級組で 2 位と圧倒的な強さを示した。表 43-1 には 1931 年度の中国最高記録を挙げておいた。網掛けが遼寧の選手である。全国的にみても、遼寧の実力が群を抜いていたことが窺えよう。種目によっては、在満日本人の記録に肉迫していたこともわかる。今回、大連中華青年会は選手を派遣しなかったが、大連出身の選手たちはおもに遼寧代表として活躍している。たとえば、馬徳剛、劉仁秀は馮庸大学、周維璞、傅宝瑞は東北大学の学生となっていた。このほか、大連からは満日社の工場員于文江と周家慶が参加したことが確認できる<sup>854</sup>。また、6 月 13-14 日に奉天で開かれた国際運動場開きには、于希渭が馮庸大学選手として出場している。当時、中国で最も陸上競技（男子）が強かった遼寧省の主力である東北大学と馮庸大学の有力選手の多くを大連が供給していたことになる。そして大連陸上競技界を発展させたのが大連中華青年会主催の陸上運動会であった。

1931 年 10 月には南京で全国運動会が開かれることになっていた。大連中華青年会は 9 月 13-14 日に瀋陽で開かれた遼寧省予選に女子陸上競技選手 6 名（劉娥煌、冷清味、胡素芝、曹桂芳、季鳳英、高金翠）と男子水泳選手 2 名を派遣、全員が遼寧代表に選

<sup>852</sup>「大連中華運動大会、参加者一千五百余」『泰東日報』1931 年 4 月 17 日。

<sup>853</sup>「成年組兩項選手賽、打破全国記録」『泰東日報』1931 年 5 月 11 日。

<sup>854</sup>「帰社した兩選手」『満日』1931 年 6 月 7 日。

ばれた<sup>855</sup>。しかし、彼らが南京へ行くことはなかった。9月18日に満洲事変が勃発したからである。

#### 第44話 中国人のスポーツ III (野球)

野球は中国人にはあまり人気がなかったが、する人がまったくいなかったわけではない。たとえば全国運動会の場合、第2回以降毎回野球が採用されており、第2回(1914年)と第3回(1914、1924年)は2チーム、第4回(1930年)は4チームが参加、第2回は華北、第3回は華東、第4回は香港が優勝している。歴代の極東大会には香港、広東、上海、ハワイの選手が中国代表に選ばれていた。華北では第2回(1914年)と第3回(1915年)の華北運動会、第2回(1925年)と第4回(1928年)の華北球類運動会、そして第15回華北運動会(1931年)で野球が実施されている。東北地区は野球の発展という面ではかなり遅れを取っており、規模の大きい競技会に参加したのは第15回華北運動会に参加した遼寧省チームが最初だった<sup>856</sup>。その遼寧省チームの主力となった東北大学で野球が始まったのは1928年秋のことである<sup>857</sup>。日本の影響力が大きい東三省で野球が発展しなかったという事実は、中国の野球が主としてアメリカの影響のもとで発展したことを示唆している<sup>858</sup>。

満洲では日本側が設置した中国人向け初等教育機関である公学堂で早くから野球が行われていた。1917年10月、長春小学校と長春公学堂が「連合野球マッチ」を挙げた。1920年には撫順小学校が遼陽公学堂と対戦、5対8で敗れた<sup>859</sup>。長年公学堂教育に携わった井上暉雄によれば、当時高等科と寄宿舎があった公学堂は長春と遼陽だけで、生徒の年齢は高く、25歳前後のものも少なくなかった。生徒の間では野球(硬球)

<sup>855</sup>「全運會省選運動員、日内即將赴瀋」『泰東日報』1931年9月6日；「赴瀋預選選手昨晨回連、八名均經錄取」『泰東日報』1931年9月17日。

<sup>856</sup>陳顯明、梁友徳、杜克和『中国棒球運動史』武漢出版社、1990年、24-31頁。

<sup>857</sup>笑仙「南校添設棒球訊」『東北大学周刊』51期、1928年9月16日。コーチは中国人だった。

<sup>858</sup>北京の清華大学、燕京大学、天津の南開大学など野球の盛んな学校もアメリカの影響が強かった。

<sup>859</sup>「連合野球」『満日』1917年10月30日；「小学野球試合」『大連新聞』1920年10月26日。

やフットボールが盛んで、教員対生徒の試合も行われたという<sup>860</sup>。とすれば、小学校（日本人）と公学堂（中国人）の試合は、子供と大人の試合のようなもので、小学校が負けたのも無理はなかったことになる。

公学堂の活躍と関係あるのか、はたまた大戦がもたらした好景気がそうさせたのか、原因は定かでないが、1918年夏に大連で中国人の野球チーム結成の話がもちあがる。

当地支那有志者間に支那人より成る一チーム組織の議あり市内五十余の錢莊両替店主等之に賛成し費用の如きは全部負担する事となり選手は前記店員中の野球趣味あるものより得る事とすべく一チームにて練習試合する丈けの人員を置きキヤッチボールバツチングの初歩より漸次鞏固なるチームと為す意気込みにて熱心なる好球家として名ある教育貯金の雉本、大連幼稚園の小川氏等に其の事を謀りたるより同氏等も此の拳を大に喜び専ら目下各方面に亘りて奔走中なるがグラウンドは取敢えず実業団のを借り練習に取り掛るべく着々準備中なるが天津上海等には既に支那人チームあり侮り難き実力を有せるに我大連にのみ之れ無かりしは遺憾とせられたる処なりしに氣運熟して組織せられんとするは快心の至りにて実業団にては頗る好意を表し交渉に応じてコーチする事を快諾したりと猶ほ小川氏は来春の我社主催関東〔州〕野球大会には是非共出場し得べき迄に為したきものなりと語れり<sup>861</sup>。

日本人側の期待の大きさが窺える記事である。関東州野球大会に中国人チームが出場することはなかったが、翌1919年には重要物産取引所の中国人チームが天狗団と野球の試合をするという記事が出ている。天狗団は大連各新聞記者と野球記録係の連合チームで、のち満洲体育協会主事となる林田学が四番打者を務めていた。興味深い試合だが、結果は報じられなかった<sup>862</sup>。中国人チームはほどなくして消滅した<sup>863</sup>。戦後不況が影響

<sup>860</sup> 井上暉雄「思ひ出二三」荒川隆三編『満鉄教育回顧三十年』満鉄地方部学務課、1937年、211-213頁所収。

<sup>861</sup> 「支那人の一团」『満日』1918年7月25日；「支那人野球団」『遼東新報』1918年7月25日。

<sup>862</sup> 「天狗対支那人チームの球戦」『満日』1919年6月12日；「天狗団の陣容」『満日』1919年6月13日；「天狗対錢鈔団」『満日』1919年6月15日；「大連記者野球団成立」『満日』1919年8月20日。

<sup>863</sup> 「後れ馳せ乍ら民国人の野球熱擡頭」『満日』1924年3月26日。宋子仁「対連濱体育界将来之希望」『泰東日報』1932年1月1日には、1922年に中青隊が日本人の開いた「全満棒球賽」に

したのでろうか。

中国人の野球熱は 1924 年春に再び高まった。

最近中国人の野球に着目するもの漸次多きを加へ敷島広場の如きは中国人のキヤツチボールを試みるものに依つて占領さるゝの状を呈して居る・・・・・現今の満洲野球界は独り日本人のみに依つて行はれて居るので目下其芽を出しつゝある中国人の野球熱をヨリ以上に助長し相当のものと為すに於ては常に喧伝さるゝ、日支親善の上から見ても運動を以て其実現に資するもの多からんと思惟され一部有力者の間には中国人に野球趣味の鼓吹と普及に力を注ぐべしと唱ふるものも現はれて来つた模様であるので将来中国人チームの組織を見るに至り野球界を賑はすに至るであらうと期待されて居る・・・・・<sup>864</sup>。

同年秋の報道から、今回野球に取り組んだのが大連中華青年会の関係者だったことがわかる。大連中華青年会は 1922 年 3 月 25 日に会員王治敏の要望を受け、200 円で野球用具を購入している<sup>865</sup>。野球部の活躍が伝えられるのは 1924 年に入ってからで、9 月から 10 月にかけて、満日、遼東新報、埠頭信託、大阪屋の各チームと次々に対戦、満日との試合は 24 対 9、14 対 5 で連勝している（他の試合の結果は不明）<sup>866</sup>。

今回の野球熱も長くは続かなかった。翌 1925 年は国際運輸、満日、満鉄埠頭事務所との計 4 試合しか確認できない<sup>867</sup>。報道価値が下がったのか、試合が少なかったのか定かでないが、この年から大連中華青年会のスポーツの重心は明らかにサッカーに移行していた。サッカーの試合は 6 回分が確認され<sup>868</sup>、また 11 月には東北足球大会を主催している（第 28 話参照）。

それでも野球チームは維持されていたようで、1926 年夏には隊員募集が行われてい

---

出場して優勝したとの記述があるが、誤りである。

<sup>864</sup>「後れ馳せ乍ら民国人の野球熱擡頭」『満日』1924 年 3 月 26 日。

<sup>865</sup>「六周年会務一覧表」『青年翼』5 卷 6・7 号、1926 年 7 月 1 日、70-113 頁。

<sup>866</sup>「西公園比賽野球」『泰東日報』1924 年 9 月 23 日；「青年會比賽野球」『泰東日報』1924 年 9 月 28 日；「中華青年會野球大勝」『泰東日報』1924 年 10 月 14 日；「青年會星期二大事業」『泰東日報』1924 年 10 月 19 日；「本日之棒球比賽」『泰東日報』1924 年 10 月 31 日。

<sup>867</sup>「六週年會務一覧表」『青年翼』5 卷 6・7 期、1926 年 7 月 1 日；「中青本日之賽球」『泰東日報』1925 年 6 月 7 日；「中華与埠頭比賽野球」『泰東日報』1925 年 7 月 5 日；「比賽野球」『泰東日報』1925 年 7 月 12 日。

<sup>868</sup>「中華青年會」『泰東日報』1925 年 3 月 1 日など。

る。用具はすべて会で準備していた。隊長は三井洋行の趙英吉だった<sup>869</sup>。この夏、野球部は毎日練習をしていたようだが、試合に関する報道はない<sup>870</sup>。1927年7月、大連中華青年会設立7周年記念にさいして、これまでの事業を振り返ったなかで野球部に触れた記事が、同会の野球に関する最後の記事となる<sup>871</sup>。

3度目の野球熱は1930年になって訪れる。大連商業から南満電氣に進んだ大藤一は、1930年に野球のコーチを頼まれる。

昭和五年に大連商工会議所会頭から、中国人の野球チームが出来たが、全くの素人ばかり親善の意味もあり是非コーチをしてやってくれと強つての依頼を受け、私一人ではと佐賀〔定雄〕先輩を口説き、二人で週二回大連二中球場で指導に当たったが、同じ球技でも棒球は真面目な割には仲々興乗りせず、そのうち一人抜け二人こぼれて遂に解散の憂目にあった<sup>872</sup>。

別の資料によれば、この年に劉文圃ら野球に関心をもつ中国人が練習をはじめ（大藤が指導したのと同じチームかどうかは不明）、1931年3月15日に震華棒球隊の創立式を挙行した。硬式野球と軟式野球の各1チームを有し、大連実業団の平田次郎の指導を受けた<sup>873</sup>。6月16日、国際観光局（ジャパン・ツーリスト・ビューロー）を相手に初試合を行ったが、3対8で敗れた<sup>874</sup>。7月22日の国際観光局との第2回戦は、震華が11対3でリベンジを果たし、急速に力をつけてきた様子が窺える<sup>875</sup>。この年は10月に南京で全国運動会が開催されることになっていた。震華は9月に瀋陽で開かれる全国運

<sup>869</sup>「中青中学近訊種種」『泰東日報』1926年6月25日。第1話で取り上げた三井物産（三井洋行）の趙選手は、あるいは趙英吉かもしれない。

<sup>870</sup>『泰東日報』1926年7月18日。

<sup>871</sup>「中青七週紀念礼誌（一）」『泰東日報』1927年7月3日。

<sup>872</sup>大藤一「優勝の思い出」満洲電業外史編さん委員会編『思い出の満洲電業』2巻、満洲電業会、1982年110-111頁所収。

<sup>873</sup>「震華棒球隊成立、開始募集隊委員」『満洲報』1931年3月17日；「震華棒球隊、特聘平田氏指導」『泰東日報』1931年5月9日；「震華棒球隊、練習比賽」『泰東日報』1931年6月7日。

<sup>874</sup>「棒球」『泰東日報』1931年6月16日；「震華隊約観光局、棒球練習比賽」『満洲報』1931年6月16日。『満日』と『大連新聞』はこのチームを「健華」と紹介しているが（「日華対抗野球戦」『満日』1931年6月16日；「日支野球戦」『満日』1931年6月17日；「健華軍敗る」『大連新聞』1931年6月17日）、メンバーを比較すると同一チームであることがわかる。『満日』によれば、健華は交通銀行、中国銀行の行員で組織されたチームだという。

<sup>875</sup>「震華対観光局之棒球比賽震華奏凱」『泰東日報』1931年7月24日。

勸会遼寧省予選に参加して優勝し、全国運動会出場の権利を獲得する<sup>876</sup>。この予選は震華にとって中国人チームとの初めての対戦だった。ところが、この直後に満洲事変が勃発し、全国運動会は中止となった。

その後の震華について少し触れておこう。震華は1936年までその存在が確認できるが、他に中国人の硬式野球チームがなかったため、もっぱら日本人チームと対戦していた。1932年9月にYSB（正金銀行）とMDN（マンチュリア・デイリー・ニュース）の間で大連満人最初の軟式野球の試合が行われると<sup>877</sup>、震華は西崗華商公議会の後援を得て、翌10月に軟式野球の選手権大会を主催した。第1回大会には6チームが参加、MDNが優勝した<sup>878</sup>。同大会は1936年の第5回大会まで開かれた<sup>879</sup>。

満洲の中国人の野球は、ほかのスポーツと違った意味を持っていた。満洲事変後に軟式野球が広まるまで、野球の対戦相手はほぼ日本人チームであった。満洲では、野球は日本のスポーツであった。それゆえ、日本人から見たとき、中国人の野球は、彼らが日本に近づき日本を理解しようとする意志の現れであった。さらに、同じく日中親善の手段とみなされたサッカーとは違って、野球の場合、日本の優位は明らかであった。中国人からすれば、こうした日本（人）との関係性を無視して野球をすることはできなかった。満洲事変前に震華棒球隊が大連の華商公議會（中国人の自治団体）からなかなか後援を得られなかったのは<sup>880</sup>、華商公議会の側に野球を通じた日本ペースの日中親善に対する警戒感があったからだろうか。逆に、満洲事変後に震華棒球隊が主催した大会を各華商公議会が後援したのは、大連の中国人の環境が大きく変化したことと関係があろう。満洲事変後の大連では、中国人は中国（中華）アイデンティティを持つことすら許されず、満人、満洲国人、関東州人と呼ばれた<sup>881</sup>。中国や中華を冠す

<sup>876</sup>「遼寧棒球予選、大連震華得冠軍」『泰東日報』1931年9月14日。

<sup>877</sup>「軟式棒球賽」『泰東日報』1932年9月4日；「軟式棒球処女比賽」『泰東日報』1932年9月6日。

観衆は「八、九十人の多きを下らず」だったという。

<sup>878</sup>「第一屆棒球錦標賽、錦標為英報隊獲得」『泰東日報』1932年10月11日。

<sup>879</sup>「第五次棒球閉幕、愛比隊獲得錦標」『泰東日報』1936年10月13日。

<sup>880</sup>「組震華棒球隊、函公議會長請為後援」『泰東日報』1931年4月11日；「震華棒球隊、再度請助」『泰東日報』1931年5月15日。対照的に、大連の各華商公議会は、5月10日に開かれた大連中華青年会主催の中華運動大会をさまざまな形で援助していた。

<sup>881</sup> 齊紅深「日本殖民統治時期大連人国民意識調査」『大連近代史研究』17巻、2021年3月。

る公共団体は名称変更を迫られ、大連中華青年会は大連青年会に、各華商公議会は商會に名を改めた。こうした新しい環境のなかで、野球は日滿融和のひとつの象徴となる。ただ、震華棒球隊が名称を変更しなかったことには注意を要する。これは日本に対する抵抗とみることができ、もしそうであれば、震華棒球隊を後援することの意味もまた違った色合いを帯びることになるだろう。

#### 第 45 話 中国人のスポーツ IV (バスケットボール)

バスケットボールは 1895 年に中国にもたらされ、YMCA を通じて広まった。東三省では 1910 年に奉天のミッションスクール（文華中学、文匯中学）でバスケットボールが始まり、1917 年には安東 YMCA が体球会なる団体を組織し、バスケットボールを行った<sup>882</sup>。ハルビンでは 1918 年に濱江道立中学とロシア人の学校が、また同記工廠の労働者と東華中学の学生がそれぞれバスケットボールの試合をしている<sup>883</sup>。大連の中国人がバスケットボールを始めるのは 1920 年代に入ってからである。

季銘なる人物が 1933 年に大連のバスケットボールの歴史を回顧している。季銘は大連バスケットボール界の中心を担ったチームにちなんで、4 つの時代を設定した。1927 年夏からの「全黒時代」（種蒔き期）、1929 年冬からの「中青時代」（灌溉期）、1931 年夏からの「中銀と黒猫時代」（発芽期）、1932 年春からの「大青時代」（生長期）である。季銘によれば、1927 年夏に周維璞と祁福祥が組織した全黒隊が中国人最初の籃球隊だった。それ以前にもいくつかの団体があったが、休暇で帰郷した学生が組織したもので、2 カ月もすれば解散した。大連中華 YMCA に所属した全黒隊は 3 年間持続したという<sup>884</sup>。

<sup>882</sup> 遼寧省地方志編纂委員会辦公室主編『遼寧省志・体育志』71 頁；丹東市地方志辦公室編『丹東市志・体育志』遼寧科学技術出版社、1991 年、587 頁。安東 YMCA のデンマーク人宣教師 Povl Hedemann Baagøe（古賢昌）が組織したと思われる。Baagøe は 1912 年に來華、1915-1922 年に安東、1922-1924 年にハルビン、1924-1926 年に大連、1927-1933 年に安東、1934-1948 年に大連で活動した。安東 YMCA のサッカーについては第 28 話参照。

<sup>883</sup> 庄鴻雁「哈爾濱与中国現代体育之濫觴」『綏化学院学报』38 期、2018 年 11 月。

<sup>884</sup> 季銘「連濱的籃球界回顧」『泰東日報』1933 年 1 月 1 日。以下、注記のない限り、この史料を参照した。

大連中華 YMCA に最初の中国人籃球隊が誕生したというのは正しい。大連中華 YMCA は1922年に設立され<sup>885</sup>、その後すぐにサッカーと卓球のチームを組織した<sup>886</sup>。翌1923年に籃球と拳術のチームが加わった<sup>887</sup>。籃球隊はこの年11月に大連 YMCA と対戦し、勝利を収めた(第30話参照)。1925年2月には満洲体育協会主催の第2回全満バスケットボール選手権大会に参加、今回は8対36で大連 YMCA に大敗した<sup>888</sup>。大連中華 YMCA は毎週3回、午後7時から9時半まで大連 YMCA 会館で練習し、日本側 YMCA と合同練習をすることもあった。会費は学生が5角、成人が1元であった<sup>889</sup>(第40話参照)。

1925年10月、大連 YMCA 主催の全満籠球大会に参加した8チームのうち3チーム、すなわち大連中華 YMCA、旅順工大、旅順二中が中国人チームであった。大連中華 YMCA と旅順二中は初戦で大敗したが、旅順工大は準優勝という成績を収めている<sup>890</sup>。

以上から、大連中華 YMCA が帰郷学生による臨時チームでないことは明らかである。ただ気になるのは、1927年5月ごろに大連中華青年会が籃球隊を組織したとき、「これまで大連の中国人団体が正式の籃球隊を組織してこなかったことに鑑み」と述べていることである<sup>891</sup>。さらに、大連中華青年会の籃球隊の隊長周維璞は、大連中華 YMCA 籃球隊の隊長でもあった<sup>892</sup>。そして季銘は周の全黒隊が大連中華 YMCA に属したと述べている。この間、複雑な事情がありそうだが、よくわからない。

<sup>885</sup> 大連中華 YMCA の前身組織である少懐会が組織されたのは1922年2月のことである(「基督教之少懐会」『泰東日報』1922年2月10日)。1922年10月25日の新聞記事ではなお「基督教少懐会」と記されるが(「体育家葛雷君過連之集餐会」『満洲報』1922年10月25日)、11月11日の新聞記事では「中華基督教青年会に改めて以来」と記されており(「中華基督教青年会又開講演」『満洲報』1922年11月11日)、大連中華 YMCA は11月初めに成立したと考えられる。

<sup>886</sup> 「基督教青年会成立足球隊与乒乓球隊」『満洲報』1922年12月8日。

<sup>887</sup> 「基督教青年会体育之発展」『泰東日報』1923年11月17日。

<sup>888</sup> 「バスケットボール、バレーボール全満選手権」『満日』1925年2月16日。

<sup>889</sup> 「基督教青年会消息側面」『泰東日報』1925年6月14日；「旅大籃球比賽」『満洲報』1925年10月24日；「基青藍球隊近訊」『泰東日報』1927年5月7日。

<sup>890</sup> 「年少気鋭の商業軍、よく工大軍を撃退」『満日』1925年10月26日。新聞では「中華青年会」と記されている。中華青年会と中華 YMCA はしばしば混同された。

<sup>891</sup> 「中青足球隊消息」『泰東日報』1927年5月21日；「中青藍球隊成立」『泰東日報』1927年11月13日。

<sup>892</sup> 「基青藍球隊近訊」『泰東日報』1927年5月7日。

1927 年から 1928 年にかけては旅順二中の活躍が目立つ。旅順二中は 1927 年 11 月に関東庁体育研究所主催の全満籠球大会、1928 年 5 月に南満工專籃球部主催の全満中等学校籃球大会に優勝、1928 年 10 月に大連 YMCA 主催の全満籃球大会に準優勝と中等学校バスケットボール界で健闘していた（このあと大連二中が台頭する。第 30 話参照）。

大連中華 YMCA は 1928 年に入ってからスポーツ事業が停頓していたが、11 月から立て直しをはかり、成人部と少年部で籃球隊が組織された。成人部の隊長于孟生は煙台（芝罘）から来連した人物で、煙台では YMCA の体育委員や楽群籃球隊の隊長を務めていた<sup>893</sup>。翌 1929 年 7 月には煙台から白燕籃球隊（楽群隊の後身）が来征、9 月には大連中華 YMCA が煙台に遠征した<sup>894</sup>。煙台遠征直前には大連 YMCA に 10 対 4 で勝利するなど競技力も向上し、1929 年 11 月に大連籃球連盟が第 1 回リーグ戦を举行すると、唯一の中国人チームとして参加している<sup>895</sup>。しかし、これを最後に大連中華 YMCA はバスケットボール界から姿を消す<sup>896</sup>。季銘は 1930 年夏に全黒隊はなくなり、中青（大連中華青年会）隊が成立した、と記している。

1930 年夏、バスケットボール界は新チーム誕生が相次ぐ。その勢いは、大連市が中央公園内に中国人専用のバスケットボールコート設置を検討するほどだった<sup>897</sup>。季銘によれば、中青のほか、裕昌源、美孚、商華、友連などが結成されたが、中青が群を抜いて強く、商華、友連がそれに次いだ。しかし、これらのチームはすぐに雲散霧消し、裕昌源を残すだけとなった。1931 年はさらに多くのチームが誕生した。南開大学（1929 年 12 月）、馮庸大学（1929 年 12 月、1930 年 4 月、1930 年 10 月）、兩江女子体育専科學校（1930 年 10 月）、北平師範大学（1931 年 1 月）など、中国の強豪チームが来征し、

<sup>893</sup>「基督青年会最近事業」『泰東日報』1928 年 11 月 13 日。

<sup>894</sup>「煙台之白燕籃球隊来連」『満洲報』1929 年 7 月 28 日；「基青籃球隊赴煙台遠征」『満洲報』1929 年 9 月 20 日。白燕隊は日本側の報道では「芝罘 YMCA」と紹介された。白燕隊は大連二中、南満工專、大連 YMCA と対戦した。季銘は全黒隊が応戦したと記すが、中国人チームと対戦したとする記事は探し出せなかった。

<sup>895</sup>「戦勝日基青之基青籃球隊」『満洲報』1929 年 9 月 13 日；「全満籃球比賽決定参加団体」『満洲報』1929 年 11 月 16 日。参加は 4 チーム、中華 YMCA は全敗で最下位に終わった。

<sup>896</sup>大連中華 YMCA は 1932 年に復活するが、翌年以降はその存在を確認できない。

<sup>897</sup>「大連市対華人事業、仍旧補助費用」『満洲報』1930 年 5 月 16 日。結局、次年度に持ち越しとなった。

日本人チームを打ち負かしたことは、大連中国人のバスケットボール熱を間違いなく煽ったであろう<sup>898</sup>。しかしながら、1931年に誕生したチームの大部分はすぐに消えていった。そんななかで、商華と友連の選手が集まって組織された黒猫は、実力の点でも、存続期間の点でも、他に抜きん出ている。1931年9月に大連中華青年会が煙台からサッカー（益文学校）とバスケットボール（白燕）のチームを招聘して日華対抗戦を開いたさい、黒猫は大連の中国人チームの代表として参加している。その後も黒猫は大連で最強の中国人チームであっただけでなく、1938年に大連 YMCA 主催の全満籠球大会3連覇を果たすなど、大連で最強のチームとして活躍することになる<sup>899</sup>。

## 第46話 中国人のスポーツ V（バレーボール）

中国でバレーボールが普及するのは1913年の極東オリンピックのあとである。バレーボールはおもに華南で発達し、歴代の極東大会代表選手も香港と広東から選ばれている。1924年に武漢で開かれた第3回全国運動会では、男子組に華北、華東、華南、漢口、女子組に湖北、湖南が参加、華南と湖南が優勝した。1930年に杭州で開かれた第4回全国運動会では、男子組に21チーム、女子組に13チームが参加、男女とも広東代表が優勝している<sup>900</sup>。不定期開催だった全国運動会とは対照的に、華北では1913年以来、2年に1回、華北運動会が開かれてきたが、バレーボールが採用されるのは1929年の第14回大会からである。この大会では男子高級で北京大学、男子中級で北京大学附属中学、男子初級で吉林第五中学が、1931年の第15回大会では男子高級で北平、男子中級で天津、女子で北平が、それぞれ優勝している<sup>901</sup>。このように、中国全体では華南が、華北全体では北京、天津がバレーボールの中心だった。

中国東北地区の体育志を見ると、バレーボールの歴史に関する記述はたいいてい1920

<sup>898</sup> 詳しくは第30話を参照。このうち馮庸大学は1929年12月と1930年10月に日本人チームに惜敗している。

<sup>899</sup> 1939年以降の『泰東日報』が利用できないこともあって、その後の状況は追うことができない。

<sup>900</sup> 袁偉民、張彩珍編『中国排球運動史』武漢出版社、1994年、48-55頁。

<sup>901</sup> 国家体委体育文史工作委员会、全国体総文史資料編審委員会編『華北運動会（1913～1934年）』120、122、136頁。

年代から始まっており（大連は1930年代）、しかもごく簡単にしか触れられていない<sup>902</sup>。しかし、当時の新聞報道を丹念に見ていくと、1918年からバレーボールへの言及がある。たとえば、1918年5月に海城で開かれた県立師範学校体育会では「手球」が行われた。同じころ、奉天の商業学校では「手球」のチームが組織された。10月に蓋平で開かれた省立第二師範学校競技大会では「手球」が種目に挙げられている<sup>903</sup>。「手球」は当時のバレーボールの呼称である<sup>904</sup>。1918年にバレーボールの記事が複数見えることは、この年にバレーボール普及のうえでなんらかの重要な出来事が発生したと考えることもできるが、現存する『泰東日報』の状況（1918年2月以前はほとんど残っていない）に依るかもしれない。いずれにせよ、1910年代後半には東三省の学校でバレーボールが徐々に広がっていたという以上のことはわからない。

1920年代にバレーボールは「隊球」と呼ばれるようになる。1929年の華北運動会、1930年の全国運動会、1931年の華北運動会には東北のバレーボールチームが参加し、1931年の華北運動会では女子組で遼寧省代表が準優勝している。関東州では大連中華YMCAが最初にバレーボールを取り上げ、1926年6月には大連YMCA主催の全満排球大会に参加した<sup>905</sup>。その後満洲事変まで、バレーボールの各種全満大会に中国人チームが参加することはなかった。大連中華青年会の学校部も1928年までにバレーボールを始めていたが、学外チームと対戦した形跡はない<sup>906</sup>。旅順師範学堂は1931年に旅順体育協会主催の排球選手権大会に参加し、Aチームは決勝戦まで進み、旅順工科大学本科に敗れている<sup>907</sup>。

<sup>902</sup> 吉林省地方志編纂委員会編『吉林省志・体育志』吉林人民出版社、2003年、169頁；丹東市地方志辦公室編『丹東市志・体育志』589頁；大連市地方志編纂委員会辦公室編『大連市志・体育志』83頁など。

<sup>903</sup> 『泰東日報』1918年5月13日；『泰東日報』1918年5月12日；『泰東日報』1918年10月16日。

<sup>904</sup> 拙稿「なぜ baseball は棒球と訳されたか」。

<sup>905</sup> 「基教青年会衛生講演と遠足会」『泰東日報』1926年6月19日；「基教青年会隊球連賽星期講演」『泰東日報』1926年6月27日。

<sup>906</sup> 「中青学校部之近況」『泰東日報』1927年9月6日。

<sup>907</sup> 「全旅順を網羅し排球選手権大会」『満日』1931年6月16日。「堂友会記事」旅順師範学堂堂友会『堂友会誌』創刊号、1929年3月、163-169頁所収によると、同学堂の運動部は蹴球部、卓球部、庭球部、競技部（陸上競技）、水上部からなっていた。バレーボールが始まったのは1929年度以降のことだろう。

## 第 47 話 中国人のスポーツ VI (卓球)

娯楽としてのピンポンは中国人の間でも早くから行われていたと思われる。史料に現れるのは 1920 年代に入ってからである。1922 年 8 月、大連中華青年会は遊芸室内に卓球の設備を整えた<sup>908</sup>。同年 12 月には大連中華 YMCA がサッカーとピンポンのチームを組織した。目的は「会員が常々集まる機会と身体を鍛錬する場所を提供するため」だったというから、競技よりも娯楽がメインだったのだろう<sup>909</sup>。YMCA と卓球の関係は深い。1911 年に完成した大連 YMCA 会館は卓球の施設を備えていた (第 40 話参照)。中国内地では、1918 年に上海 YMCA と聖約翰大学が主となって上海乒乓連合会を組織、「乒乓球規則」を制定してから次第に盛んとなった<sup>910</sup>。

1924 年 2 月、満日主催の全満洲ピンポン大会に出場した鉄道教習所と KK 社に中国人らしき選手が参加していたことは先述した (第 33 話参照)。1925 年 4 月には大連中華青年会と大連中華 YMCA の卓球試合が行われている<sup>911</sup>。

1928 年 3 月、大連中華青年会体育部主催、満洲卓球協会、関東報社、満洲報社、泰東日報社後援で第 1 回中華乒乓球比賽大会が開催された。開催に先立って、主催者は「乒乓球規則」を翻訳刊行した。翻訳というから、日本語版を利用したのだろう。もともと 2 月 5 日に開催を予定していたが、春節で故郷に帰るものが多く、参加を申し込んだのが 7 チームだけだったため、3 月 4 日に延期された。結局、参加したのは、旅順二中二年友志会、鉄道教習所、吉林団、土佐町公学堂、隆華 (甲、乙)、大連海関、中青学校部 (甲、乙) の 9 チームで、中青学校部甲が優勝した。この大会は 1934 年まで 6 回開催された。

1930 年 2 月、大連中華青年会は第 1 回中華女子乒乓球比賽大会を開催した。中国人女性のための競技会は大連では今回が初めてであった。大連中華青年会、伏見公学堂女子同窓会 AB の 3 チームが参加、大連中華青年会が優勝した<sup>912</sup>。同大会は 1934 年 3 月

<sup>908</sup>「六周年会務一覧表」『青年翼』5 卷 6・7 号、1926 年 7 月 1 日、70-113 頁。

<sup>909</sup>「基督教青年会成立足球队与乒乓球隊」『満洲報』1922 年 12 月 8 日。

<sup>910</sup>「乒乓表演」『申報』1927 年 8 月 27 日。

<sup>911</sup>「六週年会務一覧表」『青年翼』5 卷 6・7 期、1926 年 7 月 1 日

<sup>912</sup>「女青年乒乓球戦初賽已放異彩」『満洲報』1930 年 2 月 17 日:「女子乒乓球比賽、中青大獲勝利」

まで挙行されたことが確認できる<sup>913</sup>。

## おわりに

ここまでの作業で満洲国成立以前の満洲のスポーツの概要はおおむね整理できた。ほかにも書きたかったテーマはある。小学校、中学校、高等専門学校、女学校のスポーツ、相撲、軍隊のスポーツなどである。このうち、軍隊のスポーツは別に発表している。また女子スポーツについては、浜田幸絵の論文がまもなく刊行されるので、そちらに譲りたい<sup>914</sup>。今回は基本的な情報を提示することに努めたため、個々の論点を深く掘り下げることができなかった。この点は今後の課題としたい。近々発表する予定のものとして、高嶋航・佐々木浩雄編『満洲のスポーツ史：東アジアスポーツ交流圏の形成』を挙げておく。「満洲スポーツ史話」と併せて読んでいただきたい。

【附記】本稿は JSPS 科研費 JP18H00722 の助成を受けて行った研究成果の一部である。

---

『満洲報』1930年2月18日。

<sup>913</sup>「昨日女子組乒乓球賽、冠軍又屬於旅師」『泰東日報』1934年3月19日。

<sup>914</sup>拙稿「満洲における軍隊とスポーツ」『軍事史学』57巻3号、2021年12月；浜田幸絵「満洲の女子スポーツ：婦人の健康問題」高嶋航、佐々木浩雄編『満洲のスポーツ史：帝国日本と東アジアスポーツ交流圏の形成』青弓社、2023年（刊行予定）。同書には新雅史によるバレーボールの論考も含まれる。第31話とあわせて参照されたい。